
ぶらすマイナス S。

如月 コウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぶらすマイナス S。

【Nコード】

N9326A

【作者名】

如月 コウ

【あらすじ】

神風翔かんなぎしやうは至って普通の男子高校生。『夢幻学園』というオンラインゲームに出会い、彼の生活は一変する事になる。“S”をインストールした“彼”は“彼女”になっちゃったっ!?SFラブコメディ?ぶらすマイナス S。始まりますっ。

プロローグ

とある学園の地下に広がる迷路の中。
男女の息遣いが静かに響き渡っている。

「…ごめんなさい、響夜^{きょうや}。私、今日も学校ですからそろそろ寝ますね？」

時刻はすでに午前3時を過ぎた辺り。

周りに敵がいらない事を手早く確認すると、女が臨戦態勢を解き仲間である男に申し訳無さそうに言う。

「そうか。優^{ゆう}、ゆっくり休めよ」

そんな女を気遣うような言葉と共に、男は言葉の代わりに「（なでなで）」という文字と共に、頭を撫でるような動作を取る。
そして画面の外。

慣れた手付きで、終了のボタンをクイックする。

オン・ラインゲーム『夢幻学園』

それが数日前偶然見つけたこのオンラインゲームの名前。
数年前に突如学園の地下に姿を現した迷宮。
そこから現れた無数の化け物達。

そしてそれと同時に、学園生のみが手に入れたそれに対抗するための異端の力。

プレイヤーはこの夢幻学園の生徒として、この学園の平和…そして世界の平和を守るため日夜迷宮で奮起するという内容だ。

そして―

『内容をセーブしゲームを終了してもいいですか？

ログイン名：優^{ゆう}

』

これが俺のキャラクターの名前。
パソコンの画面上。

“優”と呼ばれた女のキャラクターが背伸びして終了を待っている。
そう。

このゲーム内では俺―神^{かな}風^{なぎ} 翔^{しょう}は女性として日々を過ごしているのだ。

いわゆる…ネカマ、というやつだ。

画面の先にはまったく違う、女としての自分。
まったく違う…性別すら異なる者を演じて楽しんでしまっている自分に少々複雑な心境になったりもするのだが…。

終了の問いかけに“Y e s”のボタンをクイックする。

壁にかけられた時計を見上げると、時刻は三時半を過ぎてしまっている。

そろそろ本格的に寝過ごして遅刻という言葉が脳裏を霞める。

だが、いつもならずぐ切れるはずの接続が中々切れない。

再び画面に視線を戻すと、そこには。

『“S”をインストールしますか？』

という文字。

どうやらこれをしてしない事には終了できないらしい。

眠い目を擦りながら、“Yes”のボタンをクリックする。

画面がインストールへと切り替わる。

表示された時間は、ぴったり三時間。

「マジかよ…」

回線が遅い訳でもないのにこの時間は異常だ。

だが、睡魔には勝てない。

それに今からインストールすれば、朝、目覚める時に丁度終わっているだろう。

「まあ起きてから電源消せばいいか…」

そう言っただけで、

部屋の灯りを消して、ベッドに潜り込むと同時に襲い掛かる睡魔。

“S”がカリカリと無機質な電信音をたてながらインストールされていく。

“He”が“She”に変わった瞬間。

今にして思えば、これがすべての始まりだったんだ…。

プロローグ（後書き）

始めました『ぶらすマイナス S。』

あまりにも脊髄反射で書いたので、面白いかはどうかは不明です（あ）

どのような話にするのかも決めてない現状ですので……

亀のように遅い執筆速度かも知れませんが、力の限り頑張りたいと思っております。

ツッコミや感想を頂けると励みになりますので、どんどんお待ちしておりますw

第1話：見知らぬ女性でこんにちは

―春。

俺、神風 翔は高校生になって二度目の穏やかな日差しを浴びて、未だに重い瞼をうつすらと開ける。

カーテンの隙間から差し込む日差しが心地よく朝を報せてくれている。

「…うん…」

やはりまだ寝足りないのだろうか？

頭が妙に重い。

それでもなんとか鈍った頭を奮い立たせて、壁にかけられた時計を見上げる。

―6時30分。

時計の針はいつもと変わらず、起床時間を指している。

正直寝る前までは、新学期早々に寝坊して遅刻という事も脳裏を霞めていたのだが。

どうやらそれは杞憂に済みそうだ。

布団の中から体を引っ張り出したものの、少しの間うたた寝。

数分後、まだ収まらない眠気と格闘しつつも、光を遮るカーテンを隅へと追いやる。

「まぶしい…」

降り注ぐ朝の光に、思わず顰め面で呟く。

心なしか声色が変だ。

先程から感じる頭の重さとその声色。

『風邪でもひいたかな…？』

そんな事を考えながら、次は窓を開け放つ。

その瞬間。

香る桜。

二階の窓から見下ろした、目の前にある公園に立つ木々達が、その裸体をピンク色の衣で彩り、街を染めあげている。

しかし心地良かったのは一瞬だった。

感じる妙な視線。その視線を辿った先にいたのは、近所の奥様方。その視線に居心地の悪さを感じた俺は、愛想笑いなんてものを振り撒いてみる。

すると、即座に始まる井戸端会議。

両親があまり家に居らず、近所付き合いというものが欠落している家庭の愚息とは言え、あの対応はあんまりだと心の中で悪態をつく。しかし三つ違いの妹であったならあの態度は十中八九ないだろう。妹―神風^{かんなぎ} 藍璃^{あいり}のように腹黒さを包み隠して愛想を振り撒ける程人付き合いが得意ではない俺には、奥様方の笑顔を引き出すのは到底不可能な芸当だ。

「あ…そうだ…」

朝から体の体調も悪く、気分まで悪くなってしまったが…。

せめて気分だけでも切り替えようと、つけっ放しだったパソコンの画面に目をやる。

そこには“インストールが終了しました”の文字。

どうやら無事に終えたようだ。

終了のボタンをクイックし、パソコン本体の電源も切ろうとした瞬間。

「お兄ちゃん？いい加減起きないと遅刻しちゃうよ」

無遠慮な藍璃のノック。

その音に慌てて電源を落とし、時計を見上げる。
時刻を確認して、一気に目が覚めた。

あろうことか時刻は7時を回っているではないか。
高校に遅刻しないで到着するには、ここから徒歩10分程度の所にある駅の7時15分の電車に乗らないと間に合わない…っ！

「お兄ちゃん？」

「ちょ、ちよつと待って…!!」

藍璃に生返事を返すと、慌ててかけてあった制服に手に取り着替えに掛かる。

完全に眠気は吹き飛んでいる。

しかし…そこで幾つかの疑問点が浮上する。

- 1・パジャマのボタンを外そうと手を掛けたのはいいが、視線の先…つまりは胸なのだが。なぜか妙な膨らみが二つある。
- 2・視線を…つまりは重い頭を無理やり動かした事により、本来短髪であったはずの髪が、なぜか流れるように視線に入った。
- 3・心なしか、体全体が丸みを帯びており、いつも以上に華奢になっている。

「……………」

突然の有り得ない変貌に動きが止まる。

「お兄ちゃん？なんか声が変わじゃな…」

そして異変に気づいた藍璃が、ドアノブを回し、部屋のドアを開け放ち…静止する。

視線の先には、間違いなく俺がいるのであろう。

俺は頭だけ右向け右をして、視線を藍璃から部屋の壁に立て掛けて

ある鏡に移す。

そこにいるのは…やはりというか見知らぬ女性。
試しに手を振ってみる。

するとやはり鏡に映る女性は、その美しい容姿とは不釣り合いな笑みを浮かべ、手を振り返してくれた。

……俺とまったく同じ動作で。

「えつと……」

緯線を固まって動かない藍璃に戻す。

すると藍璃は冷静を装いつつ、俺を指差す。

釣られて俺も自分を指差す。

そして――

「――……誰？」

俺は藍璃に。

藍璃は俺へ。

まるで示し合わせたかのような、これほどまでにシンクロした事はないぐらいに声を合わせて疑問を投げ掛けたのだった…。

第1話：見知らぬ女性でこんにちは（後書き）

さて、一度書いた文章を全部消去して二度目の第1話を書き上げましたorz

本来なら、第二話目を手掛けてていよいよドタバタシーンをかけるはずだったのに…orz

頑張るので、見捨てないで下さると助かります（苦笑）

少しでも面白いと感じて下さったなら、感想を書いて下さると狂喜乱舞しますので、もし宜しければお願いします。

それでは第二話目、後書きで会いましょう。

第2話 藍璃の覚悟と兄の覚悟

時計の針が時間を刻む音だけが響き渡っている。

今、秒を刻む針が長針と一瞬だけ重なり、9時が過ぎた事を報せていた。

「……………」

「……………」

俺は学校では始業式にも関わらず、自室で妹である藍璃と向かい合っていた。

パジャマのまま無言で。しかもお互い正座である。

重苦しい沈黙が続いている。

藍璃はすでに中学の制服に身を包み、その艶やかな肩まである黒髪をいつも通り後ろで括り、短めのポニーテールの尻尾が溜め息の度に揺れている。

「つまり、ですね……」

何度も繰り返した討論に終止符を打つために、藍璃が俺の説明を一言から言い直す。

「貴女は私……つまりは神風藍璃の兄、翔であって、気がつけば見知らぬ女性になっていた、という事ですか？」

「その通りだ」

俺は一語一句藍璃の言葉を聞き逃さず、そして真顔で相槌を打つ。

そもそもこうなった本人ですら未だに半信半疑であって、説明を求められても困るというものだ。

原因がまったく心当たりが無いのに、どうやって現状を説明しろと言っのだらうか。

「そうですか…」

再び藍璃が深い溜め息を零す。

「そうなんだ…」

そんな藍璃を労う様に、再び相槌を打つ。

「え〜と…ですな…」

藍璃は歯切れの悪い言葉で、必死に言葉を紡げようとして、口をパクパク動かしては、困ったような表情を浮かべている。
どうやら俺をなんて呼べばいいのか迷っているようだ。

「いつも通りお兄ちゃんでも、翔でも好きに呼んでくれ」

何を言いたいのかを察して、妹に助け舟を出す妹想いな俺。

「庇うために名前を名乗る気もないんですね…。分かりました。ではお姉さんと呼ばせて頂きます」

そんな兄に対して、藍璃は視線を外し“こんな綺麗な人を放って置
くなんて…馬鹿兄殺す”と物騒な言葉を吐き捨てる。

そして俺の案は却下され、お姉さんと呼ぶつもりらしい。

俺の言葉の何処に“わかりました”という理解を表したのだろうか。
どうも朝から理不尽過ぎる事が多い気がするぞ。

「確かに、あんな馬鹿兄と…その…一夜と言えども同衾してしまっ
たのは、あまりにも不幸過ぎる出来事で、心中お察し致します」

「……はあ」

いやもうびっくりするぐらい察してない。

素晴らしく俺の説明はスルーされているようだ。

実妹とは思えないような、あまりな言葉の数々に、意味も理解も出来ぬまま思わず生返事を返すしか出来ないでいる俺。

「そして目覚めれば相手である兄はさつさと姿をくらませ、着る服も無く、仕方なく兄のパジャマを泣く泣く着る事になって…さぞかし不安だったでしょう」

そこでやっと俺は藍璃が言わんとしている事を理解できた。なるほど。

どうやら藍璃の中では、兄である俺が女を部屋に連れ込んだ挙句、する事は済ませてさつさとトンスラこいたと思ってるわけか。それは最低な男だな…。

「……………つて、違うからっ!？」

思わずうんうんと頷いていた頭を、上下運動から激しい左右運動に変換させる。

「まさか家族の中から犯罪者が出るなんて…家族の一員として監督不届きですね…」

ハンカチで目頭を押さえる藍璃。

少なからず俺はこいつに監督された覚えはない。

しかし今はそれに対してツッコミを入れている場合ではない事は確かである。

何か納得させられる材料や、或いは一緒に説得してくれる理解者が必要だ。

そうこうしている内に、藍璃は受話器を片手に、

「もしもし…警察ですか？兄が被害者をこれ以上出す前に捕まえてください」

「待て待て待て待てっ……!？」

慌てて受話器を奪い取ると、受話器の向こうから聞こえるのは不気

味なほどに優しい声の警察のお兄さん。

「落ちついて…。辛いかも知れないけど…お兄さんの事は我々警察が責任を持って更生させるよ。だから住所を…」

「宅配ピザ屋と間違えましたあ!!」

相手が言い終える前に、そう言つて受話器を叩きつけるように置く。
「兄の事はいいんですっ!…いつか…こんな日が来るって…覚悟してましたから…」

よよよ、としな垂れる馬鹿妹、藍璃。

このままでは他ならぬこの馬鹿妹のせいで、俺はめでたく犯罪者の仲間入りを果たす事になってしまう。

何か手段はないのかっ…!?

このままでは平行線を辿つて、前に進まない。

何かこの事態を打破出来る新しい風が来る事を心から願つた。
そしてその願いは叶つたのか、事態は急速に動いた―。

「「ただいま」」

「あ、お母さんお父さん」

……………悪い方向へと。

第2話 藍璃の覚悟と兄の覚悟（後書き）

第3話 女性で歓迎っ！？

昼下がりのショッピングモールの一角。

始業式も終わり、部活動や業務に携わる一部の生徒以外は、久しぶりに会う級友達と羽を伸ばしているであろう。

この場所も、学校から近い場所に位置しているためだろうか。

そいつった学生の姿が、ちらほらと見掛けられる。

誰もが新しい季節の始まりに、心を躍らせているのだろう。

その表情は明るい。

そんな中、始業式を一身上の都合によりブツチした事よりも、遥か後ろめたい気持ちで、鮮やかに彩られたショーウィンドウの服を凝視している俺。

「……ねえ、あの子」

「一人かな？声掛けてみようか？」

先程から背中越し聞こえてくるのは、そんな珍獣を見つけたかのような言葉ばかり。

服装などは普段からあまり気に掛けていなかったが、ここまで注目を浴びると、どこか変な所でもあるのだろうか和本気で不安になってしまう。

ショーウィンドウに映る自分の姿を確認する。

無地の白Tシャツに、まだ少し肌寒かったのでこれまた白のVネックカーディガン。そして下にはジーンズ。

サイズばかりはどうにもならなくて多少ぶかぶかで不恰好だが、今の自分が着れる服がこれだけしかなかったのだ。どうしようもないやはり問題なのは、この嫌が応にも目立つセミロングの金髪のせいだろうか？

実はそれが気になって、家を出る時に髪の高さに悪戦苦闘した末、

無理やりかきあげて帽子の中に押し込んだまでは良かったのだが……。普段かぶり慣れてない上に、加えて乱暴にかぶった帽子など、すぐに気持ち悪さを感じて取ってしまったのだ。

「いい加減諦めて入って来ないと、パパの好きな露出度高い服しか買わないわよ？」

「……………」

店の中から人目をはばからず、大声で俺を呼ぶ能天気な母親。

今更だが、後悔の念に囚われずにはいられない。

どこか自分に間違った所があったのだろうかと、つい先程までの、ここに至る経緯を思い返してみる。

遡る事数時間前。

事の始まりは、普段はまったく帰って来ないクセに、ああいう最悪な状況の時だけ都合よく帰ってくる両親からだった。

あの後、未だパニックを起こしているだけなのか、それともただの嫌がらせなのか。

一家団欒の場所であるはずのリビングで向かい合い、必死に警察の必要性を両親に投げ掛ける藍璃。

お前はそこまで兄を犯罪者に仕立て上げたいのか。

そしてその後。藍璃の隣の席で、俺はまるで死刑囚のような気分で、自分の……神風 翔の半生について語る。

まるで、自分が被告人としての裁判の最終弁論を行っているような、物悲しい気分になったりもしたが……。

その間終始笑顔の両親。

俺の弁論が終了すると、重苦しい沈黙が――。

「とりあえず考えてても仕方ないし、この子の服を買いに行きましょつか？」

―続かなかった。お気楽な母の一言で。

「お母さんっ!？」

まるで見当違いな母の言葉に、藍璃が声を荒げる。

「藍璃。ママが何も考えずに言っているとも思っのかい？」

「お父さんまで…」

藍璃を制するように、今まで黙っていた親父が口を挟む。

「いいかい？少なからず彼女は翔の事を、それこそ自分の事のように話せた。それは少なからず、翔の関係者であるという証明にはなる」

「それはそうだけど…」

「聞きなさい。それに何より父さんはな…」

渋る藍璃の言葉を親父は神妙な面持ちで再び遮り、

「むさ苦しい男よりも、美人の娘の方が幸せなんだ」

「マテヤ、その馬鹿親父」

少なからず親として根本的に間違えてる言葉を吐いた。

「歓迎するよ。いつまでもここに居るといい。翔の部屋をそのまま使っていいからね。服等の日用品は今から買いに出掛けるとして…」

「翔と同じ年って事は高校二年生よね？とりあえず明日から普通に学校に登校できるように手を回さない」と

「ママ、制服も女の子用を準備しないと。あそこの女子の制服は可愛いと評判なんだよ。君ならきつとよく似合う」

テキパキと動く素晴らしく順応が素早い両親に、その子供達はすで

に茫然自失状態である。

俺自身、自分の身に降り掛かったこの不幸を把握し切れていないのに、すでにこれからの事を話し出す傍若無人な夫婦がそこにいたのだった……。

第4話 自分にこんにちは？

そして現在。

再びショッピングモールの一角にあるお店。

結局小一時間程、実の母親に着せ替え人形として試着室に監禁された挙句、ブラの着け方から服の着替え方までレクチャーされて、男としてのアイディンティティを失った気分である。

「……ふふふふ。これが現実なら俺は世の理不尽さに狂い死ぬかも知れん」

満足気に会計を済ませている母親を放置して、店のショーウィンドウに座り込み、頬杖ついて行き交う人を、ただぼろと眺めていた。

（本当にどうしたんだろうな…俺）

以前では小さいとまで感じていた、だばだばの服に視線を落とし、胸元を摘み中を覗いてみるとあるのは……。

「彼女、今暇？」

「ひゃい！？」

突然の上からの呼びかけに、変な声で答えてしまう。

慌てて顔を見上げると、そこにはどこかで見た事がある男が2人。丁度挟むかのように左右に立ち、俺を見下ろしていた。

「今一人？俺暇なんだけど、どこか一緒に遊びに行かない？」

警戒心を持たれないようにするためだろうか。

優しく微笑むと、座り込んだ俺の手をとって、優しく立たせる。

（霧島に田端……）

こいつ等には何度か面識がある。とは言え、特別親しい訳ではなく、学校で何度か顔を会わせた事もあるぐらいだが。

では、どうして名前を知っているか。答えは目の前にある。

「凄く可愛いね！俺びっくりしちゃったよ」

霧島は笑顔で人様の腰に手を回してくる。

「マジで君に会えて嬉しいよ」

田端は、優しく微笑しつつ、肩に手を置き抱き寄せる。

…と、まあそういうことだ。

2人は生粋のナンパ師なのだ。

その癖の悪さは、校内でも有名になるほどなのだが、如何せん容姿が良かったため一概に言えない。

確かなにかのファッション雑誌の、専属モデルでもあるような事も聞いた事がある。

女性にもよく声をかけられている場面にも遭遇する。

つまりは、引く手数多で、気になった女性を見かければ、自ら声をかけて口説き落とす…という流れだ。

「ね？せっかくだしお茶しようよ？」

右に左に、ガクガクと振り回される俺の体。

偶然にも今回はその標的が、よりにもよって俺ですか。

それはつまり女性慣れしてるこの2人からしても、俺は正真正銘の女であつて。

言うなれば上玉の部類に入るという事の証明にもなるのだから、嬉しいのやら悲しいのやら、複雑な心境で愛想笑いを浮かべる。

しかし先程から随分と馴れ馴れしく、人の体を触り続けてくれているものだ。

本来なら、これほど近くで2人の美男子に言い寄られるのは、女性としては悪い気はしないだろう。

それに、心なしか行き交う女性の視線がイタイ。だが、安心して欲しい。少なからず俺は男だ。

しかしこのまま激昂して断ったところで、また妙に注目を浴びてしまうのは必至だ。

それは避けたい。そこで思いついたのが――

「ごめんなさい…私、知り合いのおば様と買い物に來ただけなんで

す」

―ネカマ大作戦である。

少し困ったように、だが嫌味にならない程度に眉を顰め、女口調でやんわりお断りしてみる。

「えゝ？どうしても駄目？」

「ほんの少しだけいいんだけど…」

「駄目…かなあ…？」

2人の問いかけに、変わらぬ愛想を振り撒く。

不謹慎だが、普段からネットの中だけとはいえ、女性を演じていた事が功を奏すとは。まったくもって世の中不思議な事だらけである。

「そっかゝ…残念」

意外にすんなりと引き下がる。

その諦めに似た言葉に、俺がほっと一息ついた瞬間だった。

「じゃあさ、せめて今度お茶しようよ。どこの学校？もしよかったら、放課後とかでも迎えに行ったりするよ？」

「あ、それだと名前と番号教えてくれれば、都合も合わせ易いよね」

その言葉に、凍りつく俺。

（あ、甘かったか…）

愛想笑いを続けていた口の端が、微妙に引き攣っている。

「い、いえ…学校は…ちよっと…」

2人の、見事とも言えるコンビネーションプレイに、次第にしどろもどろになっていく。

「じゃあさ、せめて名前と番号だけでも教えてよ」

「け、携帯電話って…持っていないんですよ……アハハ…」

さらに顔が引き攣る俺。

（さすがにこのままだと拙い）

盗み見るように、会計にいるはずの母の姿を探す。が、なんと再び

店員さんと俺に着せるつもりであろう服を手にして、討論会を始める。

そういえば試着中、店員にも“こっちもきつと似合いますよっ！”と言われて、服を渡された気がする。

知らない間に、俺の周りは敵だらけですか。

「えー？それは嘘でしょ？」

「あ、名前知らない相手だと警戒しちゃう？そうだよ。俺は霧島、でこっちは田端。君の名前は？」

そうしてる内にも、どんどん詰め寄られている。

視線を合わさないように視線を下に落としたものの、さらに下から覗き込まれて失敗。

視線を戻すものの、左右の2人を交互に見ながら嫌な汗をかく。

「な、名前、ですか…？」

「うん」

正直に翔と名乗るべきだろうか。

しかし、それはそれで面倒な事になる気がしてならない。

どうしようかと必死に思案している、その時。

2人の背後から歩いてくる、昨日見たはずの…だが有り得ない人物の姿が目止まる。

俺は思わず2人の事も忘れて、その人物を指さして絶句する。

しかしその人物は、そんな俺をまるで意に介さないかのような口調で言い放つ。

「優。探したぞ」

そして呼ばれた聞き慣れない名前。

そいつは、水槽を泳ぐ金魚の如く、口をパクパクと動かすが言葉が出ない俺の腕を引き、二人の間から救出する。

そうすると、邪魔をされた2人は当然文句の1つも言いたくなるわけ。

「邪魔しないでくれない?……神風翔」

嫌味のためか、親切にその人物をフルネームで名指しする霧島。

緊迫する三人の空気。

そして集まる見学者。

自分に腕掴まれるという特殊な経験で、口から何かが出てきそうな俺。

……そしてその光景を、遠巻きから生暖かく見守る家族の姿。

助けるよ。お前等。

第4話 自分にこんにちは？（後書き）

重要な部分に一向に辿り着かないのはなぜでしょう？（挨拶）

登録して二日目でアクセス数が100を超え、とても嬉しく狂喜乱舞しております。

訪れて下さった皆様には最大の感謝を。少しでも面白く感じて貰えたならいいのですが（苦笑）

何かご意見、ご感想がありましたら仰って下さると助かります。

キャラクターが今はあまり立っていないので、もう少し個々のキャラの特徴が出していけたらな、と思いつつ次回へ。

また後書きで会いましょう。

第5話 土 S

“自己の証明”とは如何に難しい事だろうか。

住民票などといった安易な物品でなく、言葉の表現において、それを証明する事は酷く難しい。

神風翔と名乗る一組の男と女。

通常考えるならば、神風翔という人物は生物学上男であると生まれた時に証明されており、その結果、当然の如く、男の言い分が受け入れられるのが、至極当然の事だ。

その一方で女である俺の立場はどうだろう。

固定概念に囚われていては、言葉の表現においての自己の表現は、ただの妄想癖としてしか認知されない。

よって、俺が女でありながら、相手の神風翔は男であるという固定概念を取り除く事をしなければいけなくなるわけだ。

しかし、それほど厄介なものはない。

…つまりだ。小難しいこの話を要約するならば。

突如現れた男の神風翔のおかげで、女である俺は危機的状況に陥っているという訳だ。

一触即発の三人をなんとかなだめ、霧島・田端の兩人にはもう自分で背筋が寒くなる位に女の子して丁寧に謝罪し、なんとかあの事態に収集をつけたものの、すでに買い物どころの騒ぎではない。

その場でこの身元不明で、正体不明の男を問い詰めたかったが収まった騒動を再び起こす事はないだろう。

何とか堪え、ほくそ笑む家族を率いて、自宅へと戻ってきた。

俺はなぜか再び先程のリビングの席に座らされながらも、父親と共に書斎に消えたもう1人の自分の事が気になって仕方が無かった。

何より、書斎に消える前に耳元で囁かれた言葉。

『ちゃんと女の子してないと駄目だよ？居場所ないでしょ？』

ある意味、的確過ぎる言葉に絶句する俺。

不適な笑みを浮かべて書斎へと姿を消した奴は、こうなった原因を知っている。

それはどうやら間違いないようだ。

「優ちゃんは、紅茶って大丈夫？」

ふいにキッチンでお茶を入れていた母親が、声を掛けてきた。視線の先にあるのは、やはり俺がいる。

「あ、はい。大丈夫…です」

一瞬返事する事が躊躇われたが、実の母親の好意を無駄にする訳にもいかず頷く。

「ねえねえ。優さんって近所に住んでるんですか？」

今度は、藍璃が興味満々という表情で顔を覗き込んでくる。

「あゝ…翔が来たら話すね」

曖昧に愛想笑いで受け流す。

なにやら朝から愛想笑いばかりしてる気がするぞ…。

「でも、あの甲斐性なしの翔ちゃんが女の子を家に呼ぶなんて、お母さん嬉しいわ。ありがとう、優ちゃん」

「それにこんなに綺麗な人なんて…別に何か弱みを握られて脅されてるとかじゃないですよ？ちなみにそれって犯罪ですから、優さん」

「犯罪でもなんでも自力で彼女をゲットするなんて、お母さん嬉しいわ。ごめんね、優ちゃん」

「お兄ちゃんなんて、どこがいいんですか？もしかして道を聞いたら、ここに連れて来られたとかじゃないですよ？ちなみにそれって犯罪ですから、優さん」

真顔の藍璃。さっきも言ったがどうあっても兄を犯罪者にしたいの

か。

にこにこ笑顔の母。嬉しいのか、それとも俺へ毒を吐きたいのかどちらかにしろ。ちなみにさり気なくとんでもないタイミングで謝ったな。

そして連呼される“優”という名前。

未だに名乗った事がないのに、なぜかもう1人の俺が呼んだ名前がすっかり定着している。

新手のマインドコントロール教室か、ここは。

そこでふと“優”という名前に覚えがある事に気がついた。

（ネットゲームで使用している女のキャラの名前が確か……）

「……あっ……！」

立ち上がり、驚いている母と妹を尻目に、二階にある自室へと転がり込むと、真っ先に壁に立て掛けられた姿見で自分の容姿を確認める。

「……………“優”だ」

気持ちを落ち着かせてパソコンの電源をONにして、オン・ラインゲーム『夢幻学園』を起動させる。

焦る気持ちを抑えつつ、パスワードを入力し、ログインする。

そしてそこに現れたキャラの名を見て、俺は再び愕然とする事になる。

キャラの上に表示されているローマ字の名前。

『SYOU』

女のキャラクターは姿を消し、男として画面上に存在しているキャラクター。

そしてそこで思い出した、ちょっとした些細な出来事。

― “S” をインストールしますか？

「そ、んな…事あるわけ…」

“YOU” に “S” をインストールして、頭文字にすれば “SYOU”、つまりは “翔” になる。

「そんな馬鹿みたいな話で…ゲーム内のキャラと自分が入れ替わったって言うのかよ」

「あ、気づいたんだね」

愕然と立ち尽くす俺の後ろ。

もう1人の俺が、開けっ放しのドアに背をかけて言葉を続ける。

「とりあえず詳しい話は後ですよ。今は家族に違和感ない嘘をついて、事を荒げないようにしないとね」

“SYOU” から “YOU” へ。

“He” が “She” に変化した、ぶらすマイナス “S” の不思議な物語。

そしてこれが、始めて俺がその変化に気づいた瞬間だ。

自分の体を一瞥し、その事実を噛み締めて呟いた。

『リアルでネカマ生活かよ…』と。

第5話 ± S（後書き）

さて、今までお読み頂いてありがとうございました。『ぷらすマイナス S』はひとまず終了！というのは冗談で（あ）

物語的には、やっと始まりの第一歩を踏み出したと言った感じですね。

読んでいる途中で、名前の“S”に気がついた人は何人いるでしょう？

前半どうしてもシリアスの部分が多かった分、次からはコメディらしくしたいと思っています。

何かご意見・ご感想がありましたら是非コメントを残していただくさいね。やはり読まれていると言っ実感がないと、面白くないんじゃないかと不安で…ヘタレですいません…orz

次回はいよいよ学校に（たぶん）舞台が移ります。

是非是非、次回も後書きで会いましょう。

それでは。如月コウでした。

第6話：新しい日々とかつての日常

どこかのテレビで聞いた事がある。

“オカマがなぜ男性の心を捉える事が出来るのか？”

それは、元は同じ同性ゆえに、世の男性が女性に望むものを理解しているからだそうだ。

しかし、肉体を完全に女性として変化させるのは不可能で、やはりその最後の一線が越えられない事が悩みだ、と。

そんな情報番組をお風呂上り、リビングをトランクス姿で闊歩しつつ、その姿を妹の藍璃に非難されながら聞いていた事がある。

テレビに映し出された映像は現実の世界でのお話。

それを俺は、いつも通りにどこか遠くの、違った世界での出来事のように無関心に眺めていたものだ。

しかしまことに遺憾ながら、ワンクイックで、その一線を軽々しく越えてしまったのは俺、神風翔…否、今はすでにもう神風優なのだが…どうするべきか。

人間ドックの必要性を訴えてまで診断してもらった、病院のカルテの性別の記入欄に書かれた“女”という文字。

現代医学のお墨付きである。もはやその答えは決まっている。

「うわ…。優さん、凄く素敵です」

「……あははは」

一週間前と同じように、目覚めた時刻は午前6時30分。

今では幾分か俺自身の私物が置かれている、元々父親がゲストルームとして空けておいた部屋の中。

俺は愛璃と共に、そこに置かれた姿見の前で、その美しく流れるようなセミロングの金髪を、さも面倒くさそうに何度も触りながら苦笑いを浮かべる。

その身に纏っているのは、俺が通っていた^{ほうせん}峯苦高校の制服。ただ違うのはやはり、その制服が女物であるという一点。

「おはようございます、おじ様、おば様」

「あら、おはよう、優ちゃん」

「優ちゃんおはよう」

着替えが完了したので、階段を下り、リビングへと足を運び両親と挨拶を交わす。

いつの間にか定位置になった席に腰を下ろすと、目の前にいるはずの男の姿がない事に気がつき、あまり深く考えずにその疑問を口にする。

「あれ？翔は？」

「あ、翔は日直だからとかで、少し前に行っちゃったわよ」

（……野郎。また妙な真似を）

心の中で悪態をつく。

どうも奴が俺にすり変わってからというもの、どんどん自分のイメージが爽やか好青年化していつて気持ち悪い。

愛想ひとつも振り撒けない最低の愚息と噂していた近所のおば様方に、今では『翔君の爪の垢を煎じてうちの子供に飲ませてやりたい』とべた褒めされるぐらいである。

そのあまりに爽やか振りに、一番の理解者であるはずの両親と妹に疑問をぶつけた事もあった。『あれはどう見ても神風翔ではないのではないか？』と。

そしてその返答が…。

『何処かで頭ぶつけて、記憶がとんじやっただろうけど、評判もいいみたいだし、都合がいいからこのままにしておきましょう』

と、生みの親である両親には爽やかに答えられてしまった。

極めつけは藍璃である。

『今までのお兄ちゃんは、実はお兄ちゃんじゃなかったんです。先日やっと本当のお兄ちゃんが帰ってきて…』

今までの俺を全否定である。

だが家族は知らない。奴が神風翔として過ごして二日目の夜、『自分の扱いが酷過ぎる』と泣きを入れてきた事を。

そこで始めて俺は、他人だとトラウマになるような日々を平然と過
ごして来たのだと知った。

慣れとは本当に恐ろしいものである。

感慨深げに箸を口に銜えていると、三方向から視線を感じたので、
そちらに視線を移すと、そこには三者三様の表情を浮かべる両親と
妹。

「挨拶を交わして、すぐ翔ちゃんの姿を探すなんて…」

まるで夢見る少女のような瞳な母。

「そりゃ記憶喪失になって、一目見て唯一覚えてる自分の名前を呼
んでくれた相手がお兄ちゃんなんだから。いないと不安なんですよ
ね？」

そう言つて微笑みかける藍璃。

「しかしこんな可愛い子と知り合えるなら、お父さんもパソコンを
始めようかな」

笑っているが、結構本気で考えているような父。

そんな三人の視線に居心地の悪さを覚えて、残ったおかずと御飯を
口へと放り込むと、すぐさま席を立つ。

「いつてきます」

返事も待たずに、玄関を抜け外に出る。

体全体に浴びる、春の穏やかな太陽の光。

（そういえばバタバタして外に出るの久しぶりだな…）

少しは慣れてきたとはいえ、未だに違和感を覚えてしまう体で精一
杯背伸びする。

「いい天気だ」

目を細めながらも、空を見上げる表情はどこか晴れ晴れとしている。

災難続きの日々だったが、少なからず学校に行けば、馬鹿をやつて騒げる仲間達がいる。

馬鹿騒ぎすれば、この落ち込んだ気持ちも幾分かは晴れるだろう。そう考えると、自然と学校へと歩を進める足取りは軽やかだった。勿論、この考えは“自分が普段通り男だったら”という事が大前提なのだが――

「まだ時間的には余裕だが……うつし。久々の登校だ。少しぐらい早く着いて、驚かせるのもいいかつ！」

脇目も振らず、その金髪を靡かせて駆け出す。

人間そう簡単に習慣は抜けないものだ。

ある程度いつも通りの生活が行われてしまえば、必然的に過ごした時期が多い“神風翔としての日常”にスイッチが切り替わってしまう。

そんな元氣よく走り去る優の後姿を、遅れて玄関から出て来た藍璃が見送る。

そして一言。

「優さん、今から急いでも電車の待ち時間が長くなるだけなのに……」

と、呟いた。

……どうやら神風翔として過ごした時間が長過ぎたため、無駄に張り切っても報われないようになってしまっているようだ。

第6話：新しい日々とかつての日常（後書き）

未だに主要キャラが登場していないのは仕様です（挨拶）

まず始めに。

コメントを残してくれた方は勿論ながら、再びこの小説をお読み頂いている皆様には最大の感謝を。

この物語。実はあまり深く考えずに打ち始めた物語なので、どうなるかが筆者である私自身もまったく予想がつきません。

ですので、一寸先も闇の手探り状態での執筆で不安はあるものの、皆様の応援でなんとかやれてるのが現状です。感謝しております（平伏し）

評価やコメントを残して下さると、今後の執筆における課題や創作意欲へとつながっていくので嬉しく思います。

それではまた次のお話の後書きで会いましょう。

如月コウでした（礼）

第7話 初めましてと敵前逃亡から始まる学校生活？

さて話を戻そう。俺が自室に駆け上り、始めて自分の変化の謎に触れたあの時。

詳しい説明を受けた父が、残されて呆然としていた2人に事情を説明していた。

その内容を簡単に言うなら…。

『“優”という名前以外の全ての記憶を失って、さ迷い歩いていたところを偶然通りかかった翔が保護した』と、いうものだ。

そして現在の“優”という女性としての俺について。

新たに付け足された個人情報と、現在に至るまでの経緯を幾つかに分けて述べるとしよう。

“インターネットを通じて翔が知り合ったメール友達”という立場にある人物であるという事。

それが判明した理由として、以前メールのやり取りで聞いた身体的特徴があまりにも酷似していたため、まさかと思ひ声をかけたら本人だった…という、もっともらしい理由が付け足された。

そしてベッドで1人で寝ていた理由について。

記憶を失う前の知り合いに会えた事への安堵感からか、翔に抱きついて泣き崩れてしまった俺は、泣きつかれて眠ってしまった。

そこで部屋のベッドで寝かしつけたまでは良かったが、翔は同じ歳の少女と密室というのは耐え切れず、外に出ていた。

通常、そうなれば家族への連絡等の問題はあるが、そこは翔が上手く父を説得したらしい。

つまりはそうする事で、俺は再び神風家の一員としてめでたく迎え入れられ、自室まで確保出来たという訳だ。

そして、まるで当初の予定通りと言わんばかりに事を進めた神風翔は曰く、

『突然女の子になりましたじゃ色々と面倒でしょう？私はそのサポート役のようなものですよ』

と笑って答えた。

一番重要な謎は残ったが、当面の問題は解決したはずだ。

元の体に戻る、戻れない、どちらにしろ今はこうして学校に来て日々を過ごすしかない。

過ごしかないはずなのだが――

思考を停止するかのように、目の前の扉が開きクラスメイトが教室へと足を踏み入れる。

その瞬間。

「おはよう」

2 - 4 組の教室。

運良く片付け始めているクラス替えの張り紙を発見した俺は、いち早く教室へと辿り着き登校してくる新たな級友達へ努めて明るく声を掛けていた。

数名1年の時と同じ奴もいたが、それも極わずか。

そうなるとやはり最初の印象が肝心なので、出来るだけ爽やかな笑顔を中心掛けているのだが、誰も返事を返さない。

それどころか先程から誰も近寄ろうともしない。

確認した席は確かに教室の最前列。しかも扉の一番手前。

つまり、教室に入って一番最初に目に留まる席。そこから扉が開くと同時に声をかけているのだ。勘違いだと思われる事は、可能性としてまずないはずだ。

ならばこれは一体どうしたのか。

まさかすでに俺はこのクラスで、孤立無援を余儀なくされているということだろうか。

そうなるとやはり原因は、俺の代わりに今まで登校していた現神風翔に問題があると思えない。

（あの野郎…やはり学校でも余計な事をしでかしてくれたんじゃ…）
そこまで考え至って。ふと、自分はとんでもない間違いを犯しているような気がした。

しかしその疑問が何なのかが明確に分からない。

答えを導き出せぬまま、うんうんと首を捻って悩んでいる時に――

「優？ここでいったい何をしてるんだ？」

外口調絶賛使用中の神風翔が現れた。

瞬間、遠くから俺を見ていたクラスメイトがざわつく。

（これだけの大人数が周りに居るんだ。口調は女のように…）

そう自分に一度言い聞かせてから口を開く。

「何って…学校に来たに決まってるでしょ？翔こそ、日直だって言
って先に行った割には、どこで…」

そこまで口に出してある事に気がついた俺は、顔が青ざめてゆくの
と反比例するかの如く、先程の疑問が氷解してゆくを感じた。

（俺は今、転校初日の神風優であって、神風翔じゃないんだっ…！）
そこで始めて客観的に状況を理解できた。

普段通りに、教室に足を踏み入れた神風翔のクラスメイト。

しかし踏み入れたと同時に、満面の笑みで『おはよう』と声をかけ
てくる、見た事の無い金髪の女生徒。

いくら指定の制服を着ているとはいえ、昨日まで存在していなかつ
た人物にいきなり挨拶されるなんて、どう考えても不自然かつ不気
味である。

君子危うきに近寄らず。

確かに逆の立場で考えたら、俺でも数人で集まって『何者なんだ？』

という討論を繰り広げるはずだ。

「……………あはははは」

教室に響き渡る、俺のかすれた笑い声。

「……………」

「……………」

ひとしきり笑い終えた後、重苦しい空気が教室の中を支配する。

こうなれば手段は一つ。そのタイミングを待ち侘びながらも、静かに呼吸を整える。

そして鳴り響く予鈴のチャイム。

「し、失礼しました……！」

敵前逃亡あるのみ。

廊下へと逃げ出した時、なにやら背後から『翔っ！？どういう事だっ！？』と複数の男達の声と『誤解だー！？』と叫ぶ翔の声が聞こえたが、今の俺にはどうでもいい事だった…。

第7話 初めましてと敵前逃亡から始まる学校生活? (後書き)

なんて時間に更新するんだ(挨拶)

はてさて。そろそろいい加減物語を先に進めろよと怒られそうですが如何お過ごしですか? あ、石を投げないで下さいっ!?

基本的に五話で一区切りのつもりで執筆しているのですが、今回の五話で『なぜ』『どうして』という物語の核にもなる説明不可欠な要素を出せればな、と思っております。

ただ、それを明かす事により、皆様の評価が確実に変わるでしょうから少し不安でもあったりします。

書き上げた時、皆様の期待を良い意味で裏切る作品で在る事を願っています。

如月コウでした。(ぺこ)

第8話 髪をかきあげずに耳元に口を近づける事により生まれる死角と誤解？

“後悔先に立たず”

その言葉を、今日ほど深く噛み締めた事はないだろう。

「優ちゃん、また明日〜」

「うん。バイバイ。またね」

放課後の2 - 4組の教室。

先程から数名に女生徒が、俺に一言二言、言葉を投げ掛けてきてくれる。

どうやら、失敗に思えたファーストコンタクトはやはりというべきか。悪い方向へと転んだようだ。

それ以外の生徒との間には、未だに根深く溝が残っているように思える。男子生徒に至っては、どういう訳かまったく言っていないほど近寄ろうとしない。

やはり俺の最初の行動により、“闖入者”というイメージが先行してしまっている以上、警戒心というものが働いているのだろう。

しかしそれにもめげずに声を掛けてくれた女生徒がいるのだ。

そのおかげで幾分かは気持ちが楽になるというもの。

「翔」

気を取り直して隣の席の、なぜかボロボロになっている翔に声を掛ける。

いくらサポート役として俺の身代わりを引き受けているとは言え、この姿を見ると少し同情めいた感情を抱かずにはいられない。

「……大丈夫か？」

身近に誰もいない事を確認し、翔の耳元に顔を近づけ囁く。

「君のその軽率な行動のおかげで、再び私は理不尽な暴力に晒されるという事を理解して頂きたいものです…」

お、今の発言は一人称こそ違うが、かなり俺の言動に酷似しているな。

こいつもこいつなりに、周りに自分が神風翔であると思い込ませるために努力している、という事だろう。立派なものだ。

右手でその努力を労うかのように、その背中をバンバンと叩く。

「元気でた？」

顔を上げ、机に平伏した翔を見下ろし微笑む。

すると残っていた生徒と、なぜか別のクラスからその様子を覗き見していた生徒がざわつく。

このざわつきも最初の頃は気になっていたが…。

やはり家族内での不当な扱いが適応能力を高めていたのだろう。

さすがに一日中同じ状況下に置かれていたら、自然と気にならなくなっていた。

「とにかく帰りましょう」

「悪いがそれは出来ません」

「……は？」

突然、顔を上げて答えた翔の言葉の意味が理解できなくて呆然とする。

しかし奴は、そんな俺を尻目に言葉を続ける。

「先程にも申したとおり、貴女が取った行動により、残念ながら私は可及的速やかに自己の生命に対する防衛を試みなければいけないので」

突然、びっくりな口調で喋り出す翔。

その真剣さに思わず俺は後ずさってしまふ。

「あの体勢は極めて危険な誤解を招くんですよ」

神妙な面持ちで、左右の安全を確認しつつ逃走ルートを導き出しているであろう翔。

あの体勢…？とは、先程の耳元で囁いた時の事を示しているのだろうか。

「……まったくもって不可解なんだけど」

「心配には及びませんよ。ここ数日で、こういった心の機微を貴女に察せと言うのは、かつて猿人が道具を使い、火を起こす事を覚え

たぐらいに、奇跡に等しい事であると理解しています」

「あれ？さり気なく暴言？暴言吐いてる？」

「つまり、一緒に帰る事は不可能だと申し上げているのです」

どうも家族の影響を色濃く受けてしまっているらしい。

しかしながら、一緒に帰れないのはこちらとしては都合が悪い。

慣れぬ女の体。それに幾ら声を掛けてもらえるようになったとはいえ、未だに多くの生徒が警戒心を抱いているように思える。

周りに視線をやれば、合えば後ずさる生徒諸君。どうやら自分には目に見えぬ鉄柵があり、そこから興味本位で静観される珍獣扱いになっているようだ。

「そう言われても、まだお前の話が終わったわけじゃないだろ？『はいそうですか』と、簡単に引き下がる訳にはいかない」

そう。家族へと言い訳は確かに助かった。だが、目の前にいる神風翔自身の正体については、まだ説明不足である事は明白である。

「ですが、私から話せる事は極わずかであって、聞いたからと言って根本的な問題解決とはいきませんが…」

「サポート役ですと言われたからと言って、正体不明・身元不明の人物に、自分の代役を安心して頼んでいられるとでも？」

「…確かに。分かりました。可能な限りお話致しましょう」

俺の言葉に腕を組み、数秒考えるような仕草をとった後、翔は快く快諾してくれた。

その返答に満足気に頷く俺。

「それじゃ帰ろっか」

「ですから。それは不可能です」

…こいつは人の話を真面目に聞いていたのだろうか。

そろそろ苛立ちを爆発させてしまおうかと、体をぶるぶると震えさせていると――

「翔。俺達とさらなる親睦を深めるために、別室で雑談会を開こうじゃないか」

今まで傍観者であつたはずの男子生徒が翔の肩を掴んだのだ。

第8話 髪をかきあげずに耳元に口を近づける事により生まれる死角と誤解？

実は無自覚な優ほど性質の悪い女性はいない罍（挨拶）

もし少しでも面白いと感じて下さったなら評価とコメントを記入して下さると、とても励みになります。

評価なんざ出来るかゝと仰る方も、コメントだけでも大歓迎なので、思ったこと・感じた事を書いて下されば今後の執筆の糧といたく思っておりますのでご協力お願いします。

さて今回。

“男として行動してしまう優”と“何も知らず女性として見ている周り”という双方の温度差…とでも言うべきでしょうか？そういうものが少しでも感じてもらえたなら嬉しい限りです。

“なぜ翔は優へとなってしまったのか？”

果たして私が本当にその理由を考えつく事ができるのかっ！？
それではまた後書きで。

如月コウでした。

第9話 無呼吸委員長

「吉良……君？」

思わず君付けで呼ぶのを忘れそうになり、慌てて付け足した俺に、その男子生徒は少なからず俺にとっては素晴らしく不気味な笑みを浮かべた。

「そうですね。翔とは一年の頃に義兄弟の契りを交わした、吉良耕介すけです。今後とも宜しくお願いしますよっ」

（そんな誓いなんぞ初耳だが……。そもそもその無理やり爽やかぶつた口調は気味が悪いぞ……）

心の中では呟きながら、ツッコミを入れるわけにもいかず、困ったような笑みで対応する。

「もつと2人の将来について語り合っていたんですが、今は翔を義兄弟ではなく加害者として裁かなければ……。ではなくて語り合わなければいけないので失礼しますね」

「はあ……？つて、翔っ！？」

意味が分からず首を傾げて生返事を返していると、捕らえられた宇宙人のように、両脇を他の男子生徒にがちり固められ、廊下を連行されていく翔の姿。

その姿を呆然と見送りつつも、翔の席に腰を下ろし、これからどうするべきかを考えていると、ふと目の前が人影によって遮られる。

「……………」

目の前に立ち、俺を見下ろしているのは1人の女生徒。

黒く縁取られた眼鏡をかけて、その腰まである黒髪を飾ることなく凛々しく立つ彼女の姿の名は――

「……………誰でしたっけ？」

これまで数多くの愛想笑いを浮かべてきたが、未だかつて無い程引

き攣った愛想笑いは初めてだろう。

そんな俺を見ても、その女生徒は動じる事なく、その特徴的な眼鏡を中指でクイッと押し直す。

そして感情の起伏がない事務的な声色で『このクラスの委員長です』とだけ答えた。

「委員長さん？」

「はい」

俺の問いかけに、単語でしか答えてくれない委員長。

話し掛けて欲しいと願ったが、よもやまともに挨拶以外の会話をを行う初めての相手がこのようなコミュニケーション困難な相手とは思ってもよらなかった。

「それで何か用ですか…？」

「転校生に学校の案内を行うのは委員長業務の一環のひとつであるかと」

俺の問いかけに、委員長は変わりなくまったく感情の起伏無く無呼吸で言い切ってくれた。

「そ、そうですか…」

再び愛想笑い。馬鹿の一つ覚えだと言われるかも知れないが、実際にこの場に立つてみる。怖いから。

「見知らぬ私が行うよりも親戚である神風翔君に頼むべきかと思ひ本人にそれを示唆しようとしたところ、今しがた複数名の男子生徒に逮捕された挙句連行されてしまった以上已む得ません」

こちらの心中をまるで無視するかの如く、喋り続ける委員長。いや、実際無視されているのだろうが。

「案内役は私で我慢して下さい。円滑な高校生活を送る為に校内の地理把握は必要不可欠なので」

無表情のまま、感情の起伏無くこれほどまでに事務的な言葉を続けられると、ある意味感嘆してしまう。

「つまり、学校を案内してくれるって事？」

確認のため、要点だけを引き出し彼女に問う。

すると委員長は一言、『はい』とだけ答えてくれた。どうやら問かけには、一応真摯に答えてくれるらしい。

しかしここで問題が浮上する。

（案内って言ってもな…）

転校生でありながら、転校生でない俺にとっては、この学校はすでに一年間通った学び舎。

案内してもらったところで、知らない場所なんてものは存在しない。「いえ…その、朝早めに来た時に親切な方がある程度の場所を説明してくれたので……」

申し訳なさそうに、委員長に頭を下げる。

彼女なりの心遣いを、無下に断るのはどうかとも思ったりもしたが、知っている事を延々説明されて周るのは苦痛だ。

頭を上げて、委員長の様子を伺う。

「……………」

しかし彼女は無言のまま無表情を貫いている。

某クイズ番組で答えを焦らす司会者よりも、こちらの方が遥かに威圧感がある。

「あの…」

「そうですか。それではもし今後学校生活を円滑に進めるに当たって何か問題があれば仰って下さい。それでは失礼します」

耐え切れず口を開いた俺を再び無視して、委員長は目を伏せ、軽くお辞儀するとスタスタと歩いていった。

「な、なんなんだ…」

颯爽と立ち去ってゆく名も知らぬ委員長の後姿を、呆然と見送りながら俺は1人呟いたのだった…。

第9話 無呼吸委員長（後書き）

読めるもんなら音読してみろっ（挨拶）

もし少しでも面白いと感じて下さったなら評価とコメントを記入して下さいと、とても励みになります。

思ったこと・感じた事を書いて下されば今後の執筆の糧としく思っておりますのでご協力お願いします。

さて今回ですが。やっと男女キャラが一名ずつ増えました。皆さん女の子ですよっ！…無表情ですが。

あまりにも多過ぎると書き分けが大変なので今からドキドキものです。

次回が私なりの山場となります。いよいよ性別反転の原因の一端が説明されます。どんな変な説明でも見捨てないようにして下さいね

？（事前交渉）

それでは次回後書きで会いましょう。

如月コウでした（ぺこ）

第10話 お風呂と電波と俺っ!?

「それは小野寺薫おのでらかおるさんですね」

帰宅後。

家族と共に食事を終え、促されるがまま有無も言わず入らされたお風呂からあがった俺は、元自室、現神風翔の部屋で寛いでいた。

「小野寺薫…？聞いた事ないな…」

俺は、翔が吉良達に連行されていった後に出会った少女について、質問した答えとして返ってきた名前に首を傾げる。

「それはそうでしょう。こう言ってはなんですが、彼女はクラスの学級委員長という立場ながら、人の前に立つ事はしないので目立らない。一年の時は違うクラスであつた貴女が、彼女を知る可能性は極めて低いでしょう」

俺の呟きに対して、どこか小野寺薫を連想させるような口調で翔は答える。

「それよりまだお風呂は苦手なんですか？」

「ぐっ……」

先程の母親とのやり取りを盗み見ていたのだろう。やれやれと言った表情で、翔が肩を落とす。

確かに俺はお風呂が苦手だ。無論、入るのが嫌いだとか、面倒と言った理由ではない。

やはり最大の原因は――

「いい加減女性の体に慣れて欲しいものですね」

翔が溜め息混じりにその最大の原因を口にする。だがそれはそう簡単に慣れられるものでもない。ましてや、それが意図せずに訪れた変化であれば尚更のことだ。

そしてもう一つ厄介なのは家族の存在。

さすがに俺も男であつた以上多少なりとも興味はあるが、己の裸を見て喜ぶのは、自己の人間性が問われる気がしてならない。

だからこそお風呂に入るといふ行為は、可能な限り遠慮した代物となり、必死に拒絶していたのだ。

それをどう勘違いしたのか。家族は全員“極度の恥ずかしがり屋で初々しい女の子”として認知しやがった。

まったくもって、都合の悪い方向へとばかり解釈する性質の悪い家族である。

「しかしそればかりは慣れて頂かないと困ります」

「分かつてるよ……」

翔の言葉に力なく頷く俺。

だが、わざわざ落ち込むためにここにいるのではない。

「さて。そろそろいいだろう。話せよ」

数秒開けてから。翔を見据えて俺は疑問を口にした。

「……………」

「……………」

そこにはすでに先程までの和やかな雰囲気は無く、息が詰まりそうな程の重苦しい空気が場を支配していた。

ややあつて――

「ネットゲームにおいての“NPC”というものはご存知でしょう？」

何を思ったか、翔はパソコンの電源をONにし手早く起動させると、そう切り出した。

「は？ああ…ノンプレイヤーキャラクターの略称だよな？それが何なんだ？」

その突然の問いかけに少々呆気にとられながらも答える。

「そう。そして付け加えるなら“ゲームの世界において何らかの役割を持ち、その役割に応じてプレイヤーを導く事を主に行っているキャラクター”という立場にある者の名称です」

「……………はあ」

突然のゲーム解説に適当な相槌をうつ。

正体を話せと言っているのにも関わらず、この会話内容。本当に話す気があるかどうかすら怪しく思い、顔を渋めた瞬間だった。

「つまりこの世界において“私”がその立場にいる訳です」

さらりと。

驚くほど簡単に、目の前にいる神風翔は自分の正体を口にした。

「……………はあ？お前がNPC？なんの？」

「ですがそれは通常、パソコンという膨大な情報量を持つ世界の中で、ゲームという一部分の存在でしかありません」

怪訝そうな表情を浮かべる俺の疑問は、素晴らしくスルーしてくれやがる翔。

「そしてここからが重要です。1人の人間を、一つのパソコンとして考えてみて下さい」

もう誰か助けて欲しい。

正体を聞いただけで、こんな訳の分からない電波講義を受ける事になるとは誰が予想しただろうか。少なくとも俺は予想できなかった。「そう例えたのなら、そのパソコンは“コミュニケーションという媒介を通して他と繋がる事も可能な、かなり精密かつ高度でありながら自己修復機能をもった代物”と定義出来ます」

「あゝ……………頭大丈夫か？」

あまりの電波っぷりに引き起こされた眩暈をなんとか耐えつつも、我慢しきれず口を挟む。

「ですがパソコンである以上、どうしても弱点となるものが存在し

ます。なんだと思いますか？」

こちらの話を完璧に無視した挙句、そちらの疑問には答えると仰るようだ。

しかしどうやらその問いに答えない限り、話を進ませないつもりなのだろう。

こちらを見据えたまま翔は動かない。

「……ウィルスか？」

とりあえず一般的に言われているパソコンの弱点を述べてみる。

その答えに満足気に頷くと、翔は『では手短に』と前置いて次なる話へと切り出した。

「結論から言いましょう。“神風翔”という“パソコン”は、“S”という不純物……つまりはウィルスをインストールした事により、ある情報において壊滅的なダメージを受けました。その壊滅的なダメージを受けた情報こそが……」

――性別という情報です。

その言葉を聞くと同時に、俺の意識が遠退く。

……ああ神様。どうやら俺のささやかながらも平穏な日々は、いつの間にかこんな毒電波な与太話によって侵されていたらしい……。

第10話 お風呂と電波と俺っ！？（後書き）

はい、石を投げないで下さい！（挨拶）

もし少しでも面白いと感じて下さったなら評価とコメントを記入して下さい、とても励みになります。

思ったこと・感じた事を書いて下されば今後の執筆の糧としく思っておりますのでご協力お願いします。

さて今回ですが…難しいですね。

皆様に受け入れられるかがとても不安です。ですので、皆さんも自分をPCとして仮定して考えてみてください。（洗脳を試みる）

色々とツツコミ所が満載なまま、次回の後書きで会いましょう。

如月コウでした（礼）

第11話：男で女。でも女で男

俺の名前は神風翔改め神風優。

自称は男。他称は女。

体は女で頭脳は男だ。

決して名探偵でもなく、極々普通の高校二年生だったように記憶している。

「大丈夫か？」

あの、人生最悪の事実を突きつけられてから数日後の深夜2時。翔の部屋、パソコンの画面上。

頭上に『KYOUYA』と表示された学生服に高レベル者のみが扱える剣を携えた男が、初期装備の木刀を携えた俺に優しい言葉を投げ掛ける。

「優：じゃなかった。今は翔だったな」

名前を呼ぼうとして間違いに気がついたのか。男は文を打つ途中で訂正し、名前を入力し直す。

「気にするな」

その男の戸惑いを感じて、俺も言葉を返す。

プレイしているのはオン・ラインゲーム『夢幻学園』。

ベッドで熟睡している翔曰くは、『このゲーム自体が今の状態を引き起こした直接的な原因ではないので、プレイしても問題ない』という事なので、俺は再びこうして普段通りに過ごしていた。

「ここの階の敵はそろそろ打ち止めか…。次はどうする？もつと先に進むか？」

「あゝそうだな。悪いな。レベル上げに付き合ってもらって」

「別に構わんよ」

何気ない男同士の会話。その何気ない会話内容に、俺は嬉しいよう

な悲しいような表情を浮かべる。

（まさかネット内で男として生活出来る事に感動するなんて……）
心中複雑である。

だがまあそれはさておき…このゲーム。

“S”がインストールされたせいかどうかは不明なのだが、どうやら“性別の変更”という行為のみ操作不能になっていた。

さらに運が悪い事に、運営者側でバグが発生したらしく数人のキャラクターのレベルが初期レベルの一という設定に戻ってしまったらしく、その数人の中に俺も含まれていたらしい。

まさにふんだりけつたりである。

いくら、自分から『女です』と明言せずにプレイしていたとは言え、相手が俺を女だと勘違いさせるような口調や仕草を行っていたなら、それは十分過ぎるネカマ行為である。

IDも一度登録してしまえば変えられないこのゲームで男のままでもログインして、ネカマがバレてしまえば痛い話にしかない。

勿論、女だと思い込んでいる相手に、ネカマだったのかと問われた時に『女だけど男のキャラを作ってみました』と言ってプレイするのも一つの手段ではあるが…。如何せん何かそれはもう破滅的に駄目な気がする。男である事を主張したい俺にとって。

レベルも初期に戻ってしまった事だし、他のネットゲームにでも手を出そうかと思案もしたが―

『現在、貴女という存在は肉体レベルという一点において、このパソコンのプログラムの影響下にあります。現在、“S”のウィルスは抑えられている状態にありまして、移転し再び肉体的に変化をもたらす事はないでしょうが…。何かプログラムが再びインストールされた場合、そのはずみで被害が拡大する可能性は大いに考えられます』

この、翔の言葉が脳裏を霞めたのだ。

まったくもって電波かつ理不尽な理論で、男の時に聞いていたら無言で警察へと突き出す所だが…。

自称『“S”』という正体不明のウィルスが進入した際に発生したバグにより生み出された、ゲーム世界ではなく、この現実世界の俺の人生というゲームに対してのNPC』である現神風翔が言うのだ。蔑ろに出来ない。

その理論の成否は別としても、事実女となった俺が存在しているのだからな。

「しかし…まさか男だったとはな。すっかり騙されてたぞ」

響夜が快活に笑う。

「マテマテ。俺は女なんて一言も言った覚えがないぞ」

「だが、そう思われている自覚はあっただろう？」

そう言われてしまえば返す言葉がない。俺は『まいったよ』と言わんばかりのジェスチャーをとる。

すると、そんな俺を見て響夜が再び快活に笑う。

しかしこの響夜というキャラのプレイヤーはとても心が広く、いい奴だ。

このゲームをやり始めてすぐに知り合った相手な分、男だと白状するべきか迷ったが、笑って受け入れてくれた。

（男って認知される事って素晴らしい…）

思い返して、再び感動に打ちひしがれる俺。

そしてある程度時間が経った時――

「と、すまない。さすがに俺も少し寝ないと今日が辛い」

響夜が剣を納め、申し訳無さそうに言った。

「げっ…確かに俺も拙いな」

顔を見合わせ、互いに失笑する。

時刻はすでに午前4時。どうやら時間を忘れて楽しんでしまったようだ。

だがやはりネット世界とはいえ、ここまで気さくに話せる奴は現実世界においてもそうはいない。

（こいつが現実にくれたらな〜…）

そんな馬鹿な事をふと考えてしまう。きっとこれはゲームの世界で話であって、現実に出会って見れば性格が全然違うだろう。

だが今の俺にしてみれば、男として俺を認知してくれる唯一の人物なのだ。

「それじゃまた今晚に」

再び今日の夜の約束を取りつけ、ゲーム画面を閉じパソコンの電源をOFFにする。

「さて、寝るとしますか…」

電源を消すと、訪れたのは凄まじい眠気。

立ち上がり、固まった体をほぐす為に一旦背伸びし、欠伸を噛み殺しながらすぐ傍のベッドへと身を委ねる。

潜り込む途中何か障害物があつたように思えたが、寝惚け眼ながらも器用にそれを避けつつ空いたスペースへと体を滑り込ませる。

やはり慣れ親しんだ自分のベッドというのは、他では得られないほどの安眠を誘うものだ。

そしてそれに抗う事無く、俺は静かに閉じかけた瞼を完全に閉じたのだった…。

第11話：男で女。でも女で男（後書き）

力の続く限り毎日更新出来る……気がしないでもない！（挨拶）

もし良ければ評価とコメントを記入して下さいと、とても励みになります。思ったこと・感じた事を書いて下されば今後の執筆の糧としたいと思っておりますのでご協力お願いします。

勿論、作者宛てに直接メールを送って下さっても構いません。寧ろ小躍りして喜びます。

さて今回は…なんだろう？（困惑）

優なりの男としての抵抗？みたいなものでしょうか。

前話で五話分が終わり、今回も新たな展開が待っています。………たぶんきつと。

脊髄反射で執筆活動を行う駄目作者に乾杯…orz

それでは次回後書きで会いましょう。如月コウでした（ぺこ）

第11・5話 藍璃の朝

皆さん初めまして。

私の名前は神風藍璃と言います。

性別は女。中学二年生。

身長は154cm。

スリーサイズ及び体重は永遠の秘密と言う事でお願いします。
家族構成は父、母、兄そして私の四人家族…だったのですが、
つい数日前。

新しい家族とも言えるべき人が、この家にやって来ました。

その人の名前は…優さん。

記憶喪失という大変辛い現状ながらも、めげずに明るく振舞う気丈さ。

時々その不安に耐え切れなくなっただけか癇癪を起こす時もありますが、
とても元気で素敵な人です。

身体的な特徴で言えばやっぱりその美しいセミロングのブロンドの
髪。

その小柄で整った顔。綺麗な二重の奥にある、薄っすらと青がかつ
た瞳に見つめられたら、同性の私ですらドキッとしてしまう。

そして身長は…私よりも全然高いので160cmぐらいはあるで
しょうか？

とにかく綺麗と言う言葉は、この人のためにあるんじゃないんだろ
うかと思わせるぐらいの容姿です。

あの馬鹿で間抜けで何処に出しても恥ずかしいような兄を、あそこ
まで好青年に変えた人はやはり普通の人とは違うものなのかも知れ
ません。

でもいくら外面を変えたところで所詮兄は兄。どこでその本性を現
すか分かったものじゃありません。
そして今日。

ついにその化けの皮が剥がれたようで、すでに朝食の準備は整ったというのに一向に起きてくる気配がありません。

優さんの姿も見えませんが、転校したばかりの学校で疲れが溜まっているのでしよう。

本来なら女の子は早く起きないと、色々と準備している間に遅刻する可能性があるものですが、そこは優さん。

『すぐにいくから』と答えた後、男性であるお兄ちゃんと同じ程度の時間しか要せず、完璧に身支度を整えるのです。

一度その方法を教えて頂きたいものです。きっと無駄が一切ない、優さんらしい方法なのでしょう。

ですから、出来るだけギリギリまで寝かせてあげたく思います。

そうなると思か不本意ではありますが、兄を起こさなければいけません。

「お兄ちゃん？いい加減起きないと遅刻するよ？」

一度でいいので感情のまま扉を開け放ち、起き上がる暇など与えずにマウントポジションをとると、眠っている兄を永眠させるが如く勢いで、心ゆくまで殴り続けたいと思ったりもするのですが、努めて冷静を装いドアをノックします。

「……………」

案の定それでも反応はありません。

こうなると、部屋に入り直接兄を叩き起こすしか手段はありません。

「お兄ちゃん……………」

そして中の様子を伺うように、私はドアの隙間から少しでも顔を覗かせます。

そして――

「……………え？」

私ほとんどないものを見つけたのです…。

第11・5話 藍璃の朝（後書き）

日曜日って美味しいですか？（挨拶）

もし良ければ評価とコメントを記入して下さいと、とても励みになります。思ったこと・感じた事を書いて下されば今後の執筆の糧としたいと思っておりますのでご協力お願いします。

勿論、作者宛てに直接メールを送って下さっても構いません。寧ろ小躍りして喜びます。

さて今回は、前回の11話と次回である12話の間のお話ですね。完璧に藍璃としての視点で書かれています。藍璃の視点から見た優と、藍璃が優へ抱いている尊敬の念が垣間見れたのなら嬉しい限りです。

次回、12話では再び優の視点でお送りしますので、宜しくお願い致しますね。

それでは次回の後書きでお会いしましょう。如月コウでした。

第12話 父の叫びと母の笑顔は家族の基本形である

「この馬鹿兄ーーーーー!!」

響夜というゲーム内の友と別れた約二時間後の朝。

突然部屋中に響き渡る、甲高い悲鳴のような藍璃の声。

「なんだなんだっ!？」

ベッドの端で寝ていたのだろう。

その声のあまりの大きさに驚き、跳ね起きた俺は床へと滑り落ちた。

「ぎゃーーーーー!？」

そして、驚きのあまり早鐘の如く鳴り響く鼓動が落ち着かぬ間に、続いて真横で聞こえる男の叫び声。

慌てて視線をそちらへと動かす。

そこにいたのは、起き上がる暇など与えずにマウントポジションをとると、眠っていた翔を永眠させるが如く勢いで心ゆくまで殴り続けている藍璃の姿。

かつては男であつた俺が見ても、畏怖を抱かずにはられないような、一撃一撃に全体重を乗せたいいいパンチである。

「優さん…レフリーストップを…要求します…」

そのまさに一撃必殺の拳を何度も受けながらも、何とか声を絞り出す翔。

「藍璃落ち着けっ!普段ならまだしもこいつは本当に死んでしまうつ!」

事態は一刻を争う状況であると察知した俺は、口調を変える事すら忘れて藍璃を抑えにかかる。しかし如何せんながら力不足である。人間というものは、何かを殴る等の行為を行う時、無意識にその力を自分の肉体が傷つけないようにセーブするものらしいが…。

どうやら今の藍璃はそれを取っ払った所にいるらしい。正直俺1人の力では手がつけられない。

「翔っ！お前も少しは手伝えっ！」

完璧に止められないにしても、多少は攻撃を抑える事は出来る。

翔はその隙を見計らって起き上がり、馬乗りになっていた藍璃の両手を掴み、一気にベッドへと押し倒す。

……勿論と言うかなんと言うか。藍璃の後ろで両手を掴んでいた俺と一緒に。

「一体何事っ！？」

そしてそこに颯爽と現れる父と母。

その眼前に広がるのは、着衣の乱れた自分の息子に押し倒された、これまた同じく着衣の乱れた娘とパジャマ姿の女性。

「……………」

「……………」

凍りつく場の空気。

今更言うような事でもないが、この状況は非常に拙い。

「ば……………」

「ば……………」

「馬鹿野郎……………」

父は涙を浮かべながら叫び、翔の襟を掴みガクガクと揺さぶる。

それはそうだろう。知らない者が見ればどう考えても犯罪行為のそれである。

当然、父親として毅然とした態度で望まなければいけない。

そして道を踏み誤った息子を諭し、再び正しき道へと導くため声を荒げて叫ぶのだ。

「どうしてお父さんも呼んでくれないだ……………」

……いや。人の親としてその発言はどうだろう、父よ。

未だに騒動の渦中にある翔の部屋の中。父まで乱入してしまった以

上、そう簡単に事態が沈静化に進むとは考えられない。

「あなた？」

「あ、ママ聞いてくれっ！翔が――」

「黙れ」

「ごめんなさい」

予想に反して、父、すんなり沈静化。この数秒のやり取りで、一瞬にして家族内での力関係が窺い知れる。

「とにかくいつまでもふざけてないで、下りてきて御飯食べちゃいなさいね？」

いつも通り柔らかな笑みを浮かべる母。先程の黙れ発言が嘘のようなほんとした笑顔である。

それから五分も経たずに、暴れていた藍璃もすっかり平常心を取り戻したのか、乱れた着衣を直して『ごめんなさい』と俺へ一言謝罪の言葉を残してリビングへと下りていった。

「……優さん」

「……ごめんなさい」

責めるような口調の翔に、俺は素直に謝った。

現状と不鮮明ながらも昨日の寝る瞬間の記憶を手繰り寄せてみれば、俺が優としての自室に戻らずに、ついうっかり翔のベッドに潜り込んだという事が安易に理解出来たためだ。

「貴女は故意に私を殺そうと画策していませんか？」

「その可能性は否定できないが、今のところはないと答えておこう」
翔の質問に真顔で即答する。

そんな俺の答えに翔は、『どうして私がこんな目に……』と哀愁たつぷりに呟き、溜め息をついて制服に手をかける。

「さて、俺も自室に戻って制服に着替えるとするか……」
面倒臭そうに、背伸びをしながら立ち上がる。

「本来、女性というものは身支度に時間がかかるものなのだという
ことも視野に入れて早起きして欲しいものです」

「そう言われてもな」。女としての身嗜みは、性別の情報の一環と

して無理やりにもベストな状態へと戻されるんだろ？」

「女性が聞いたら、喉から手が出るほど欲しいシステムですね……」
翔の言う通り、女である藍璃がなにやらその事で尊敬の眼差しを送っていたが……つまりはそういう事だ。

必要以上の美容……つまりは化粧を行なうと言うなら話は別だが、世の女性が欠かさず行なっているであろう髪の手入れや、肌の手入れ。それらはすべて、性別の情報としてすでに構築されているため、手入れの必要がまったく無いのだと言う。

「まあ男である俺が、女として一生を快適に過ごせるようにしてくれる、ありがた迷惑な機能って訳か……」

改めてその事実を口にして、諦めにも似た溜め息が俺の口から零れるのだった……。

第12話 父の叫びと母の笑顔は家族の基本形である（後書き）

人間の限界は、もう駄目だと感じた数歩先にあります（挨拶）

もし良ければ評価とコメントを記入して下さいと、とても励みになります。思ったこと・感じた事を書いて下されば今後の執筆の糧としたいと思っておりますのでご協力お願いします。

勿論、作者宛てに直接メールを送って下さっても構いません。寧ろ小躍りして喜びます。

さて今回は、もうとにかくコメディを目指しました（この作品コメディで登録されております）一応、『藍璃の朝』を読まなくても、続くような話の流れになっているように頑張りました。

……だから何？と言われればそれまでですがorz実は前回の『藍璃の朝』をいつ出すか迷っていた名残なんですけどね。

次回の13話では再びあの委員長さんの出番です。はてさてどうなる事やら。

それでは次回の後書きでお会いしましょう。如月コウでした。

第13話 優の外的な憂鬱

慌しかった朝はすでに終わりを告げ、今は学校の昼休み。

転校からすでに随分と日にちが経過しており、通常ならば俺もそろそろ仲の良い友達でも誘って中庭のベンチに座り、仲慎ましく弁当を食べている…予定だった。

「……………」

しかしどういった運命の悪戯か、仲の良い友達というカテゴリーなどおらず、人影も無い。

あるのは、なぜか俺を囲うような形で陣取っているクラスの女子達の姿。

その表情はさながら、いつ敵襲が訪れるか分からない戦場で腰を下ろしつつも、周囲の警戒を怠らない熟練した兵士のようなのである。

先程から目の前を通る男すべてを威嚇している。

威嚇された男子には悪いが、外から見ると怖いだろうが、真ん中にいる俺はもつと怖いのだ。勘弁してくれ。

そんな殺伐とした重苦しい雰囲気の中。

疲れた表情で弁当を食しつつも、俺は今日に至るまでの己の行動において、この事態を引き起こす事となってしまった失敗は無かったかと頭を悩ませていた。

（やはり体育の前の休み時間、自分が女である事を綺麗さっぱり忘れて、女子更衣室に行かぬままいきなり教室で制服を脱ごうとボタンの手をかけたのが拙かったのだろうか？）

しかしあれなら、慌てて引き返してきた数人の女生徒の制止により未遂で終わった筈だ。

頭を振り、もう一度良く考えてみる。

（ではまさか、何度も誤って男子トイレへと足を踏み入れたのが拙かったのだろうか？）

すぐさま思い当たる行動を思い返す。

だがすでにその問題は解決したはずだ。なぜなら俺はその度に、ここごとく初々しい女生徒を演じきり事無きを得たはずである。

（それではまさか、クラスメイトである男子ならいざ知らず、見知らぬ男子にまで手を振られる度に手を振り返し、尚且つ円滑な友好関係の構築のため笑顔と挨拶を忘れなかったのが問題だとも言うのだろうか？）

さすがにそれは考えられない。それをなぜかと問うのなら。

かつての俺は、愛想の一つも振り撒かずに円滑な友好関係を築けなかった。

そこで同じ徹を踏まぬようと、せめて挨拶だけとは思いい完璧に行なっているはずだからだ。

一通り考えてみるものの、やはり己の行動にこの状態を引き起こした直接的原因があるとは思えない。

（となると考えられる原因は――：）

「やはり自己紹介時の『特技は某落ちゲーで19連鎖を行なえます』が問題だったか……」

あれを行なうには至難の業。

それを容易く特技と言いつた俺に、皆畏怖の念を抱いてしまった近寄り難くなってしまったというのが。

「なんたる悲劇だ……」

「理解不能です」

自分の浅はかな失敗に一人落ち込む俺の呟きに、立ち去り始めた遠巻きの女生徒達に挨拶を交わす委員長こと小野寺薫が冷静にツツコむ。

「悩み事ですか」

どうやら俺が考え込んでいる間に、皆昼食を食べ終えていたようだ。彼女に後の事は任せ、一足先に教室へと戻っていったようである。無表情ながらも俺の隣へと座り、その手に持っていた食べ終わった小さな弁当箱を丁寧に仕舞い込み、こちらの様子を伺う。

……やはり無表情ながら。

「な、なんで皆私の周りを囲むようにお昼ご飯を食べるのかな」とか……？」

『あはは』とお得意の愛想笑い浮かべながら、委員長の様子を伺いつつ、その真意を問うてみる。

すると委員長は、暫くじつとこちらを見据えた後、俯き視線を落として左手を口元へと運び、なにやら考えているような仕草のまま動きを止めた。

「……………」

「……………」

そして訪れる沈黙の時。

どうやらこの沈黙は、彼女なりの俺の問いかけに対する適切な返答への思考時間のようだとやっと最近になって理解出来た。

だが――

「……………」

「……………」

この無言のプレッシャーには、いつまで経っても慣れる事はない。

暫くして。口元に添えた左手を下ろし、俯いていた顔を上げて再びこちらに向き返し、長考の末導き出した言葉を紡ぐ。

「その問いかけには様々な要因があり私が知りうる言葉を尽くしても一つに纏めきれるものではありませんでした」

彼女はいつものように無表情、ついでに無呼吸というおまけつきで、信じられないような長い言葉を一気に言い切った。

「そっか……」

その言葉に、俺は力無く項垂れる。

その瞬間だった。

「……………ふぁ」

聞き慣れぬ可愛い声が、すぐ隣から聞こえたのだ。

まさかとは思いつつも、横目で隣に座っている薫を盗み見ると、そこには――

「……失礼しました。睡眠不足のためか我慢出来ませんでした」
相談中に欠伸をした事への謝罪のつもりだろう。

こちらが見ている事に気がついたのか、彼女は小さく開けた口を左手で隠しつつ元の無表情へと戻す。

しかし今の俺はそれどころではない。

あの、ミス無表情と言っても過言ではない委員長が、初めて人間らしい動作を見せたのだっ……！

その驚きは、とてもじゃないが言葉で言い表せるものではない。

そしてその俺の驚きを読み取ったのか。

彼女はまるで、そんな居心地の悪さを振り払うかのように立ち上がり、俺を教室へ戻るように促した。

第13話 優の的外れな憂鬱（後書き）

恥も外聞も無く現実で狂喜乱舞（挨拶）

もし良ければ評価とコメントを記入して下さいと、とても励みになります。思ったこと・感じた事を書いて下されば今後の執筆の糧としたいと思っておりますのでご協力お願いします。

勿論、作者宛てに直接メールを送って下さっても構いません。寧ろ小躍りして喜びます。

そしてここで皆様に感謝の言葉を。

本日で登録から一週間が過ぎたのですが、そろそろアクセス数が1000件に到達致します。これは読者の皆様が、如月の小説に足を運んで下さったという事であり、とても恐縮至極でございます。感激です。本当にありがとうございます（礼）

さて今回のお話ですが…。翔が考えていた事が的外れであるという事が、なんとなく伝わりましたか？（不安）

次回からは、新たなキャラクターも出てきますので、少しは楽しめるかと思います。

慢心せず、これから少しでも楽しんで頂けるような作品を創っていきたいと思いますので、宜しく願いますね。

それでは。如月コウでした（礼）

第14話 現状の死刑宣告と今後の拒絶を一言で表すと？

結局、惜しまれつつも委員長に促されるまま教室へと足を踏み入れた、まさにその時だった。

「優ちゃん……」

気持ちの悪い猫なで声で、吉良耕介がこちらへと飛び掛ってきたのだ。

正体不明の悪寒に、思わず後ずさりながら身構える。

だが、吉良が俺に辿り着く事はなかった。

なぜなら――

「あぶない」

「ぶべらっ!？」

注意を促すつもりがまったく無い声を出しながらも、地面よりも僅かに浮いた場所にいる吉良の顔面を容赦なく打ち抜いた、女生徒の上段回し蹴りは鮮烈だった。

女生徒はその動作のせいで靡いた、背中の後ろ程の長さもある左のサイドポニーをかきあげ姿勢を正す。

そして綺麗に弧を描いて黒板へと叩きつけられ、そのまま下へとずり落ちた吉良に冷やかな視線を送った。

「優さん大丈夫ですか？」

それまでサイドポニーの女生徒の横に立ち、オロオロしていたボブカットが似合う小柄な女生徒がこちらに駆け寄り声をかけてきた。

「わ、私は大丈夫だけど……。吉良君の方があまり大丈夫じゃないんじゃない……」

「大丈夫大丈夫。女の子にいきなり抱きつこうとする奴が悪い。ね？綾奈^{あやな}」

「そ、それはそうだけど……」

「……………あはははは」

未だ微動だにしない吉良を尻目に、そう言っただけに笑うサイドポニーの女生徒と、綾奈と呼ばれた、俺より身長が一回りほど小さな女生徒を交互に見ながら、俺は馴染み始めてしまった女口調と苦笑いで答える。

そうしてる間に『危なかったね』『大丈夫？』と駆け寄られ、知らない間に再び俺の周りに女子の輪が出来ていた。

「初動作から終わりに至るまで無駄のない敵の急所をピンポイントでついた見事な上段回し蹴りでした。翼」

「ありがと、薫。まあそれでも、女子空手部のエースだからね」

それを遠巻きから見つめつつ、翼と呼ばれた少女が委員長の言葉に微笑む。

「人様の顔面をシュートするとは何様のつもりだっ！？悟技翼！」
なとうきゆう

そこで突然吉良が復活し、それと同時に悟技翼という名の少女に詰め寄り抗議し始めた。

「……………あん？」

しかし、どうやら吉良の発した言葉の中にどうやら触れてはいけないうね線があったらしく、瞬時に少女の目が据わる。

そして周りの生徒達は、無言で一定の距離を空け始めた。ある者は机を隅に除け始め、またある者はさり気なく机に飾られるであろう花瓶と花を準備し始める。

「ちょ、ちょっと待てっ！？委員長も黙ってないで、今まさにいわれも無い暴力を行おうとしている親友に何か言っただけでくれっ！」

「死して屍拾う者なし」

「……っですでに避難してすっげえ遠くにいながら、今平然と俺への死刑宣告と、暗にその後の対応に関しても俺に関わる気が無い事を述べましたよねえ！？」

つい先程まで俺の横に居たはずの委員長。すでに『我関せず』と言わんばかりに一言言い放ち、飄々とした表情で教室の隅にある自分

の机で読書中である。

（ん？俺の隣から退避した？それってつまりー）

「死に晒せー！！！！」

「ボールは友だびべらっ！？」

思考を遮るかのように意味不明な言葉を残して、再び回転しつつ突っ込んでくる吉良。

その先にあるものは――

（どう考えても俺だよなあ……）

気がついたところで、今はすでに後の祭りと言うやつだ。どかつ！と激しい衝突音を教室中に響かせ、見事俺は飛んできた吉良の下敷きと相成った。

「いつつ……」

したたか打ち付けた腰を擦りながら、俺は涙目になりながらぶつかる瞬間に閉じた瞼を開け放ち、周りを見渡す。

するとそこは奇妙な光景が広がっていた。

まず、目と鼻の先にいる吉良は、どういう訳か驚愕に目を見開いたまま固まってしまっている。

そして取り囲むのようにしてこちらの様子を伺っている女子達は、非難するような視線の者もいれば、激しい憤怒の表情で肩をふるふると震わせている者と、その態度と様々である。

一方。その他大勢の男子の態度はさらに理解不能で、『やられた』だの『羨まし過ぎる』と言いながら、涙まで流す始末だ。

訳が分からず、首を傾げていると。

「柔らかい……」

呆然と吉良が呟いた言葉が耳に入った。

その言葉と共に感じた、胸部への違和感を確かめるように視線を落とす。

手を床につこうとでもしてのだろう。視線の先には、差し出された

吉良の右手が俺の胸をばっちり握っており――

「~~~~~っ!?!」

そこで完全に思考する事よりも先に、言葉にならない悲鳴をあげながら体が動いた。

たぶん俺が思うに、恥も外聞も無く本能的に女としてのリアクションをとったのは、はじめての事だったはずだ。

吉良の腕を素早くとりながら体を反転させて、上下の関係をすり替える。

そして起き上がる暇など与えずにマウントポジションをとると、そのまま永眠させるが如く勢いで心ゆくまで殴り続けていた。

その一部始終を見ていた神風翔を、今朝に自分の身に振りかかった災難と寸分変わらない状況をどこか遠くに見つつ。

『やはり兄妹ですね…』

と、溜め息混じりに呟くのだった。

第14話 現状の死刑宣告と今後の拒絶を一言で表すと？（後書き）

ラブコメディのラブの部分がまったくありません（挨拶）

もし良ければ評価とコメントを記入して下さいと、とても励みになります。思ったこと・感じた事を書いて下されば今後の執筆の糧としたいと思っておりますのでご協力お願いします。

勿論、作者宛てに直接メールを送って下さっても構いません。寧ろ小躍りして喜びます。

さて今回にやっとこさ登場した二人の女の子。果たしてその正体はっ！？…いあクラスメイトですけどね（ああ）

実は次の15話とエピソードで、私的には第一部は完結します。随分と長い前フリでした。ごめんなさいorz

それでは次の後書きでお会いしましょう。如月コウでした。

第15話 神風優におけるその属性について

ここで勘違いしないで頂きたい。

確かに、不覚にも本心から女としての行動をとってしまった事は事実だ。

それは男らしく非を認めようじゃないか。

しかしながらそれを真実として捉えるのはどうだろう。

事実が必ずしも真実である、という保障はどこにもない。

ましてや老若男女誰であつたとしても、突然何者かによつて体を触られれば多少なりとも“驚きのリアクションをとる”というものは存在して然るべき動作である。

その動物的とまで言える自己における危機回避行動に対して、『顔を真っ赤にして可愛い』や『初々しくていいっ！』などと言つたかなり偏つた知識においての観点による評価：いわゆる偏見というもので俺といういち個人のすべてを理解したつもりでいられるのは早計というものだ。

こうして無理やり小難しい言葉を並べて、インテリぶっている事にも訳がある。

つまり何を言いたいのか。

その答えは極めて単純かつ明白である。

「可愛いって言うなーー!!」

「無理無理。だってその怒った顔もまた可愛いから」

まったく災難だった学校の帰り道。

ハンバーガーショップの店内。各自各々が頼んだ注文の品物を頼張りながら押し問答を繰り返していた。

俺と小野寺薫。そしてその向かいに悟技翼、菜乃綾^{なのあやな}奈がテーブルにつき、総勢4名は、悟技の『優は1人にすると浚われちゃいそうだ

から家まで送ろう』という訳のわからない提案により放課後の少しの時間、行動を共にしていた。
俺の叫びを頭を撫でながら軽く流して、悟技翼は未だに俺を開放しないでいる。

悟技翼は身長が女子にしては高い方で170cm以上はあるようで、160cm前後しかない俺の身長では、容易く頭を撫で回されてしまう。

しかしどう考えても可愛さで言うのなら、菜乃綾奈の方がこの中では群を抜いているように思える。

ボブカットが似合う童顔。そして、その幼顔には似合い過ぎるほどの背の低さ、及びに体型は愛らしい小動物を連想させる。

「翼。その表現は神風さんにとって適切ではありません」

黒縁眼鏡をくいと押し上げ、悟技の言葉に意義を申し立てる。

（お、委員長も分かっているな）

うんうんと俺が頷いているのを横目に、薫は無表情に淡々とその頭の中で整理された理由を一気に読み上げる。

「神風さんはいわゆる“天然”という属性に準ずる人物であり可愛いと漠然とした表現方法を使用するとその属性ゆえに理解できず混乱させる恐れがあります」

一瞬耳を疑ってしまった。

そのあまりにも俺の思考内容と違った、無表情で淡々と語るべき内容ではない言葉に、俺はあんぐりと口を開けて呆然と薫の顔を見つめる。

しかし素知らぬ顔で、再びハンバーガーを頬張る薫。

その姿に俺も下手な追求をする事は止めておき、溜め息混じりに頼んだウーロン茶のストローに口をつける。

だが翼はそうは思わなかったらしい。

「つまり？」

眉を顰め、首を傾げて薫に言葉の意味を質問する。

「つまりは――」

すると薫は二度ハンバーガーを置き仰々しく口を開く。

馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに、俺は大きな音を立ててウーロン茶を口に含む。

「自己の胸を公衆の面前で触られた時の体温上昇においての顔の赤面具合とその後の照れ隠しの行動において可愛さを感じられる。そう明確に表現するべきかと」

「ぶーーーーーっ!!」

「きゃっ!?!」

その無表情で淡々と、尚且つ公衆の面前で話すべきではない内容に、今度はその口に含んだウーロン茶を盛大に噴き出す俺。

そしてその被害は、丁度俺と向かい合っていた綾奈に直撃する。

「ご、ごめんっ…」

慌てて、もっていたハンカチを手にして綾奈へと手を差し伸べる。

「だ、大丈夫ですから…気にしないで下さい」

少し困ったような…、だがほんわかとした笑顔を浮かべながら、綾奈は自分のハンカチを取り出す。

だがそれを制し、俺は綾奈の濡れた頬にハンカチを添える。

「ごめんね」

「う、ううんっ…!ほ、ホント気にしないで下さいね…っ!?!」

綾奈はなぜか頬をほのかに朱色に染め、緊張からか言葉が変に力強い。

そこで気がつく周囲の視線。全員食べるのを一時中断し、こちらの光景に呆然と見とれている。

だが、一度出してしまった手を引っ込めるわけにはいかない。無心で綾奈にかかった滴を拭き取る。

その横で、ハンバーガーを食べ終えたのか、ポテトを頬張りながら

雑談を推し進める二人。

「翼。謝罪し訂正します。神風さんは“天然”だけではなく“百合”の属性も兼ね備えているようです」

「なるほど。両刀使いと言う訳か…侮れないね」

「二人とも…いいから黙ってくれ……」

学校に通い始めて数日。

どうやら俺は、友達選びという最大の問題を間違えてしまったらしい。

これからの学校生活に一抹の不安を感じつつ。

俺は、静かに溜め息を吐いたのだった…。

第15話 神風優におけるその属性について（後書き）

友人に作中のネタを振られて一瞬何のことか考えた（挨拶）

さて。一応残すは第一部のエピローグ的な第16話を打てば、ひと段落でしょうか？

その第16話は今日中にはUP出来るかと思っています。

如月的第一部は、言い表すなら『出会い』のように思っております。実際第17話からの第二部では、一部で出てきたキャラクター達が中心となった話になりますね。本当のドタバタはまだまだこれから？

それでは次回の後書きでお会いしましょう。如月コウでした。

第15・5話 可能性を示唆すると生まれた問題点

なんとか？無事に帰宅した俺は、いつも通りご飯を食べて、洪々ながらお風呂に入って…。

そうしている内に、どうやら家族の皆は寝静まったらしく、一階にある風呂場から自室に到るまでの廊下は、すでに消灯されていた。

「疲れた…」

自分のベッドへと、前のめりに倒れこむ。

目を閉じると、まず思い返されるのは騒がしかったクラスメイト達の顔。

思い返して―

（男だったとしても同じようなもんか…）

そう思った。

この疲れも、新しい環境も。

女という根底の違いはあるものの、自分が神風翔であったとしても、あのクラスメイト達と共に過ごす事には変わりないのだから。

多少の罪悪感があると言えば、ある。

嘘は嘘。

そう考えると、俺は目先の保障の確保に動かずに、意地でも男である事を証明した方が良かったのではないかとも思ってしまう。

「まあ…全部終わっちゃった事、か」

深い溜め息をつく。

そして疲れ果てた体をなんとか奮い立たせて、俺は抜き足忍び足で翔の部屋に訪れる。

「どうぞ」

ノックの後、聞こえてきたのはいつもの声。

あまりに自分のイメージとは違った、神風翔の声というものに少し戸惑ってしまう。

体の内で聞く声と、体の外から聞く自分の声はまったく異なって聞

こえると、何処かで聞いた事がある。今感じている違和感もその一つだろう。

用意された椅子をすり抜け、ベッドの上に座り込む。

そこは、この家でまだまだ一番に安心できる場所。

「……………」

「……………」

俺の中にある不安を察したのか。翔はただ黙って、俺が口を開くのを待っている。

「“S”ってなんだろうな…」

それが。俺が悩みぬいた末での、最初の疑問だった。

「私にもそれは分かりません。私も突然この世界で、神風翔として産み落とされた存在ですからね」

翔が苦笑する。

その表情には、何かに対する諦めのようなものを感じられた。

「俺はこれからどうなっていくんだろうな…」

「現状だけで物を言うなら、男に戻るという可能性は極めて低いでしょうね」

「お前は？」

「さあ……どうでしょうかね。何にせよ、私には貴女をサポートする以外にはする事がなさそうですね」

予想外だったのだろう。自分への問いかけに、少し驚いたような表情で翔は答える。

再び二人の間に沈黙が訪れる。

そして、今度は翔がその沈黙を破り、口を開いた。

「“S”は。ともすれば人の変身願望がパソコンという媒体を通して、歪ながらも形を成したものかも知れませんか」

「え？」

突然の翔の言葉に、俺は首を傾げる。

「男性が女性になる、というのはその極端な例ですからね」

「それはそうだろうが……。俺はそんな願望持っちゃいなかったぞ」

その俺の言葉に、『だから願望というウィルスなんですよ』と翔は笑う。

そんな自己の存在を根底からひっくり返してしまうような願望が、そう易々と簡単に叶う筈が無い。

だがそれらの変身願望が集まり、一個の形を成したとしたら——どうだろうか。

意識下の変革を、その肉体にまで及ぼせるモノがあるとしたら。

勿論、そんなものは所詮空想論であって、有り得ない話だ。

だが何事も『もしあったとしたら？』と、問われるとその存在を否定は出来ない。

「しかし、そう考えると一つの可能性が見えてきます」

「可能性？」

「はい。性別を再び変化させる事が出来る可能性です」

その言葉に、俺は身を乗り出す。

どんな空想論だろうが、今の俺の身に降りかかった事に比べればどれほど現実味がある話に聞こえる事か。

可能性があるならば、それを試す他に、この状況を打開する方法は無い。

「相手が“S”という願望の集合体のウィルスというのならば。それに對抗し、打ち勝てるほどに強固な自己の無意識下レベルの性別意識——つまりは“自分は男ありたい。或いは女でありたい”と心の底から思えるようになる事が重要だという事です。それにより、性別変化を防御できるプログラムが持てるかも知れません」

「それはつまり？」

小難しい事は分からない。

急かす様に、ベッドから身を乗り出して次の言葉を待つ。

そして―

「優さん。性別は問いません。本気で人を好きになってみませんか？」

翔はまるで“面白い事を考えついたので試してみよう”的な顔で、
そう言い放った。

その言葉を聞くと同時に凄まじい眩暈が俺を襲う。

（そんなどこかで聞いた事のあるような解決法ならせめて言い切れ
よ…）

いつだったか、以前はこれで意識を手放した事があったような気がする。

免疫が出来たということだろうか。

それにしても…神様。どうやら俺の身に降りかかった不幸は、まだ
まだ留まる所を知らないらしい…。

第15・5話 可能性を示唆すると生まれた問題点（後書き）

背中が煤けて見えるぜ、俺（挨拶）

ようやく『ぶらマイS』もラブコメディとして話を進められるような気がする今日この頃。皆様如何お過ごしでしょうか？

第一部は如何だったでしょうか？読んで下さった読者様が少しでも面白かった、或いは時間潰しにはなったと仰ってもらえたなら幸いです。

現在、第一部が完了して如月的にはほっと一安心といったところでございます。話として纏まっているネタのストックが尽きてしまいました。が、出来るだけ早く、第二部を書き始める事が出来るように尽力致しますね。

第二部は別に分けて書こうかとも考えたんですが、このまま続きで書こうと思います。大層に書いてはいますが、すぐ更新出来ると思っていますし…。

もし第一部を読んでみて、感想・ご意見が御座いましたらどんどん仰ってください。注意点や良かった部分がありましたら、それを肝に銘じつつ、第二部も考えていきたいと思えますので。

それでは第二部が始まりましたら後書きで再びお会いしましょう。如月コウでした。

第16話：そして少女は日々を送る

『人を好きになれ』

そう言われて、次の日に『好きになってきました』と言える人間なんて、そうは居ないだろう。

ましてやその言葉の前に、本気で、という言葉が付けば尚の事だ。女として男に惚れてしまうとこのまま女で。

男として女に惚れると、男に戻る。

勿論、そのすべてに空想論においての“かも知れない”がつくのだが。

そうなると答えは簡単だ。

俺が女になった理由の時もそうだったが、その理論の成否はともかくとして、日々の日常を過ごしていくしか手段は無い。

普段通りに朝起きて。

学校に行つて。

帰ったら晩御飯を食べて、お風呂に入つて。

一段落ついたら翔の部屋で、夜遅くまでオンラインゲームをプレイする。

その流れに多少の変化はあるかも知れないが、それは誰も起こりうる出来事ばかりだ。

俺の最大の変化は性別であつて、それを除けば普段通り。いつもと変わらない日常である。

最近では、その変化にも慣れ始めたようで、多少の戸惑いときこちなさはあるものの、特別対応に困る事が発生する、ということは少ない。

“女でも口調さえ気をつけていれば、男の俺でも大丈夫”

そう開き直ってしまっているせいもあるかも知れない。

今更せっかく美少女になったのだから、その容姿を武器にして男を漁ろうなんて到底思えないし、思わない。

それに最初に奇行が多過ぎたせいか、変に学校内でも有名になってしまっているのが現状だ。

自分の噂を他人に聞いた所で話してはもらえないので、その内容までは知らないが…。

どうせ“美少女だが”という前置きはあるにはあるが、続く言葉は『性別を意識してない痴女』だとか『天然馬鹿女』と言ったものだろう。

恋愛云々よりも先に、その噂がこれ以上酷くならないように、まずは日々その印象を改善していくしかない。

そしてまた今日も。

窓辺から差し込む、朝日で目が覚める。

誘われるかのような日差しに、眠たい目を擦りながら立ち上がり、窓を開け放つ。

そして一日の始まりを知らせる、小鳥達のさえずりがその耳に聞こえてくる。

「ん……」

欠伸して。背伸びして。そして今日もいい天気だと呟く。

「翔、おはよう」

「おはようございます」

水面所まで行つて、歯磨きをしている所で翔と鉢合わせ。

「最近はどうですか？」

「んー…ぼちぼち…」

朝から無駄に爽やかな翔の幾つかの質問に答えて、眠気が覚めるのを待つ。

その後、家族みんなで食事。俺が女になってからというもの、なぜか普段は姿形も見せなかったはずの両親が、居座りついてしまっているのが少々疑問だ。

「あ、そうそう。優ちゃん、この前買った下着の事なんだけど…」

「…おばさん。おじさんと翔がいる前で、そういう話題を振るのはやめて下さい」

いつも通りの母親のセクハラ発言とも取れる攻撃をかわしつつ。

「お父さんは嬉し——」

「黙れ」

「……ごめんなさい」

父親の馬鹿発言を遮り、黙らせて。

「あ、優さん。私があげたリップクリーム塗ってくれてるんですね」

「あはは。ほら、せっかくももらったんだし、ね」

「優さんは何もしないで十分美人ですけど…。少しぐらい、そういう事も気にしないと駄目ですよ」

藍璃の女らしい会話を、波風立てない様に適度に要望に応えながら。
「いつてきまーす」

挨拶を交わして、同じ高校へ通う翔と共に玄関を出る。

こうして俺——神風優の一日が始まりを告げるのだ。

「リップクリームって…。俺ってどんどん普通に女になってきてるような気がする…」

「いつもながらよくも飽きずに毎日毎日、朝からの己の一連の言動を省みて、玄関を出てすぐの道の真ん中で項垂れるなんて…忙しい人ですね。貴女も」

……………始まるのだ。

第16話：そして少女は日々を送る（後書き）

二日間ほど考えたけど何も思い浮かびません（挨拶）

やはり私には脊髓反射で書くしかないようです（汗）無駄に日を空けてすいません…！！（ああ）

それと今回から『ネット小説ランキング』という所にも参加させて頂いています。もし宜しければ皆様の清き一票を…！！

部門がラブコメディかFTコミカルかで迷いましたが…。今現在でラブの要素が無いので後者を選びましたorz

● ネット小説ランキング＞現代FTコミカル部門＞「ぷらすマイナス＊S。」に投票です。

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

第17話：肉体の変化による弊害とそれによる印象

約一ヶ月前。

春休みの余韻もそろそろ抜け落ち、変わらぬ学園生活へと過ごす学生達に、ある衝撃が走った。

突然この峯^{ほうせん}苫^{とま}高校へと転校してきた生粋の美少女である女生徒――神風優。

2 - 4 組の神風翔の親戚にあたり、日本人では東北地方に多いという青い瞳。みずみずしい肌。そしてその手入れが行き届いたセミロングの美しいブロンドの髪は、同じ女性でも思わず感嘆の声を上げたくなる。

校則で違反とされているはずのその髪の色は、彼女の『地毛です』という弁明に、教員達が『じゃあ仕方ないよね』と声を揃えて即答したほどだ。

そんな女性が転校して来たのだ。やはりというかなんとというか。男子生徒の反応は凄まじかった。

当然の如く、その姿をひと目見ようと2 - 4 組の教室に押し掛けたのだ。同級生はさることながら、下級生・上級生さえも入り乱れて。

「神風優……貴女が、欲しい」

望遠鏡が映し出した先。

その遠方に位置する、コンクリートで固められた、何棟も連なった室内の一角。

中庭で友人達と仲睦まじく昼食をとっている、そんな有名人である優の姿を見つめながら、望遠鏡を手にしている男が呟いた。

「そっぴやさ。優は部活動何か考えてるの？」

「部活動？」

そんな妙な視線が、自分に向けられているとは露にも思っていない俺は、もうすっかり仲良くなった仲良し三人組の一人、悟技翼の突然の問いかけに、箸を銜えながら首を傾げていた。

「んゝ…でも二年からってどこも大変そうだし…」

過去、自分が神風翔であった時は、俺はどの部活にも属さず帰宅部として日々の生活を送っていた。

女という耐え難いイレギュラーはあるものの、やっと元通りの学校生活へ戻れたのだ。

それほど深く考えてはいなかったその内容に嫌な予感を感じ、もつともらしい理由を付け足して曖昧に答える。

しかし――

「でも、私達も部活に入ってますよ？」

そんなお茶を濁す目的で発せられる発言には、やけに鋭い菜乃綾奈が人懐っこい笑顔で返す。

その『でも』という言葉の意味が、まったくもって理解出来ないが…。

「入部しても同じ部活でもない限り終了時刻に多少のズレがあるとはいえ、帰宅時行動を共に出来る可能性が高くなります」

食べ終えたのだろう。

その膝に置かれた小さな弁当箱に蓋をして、何処からか取り出されたコップ。

そこに淹れられた、持参のほうじ茶を一杯啜ってから、小野寺薫が俺の心の中の疑問に答える。

「な、なるほど…」

薫は人の心を読めるのだろうか…。

「でもそれは抜きにしても勿体無いよ。体育で見る限りだと、運動神経自体はいいからね」

翼が言う。

俺は帰宅部とは言え、何も運動が嫌いな訳ではない。

どちらかと言えば、体を動かす事は好きな方だ。

中学の頃には剣道部に所属していて、全国とまではいかないが、県ではかなり上位に食い込める位の腕前は持っている自信はある。

勿論、高校に入ってから適度な運動しかして来なかったのは事実であつて、今、以前と同じように動けと言われても無理だろうが…。

それでも運動をしていた事は確かで、ある程度の運動なら出来る。

ただ――

「短距離走れば前のめりに転ぶわ、長距離走れば自分の体力考えずに走って後からバテてるわ」。天然過ぎるのが玉に傷だけど」

突き刺さる翼の言葉。だが、それらはすべて実際あつた事なので言い返せない。

ただ、如何せん、今の俺は男ではなく女である、というのが問題なのだ。

脳というのは非常に面倒で、それが肉体的限界であつたとしても、自分が可能だと思い込んでいたりすると、その限界以上の信号をいとも簡単に容易く体に送ってしまう。

そしてその結果、通常では考えられないような、まさに“漫画のように盛大なこけ方”を披露してしまうのだ。

子供体育大会の時に見かける、父親による競走時における転倒がまさにそれだ。

全盛期の頃の肉体で想定された、肥大した信号によって引き起こされた、足のもつれによる転倒である。

もつとも。

最近では女であるこの体にも慣れてきて、かなり適切な配分を行えるようになったように思う。ふと突発的な動作の際に見誤って、ポカミスをしたりも多少はするが――それは愛嬌というものだ。

それを見た上での翼の『運動神経自体は悪くない発言』だろう。

人間の慣れというのは、まったくもって恐ろしいものである。

しかし、そのちょっとした愛嬌のおかげで――

「まあそういう天然な所が、優の可愛い所でもあるけどさ」

こうやってまた、間違った認識を深々と植えつけさせてしまっているんだが……。

第17話：肉体の変化による弊害とそれによる印象（後書き）

倒れるなら後ろ向き（挨拶）

さて今回は部活動のお話ですね。今後、この仲良し三人娘は優と同様にお話に絡んできます。この三人の魅力も出していけたらな〜とか思案中です。

時間がある内に、ある程度まで進めておきたいですしね。頑張ります。

お手紙、コメント、感想大歓迎です。もし宜しければお願いしますね。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説ランキング＞現代F T コミカル部門＞「ぶらすマイナス* S。」に投票です。

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

第18話 心配性な少女と意味不明な上級生…と木。

そしてその日の放課後。

「それじゃ行きましょう」

俺が帰り支度をし終えた事を確認して、綾奈が微笑む。

「どうやら本気で、自分が所属している家庭科部を休んでまで、部活案内を務めるつもりらしい。」

その後、俺が溢した溜め息を、どう勘違いしたのか突然妙案が思いついたと言わんばかりに笑顔で『私が案内しますよ』と言い出したのだ。

どうも、綾奈は引つ込み思案ながら、一度友達として懐くとあれこれ相手の世話を焼きたくなるらしく、その行動力は半端ない。さらに言えば、それが全て善意から来るもので、こちらとしてもそう簡単に嫌とは言えないのである。

以前、翼が『そういう意味じゃ三人の中では一番性質が悪いかも』と笑って言っていたのを耳にしたが、ありがち実体験からくる感想だったのかも知れない。

「うん。ありがと、綾奈。……さ、行こっか。神風翔君」

だが、やはりその厚意を無駄にする訳にもいかない。俺はエンジンスマイルで綾奈に返事を返し、一人帰ろうとしていた所を先程捕まえた翔に微笑みかける。

「いつもながらまったくもって信用できない笑顔ですね」

翔も、俺に負けず劣らずの綺麗な笑顔でその問いかけに応えてきた。どうやら無理やり巻き込まれた事が、少々気に入らないらしく、その笑顔は果てしなく黒い。

「あら嫌だ。信用できないのは、貴方の愛想笑いで十分ですから」

「ははは。愛想笑いの質の高さでは、私は貴女の足元にも及びませんかね」

関わりたくない翔と、無理やりにも関わらせるつもり俺。笑顔

のまま、不敵に笑い合う。

その悪質な嫌味の応酬に、綾奈とまだ教室内に残っていた生徒達も少々引き気味である。

そこに――

「神風優！折り入って頼みがある――！」

響き渡る男の声。

突然の闖入者に一同が呆然としている最中、その男子生徒は俺へと歩み寄ると手を両手で握り締める。

「あ、あの――どなた様でしょうか……？それから頼みって……？」

そのあまりの唐突さに困惑しながらも、なんとか声を絞り出して問う。その時見えたのは、胸元にあるリボン。それは三年生を示す青だった。

「神風優」

「はい？」

その呼びかけの意図が分らず首を傾げる俺に、男は爽やかな白い歯を輝かせて、俺の手を握り締めていた右手をそのままに、左手を首元に添えてくる。

とても嫌な予感がする。

「貴女が――」

男子生徒は添えた手を、後頭部へと滑り込ませると一気に俺を抱き寄せた。

少々近過ぎるように感じる、顔と顔。

そして囁かれる言葉。心なしに男の表情が硬い。どうもこういった事は不慣れらしい。

「貴女が……欲しい」

だが男は言い切った。言われた俺自身はとにかくその言動すべての意図が理解出来ないが、男はどこか満足げだ。

だがここは天下の往来とも呼べる学校の廊下際。

当然そんな行為をすれば――

「そうか。相川^{あいかわ}。先生もお前の身柄が欲しい。生活指導室までの短い付き合いだが宜しく頼むぞ」

案の定、通り掛った体育指導者兼生活指導長である教員に、相川と呼ばれた上級生は襟を掴まれた。

「俺は別にやましい事など……！」

「犯罪者は皆最初はそう言うんだ。いいからさっさとこっちに来い」
なにやら必死に弁論していて抵抗を試みているようだが、そのまま連行されていく正体不明の上級生。

「……………なんだっただろうね？」

「さ、さあ…………？」

その上級生の姿を、呆然と見送る俺と綾奈。そして様々な憶測を囁き合う、その一部始終を目撃した生徒達。

そんな皆を尻目に、翔は一言。

「いつもながら貴女の周りには不思議な人が集まりますね」
と、笑顔で皮肉を言うのだった。

かくして、突然の闖入者に一時騒然としたりもしたが、今はすっかり気分を入れ替えて、綾奈の案内の元、校内部活めぐりが始まっていた。

美術部に吹奏楽部。そして綾奈が所属している家庭科部などといった文化部の見学が一通り終え、今は下駄箱で下履きに履き替えている所だ。

時刻的にどうやらこれでお開きになるようである。

しかし翼の部活の終了時間には、まだ少し時間が早いらしく、迎えに行くついでに所属している空手部の見学でも、と話が綾奈から提案された時の事だった。

「ごめんなさい！」

最後に立ち寄った家庭科部での俺の振る舞いになにやら問題があっ

たらしく、綾奈が呼び戻されてしまったのだ。

「それより私のせいでごめんね…。何か失礼な事しちゃったのかな…」

最初に綾奈に紹介されてからというもの、特別する事もないので、部員が調理をする様子を見ていただけ。そのはずである。

それと意外な事、と言えば失礼かも知れないが、男子の部員も多くて驚いた。

その理由に、この隣にいる綾奈の存在が大きいという事を、部長さんに耳打ちされた時は『なるほどな』とは思ったが。

俺自身、まったく料理が駄目なので、少しばかり尊敬の眼差しで皆を見ていた。

だがやはり動機が不純なせい、その腕はまだまだ未熟だった。男子生徒の多くは、視線をやれば、やれ指を切っただ、やれ調味料の分量を間違えたとか、失敗を繰り返していた。

その様子に少し失笑してしまっただが、勿論、失礼の無いようにちゃんと後から笑顔で対応したつもりだ。

「……優さんってホント凄い天然ですよ」

首を傾げてる俺に、天然であるはずの綾奈が苦笑いを浮かべる。

生粋の天然さんに天然と呼ばれる俺。それはかなり…なんというか。イタイ存在ではないだろうかと不安になる。

「それじゃあ、私は行ってきますね。後片付けだけですから、すぐ戻ってこれると思います。あと、さっき見学の時に薫ちゃんに聞いたらもうすぐ終了するって言っていたので、もうすぐここに来ると思いますから」

「え！？薫って見学した所に居たって？」

綾奈の言葉に、驚きの声を上げる。

「あ、はい。ほら、演劇部に行った時に、背景の木になりきってましたけど」

確かに演劇部に足を運んだ時、ちょっとした演劇の練習中だったらしく、その一部を観させて貰いはしたが、その中で薫を見た記憶は

ない。

それがまさかあの、たった一本、ただ突っ立っていた木を薫が演じていたとは思ひもなかった。

俺の様子に『気づきませんでしたか？』と、今度は綾奈が俺に対して首を傾げる。

そしてその問いかけに俺は――

「薫…。恐ろしい子…」

名女優を予感させる薫の名演技を思い返して、思わず項垂れるのであった…。

第18話 心配性な少女と意味不明な上級生…と木。（後書き）

眠り眼で打った文章の修正には苦勞するぞ。 気をつける！（挨拶）
さて以前もお話しましたが、今回も五話で一つの物語となります。
こういった手法で一話ずつ公表する事は、読者様にとっては読み辛
いく苦痛なのではないかと頭を悩ませたりもしているのですが…。
如月は一話で完結させるほどの表現力を持っていないものとして諦
めてやってくださいorz本当にすいません。

ですがその分、私生活に支障をきたさぬように時間配分をしつつ、
この更新スピードを維持する事でその穴を埋められたらな、と考え
ております。 目標は大きく持って一日一度更新！……ネタが続く限
り（笑）

お手紙、コメント、感想大歓迎です。 文法的におかしな部分、読み
難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いしますね。
それでは。 如月コウでした（礼）

● ネット小説ランキング>現代F.Tコミカル部門>「ぶらすマイナ
ス★S。」に投票です。

● ネット小説の人気投票です。 投票していただけると励みになりま
す。（月1回）

第19話 少女の自己性別意識の確認とその必要性

そして綾奈の代役である薫を待つ事30分。

「まだかな」

視線の先にある時計を見ながら、ぼやくように呟く。綾奈もすぐ戻ってくると言った割には、後片付けに戸惑っているのだろうか。姿を見せない。

翔は『後は帰るだけなら私は一足先に』と、さっさと帰ってしまった。

一人でいると、なぜか男子生徒の視線が痛いように感じる。それは出来る限り遠慮したいので、いつそ『帰ってしまおうか』とも考えたりもしたが…。

さすがに、ここまで親切に案内してもらっておいて、少し時間が空いたからと言って一人で帰るのは気が引ける。我慢である。

そこでふと―

「先程は失礼した」

そう声を掛けられたので振り返ってみると、そこにいたのは先程意味不明なまま連行されたあの三年生の男子。

「さっきの……」

「うむ。そう警戒しないでくれ。俺は別に貴女に危害を加えようとしてる訳じゃない」

あからさまに怪訝そうな表情を浮かべて後ずさる俺を、安心させるためだろうか。

男はそう言って両手を高く上げ、その身をゆっくりと回転させる。武器は所有しておらず無抵抗である事を、俺に示唆させようとしているらしい。

せっかくの機会なので―

「さようなら」

「待ってくれっ!―!」

回転してこちらから視線を外したその隙に逃走を試みてみた。が、飛び掛るような勢いで制止されてしまった。無念である。

「なんですか？」

「まず話を。話を聞いてくれ！」

まるで、時代劇で悪徳商人が、借金のカタに財産を奪っていく時の町人のように、そう言っただけで必死に俺の腰にしがみつく男。

そしてそれを振り払うように足蹴にする俺。

凄い光景である。

ともすれば、俺が――

「不特定多数に好意を抱かれ過ぎるというものもなかなか面倒なものですよ」

先程の演技を彷彿とさせる気配の無さで、いつの間にか真横で待機していた薫が、俺の胸中を言葉にした。

そう。まるでこの姿は、告白されて断った相手に、すがりつかれているようにさえ見えてしまう。それだけは避けたいと思っていたのだが、どうやら一歩遅かったらしい。

「薫……この事は皆に内緒でお願い」

翼辺りにそういう話になって耳に入ったら、この男の命は保障しかねる。

綾奈が言っていたが、どうも翼は過保護過ぎるらしい。

だが、一応俺は男である。

気概の知れた友達とは言え、出来ればそれは遠慮して頂きたい。

それだけは譲れない。そこを譲ると、何か男として色んなものを失ってしまいそうだ。

「分かりました」

薫が頷く。薫は口が堅いので、これで安心だろう。

「……で。いい加減、人の腰に纏わりつくの止めて貰いませんか」

こうしている間も、ずっと腰にしがみついている男を半目で睨む。

「おつとすまない。不覚にも触り心地が良かったので、つい」

「……………」

嘘はつかないらしい。男は俺の問いかけに正直に答えた。

それは立派な心構えだろうが、真剣に『触り心地が良かった』と言われると、もう一度足蹴にしてしまおうかと真剣に悩んでしまう所だ。

「それで？貴方はいつたい誰で。私に話つていつたいなんなんですか？」

「ああ…申し遅れた。俺の名前は相川圭介。あいかわけいすけ三年生。剣道部主将を務めている者だ」

俺の非難の視線も何のその。その問いかけにその男―相川圭介は破顔した。

相川圭介の話は、その奇行ぶりとは裏腹に至って単純なものであった。

「で？そのマネージャーを引き受けた、と？」

その日の帰り道。事の顛末を聞いていた翼の言葉に、俺はこくりと頷いた。

「確かに有名人の優がマネージャーになると、それを目当てに来る新入部員獲得数は計り知れないものがあるからな」。人数不足で廃部寸前の弱小剣道部には、喉から手が出るぐらいに欲しい人材だろうからね、優は」

やれやれと大げさなジェスチャーをとる翼。

俺もいくら今は女の姿をしているとはいえ、腐っても元健康的な一般男子学生である。女子マネージャー効果による部員確保ぐらい、さすがに理解できる。

だが、そのために自分が見世物のような状態になるのは絶対遠慮したいし、何よりそのせいで無駄に目立つ事だけは避けたいが…。かつては自分も中学の頃とはいえ所属し、汗を流した部活である。

熱心に頼まれた上に、それを断れば廃部決定という事態に、知らぬフリをするのはどうかと思い、首を縦に振ってしまった。

あまりそういった方法での新入部員勧誘は好まないし、実際に俺が入部しただけで新入部員が大勢押し寄せる訳はないと思う。

だが、お世辞でも『綺麗だから大丈夫』と言って己の容姿を面と向かって褒めちぎられると、悪い気がしなかった事も事実だ。…勿論、それが理由で承諾したわけでは決してないが。

それに、最近では自分が男であった時の思い出に浸れる場所というものも少なくなってきたので丁度良い。これをいい機会に、男としての自分を再確認しよう。

（最近、自分が女である事に違和感を感じなくなってきたもんなあ…俺）

家に至っては、女としての困惑の日々の思い出でいっぱいである。

薄ら笑いを浮かべ、溜め息をつく。

そんな俺の心中を知らずに――

「優さんはなんだかんだ言っても優しいんですよ」

綾奈が微笑む。

そんな純真無垢な微笑の下。俺は久しぶりの愛想笑いを浮かべるのであった…。

第19話 少女の自己性別意識の確認とその必要性（後書き）

話の展開が遅いのは仕様です（挨拶）

小説を執筆しながら『いい加減（小説内の）夏休み早く来ないかな』と真剣に切望する私は駄目ですか。そうですか。

皆様が足を運んで下さり、アクセス数もすでに2000件間近です。感謝の意を込めて、本編の間にも何かお話を書けばいいのですが…。仲良し三人組の個々のお話は本編に追々出てくるとなると…はてさて。と言った所です（滝汗）

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です。

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

第20話 懐かしき思い出は2乗

そしていよいよその翌日。

学校の一日の終了を告げるチャイムが校内に鳴り響く。

いつもは、クラスメイト達に挨拶を交わして帰宅なのだが――

「それじゃ行つて来るね」

傍にいた薫に、そう言つて教室を後にする。

男である時には、こんなにも部活動の時間を待ち焦がれる事など有り得ない事だった。

今にして思えば、マネージャーよりも正式な部員としても良かったのかも知れないという考えも浮かんだが……。

元々、そうなると自由な時間が減るのが嫌で、帰宅部を選んだのだ。それは遠慮したかった。

せっかく自由にしていいと言われている事だし、入部届けとしてはマネージャーとしてだが、気が向いた時ぐらいは、練習に参加させてもらつても問題ないだろう。

「失礼しまーす……」

体育館のすぐ傍にある、小奇麗に片付けられた武道場に足を踏み入れる。

すると――

「セミロングでブロンドの髪……あの噂の神風優か……？」

「まさか……噂は本当だったのか……？彼女があんな弱小剣道部のマネージャーをするなんて……」

手前で今まさに練習を始めようとしていた空手部と柔道部の面々がこちらを見て、ひそひそ話を始める。

（噂って……。マネージャーになるって承諾した昨日から、まだ時間的にも一日経っていないのに……）

げんなりした表情で溜め息をつく。

この学校の生徒は、全員恐ろしく速い情報伝達ネットワークでも保

有しているのだろうか。

「あ、優。剣道部の連中は部室に着替えに行ってるよ?」

「ん、了解」

先に武道場に到着して、空手部として練習に取り掛かろうとしていた翼が出迎える。

(剣道部員は全員部室、か…)

しかし入り口でこのまま突っ立っていても仕方ないので、その場にいる翼と皆には、当たり障りのない笑顔を振り撒きつつも、剣道部の練習スペースがある奥で座って待つ。

(この感覚…久しぶりだな…)

試合前。目を閉じ、床の上に座してただじっと己の番を待つ感覚。なんの未練もなく高校へ進学後、帰宅部へと移ったが、今こうしてみると少し惜しい事をしたような気持ちになってくるのが不思議だ。凜とした心地良い空気。いつの間にか他の部員達のざわめき声も聞こえなくなっていた。そして暫くして―

「神風っ！良く来てくれた」

相川の声が響き渡った。

その声に静かに目を開けて、入り口を見てみると三人の部員と共に相川がこちらへと歩み寄ってくる。それを目で追う途中、幾人かの他部員と目が合ったが、どうやら何かに見惚れていたらしく、思い出したかのように練習を開始し始めた。

そんな事よりも、今日は顔合わせのために部員全員に声を掛けておくと言っていたはずだが…。

「相川先輩…もしかして剣道部員はこれで全員ですか?」

「そうだ」

迷いの無い返答に、俺は思わずその場でこけそうになる。

「いや。名簿的には後もう一人いるのだが…。ただ在籍しているだ

けで、練習にはあまり参加しない奴でな。神風の勧誘方法については色々アドバイスをしてくれたんだが……」

申し訳無さそうに相川が苦笑する。

(…そいつがあの騒ぎの元凶か)

真面目な相川の事だ。その部員が冗談半分で言った誘い文句を忠実に再現したのが、昨日の行動そのものなのだろう。

まあ、そいつは来た時にでもさり気なく締め上げるとして。

それでやっとこさ団体戦に必要な五人が揃う部員数。今の言い方から察するに、その一人は来ないものと考えれば四人となつて、実質団体戦も参加出来ない弱小部という事らしい。

「ちなみに、その後一人つて誰ですか？何年生？」

「霧島は確かー」

「あれ？本当に優ちゃんがマネージャーになつたんだ？」

相川の口から出た名前に、俺が顔を引き攣らせた瞬間。

いつだったかショッピングモールでも会った事もある霧島京一。きりしまきょういち

まさしくその男が、いつも通り女性には油断ならない笑顔のまま手を振り、武道場の裏口に立っていた。

「ま、まさか…彼がこの剣道部の部員なんですか…？」

「そうだけど？」

さらに顔を引き攣る俺。

「な、なんだってこんな部に……」

毎日放課後になれば、相方の田端と街へと繰り出して、ナンパばかりしている霧島。

そんな奴がこの弱小剣道部に居座る理由が分からず、ただ呆然と立ち尽くす俺に対して、霧島は実にあっけらかんとその理由を口にした。

「どうしても団体戦が出たい。なのに人数が足りないからって頼まれたからね。剣道ぐらい、少しやる程度なら簡単だし」

「……剣道ぐらい……少し、やる程度なら簡単、ですか……」

顔を俯かせ、霧島にこちらの表情が見えぬようにして、引き攣った

顔を一段と引き攣らせる。

そして――

「それに部活動を三年間やり続けたっていう事は、内申書にも有利じゃない？」

その霧島の一言に。完全にキレた。

確かに俺も、面倒だという勝るとも劣らない下らない理由で、中学時代やり続けた剣道部に入らなかった人間だ。そんな俺がキレるのはお門違いもいい所だ。それは認めよう。

だが。言い訳がましかろうと、少なからずやる気が無い状態のまま、情性で剣道を続けるのは真剣に打ち込む奴等に失礼だと思った、その気持ちには嘘は無い。

それをこいつは。まともに参加もせずに、易々と『内申書のため』

と言って踏み躪ると言うのか。それは……俺が個人的にだが許せない。「優ちゃんもそうなんでしょ？ だったら、こんな所で青春を浪費してないで、今から俺とデートしようぜ」

「……………いいですよ」

肩に置かれた霧島の手を払い除け。俺は、デートの誘いを満面の笑みで承諾する。

なんとか最後の一線を保って女口調を続けながらも、このまま何もせずに知らぬ存ぜぬを吐き通す事も出来なさそうだ。

だからと言って、容赦無用でこの場で暴れる訳にはいかない。もつとも、した所で霧島も男だ。女の俺では、力と体力勝負になる長期戦になるとまず勝てないだろう。
なら――

「貴方が皆が見ている状態で試合して、私から一本取れたら、ね」

霧島を挑発して、周りに人がいる言い逃れできない状態で、試合と

いう短期決戦のお膳立てをすればいい。

壁に立て掛けてあった竹刀を手に取り、その切っ先を霧島に向ける。相川達が慌てて止めに入る。

それはそうだろう。俺が実は剣道をやっている。さらには全国大会にも出場経験があるなんて事は知る訳が無い。そうなれば、多少心得がある、しかも男に、女の俺が勝てるわけがないと思うのは至極当然だ。

「デートだけじゃ割に合わないから、恋人になるっていう条件も追加させてもらおうよ」

霧島もそう思ったのだろう。少し驚いたような表情を見せたものの、すぐに不敵に笑い、チャンスと言わんばかりに余計な条件を付け足して、そう答えたのだった。

第20話 懐かしき思い出は2乗（後書き）

文章を打つよりも題名を考える方が悩むという罫（挨拶）

せっかくの日曜日なので気合を入れて二話更新致しました。部活動編は次回で終わりですね。気合を入れて頑張ります。

こういった日常ネタを如何に面白く、飽きさせないように書く事が出来るのか。まだまだ私が考えなければいけないことは多そうですね。

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説ランキング>現代F.Tコミカル部門>「ぶらすマイナス* S。」に投票です。

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

第21話 剣術小町であってそうでない少女

俺の宣戦布告と、霧島の受諾があつた数十分後。

放課後から随分と経っているにも関わらず、部活が丁度終わり始めた頃だつたせいだ。

どこからか俺と霧島も決闘の噂を聞きつけたらしく、かなりの数のギャラリーが武道場に押しかけて、賑わいを見せていた。

俺は一人、その雑踏から少し離れた部室棟にある剣道部の部室にいる。

「…仕方ないか」

溜め息混じりに、ここにある一番小さな剣道着に袖を通す。

だが女子部員がいないせいだろう。如何せん、今の俺に——つまりは女子の背丈に合った道着がない。奇跡的にそれに近い剣道着はあるにはあつたが、やはり多少の動き辛さを感じる。

「優さん…ホントに防具無くて大丈夫なんですか…？」

その姿に不安を覚えたのか。部室の入り口から顔を覗かせたのは綾奈だつた。

「ん、大丈夫大丈夫」

本来、試合を行うなら身に着ける筈の防具はあまりにもぶかぶか過ぎて動けなくなるので着るのは諦めた。だが、その防具を身に着けずに試合に臨む俺を心配して、綾奈はわざわざ様子を見に来てくれたのだろう。その後ろには翼の姿も見える。

「しっかし…。入部した初日にマネージャーの優が試合するなんてね。いつもながら目立つ事するもんだ」

「ホントは目立つのは嫌いなんだけどね…」

翼の言葉に苦笑する。

だが、よくよく考えればデモンストレーションとしてはなかなか効果も有りそうだ。上手くいけば新入部員確保も見込める。一石二鳥である。

「でも…負けたら恋人だなんて」

綾奈が一番の不安を口にする。

それは先程、武道場へと駆けていく男子生徒も言っていたが『神風優が霧島の恋人になる事を前提条件に試合をするらしい』という、一見俺の負けが決定している試合だからだろう。

「霧島君も油断してるだろうし、その隙をつけば大丈夫だって」苦笑いを浮かべつつも、努めて明るく振舞う。

その苦笑いが、悲痛な決意からくるものではなく、大勢の前で霧島を叩き伏せる喜びに、必要以上に頬が緩まないようにするためのものだったりするのだが。

「優。準備は万事整いました」

そして、開始を知らせるために薫が俺を呼びに来る。

「それじゃ、皆応援してね」

満面の笑みで言う。

そしてそのままの表情で手を振り、軽やかにスキップしながら武道場に向う俺の後姿を、三人はさも不思議そうな表情で眺めていた。

「すまない…神風。俺が不甲斐無いばかりにこんな事に…」

武道場について、囁かれる噂を右から左へと聞き流しながら試合までの時間を過ごしていた俺に、相川先輩が頭を下げてきた。

「い、いいですってば！頭なんて下げないで下さい」

両手をぶんぶん而降り、慌てて頭を上げさせる。

最初の奇行はさておき、この相川という男は礼節を重んじるかなり生真面目な方らしい。

そんな彼に、突然俺を抱き寄せて『貴女が欲しい』などと、馬鹿っぽい事を吹き込んだ霧島はやはり万死に値する。

「それでは…両者前へ！」

そして審判役の男子生徒の声が響き渡る。

相對する両名。静まり返る道場内。その中心で両者、共に防具を着

けないままゆつくりと竹刀を構える。

「防具を着けないでいいんですか？」

「優ちゃんこそ。それに、そんな道着がぶかぶかだと、打ち込んだ竹刀に偶然引つかかって途中で脱げちゃうと大変だよ」

俺の姿に、霧島がいやらしい笑みを浮かべる。

実際俺の着込んだ道着はぶかぶかで、見るからに激しい動きは出来ない。周りのギャラリーには散々『ギャップが可愛い』だの『チラリズム万歳』だのはやし立てていたが…。

そう言つて、俺に心理的プレッシャーをかけてくる辺りは、さすが抜け目がない男である。

だが、それは俺も承知の上。

「……ぬかせ」

対峙してまで、相手の力量を測れぬ霧島に、聞こえぬ様に悪態をつく。

そして――

「始め！」

合わさっていた竹刀と同様に、弾かれるように間合いを取るために後ろに小さく飛ぶ。

試合の数合わせでしかない霧島に、自分が負けとは思わないが…一本勝負である以上油断は出来ない。一瞬の油断で雌雄が決してしまう事なんてざらにある。

さらに言えば、俺はこの女の体に完全には慣れてない。男であった時と同様に動けると思って行動すれば、最悪負けてしまう可能性だってある。

ならば相手が油断している、今のうちに仕留めるのが理想。十分な力量があり、相手を確実にいつでも仕留められる洗練された技量があれば話は別だろうが…。

少なからず、今の俺はそれほどの腕前など持ち合わせていない。

ゆえの一本勝負。油断が勝負の決め手となる。俺は油断なく中段の構をとる。

「……………」

その落ち着いた一連の動作に、審判である剣道部の部員が小さく声を上げた。

しかし、俺をただの素人の女としてしか見ていない霧島はそんな事も気づかない。

小さく竹刀を振り、小手を打ってくる。それなりに女である事を気にかけているのだろうか。その速度は極めて遅い。

即座に見切り、手にした竹刀で相手の竹刀弾くと続け様に――

「め……………ん!!」

竹刀をしならせ、何が起こったか分かっていないであろう霧島の面を容赦なく捉える。

(殺った……………)

心の中でほくそ笑む。

手加減してやったとは言え、防具も着けずに竹刀で面を打たれたのだ。そのダメージは計り知れない。

当然の如く意識を飛ばした霧島は前のめりに倒れ込む。

そんな霧島を見下ろしつつ。

「…これでデートも恋人も無し、ですよ」

ブロンドの髪を揺らして、にっこりと微笑む。

「め、面有り一本！勝者、神風優！」

そして一瞬呆気に取りられていた主審が、改めて俺の勝利を宣言する。その瞬間――

「カッコイイ……」

「すげ……………」

「神風さん素敵……………」

あちこちから巻き起こる賞賛の声の嵐。

その声にようやく我に返った俺は、どうも目立たないようにするといった考えからかけ離れた事を仕出かした事に気がつく。慌てて俺はとにかく体のいい愛想笑いを振り撒きつつ、逃げるようにその場から立ち去った。

その後。霧島は退部届けを出し、剣道部を去った。

そのせいで団体戦への夢を潰えさせてしまったのかと心を痛めたそうになったが、この騒ぎのおかげで剣道部の部員数は跳ね上がり廃部は免れたようだ。

中には感銘を受けて、純粹に剣道へのやる気を見せる新入部員も確保できたらしく、部長である相川はそれをかなり喜んでいた。

しかし、それ以外。不純な動機の入部希望者の多さから、俺が在籍していると他の部活にも迷惑がかかるとして、生徒会から俺への部活動禁止の通達が下ったのは———なんというか。

残念だったような、これで良かったような。

正直その心中は複雑だが…。

当分の間は、俺は以前と同じように帰宅部での生活を満喫する事には変わりはないさそうだ。

第21話 剣術小町であってそうでない少女（後書き）

二度。ラブ要素がありません（挨拶）

さて。皆さん、部活動編はどうだったでしょうか？

何かの部活に、とも考えたんですが…。こういった形に落ち着きました（苦笑）

次は…とりあえず案としては物語的な夏休み前に一呼吸を入れたい所ですね。頑張ります。

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス*5。」に投票です。

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

第22話：日本経済における女性の貢献度は多大である

そろそろ夏休みという季語が脳裏を霞める6月。

日に日に暑くなっていく気温とは裏腹に、俺はいつも通りの生活を送っていた。

「さて…そろそろ寝るとするか」

「ああ、そうだな。お休みだ、翔」

深夜。いつもと同じようにパーティーを組んでいた響夜と別れて、パソコンの電源を落とす。

オンラインゲーム『夢幻学園』。

そのゲーム内容は以前も紹介したとおり、至って簡単だ。

数年前に突如学園の地下に姿を現した迷宮。

そこから現れた無数の化け物達。

そしてそれと同時に、学園生のみが手に入れたそれに対抗するための異端の力。

プレイヤーはこの夢幻学園の生徒として、この学園の平和…そして世界の平和を守るため日夜迷宮で奮起する。

しかし、それだけではない。

俺がこのゲームを魅力に感じたのは、その自由性にあった。

キャラメイクにおいての多種多様なデータ量。

地下以外でも起こる、擬似学園生活内で起こる、リアルタイムイベントの数々。

街へと繰り出せば、地下の化け物を倒した分支給されるゲーム内のお金で、様々な武器は勿論ながら、衣装なんてものも買える。

衣装だけじゃない。髪型も自由に変えられ、まさに自分だけのキャラクターを創り上げる事が出来るのだ。

（それで勢い余って女キャラ作ったんだけどな…）

そんな言い訳はともかくとして。

そういう訳で今日も俺は、家族が寝静まった事を確認した上で、翔の部屋に入り浸っている。

あまりに入り浸っているものだから、その日、それまで黙って様子を見ていた翔が俺にある提案をもちかけた。

「私が短期バイトでもして、その資金を元手にパソコンを購入してみては？」

この状況を親や藍璃に見つかって、その度に自分が怒られる現状にさすがに嫌気が差してきたのだろう。

なんと、バイトで稼いだ金額の一部を俺に譲渡すると言ってきたのだ。

しかし代理翔として、本人の承諾を得ずにバイトを始める訳にはいかない、と思ったらしく承諾を取ろうとしたらしい。

そういえば、俺の預金通帳の暗証番号を聞こうとしなければ、無理やり引き落とすために銀行に行こうともしない。妙な所で律儀な奴である。

「貴女も今は女性である以上、異性である男の部屋に入っては深夜まで居座るのは、世間的にも問題があります。何より、そういうものは自分の部屋でのんびりとしたいでしょう」

確かに翔の言う事はもっともだ。

前者の理由はともかくとして、俺としても元自分の部屋とはいえ、いい加減人の部屋に入り浸るのは遠慮したい。

さらに言えば携帯電話が無い事にも、かなりの不便さを感じている。もうすぐ夏休みもあるので、一ヶ月ぐらいの短期バイトで遊ぶ資金も調達したい。

とはいえ、頼みの預金通帳の中にも、雀の涙ほどの残高しか残っていないのが現状だ。

その理由をなぜかと問われれば。女同士で行くショッピングという

ものは恐ろしいという事。

以前、学校で化粧品の話題になった時、俺が美容に関して無頓着だという事がバレて、放課後店へと連行された事がある。

お店に着くなり皆が到底日本語とは思えない、訳の分からない名称を言い合う。

そんな三人に気圧されて呆然と立ち尽くす俺が、愛想笑いとは生返事を返している間に、持っている買い物籠はどんどん品物で埋まっていく。

そしてその化粧品やらすべてをレジに通して表示された驚愕の金額。俺は思わず、その金額を復唱するレジのお姉さんに『日本は本当に不景気なのか』と問いたい気分になった。

どこそのニュースで言っていた、女性が美容のために費やす金額を聞いて『それは嘘だろう』と鼻で笑っていたりもしたが…。

今はそれが嘘ではなく本当なんだと、不安になって事前に預金を下ろしておいたはずの己の財布の中にいた諭吉さんの尊い犠牲によって理解させられた。

しかしだからといって翔一人を働かせるのもどうかと思う。やはり私も一緒にバイトするべきだろう。

問題は俺の蓄えと学生一人の短期バイトで、必要としている金額を賄うのは到底無理だ。いくら、そこに翔がバイト代を少し分け与えてくれた所で、その金額には届かないだろう。

(さてよ…？給料を銀行振り込みにしてもらえば…)

現翔は、自分名義の預金通帳の暗証番号を知らない。通帳とカードを隠している場所さえも知らないだろう。

そうなれば――

「そのまま翔のバイト代を全額せしめる事も可能……！」

「優さん。悪魔の如き本音がダダ漏れてます」

「よし！翔、バイトするぞ！」

「いえまあ、月に支給されるお小遣いで私は十分なので、夏休み、貴女とその友人の遊びに付き合わされる分さえ残してくれるなら別

にそれで構いませんけどね……」

思わずガッツポーズをとりながら構わず話を進める俺を、翔は冷やかな視線で見つめながら、深く溜め息をついた。

第22話：日本経済における女性の貢献度は多大である（後書き）

いやホント凄いのと思うよ？（挨拶）

夏休み中に何処か出掛ける話を書くつもりなら、まずお金が必要だと思ってバイト編の始まりです。はてさて。いったいどうなるのやら？

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス*5。」に投票です。

第23話 心情の機微を理解する友人は大切である

「と、言ったものの…。そう簡単に都合のいい短期バイトなんてないよな…」

登校中に駅のホームで見つけた、無料のバイト求人誌を凝視しながら机に突っ伏す。

間近に迫った夏休み中ならまだしも、夏休み前の短期バイトとなるとかなり厳しい。

よしんばあったとしても、その競争率は極めて高いものとなるだろう。長期休みの前に、遊ぶためのお小遣いを稼ぎたいと考えている学生は数多なのだから。

「優。バイトでも始めるのですか」

珍しく一人で登校してきた小野寺薫が、俺の手に握られた求人誌に視線を送る。

「うん。パソコンと携帯電話が欲しくて」

「後者は理解出来ますが前者の必要性はあるのですか」

「自宅でネット繋いでゲームで遊んだりしたいからね。翔も手伝ってくれるそうだし、いい機会かなー、と思って」

その言葉に心なしか眉を顰めた薫に首を傾げながらも、俺は再び視線を求人誌へと戻す。

確かに薫はそういうゲーム類の、しかもネットゲームというものには無縁そうだ。

しかし、最近随分と感情を表情に出すようになったように感じる。一緒にいる時間が増えたから、その心情の機微が理解出来るようになったのだろう。同様に、悟技翼や菜乃綾奈の考えてる事も分かるようになってきたからな。

今では三人の前に限っては、最低限の口調以外はほぼ素と言っても過言ではない。

「そういえば…。三人は何かバイトしてないの？」

「しています」

「ふーん…やっぱりそんな時間ないよね…って、してるの!？」

「はい」

求人誌を見ながら、思いつきで言った質問に薫が平然と答える。三人がバイトしているなんて初耳である。そもそも、皆各々遅くまで部活動に精を出しているはず。

それなのに、どうやってバイトなんてする時間を捻出しているのだろうか。

「各々、ある程度時間の融通が利くバイトを持っていますから」

うん。だからどうして薫はいつも人の心の中のツツコミに対して、そうも平然と答えるのか。

機微を理解するレベルを超えている気がする。

「些細な事です」

「全然些細な事じゃないんだけど。……いやまあいいけどね」

再び心の内の疑問に、黒縁眼鏡を中指で押し上げながら答える薫に、俺はげんなりとした表情を浮かべる。

「ちなみに薫はどんなバイトしてるの？」

「……基本的には延々無言で立っているだけでしょうか」

自分のバイトにも関わらず、どう表現すればいいのか分からず言葉を濁す薫。

（流れ作業の工場のバイトだろうか…？）

しかし、そんな時間の融通の利くバイトではなかった気がするが。だが薫の事だ。合理的な方法でそれを可能にしているに違いない。ならば――

「それって私にも出来る？」

「可能ですがお奨めしかねます。それに優なら私よりも適任でしょうが早急には不可能です」

「そっか…」

一分の望みを賭け聞いてみたが、残念ながら薫はその首を横に振っ

た。

少々どのようなバイトか興味があったものの、今は己のバイト探しで必死である。パソコンは不可能でも、せめて携帯電話購入と夏休みを楽しむだけの資金は絶対に手に入りたい。

そして再度うんうんと唸りながら、穴が開くほど求人誌を見ている俺に対して、薫は『どうしてもと仰るなら』と前置いて。

「綾奈に頼んでみてはどうでしょうか」

そんな風に、俺に進言してくれた。

「え？綾奈のバイトは短期でも良くて、すぐ紹介してもらえそう？」
薫の提案に、天の助けと言わんばかりに目を輝かせる。

「紹介も何も綾奈の家は喫茶店ですから。確か、力仕事を頼める男性と、優のような女性を随時募集していた記憶があります」

「嘘！？ホント!？」

「はい。綾奈の紹介なら尚の事確実でしょう。ただ、その喫茶店というのが少々特殊でして――」

「それなら私にも出来そうだ。薫さんきゅ!」

薫の言葉を遮りその手を握ると、ぶんぶんと上下に振り回す。

「いえ。私も貴女の尊い犠牲を忘れません」

その浮かれた俺の様子に説明する事を諦めたのか。薫はなぜか物騒な物言い祝福してくれた。

そして――

「あ、綾奈おはよう」

「おはようございます」

噂をすれば影あり。翼が寝坊したらしく、一緒に遅れて登校してきた綾奈が道行くクラスメイト達に挨拶を交わしながら教室へと入ってきた。

「……綾奈」

「あ、はい。優さんおはようございます」

「綾奈助けてーーーー!!」

「は、はいっ!？」

自分が登校するまでの間に行なわれた会話内容を知らない綾奈は、いきなり抱きついて助けを請う俺に動揺してただオロオロとしている。

その横で、薫からその事情を聞いた翼がその顔を小悪魔のような笑みに変えていたとは…。

バイトを見つけられたと浮かれ気分の俺が知る由もなかった。

第23話 心情の機微を理解する友人は大切である（後書き）

ここまで理解されると怖いですけどね（挨拶）

さて。今回はちよつとした綾奈シナリオでしょうか？とはいえ、今回はそれほど綾奈だけに突出しているわけじゃないですが（苦笑）バイトの内容については…なんとなく文面で分かって『あゝ…あれかあ』と画面前で笑ってらっしゃる方もいらっしゃるんじゃないでしょうか（笑）

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング＞現代FTコミカル部門＞「ぶらすマイナス★S。」に投票です。

第24話 綾奈とメイドとご奉仕と

こうして俺は『どうなっても知りませんよ』と念を押す綾奈をなんとか説得。

お店の店長で、綾奈の母親でもある菜乃里香なりのかさんに二つ返事で承諾を貰い、喫茶店『Re:Symphony(リ:シンフォニ)』というお店で先週から働かせてもらっている…のだが――

「すいませーん。注文いいですか」

「……どうして、毎日毎日部活帰りにここに立ち寄る必要があるのでしょうか? お客様」

顔を引き攣らせながら、毎日わざわざお客として来店する翼と薫を睨みつける。

「あれ? お客様って言って良かったつけ?」

「ぐっ……!」

白々しくも、俺の発言の揚げ足を取ってくる翼に、さらに顔を引き攣らせながらも表面上の笑顔は絶やさない俺。

「分かりました。やればいいんでしょうが……」

「そうそう。ちゃんとバイトとしての職務を全うしないと」

してやつたりと言わんばかりに意地悪そうな笑みを浮かべる翼に対して、俺は両手でスカートの端を上品に摘み上げ、目を伏せてお辞儀する。

そしてテーブルへと注文を聞きにいった際の台詞を口にした。

「何でもお申し付けくださいませ。ご主人様」

……バイトを始めて一週間。すでに俺のアイデンティティを、すべて犠牲にしているような思いで働いている。

喫茶店の前に、『メイド』と言う単語が付く事をまったく知らされていなかった俺は、バイト初日に笑顔で手渡されたメイド服に声にならない叫び声を上げた。

すべて説明されたものだとはかり思っていた綾奈はともかくとして、翼と薫の両名は確実にわざと俺への通知をしなかった。その理由は、初日から連日訪れるその立ち振る舞いから、容易に想像できるのだが…。

「予想通りです」

「薫。陥れた本人を前にしてそういう事言わない」

優雅にレモンティーを啜りながら言う薫にツツコミを入れる。

だが元々メイド喫茶なんていう考えは、里香さんの頭の中には無かつたらしい。

旦那を早くに亡くして、女手ひとつで綾奈をここまで育て上げてきたのだが、ふと娘に何も残してやれていない事に気がついた。

せめて、当時は趣味程度のつもりで始めた喫茶店を時が来れば綾奈に譲ろうと、純粋に綾奈が似合いそうな衣装と方針を打ち出したら、立派なメイド喫茶になったと言っていた。

一人の人間としてはその素晴らしい経緯には敬意を表したいし、その意見には男として大いに賛同したい。だがやはり、女性でありながらそこに行き着いてしまった思考回路は間違いであると、ここで指摘しておこう。

それに運が良いのか悪いのか。実際、綾奈のメイド服姿は恐ろしいほどに似合ってしまったているのが現状だ。

その結果、近隣ではこの店は『可愛い女の子が奉仕してくれる喫茶店』として名を馳せてしまったらしく、それを目当てに来たお客相手はかなり骨が折れる。

「優ちゃーん。今日の仕事上がりは何時？一緒にデートしようよ」

「風俗店じゃないんで、店員への過剰な口説きやお触りは止めて下さいね？ご主人様」

「…はい」

いつも通り手に持っていたお皿を振り上げて、お客を威嚇する。

今までも、給料の良さからアルバイトも大勢来たらしいが、それもこんなお客相手に嫌気が差してすぐ辞めてしまつて困っていたそう
だ。

今では、残つた数人の古株と娘である綾奈とで、なんとかやりくり
しているらしい。

どうも綾奈の普段から丁寧な口調や物腰は、小さい頃からの接客で
培われたものであり、今では完全な素で接しているのに、ちゃんと
したメイドとして機能している事に妙に納得がいった。

「いらつしゃいませ、ご主人様」

「いらつしゃいませ、ご主人様」

店の中に入ってきたお客を出迎える挨拶が店内に響き、俺も慌てて
それに続く。

その『いらつしゃいませ』という部分には、まだやはり本来は普通の
喫茶店であつた名残を感じさせる。

「優ちゃん、そろそろ休憩してらつしゃい」

そんな折、そう言つて優しく俺の肩を叩いてくれたのは里香さんだ
つた。

「頑張つてくれるのは嬉しいけど、あまり無理しないようにね？」

「あはは、大丈夫ですよ。それじゃ休憩入ります」

里香さんの気遣いに感謝しつつ、店内の奥にある更衣室へと足を向
ける。

「あ、ちよつと待つて」

すると、何かを思い出したように俺を呼び止める里香さん。

「ついにて倉庫整理してくれてる神風君に、ジュースを持っていっ
てあげて欲しいの」

どうやら翔への差し入れを頼みたいらしい。

倉庫は更衣室のすぐ近くにあることだし、別段断る理由もなかった
ので俺は一言『わかりました』とだけ答えて頷く。

そんな俺に対して、満足気に里香さんは頷くと――

「…………個人的にご奉仕してきても大目に見るからゆっくりしてらっしゃい」

去り際にとんでもない台詞を呟かれた気がしたが、俺は無視して翔がいる倉庫へと歩を進めた。

第24話 綾奈とメイドとご奉仕と（後書き）

前話で脱字がありました、ごめんなさい（挨拶）

ご連絡頂いてまことにありがとうございます。感謝です！お手数かけて本当に申し訳ない…orz

今回は…予想通り？でしょうか？それとあまり動きがないように感じるかも知れませんか。ホントに夏休みまでの間を埋めるだけの話にならないように頑張ります（苦笑）

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス★S。」に投票です。

第25話 想像力の高さにおける弊害とそこでの少女の在り方

どうも二人一緒にバイトの申し込みをした事が、里香さんには恋人同士として認知されたらしく、事あるごとに二人つきりにさせようとしてくる。

それは違うと始めのうちは根気良く説明していたが、さすがに綾奈とメイドを結びつけたお方である。まったくもって聞き入れてはくれない。

むしろその態度がツボだったらしく、『優ちゃんはツンデレなのね』とのたまう始末である。

これはもう諦めるしかないかと、説明を断念した。
それともうひとつ。

「優さん？今から休憩ですか？」

「綾奈…」

里香さんが、そういった悪質な洗脳にも似た空想癖を信じるのが綾奈であるという事。

たとえば――

「うん。翔に差し入れもっていかない駄目だけど…」

「え！？そ、そうなんだ…。ご、ごゆっくり…！」

あれほど学校では気にしなかった翔との関係を、ここ最近になって気にし始めた発言が目立つ綾奈。翔に会いに行くという発言だけで、里香さんと同等の想像を働かせる。

『翔が帰宅した時に、優から“ご飯”“お風呂”“優”の三つの選択肢が提示され、その中から翔は常に“優”を選び、美味しく優はいただかれている』

ちなみに里香さんのには、俺達はすでにこんな関係らしい。
そういう類の与太話を、綾奈は真に受けているようで、俺の口か

ら翔の名前が出れば茹でたこのように顔を真っ赤に染めあげる。

その姿を見て、この母と娘は本当に想像力豊かだと思わず感心してしまった。

しかもその誤解は未だに解けておらず――

「綾奈も休憩？ だったら一緒に休もうよ」

「え！？ わ、わたしも！？」

だから。なぜ誘うと頬を染める。

「……が、頑張ります」

……何を頑張ると言うのだ、綾奈よ。

「とりあえず翔にジューズでも持って行ってやるか……」

俺は半ば諦めた溜め息を吐き、隣を歩く綾奈に聞こえぬように呟くのだった。

そんな日々を過ごしている内に6月も半ばを過ぎ、そろそろ7月にある期末考査という恐怖の足音が聞こえてくる頃。

バイト期間の半分が過ぎ、本来一ヶ月働いてから手渡される給料を、里香さんのご厚意により先に手にする事が出来た数日後の夜の出来事だ。

それを元手に購入したばかりの携帯電話が、深夜に突然鳴り響いた。

液晶画面に映し出された名前は菜乃綾奈。

「もしもし綾奈？ どうしたの？ こんな夜遅くに」

携帯電話を購入したと知らせたのはつい先程だったので、少し驚きながらも電話に出る。

「優ちゃん、助けて……」

「その声……。里香さんですか？ 助けてって……。どうかしたんですか！？」

いきなり耳に飛び込んできた助けを求める電話に動揺して、思わず声を荒げてしまった。

相手が里香さんだけに、凄まじく嫌な予感がするのは、きっと気のせいではないだろう。そして告げられる言葉。

「明日のシフト組むの間違えちゃった…」

それはある意味、明日通常通りバイト先へ向う人間には死の宣告に等しかった。

「ちなみにどう間違えたんですか？」

「うんとね。明日出勤するの、綾奈と優ちゃんだけになってるわ」
一番最悪なパターンである。平日でもフロアは四人いないと辛い賑わいをみせていると言うのにも関わらず、だ。

加えて明日は――

「……里香さん。明日何曜日か分かってます？」

「日曜日ね」

もう絶句するしかない状況である事は間違いないらしい。

電話口からは、綾奈が必死に他のアルバイト達に連絡を取っている声が聞こえてくる。だが、どうも感触はあまり宜しくないようだ。その声は、どんどん小さくなっている。

「……………てへ？」

「てへ？じゃないですよ」

可愛く笑って誤魔化そうとする里香さんに、鋭いツツコミを入れる。

どうも里香さんも綾奈と同様、一見しっかりしてそうで、どこか肝心な所が欠落している天然さんのようである。性格どころかその性質まで酷似している似た者親子というのも珍しいものだ。

「仕方ないですね…。里香さん、綾奈と電話を替わってください」
もうこうなってしまうては仕方ない。最後の手段を講じるしかないようだ。

「もしもし…。アルバイトの皆さんは駄目でした」

里香さんと電話を替わった綾奈は開口一番に、先程の電話の結果を俺に教えてくれた。

「そっか…」

なんとなく予想していた事とはいえ、やはり落ち込んでしまう。出来る事なら最終手段を講じたくなかったのだが…。

「こうなれば……するしかないね」

「ですね…」

綾奈も何の事かを理解しているらしい。俺の言葉に重々しく頷く。俺と綾奈の脳裏に浮かぶ、昨日もわざわざ来店した、暇を持て余してそうな二名の姿。

「では私が誘導を」

綾奈が言う。

「了解。私は更衣室で待機。捕縛後、強制的に着替えさせます。フロアで会いましょう」

俺が答える。

そして――

「グット・ラック」

合わさる二人の声。そして切れる電話。こうして夜が更けていった…。

第25話 想像力の高さにおける弊害とそこでの少女の在り方（後書き）

題名はいつだって統一感がありません（挨拶）

もう少し捻った方がいいのかも知れないのですが…。考え出したら、一日中考えても更新出来なさそうなので許して下さいorzさすがに5話分を同じ題名と言うのは避けたい所ですしね…（吐血）

今回は、意外に？アクシデントがささやかだと思えます。誰を巻き込む気なのかは…皆さんすでにわかってらっしゃるんじゃないでしょうか？

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス*」に投票です。

第26話 夏を思う少女二人

「…で？どうして私等がメイド服着せられてるわけ？」

「理解不能です」

翌日。早朝にも関わらず、店が開店するとほぼ同時に、親切にも様子を観に来てくれた翼と薫という人員を無事確保出来た。これで一安心である。

「だから。人手が足りないから手伝って」

「ヤダ」

親友の願いを即答に断る翼。だがしかし――

「翼ちゃん。お願い」

「くっ……分かった！分かったよ！！」

目を潤ませ懇願する綾奈にはさすがにNoとは言えないらしい。投げやり気味に翼は首を縦に振る。残る問題は、綾奈のお願い攻撃を簡単に切って捨てる事が出来る薫が、協力してくれるか否か。

「薫。そういう訳で悪いんだけど――」

「なんですか。ご主人様」

「うん。無表情で乗り気なのはやめて。怖いから」

どうやら薫も手伝いにやぶさかではないらしい。意外にもメイド服を着こなしつつ、無表情ながらも黙々とメニューの確認を行なっている。

まだまだ人数不足だが、これで綾奈と俺の二人だけよりは遥かにマシなのは確かだろう。

なんだかんだ言いながらも、翼も薫も俺達が困っている事を理解して、手伝おうとしてくれているようだ。

「翼さんも薫さんもお綺麗ですから。きっとそれ目当てで来たお客さんも満足しますよ」

その様子を見ていた藍璃が笑う。

これはまったくの偶然だったのだが、家で暇そうにしていたので

『一日臨時バイトしないか』と藍璃を誘ってみたところ、なんと快く協力してくれた。

中学生でアルバイトというのもどうかとは思ったが、友達の家の手伝いだと考えれば悪くはあるまい。ちょうど藍璃自身、今月はピンチだとぼやいていたからな。

「へい！らっしやい、旦那！」

どうやらお客様が来たらしい。翼の威勢のいい声が店内に響き渡る。

「あ、すいません。こちらへどうぞ。ご主人様」

「すぐにお冷とおしぼりお持ち致しますね！」

驚いた表情を見せるお客を、丁重に誘導する綾奈と藍璃。なかなかいいコンビのようだ。

「いらっしやいませ」

席に着いたお客に、気づかれないぐらいの無音さで近づき、薫が一言挨拶した後に、手にした水とおしぼりを出す。

「で、旦那は何にします？」

……ところで翼。いつからお前に中でこの喫茶店はお寿司屋に様変わりしたんだ。

自分の接客を行ないながら、横目でそんな翼の接客を見て、全員が心の中で苦笑いを浮かべるのであった。

その一日は本当に多忙を極めた。

綾奈と、普段のアルバイトの人達で噂になったのだ。そこに、さらに新しい個性豊かなメイドが今日限定で増えたという噂は、あっという間に広まった。

調理を行なう里香さんは大忙し。結果、調理の人手が足りない事から急遽厨房へと入った綾奈が抜けた穴を埋めるべき、奮起する俺達。

俺はさすがに半月働いた経験があるので、全員の細かなサポート

を。

藍璃は接客業の才能があるらしく、かなりの数をテキパキとこなして、薫も無表情ながらも、額に汗しながら普段より忙しく動いてくれた。

翼はその元気の良さで、大道芸のような皿運びで店内を色々な意味で沸かせてくれた。

なんとか最後のお客を捌いた時には、すでに閉店時間の19時を大幅に超え、20時を過ぎていたため――

「皆、お疲れー。頑張ってくれたお礼なんだからじゃんじゃん食べてね」

店の片付けも程々に、里香さんが今日の感謝を込めて全員に晩御飯を振舞ってくれた。

皆、お昼休憩もまともに取らずに働き詰めだったせいか、驚くほどよく食べている。

勿論、その中には翔も含まれている。延々普段は放置されている倉庫整理を行っていた翔が、ボロボロになって倉庫から出てきた時は驚いたが……。なんとか生存していたらしい。

「たまには公の場で活躍したいものです」

と、ぼやいていた。

「優さん、お疲れ様です」

「綾奈、お疲れ様」

皆から少し離れて、座って物思いに耽っていると綾奈に声を掛けられた。

「このバイトが終わって、期末考査が終わればいよいよ夏休みですね」

「あー……テストあったんだった……」

綾奈の言葉に、いらぬ単語がある事に項垂れる俺。そんな俺を見て、綾奈は苦笑する。

「頑張らないと、ですね。皆で過ごす夏休みはきつと楽しいですよ」
「……そうだね」

すでに暗くなっている空を見上げて、感慨深げに綾奈の言葉に頷く。

もうすぐこのバイトも終わり、夏が来る。

たぶん、このメンバーで騒がしく何処かへ出掛ける事にもなるだろう。

女になって初めての夏にほんの少し期待しつつ。俺と綾奈は皆が
いる騒がしい店内へと戻ったのだった。

第26話 夏を思う少女二人（後書き）

少し爽やかなお話です（挨拶）

実は、綾奈に夏休み前に『みんなで過ごす夏休みはきつと楽しいですよ』という台詞を言わせたいがためにここまで書きました（駄目人間）

今回は、トラブルをみんなで仲良くドタバタして過ごす一日を平均的に描いたシナリオを目指しました。ドタバタがメインではない気がするので、面白くなかったと仰る方もいらっしゃるかと思いますが（苦笑）ただ、こういうのも必要かな？と思って夏休み前に入れました。

次回からいよいよ夏休み！次回は、ちゃんとコメディらしくなるかな？…まあ予定ですけどね（笑）

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス★S。」に投票です。

第27話 少女の夏休み

長かったバイト生活も終わりを告げ、期末考査もなんとかクリアしてついに訪れた夏休み。

つい先日にあつた終業式。その時に約束した、神風家への招待のため俺は神風翔と二人、仲良し三人組が指定した俺の家の近所の駅の改札口で、三人の到着を待っていた。

「……毎回不思議に思つのですが」
「聞き飽きた」

翔の最近の口癖のような前置きの後に続く、これまた口癖のような言葉を予測した俺は先手を打つ。

「どうして私が、女性同士の付き合いに巻き込まれなければいけないんでしょうか？」

それでも、やはり聞かずにはいられないらしい。翔はげんなりした表情で、呟くように問いかける。

「俺だけだとボロが出そうで嫌なんだ」

主語をわざとらしく飛ばし、俺は答えた。

「確かに貴女は女性としてもっと色々と配慮すべき点はありますが」
分かつてるじゃないか。

決して嫌いなわけではなく、寧ろ、友人としてはかなり好きな部類に入る彼女達だが、やはりどうしても女なのだ。

『今はお前も女じゃないか』とツッコまれたら終わってしまうが、やはりどうしても必要以上に気を使ってしまう。

その一方。男子とも仲が悪いわけではない。やはり、女子相手に話す時のような気遣いは不要だし、口調さえ気をつけていれば事は済むので楽だ。

頻繁に話しかけられたし、こちらからも積極的に話しかけた。

それにより、以前にも増して、かなり広い範囲での友好関係を築けたように思う。

だが。これは最近知ったのだが――

「男連中と遊びたくても、必要以上に仲良くなると後々面倒だから……」

どうやら一部の男性諸君は、俺と友達以上のお付き合いを望んでいるらしい。

この俺のどこに女性としての魅力を感じるかは皆目見当がつかないが、夏休みに入る直前まで下駄箱を開ければ手紙がある、という日々を過ごしていた。

しかも、その以前。まだ桜が散って間もない頃は下駄箱の中にあるそれを、早朝、部活動の朝練が終わった後に回収した悟技翼経由で、クラスの女子の手に渡っていたというのだから驚きだ。

今になって思えば、その時に一悶着あったおかげで、あの三人組と仲良くなれたので、手紙を見られた男子には運が悪かったとしか言いようがないのだが……。

「では私との付き合いも、少しは遠慮して頂きたいものです……」
「いや、親戚である男と仲良くするのは問題ないだろう?」

再び翔の口から漏れ出た愚痴を、すぐさま否定する。

勿論、実際の何も知らない親戚であるなら多少は考えるが。少なからず、翔においては恋愛感情という面倒な問題は発生しないで済む。

「しかし、突発的出来事でプログラムが書き換えられ、貴女に恋愛感情を抱く可能性だってあります?」

「それもお前の場合問題ない。俺に手を出そうものなら、お前がこの世に居られなくなるから」

「……確率で考えれば、そちらの方が高確率でしょうね」

以前、誤って俺がベッドに潜り込んでしまった時の、藍璃の拳が脳

裏に思い浮かんだのだろう。

翔はさらにげんなりした表情で答えた。

「優〜！」

そうしているうちに、仲良し三人組が到着したらしい。

改札口の向こうから、いつものように翼を先頭に、その後ろに少し遅れて慌てて翼の後を追う菜乃綾奈が。

そして最後に、走る気がないらしく小走りに走り寄る二人を静観しつつも、心なしか歩く速度を上げた小野寺薫が続いた。

「なんだ。神風も来てくれたんだ？ 出迎え、ご苦労ご苦労」

翼が笑いながら、苦笑いを浮かべた翔の肩をバンバンと叩く。その瞬間、翔の苦笑いに苦悶の表情が付け加わる。

翼は常に元気で明るい。その明るさはクラスのムードメーカーであり、それが魅力といえは魅力なのだが…。

如何せん手加減というものを知らない。あれも肩を叩く掌を少し回して、手刀の型に変えればきつと翔はその場で悶絶する事になるだろう。

「優」

「ん？ 薫、どうかした？」

そういえば以前は『神風さん』『委員長』と呼び合っていたな、思い返して思わず苦笑してしまう。随分と一学期中に仲良くなったものである。

「貴女はよく神風翔と行動を共にしていますが何か特別な感情を共有している、或いはそれ以上に密接な関係にあるのですか？」

「……………」

とは言え、俺は未だにその思考は読めずしばしば絶句させられるのだが――

「……………」

真っ直ぐに俺を見据えて、薫は俺の返事を待つ。その瞳には嘘偽りが無く、ましてや悪意も感じられない。常にその真っ直ぐな瞳で相手を見つめられることが、彼女の魅力なのではないだろうか。

「違う違う。それに今日は、やっぱり私は翔の家の下宿させてもらってる居候なわけだし、私が『友達連れて来ました』なんて変かな、って思ってた着いてきてもらっただけ」

聞かれるであろうと予測出来た質問に対して、昨日の就寝時考えたそれっぽい口実を、すらすらと読み上げる。

「なるほど。正論です」

合点いったと言わんばかりに、無表情ながらも頷く薫。

「優さん、翼ちゃんが無理言ってごめんなさい…」

そして、さっきの俺の発言が聞こえたのか、その横で申し訳無さそうに目を伏せる綾奈。

「あはは。気にしないで。おば様も大歓迎だって言ってくれてるけど、私が変に気を使っちゃっただけだから」

その言葉に幾分か気持ち緩和されたのか、綾奈は『ありがとうと、可愛い笑みをこぼしたのだった。』

第27話 少女の夏休み（後書き）

皆様、いつもお読み頂きまことにありがとうございます（挨拶）

皆様のおかげで、アクセス数が5000件を超えました！まだまだ未熟ながらの執筆なので、ただただ恐縮するばかりですが……（苦笑）本当にお読み頂き感謝です。

何か記念になるような事でも、と考えた結果。今回のお話が終わった後、優と仲良し三人組が友達として付き合うキツカケとなったラブレター編でも書こうかな？とか思ったりしています。

もし他に『優にこんな事をさせたい！』といったクエストがあれば仰って下されば。可能な限り頑張らせて頂きます（笑）

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング＞現代FTコミカル部門＞「ぶらすマイナス★S。」に投票です。

第28話 藍璃の女心と夏の空

「さあ、皆俺について来い！」

威勢のいい掛け声と共に、俺は翼が提案した『自宅に三人を招待する』という当初の目的通り、皆を引き連れて自宅へと向っていた。少々予定外の――

「案内はこの吉良耕介にお任せあれ！」

なぜここにいるか分からない、目の前を歩く吉良の意味無く元気な掛け声と共に。

「どうしてあの変態がいるんだよ」

「理解不能です」

「吉良君はいつも元気ですね」

そしてその心中を、三者三様の言葉で言い表す仲良し三人組。

「優、誰かに今日のこと話した？」

吉良がいるのがよほど気に入らないのか。不機嫌そうに翼が言う。
「話した記憶はないんだけど……」

聞くな。それは俺が一番聞きたい。

「……優さん」

「分かってる」

そんな俺に翔は、静かに傍へと歩み寄ると、神妙な面持ちで耳打ちする。

前をいく吉良本人は些細な問題としてしか捉えていないであろう過去の出来事により、奴を今、家に招待するのは危険なのだ。

その出来事というのが――なんというか。

吉良が俺の家に遊びに来て、何度目かのある日のことだった。

その時は他愛も無い馬鹿話がいつも以上に弾んでしまい、気がついた時には、日が落ちてから随分と経っていた。

そこで、あまり深く考えずに俺は『泊まれば？』と吉良に進言する。

すると同じくあまり深く考えずに『そうだな、世話になるとしますか』と、吉良は笑って答えた。

その夜、事件が起こったのだ。

トイレに起きた吉良が、寝惚けたまま俺の部屋の隣に位置する部屋、すうすうと寝息を立てて眠る藍璃のベッドに潜り込み、朝を迎えたのだ。

よくよく思い返せば、藍璃のあのマウントポジションからの攻撃を見たのはあれが始めてである。

そしてそれから吉良を連れて来る度に、俺は藍璃の逆鱗に触れ、後からその怒りを宥めるのにとて苦勞するのだ。

しかしながら、徒歩10分程度の所にある自宅へと到着する間に、この事態を打開できる妙案など思いつくわけも無く、ついには玄関へと到着してしまう。

「優ちゃ〜ん？」

玄関の扉に手をかけ静止している俺に、翔の働きにより一番後ろにいる吉良が声をあげる。

（ええい！もうどうにでもなりやがれっ！）

その、あまりにもこちらの気苦勞を無視した発言に意を決し、玄関の扉を開け放つ。

そしてその先には――

「いらっしやいませ！」

満面の笑顔で、客人を出迎える妹の藍璃の姿。

「お久しぶりです！ようこそいらっしやいました。どうぞどうぞ、遠慮せず上がって下さい」

わざわざ下履きに履き替えて、玄関扉を押さえつつ、笑顔を振りまいている。これほどまでに上機嫌かつ愛想のいい藍璃は珍しい。

どうやら俺と翔の心配は、ひとまず杞憂に終わりそうだ。そう思った矢先だった。

「あ、何人ですか？後から人数分のお茶とお菓子でもお持ちしまー

ー」

「6人だよ。藍璃ちゃん」

吉良の声に、一瞬顔を引き攣らせ、藍璃が笑顔のまま凍りつく。

（やっぱり駄目だったか）

その、知る人が見れば露骨過ぎるリアクションに、俺と、たぶん後ろに控えていた翔も、事後の対応について頭を痛めながら溜め息をつく。

「さ、どうぞどうぞ。お上がりください」

しかしそんな俺と翔の予想に反し、藍璃は一瞬その動きを止めたものの、何事も無かったかのように皆を一人一人丁寧に迎え入れる。

「お邪魔します。良くできた妹さんだな」

「ありがとうございます。ゆっくりしていつて下さいね？」

「ご、ごめんなさい。大人数で押しかけちゃって」

「いえいえ。うちは全然気にしませんから。ゆっくりしていつて下さい」

「お邪魔します」

「はい。いらつしゃいませ」

先頭に立っていた俺が足を踏み入れると、藍璃は並んでいた順番通り、翼、綾奈、薫と挨拶を交わしつつ迎え入れる。

そして吉良へとその順番が回ってきた。

「藍璃ちゃん大きくなっ——」

ボタン…ガチャン。

「……………」

その場にいた全員が、一瞬何が起こったのか理解できなかった。先程まで開いていたはずの玄関扉は、他でもない藍璃の手によって閉められている。

……丁重にチェーンロックが施され。

「もしも〜し？翔の大親友の吉良耕介お兄ちゃんがまだ入ってないですよ〜」

何が起こったのか理解出来なかったのはあちらも同じようで、吉良がドンドンと玄関の扉を叩く。

すると藍璃はチェーンロックが施されたままのドアを少し開けると――

「秘境へ帰れ」

冷たく言い放ち、再び扉を閉め直した。

「あ、あの……藍璃……さん？」

「さあ、四人ともぼ〜としてないで上がって下さい！」

先程、場を一瞬にして凍りつかせるような発言をした人間とはまるで感じさせない満面の笑みで、さり気なく人数を減らしつつ、二階奥にある優の自室へと戸惑う皆を案内する。

「お茶とお菓子は私が準備しますから。優さんは、皆さんと雑談でもしておいて下さい」

階段のすぐ傍から、最後まで渋った俺を見送る藍璃。

その時。

『ピンポーン』

インターホンの音が家内に響き渡る。

藍璃は、二階の階段の傍にあるインターホン用の受話器を笑顔のまま手に取ると――

『もしも〜し。吉良耕――』

「黙れ」

吉良が名前を言い終える前に笑顔を崩さないまま、神風家女性陣の伝家の宝刀とも言える言葉を告げて、情け容赦なく受話器を置く。
「ささ、遠慮せずに」

言葉と表情のギャップが生み出す恐ろしさは、薫で十分に理解していたつもりだったが……。どうやらまだまだ理解不足だったらしい。

そして俺が、藍璃の恐ろしさを痛感しているこの頃。

「……さて。私は今日一日どこで時間を潰しましょうか」

吉良と一緒にいない者として自宅から締め出された神風翔は、夏らしい良く晴れた空を見上げ、諦めと共に呟いたのだった……。

第28話 藍璃の女心と夏の空（後書き）

パソコンが一瞬壊れました（挨拶）

いきなり画面が暗転して動かなくなった時は、この世の終わりかと思いましたよ。今、買う余裕なんてないですからね…。

はてさて、今回ですが。藍璃が中心となったお話を書くつもりです。学校生活の描写になると、中学生の藍璃の描写はほぼ皆無ですからね…。今更ながら設定が甘かったな、と思ったりします（苦笑）

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング＞現代FTコミカル部門＞「ぷらすマイナス★S。」に投票です。

第29話 押す事よりも引く事を選んだ少女

「へー。やっぱり学校でも優さんは人気者なんですね」

準備された飲み物とお菓子をつまみながら、わいわいと雑談を楽しむ女四人……と、微妙に外で放置された男性陣が、同じ男として心配な俺が一人。

（ちゃっかり藍璃も紛れ込んでやがるな…）

宣言通り、飲み物とお菓子をこの部屋へと運んでくれた藍璃。丁度話していた話題に、その瞳を輝かせて喰いついてきた。

「人気者過ぎて困っちゃってさ」

そんな藍璃に対して、さもその当人でもあるかのように、笑いながら話す翼。

「求愛を断るには骨が折れました」

その黒縁眼鏡を押し上げ、似合わない台詞を吐く薫。

「優さんって優しいから…その…女の子にも人気があって…」

なぜか頬を染めながら、語尾が尻すぼみになっていく綾奈。

そして話題の中心人物であるはずの俺が会話に参加出来ずに、ぽつねんとお菓子をばりばり。

なんですか。この居心地の悪さは。

（翔の奴大丈夫かな）

さすがにあれから随分と時間が経っているので、すでにもうどこかに移動しているだろう。

しかし、こうならなかったための予防策であつたはずの人物を思い、『役に立たないサポート役だ』と心の中で愚痴を溢す。

（携帯電話さえあれば、連絡の取り様もあるんだけどな…）

携帯電話は今時の高校生らしく持つてはいたものの、それはすで

に神風翔の所有物であつて、神風優の物ではない。

（あるとすれば一階にある家庭用電話機で電話をかけるぐらいだけど…）

するとふと、その電話機が鳴っている事に気がつく。

しかし、喋る事に熱中し過ぎているせいか、誰もその音に気付かないようだ。確か両親も何処かに出掛けており、不在のはずである。ならば藍璃に知らせようと、手を差し出そうとして躊躇する。

自分宅への電話だが、女の体になってからというもの、余計な混乱を避けるためにまったく言っていないほど出た事が無い。

しかし、これは男性陣の様子を伺いに一階へ赴く、丁度いい口実になるかも知れない。

「綾奈。電話が鳴ってるようだから、私少し席を外すね？」

「あ、はい。分かりました」

話を続けているメンバーの中で、一番フォロー上手な綾奈に一声かける。

未だに俺に対してだけ敬語な彼女だが、万が一、部屋に俺の姿がない事が発覚したとしても当たり障りの無いフォローを行ってくれるだろう。

そして俺は、他の三人に気付かれないように部屋を出る。

「ふう…」

汗を拭う仕草をしつつ、溜め込んでいた息を吐く。

少々抜け出すまでに時間が掛かってしまったが、その間も電話は延々と鳴り続けている。

「はいはい、今出ますよ」

階段を下り、そんな気の抜けた生返事を、聞こえるはずのない電話の主に戻す。

「もしもし、神風ですが」

「……………」

そして受話器をとってみるものの返答が無い。

「もしもし？どなた様ですか？」

「……………優ちゃん」

何処かで聞いた事がある声だ。携帯電話からの着信のようだが、やけにクリアに聞こえる。

だが涙声のせいか、誰なのかが分からない。

「もしもし？どなた様ですか？」

もう一度問いかけてみる。すると相手は一言。

「玄関……………」

と、だけ答えた。

「玄関？」

首を捻りながらも、電話の主に促されるがまま、玄関へと視線を移す。

そして――

「ぎゃーーーーー！！！」

思わず大声で叫んでしまう。

「なんだなんだ！？」

悲鳴を聞きつけて、大慌てで下りて来る女性陣。

俺の視線の先にあるものを見て、全員がその場で石化する。

そこにいたのは、チェーンロックのため辛うじてしか開かない玄関の扉の隙間に、可能な限り体を押入れつつ、携帯電話片手に涙目で俺を見つめる吉良の姿があった。

どうやらなんとか侵入を試みようとして、途中まで体を押し入れたのはいいが、自力で抜け出せないらしい。体の半身を無理やり捻じ込みつつも、身動きが取れない状態で電話をしている吉良の姿は、正直下手なホラー映画よりも怖い。

「ひ、悲鳴はいいから誰か助けて」

「……………」

いち早く石化から解けた藍璃は、無言で下履きへと履き替えると、その玄関扉のノブへと手を伸ばす。

そして――

「うん。確かに『押して駄目なら引いてみる』って言うことわざがあるように、玄関側から扉を閉じるように引いて確認してみる事はいい事なんだけど、この場合は後者を試す前に前者を選択するべき状況だと俺は思っただ。なぜなら、引いたら余計に挟まって地獄の激痛が……ってイタタタッ!？」

よほど切羽詰っているのか、饒舌に藍璃の行動について間違いを指摘しながら、吉良は涙目でその制止を訴えたが――

「潰れる」

語尾に音符マークがつくぐらいに満面の笑みを浮かべて、再び力の限り扉を引っ張る藍璃。

受話器越しからも聞こえる声も重なり、響き渡った吉良の断末魔は、辺り一帯に家を震わせた。

第29話 押す事よりも引く事を選んだ少女（後書き）

痛いから良い子は真似しないように（挨拶）

藍璃は元々作者的にはこんな子だったのですが、『こんなの藍璃じゃない！』と思われた方はいらっしやるでしょうか？

居たらゴメンナサイ。でも私は後悔していない。きっとこれが藍璃なんだ（マテ）

（この『我が家へようこそ編』は藍璃の魅力に迫るお話です）
お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング＞現代FTコミカル部門＞「ぷらすマイナス★S。」に投票です。

第30話 元兄の少女と妹の本心

あの後、今にもトドメをさしそうな藍璃を何とか宥め、俺は吉良を救出する事に成功した。

そして、晴れて男性陣も俺の部屋へと招き入れて、こうして皆で雑談に花を咲かせているのだが……。

どういう訳か。藍璃だけは先程とは違って、その輪を複雑そうに眺めている。

その瞳の先にいる、かつての俺には考えられないような愛想笑いを振り撒きながら、吉良と、そして仲良し三人組と語らう現神風翔もその瞳に気がついた一人で、俺にこう問いかけてきた――

『神風藍璃さんはなぜ、神風翔、及びにその友人全般に手厳しいのでしょうか?』

その言葉を聞いた俺は、少なからずそれに気がついた翔に、多少の驚きと賞賛を覚えた事を、今でも鮮明に覚えている。

その言葉には、翔が兄として藍璃をちゃんと見てくれているような気がしたからだ。勿論、『手厳しい』という点で言えば、普段の暮らし中で充分理解出来る内容ではある。

しかし、俺が驚いたのはそこではない。『友人全般』という言葉。吉良に関しては、その態度があまりにも露骨なので、その原因となるベッド進入事件は翔に伝えてあったのでそれには該当しないだろうが。

普段の暮らしの中で、藍璃がその表情を見せる事はあまりにも少なく、本来他人である筈の現神風翔がその事に気づき、かつては神風翔であった俺に聞いてきたという事実には驚いたのだ。

「お茶とお菓子少なくなつたから持ってきますね」

そう言って藍璃が席を立つ。

「あ、私も付き合うよ」

その表情の陰りが気になった俺は、大丈夫だと慌てる藍璃を無理やり押し切ると立ち上がり、その後ろにつく。

そして、部屋の扉を閉めようとした時だった。

「優さん」

ふと、普段二人でいる時にしか使わない“さん”付けで、翔が俺の名を呼ぶ。

俺は閉じかけた隙間からその表情を伺うとその唇が微かに動き――
『しっかり頑張って下さい。“お兄ちゃん”』

声には出さず、皮肉交じりに。だが、温かな笑顔で俺を見送った。

時々聞こえてくる二階の部屋の、騒がしい声がどこか遠くに感じる。

俺は一階のリビングで、藍璃と二人でお茶とお菓子の準備をする。すると藍璃は何を思ったか、突然。

「さつきはごめんなさい」

と、俺に頭を下げてきた。

「別にいいよ。吉良君も悪ふざけが過ぎた所もあったし……」

先程の、玄関扉の隙間に挟まって、身動きがとれなくなった吉良の姿を思い返し、俺は苦笑いで答える。

「その……あの人もどうしても苦手で……」

藍璃もその姿を思い返しているのか。まるで俺につられるような形で、苦笑いを浮かべた。

「昔、何かあったの？ なんだか翔の男友達に辛くあたっているようにだけど」

「……………たんです」

藍璃がどんよりした表情で、何かを呟く。

「ん？」

上手く聞き取れない言葉がなんなのか分かっていながら、知らないフリをするしか出来ない事に歯痒さを感じながら、出来るだけ優しい声色でもう一度声をかける。

「昔、ベッドに忍び込まれたんです……」

案の定の原因。だがしかし、それは多感なお年頃である藍璃にはシヨックな出来事だったのだろう。

「勿論あの人以外は嫌いじゃないですけど……。少し昔の嫌な事思い出しちゃって……」

「え？」

予想外に言葉が続いた藍璃が、昔を懐かしむかのような声色で、苦笑いを浮かべる。

そして――

「昔は、ああやって私が知らないお兄ちゃんの話聞くのが、とても嫌いだったんですよ」

藍璃は、その当時を思い返して照れくさそうに笑った。

「小さい頃、お兄ちゃんがまだ好きだった時の私には、まるで横から突然現れた他人にお兄ちゃんが取られた気がして、結構シヨックだったかな……」

『今は全然そんな事ないですけど』とつけたし、お茶をカップに注ぎながら、藍璃が言う。

その昔とは違う大人びた姿に、なぜか小さい頃甘えん坊で寂しがり屋な藍璃の姿がかぶった。

「勿論今はもう、そんな子供じみた感情なんて全然これっぽっちも無いですけど。傍にいて欲しいとかよりも、寧ろ寄るな触るなの気持ちの方が大きいですから。癖のようなものですよ」

それは本心なのだろう。……出来る事ならば、後半部分の毒舌はさておきたい所だが。

だが、今は子供の頃のように仲良くする事も、謝罪も望んでいないのは確かだろう。家族なんて……ましてや年頃の兄妹なんて、そ

ういうものだと思う。

藍璃だって、この話は本来翔には一生黙っているはずの本心だったはずだ。俺が、嫌っていると勘違いをしている優だからこそ、教えてくれた藍璃の秘密。

だから俺は。苦笑いを浮かべる藍璃の頭を、ただ黙って撫でた。翔と優。言い方は複雑だが、二人の思いを込めて。

「……………あ」

藍璃は、俺の突然の行動に一瞬目を丸くして驚いた表情を見せたが、すぐに瞳を閉じて、頭に触れる手のひらの感触に身を委ねている。

そして再び、大人しくなった藍璃が独白めいた言葉を口にして。

「……………不思議です」

「ん？」

「昔もこうやってお兄ちゃんに頭を撫でられた気がします」

確かに、昔こんな風に頭を撫でた記憶がある。それがなんだったかは思い出せないが、きっと今と変わらない関係であつたはずだ。

「……………翔の事、今は嫌い？」

俺は微笑み、藍璃に静かに問いかけた。

すると藍璃は、一瞬驚いてから、困ったような表情で舌を少し出しながら、藍璃は照れ臭そうに笑い——『昔の癖はそう簡単に抜けないものですから』と、答えたのだった。

第30話 元兄の少女と妹の本心（後書き）

祝！30話！間のお話も混ぜると33話ですが（笑）

このように続けられたのは、読者の皆様の存在が大きいでしょう。皆様に多謝です！

今回の『我が家へようこそ編』ですが、藍璃の本心が描かれました。藍璃の兄嫌いの理由は『嫌うという癖』な訳ですが…。一見すごく理不尽で意味不明かも知れませんが、言葉にすればこうなるんじゃないのかな？と思い、文章にしてみました。

どうだったでしょうか。少しは藍璃が可愛く思えましたでしょうか？お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス*5。」に投票です

第31話 夏空に想う少女

藍璃の意外な一面を垣間見れた俺は、その藍璃と共に部屋へ戻る。お茶とお菓子をもつて扉を開けた先。そこに映し出された光景は――

「あの……翼さん。そろそろ降ろして欲しいんですが……」
なぜか窓の外にあるベランダから、逆さ吊りで吊るされている吉良と。

「降ろす？まあ、優も帰って来た事だし、そろそろ許してあげてもいいか……」

その言葉に、面倒くさそうに答える翼。

そしてそれを大慌てで止めている綾奈に、『さすがに首からは危険ですね』と冷静に言いつつ苦笑いの翔。

それと――

「少々時間がかかっていたようですが何か問題でも生じたか」
その背後で巻き起こっている出来事を素晴らしく我関せずでスルーして、平然と俺達へと歩み寄り、語りかけてくる薫。

「……薫。説明をお願い」

げんなりした表情で、状況説明の達人である薫に質問する。すると、薫は『わかりました』と頷き、事の顛末を話し始めた。

「貴女達二人が退室後も暫くその事実にあづかずに雑談に興じていましたがあつと吉良耕介が部屋の主である優が不在である事に気づきある犯罪行為を行いました」

「犯罪行為？」

その仰々しい物言いに、俺と、その後ろに控えている藍璃が息を呑む。

「え、マジで許してくれるの？いや……ロープで吊るされた時は一瞬どうなるかと思った……って、どうしてロープを切ってるんですか？それって降ろすんじゃないかって落とすですよっ！？」

「うっさいな……。あともうちよつとだから我慢しなさいよ」

「翼ちゃん落ち着いて〜!？」

「いやいやっ!? もうちょっと我慢してて切られたら、待ってるのは自然落下だけですからっ!？」

「わかったわかった。やめるって」

「しかしまことに遺憾ながら、ここまで切ってしまったっていると吉良の自己の重みだけでも切れそうですね…」

「うおいー!？」

その先には、玄関扉に挟まれてた時も思ったのだが、意外に余裕があるっぽい吉良と、半泣きの綾奈の制止には耳を傾けず、翼が黙々と切断作業を行い、翔が素の口調でトドメをさしている姿。

そして―

「はい。部屋の主である優の許可を得ないままでの盗難目的による下着の搜索。これは窃盗罪にあたります」

やっぱり我関せず、淡々と事の顛末を話す薫。

(いや、罪名は別にどうでもいいのだが…)

俺は深い溜め息を吐く。

「ま、まあ…別にまだ盗んでないんでしょ? だったらそれぐらいで許してあげようよ」

今まさに地獄への片道切符を手にしている、吉良を許すように翼を説得すべき近づいて、肩を叩いて説得する。

すると吉良は何を思ったか、懐に手をつ込み一枚の布切れを申し訳無さそうに差し出す。

「あ、でも一枚もらちゃ――」

「地獄へ堕ちろ」

素早く地獄への片道切符を奪い取ると、吉良の言葉を遮り、俺は即座に翼の手にあるカッターナイフを手にし、躊躇うことなくそのロープを切った。

日が暮れ始め、あたりはすでに夕暮れの橙色で染め上げられ、騒

がしかった今日一日が終わろうとしている。

「お邪魔しました」

そう言って、家路へと着こうとする彼女等に一言二言挨拶を交わし、その遠ざかる後姿を三人で見送る。

「こういう時ってせめて駅まで送っていたりするのが普通じゃないの？お兄ちゃん」

「……と、確かにそうですね。それではいってきます」

「うん。いつてらっしやい」

もうすっかり口調を隠す気がないらしい翔は、そう言って彼女達の後を追う。

そして、そんな翔の背中を優しい眼差しで見送る藍璃。

「ホント優さんが来てから変わったな、お兄ちゃん……」

その眩きには、藍璃の心中にある様々な感情が入り混じっているように感じられて、今の俺には返す言葉が見当たらず口を摘むんでしまう。

「でもやっぱりその気持ちも分かるかなあ……」

「え？」

「優さんの前だと、なぜか自然体で居られちゃうんですもん」

その短めのポニーテールの尻尾を左右に揺らしながら、満面の笑みで言う。夕日が染め上げた世界の中で、その笑顔は不思議な魅力に彩られていた。

「さ、お父さんもお母さんももうすぐ帰ってくるでしょうし、今内に晩御飯の準備でも始めるとしましょうか」

再び悪戯っぽくクスリと笑って、扉を開けて家の中へと消える藍璃。

「自然体、か……」

そう、橙色の世界の中で一人眩き。俺は空を仰いだ。

その一方。神風家の庭では。

「だ、誰か…救急車… さすがにこれは…死ぬかも知れない…」

吹き荒む冷えてきた風に吹かれながら吉良は、橙色——ではなく
白い世界へとその意識を手渡そうとしていた。

第31話 夏空に想う少女（後書き）

第二部では多少のシリアスさも…（挨拶）

吉良はいつまでも馬鹿なままで居て欲しいものです。

藍璃シナリオは如何だったでしょうか？少しでも楽しんで頂けたなら光栄です。

次はどうでしょうか……。次は仲良し三人組と優のお話かも知れません（未定）

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス」に投票です

第32話：少女交響曲

そもそも、神風優という存在はとても不思議な存在だった。

その美しい容姿には、同性である女性ですら溜め息をこぼす。

しかし彼女は、それはまるで自分には関係無いかのように振る舞い、自己の容姿からくる優越感を満たすための付き合い方などせず、平等に——否。平等以上に他人と接する。

ただ、いつも一瞬に垣間見える憂いの表情がどこか神秘的だった。誰もが羨むその美貌とその性格を、彼女自身は嫌悪している。このような自分は偽りだと。彼女自身が無意識に周りにそれを教えていた。

だからこそ、彼女の周りには人は絶えない。偽りの自分のせいで誰も傷つけたりしないようにと。そのために他人に優しく接している事を、皆理解しているから。

だからこそ、周りの人間も彼女を傷つける事がないようにと願うのだ。神秘的な存在でありながらも妙に人間くさい——神風優という存在を。

だが、彼女にはある一定の距離以上からは歩み寄ってはいけないような、そんな魅力の持ち主である事は間違いない。

しかし、そんな私達の杞憂を吹き飛ばしてくれたのもまた彼女だった。

今回はそのきっかけを与えてくれた時の——私たちが、彼女を友と言うには、まだ少し距離がただのクラスメイトという存在であった時のお話だ。

「……………」

桜も散り終えて、木々達が緑の蕾をその身に宿し始めた、そんな

ある日の午前8時少し前。

少々登校時間にしては早いためか。道ゆく生徒の数がまばらな、
峯^{ほうせん}芒^{せん}高校の正面玄関に位置する下駄箱の前。

普段はギリギリに登校するくせに、酔狂にも珍しく早起きして一人で登校してきた事が、俺の人生になんらかの変化をもたらしたのかどうか。

いつも通り、下履きから上履きへと履き替えようと下駄箱の扉を開けた時だった。

ふと、上履きの上に置かれた何通かの手紙の存在に気づき、直感的に嫌な予感がした俺は無言でその扉を閉め直した。

「……………まさか」

意を決して再び下駄箱を開け、一通りの手紙を確認する。

『神風優様へ』と書かれた手紙。そのすべての裏側には、各々のクラスと男の名前が書かれていた。

「マジかよ……………」

思わずその場で項垂れる。まだ手紙の中身こそ確認していないが、十中八九間違いないだろう。

「男の俺にラブレターって…それは拙いだろう…」

やはり、いくら今は女として日々を過ごしているとは言え、気持ちまで完璧な女になり、ましてや恋愛など…。はっきり言って不可能な話だ。

「なに？優、どうかしたの？」

「ひゃっ!？」

突然の背後からの呼び掛けに、素っ頓狂な声を出してしまう。

そのびっくりした拍子で思わず手に持っていた手紙を再び下駄箱へと詰め込んだものの、一枚だけ手紙を地面に落としてしまった。

「悟技……………」

「翼でいいって。なんか落としたよ…っ」と

朝練の最後の走り込みを終えたのだろう。空手の道着に身を包みながら、その特徴なサイドポニーを揺らしつつ、悟技翼は落ちた手

紙を拾い上げる。

「あゝと……それじゃ翼。それ、返してくれないかな……？」

愛想笑いで伺いを立てる俺を無視し、手紙の表を確認した後、素早くその手紙を裏返し、何か新しい玩具を手に入れたような、そんな子供のように意地が悪い微笑みを浮かべる。

「優さ……これってどうみてもラブレターだよねえ？」

「ど、どうだろうね？ 案外、果たし状かも知れないよ？」

「じゃあ私が返事しにいったいいい？」

「……勘弁してあげて」

恋文、果たし状に関わらず、翼が行けば相手は大きな傷を負う事になってしまふ。あるのは、その傷が精神的か肉体的かの違いだ。

「そっかそっか。優はもてるからね。多感なお年頃の時にこういった手紙は心臓に悪いって事か」

（お前も確か同じ年齢のはずなんだがな）

心の中でツツコむ。口は災いの元。こいつの前で迂闊な事を言えば、その瞬間その研ぎ澄まされた足で意識ごと刈り取られてしまふ（それに俺がもてるだって？ どこをどう見てそう思っているかは知らないが、残念ながらラブレターなんざもらったこともねえよ）

「そういうの、初めてもらったから……。少し驚いただけ」

「は？……あはは。そっか」

俺の言葉に翼は少しの間ぼかんとして、すぐさま快活に笑う。

そして、妙に慣れた手つきでその手紙を懐へと仕舞い込むと、俺の下駄箱の中に残った手紙までも回収していく。

「ちょ……翼っ！？」

そんな翼の突然の行動に戸惑いながらも声を出す。

「んじゃ、また教室で会いましょう」

しかし俺の制止もなんのその。翼はまるで何事も無かったかのようにな、部室へと走り去っていった。

「お、俺は手紙に対して何も返事しなくていいのか……？」

その後姿を見送り、ぼつねんとその場に立ち尽くす俺の眩きは、
突如吹いた春風によって掻き消されたのだった…。

第32話：少女交響曲（後書き）

予告通り、仲良し三人組と優のお話です。

まだ桜の季節の頃のお話ですね。15話から16話の間ぐらいの出来事で、四話構成です。

実は仲良くなった過程をその時に描写しなかったのは、まだ三人の魅力は出せてないと思ったためです。

そして今なら、その三人らしさを感じてもらえるように思えるので、ここで発表ということになりました。

心なしか優も、女性らしくなく、翼も今とは少しか距離を置いている付き合い方をしているように感じてもらえたなら嬉しいですが

…（苦笑）

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス★S。」に投票です

第33話 少女交響曲2

その日のお昼休み。

とある空き教室に集まった2・4組の女子達は、目の前に並べられた色とりどりの封筒に手紙を一瞥し、輪になつて討論を繰り返していた。

「『好きです。付き合ってください』か…。飾らずにストレートに気持ちを伝えようとしたのは評価できるけど…これって手紙に書くような内容じゃないよね…」

「あ、ねえねえ！これなんてどう？『めっちゃ好きやねん！』だつて」

「駄目駄目っ！そんなただのネタじゃないっ！」

「じゃあさ。これなんてどう？『I LOVE YOU（優とかけてみたんですけどどうでしょう？）』だつてさ」

「自分でネタの説明するなんて言語道断よ。却下却下っ！」

女三人寄れば姦しい（かましいい）とはよく言ったものである。

ましてやこの教室にいるのは、2・4組の女子全員、つまりは総勢14名揃い踏みだ。そのかましさと言えば尋常ではない。

「い、いい加減に落ち着いて話し合いましょう…」

皆、あまりの白熱ぶりに、すでに本来の目的を見失っている。

それをなんとか静めようと、菜乃綾奈が先程からその小さい体で教壇に立ち、両手を掲げぶんぶんと振りながら、必死に言葉を投げかけている。

しかし、その姿はどう見ても半べそかいて地団駄を踏んでいる子供そのものだ。この暴動を鎮圧するには、如何せん迫力不足である。

「薫ちゃ〜ん……」

もうどうしていいのか分からず、綾奈が親友の一人に助けを求める。

その教壇の横。ちゃっかり己の椅子だけは確保し、何かをする訳でもなく事態を静観し続けていた小野寺薫は、ゆっくりと綾奈へと視線を移し、たった一言。

「不可能です」

いつも通り無表情で、きっぱり言い切った。

そして、その返答を予測していたのだろう。綾奈はただ深く溜め息をつく。

「翼ちゃん……」

無理とは思いつつも、あの輪の中心にいるもう一人の親友の名を呼んでみる。

「いや〜もう驚いたね。いつもはギリギリにしか来ないくせに、今日みたいに大漁の日に限って早く登校してくるんだからね」

しかし、どうやらいつの間にか議論内容が再びすりかわっているようだ。

「優は自分の事、全然モテないと思ってるようだけど…。まあそういう美人を気取らない、人懐っこい天然さが人気の秘密っていうのもあるんだろうけどさ」

「仲良くなりたいたいから、転校初日に早く来て皆に挨拶して回るなんて…。私達には真似できないよね〜」

「でも、そのせいで変に男子がたかっちゃって大変だったよ…」

「鼻の下伸ばしてる男連中にも、声をかけられたら嫌な顔ひとつせず、笑顔で返事を返しちゃうんだもん。仕方ないよ」

翼の言葉をかわきりに、次々と出てくる優の深層心理を知らない者達が見てきた客観的な逸話の数々。

当の本人である優がこの話を聞けば、その場で半笑いのまま気を失うほどの、ある種の破壊力をもった代物である。

なぜなら。そのすべてにおいて、男として動き易いように動いた結果によるものなのだ。

しかも、それにより女子達は団結し、彼女達からしてみれば純真無垢な優を、男の毒牙から守ろうと日々暗躍しているとは…。

当の本人である優には、当然ながらあずかり知らぬ事であった。

「翼ちゃん……」

感慨深げに腕を組む翼の耳に、綾奈の声が届く。

「なに？」

「今日はそういう議論じゃなくて、ラブレターの差出人さんへの体のいい断り方と、対面でのお断り人の選出です……」

「あ、そうそう。本来の目的を忘れるところだった。時間もないし、この際断り方はアタリひいた人の自由って事で。さ、皆このクジひいて〜」

綾奈の言葉に、本来の目的を思い出した翼が、テキパキと適当ながらも話を進めていく。

そしてその結果――

「……………」

全員が、約一名の手に握り締められたアタリクジを見つめる。

本来ならこの時点で、喝采や冷やかしといった悲喜交々な言葉が飛び交うはずなのだが――

「……………」

「……………」

誰一人言葉を発しようとしなない。

寧ろ全員が『なぜ自分がアタリを引き当ててやれなかったのか』という後悔の念に打ちひしがれている真っ只中である。

そう。アタリクジを握り締めたままピクリとも動かない人物は、誰がどう考えてもこういった色恋沙汰とはまったく無縁……といった可愛らしい次元すら超越して、感情自体に無縁に見える小野寺薫だったのだ。

アタリを引き当てた当の本人である小野寺薫は、そんな重苦しい空気をまるで意に介さず、いつも通り感情の起伏がまったく感じられない声色で一言。

「あたりました」

と、その場にいる誰もが理解しながらも、認めるべきかどうか迷っている事実を、ただ口にした。

第33話 少女交響曲2（後書き）

ギリギリ執筆が間に合いました（挨拶）

はてさて。優が居ない時の三人は、いつも通りですね。翼が中心に居て、綾奈がそれに巻き込まれつつ、薫が静観しつつも傍に居る。

これが彼女達の立ち位置のような気がします。

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的小さな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代F.Tコミカル部門>「ぶらすマイナス*5。」に投票です

第34話 少女交響曲3

「…以上において貴方は彼女に相応しくないと結論に至りました」

「ひ、酷過ぎるっ！！うわーっ」

放課後。

告白場所としてはベターな体育館裏。

本来なら、それ目的で待ち合わせているのならば、誰しもが期待と不安に胸を躍らせてここを訪れるだろう。

しかしどういう訳か、訪れた者達のそんな純粋な心を打ち砕くどころか、さらにそこからの確に重箱の隅までつつかれ、人生の袋小路に迷い込ませるような言葉の暴力に晒される危険地帯へと様変わりしていた。

「……薫。恐ろしい子」

親友である薫が心配になつて様子を窺に来た翼。

薫なりの“体のいい断り方”の一部始終を眺めつつそう呟いた。

薫は、手紙で呼び出した神風優がおらず、代わりにその場に存在している女生徒に戸惑う男生徒に対して“如何に己―この場合男生徒の訳だが、が、神風優という女性とは不釣り合いか”を事務的にかつ雄弁に語り始めるのだ。……当然いつもの無表情で。

本来そのような小馬鹿にされたような言葉を、見知らぬ女生徒に言われれば相手は憤怒し、最悪、激昂し殴りかかってくる可能性さえあるのだが…。

どうやら小野寺薫において、その理屈は通用しないらしい。

その無表情で罵詈雑言を言い放つ様は、悪霊が延々と意味不明な呪いの言葉を囁き続ける事と同等レベルの異質さを醸し出していた。

それにより、言われている相手は憤怒といった怒りの感情よりも先に、その恐怖に屈してしまうのである。

その恐ろしい手法には、戦慄を覚えずにはいられない。

「こ、言葉って本当に怖いんだね……」

翼の言葉に頷きながら、同じく様子を觀に来ていた綾奈は先程から苦笑いしか浮かべられないでいる。

（明日にもちゃんとあの人達にフオローしとかないと……）

薫本人にはそんなつもりはないのだろうが、さきほどから繰り出される傍から見れば情け容赦ない言葉が苦で、登校拒否などになってしまえば笑うに笑えない。

「翼。今ので終了かと思われます」

そんな綾奈の心配を他所に、薫は至っていつも通りだ。

「ほい。お疲れさん。それじゃ帰ろっか」

気がつけば日も大分傾いてきている。

翼の言葉に異議を唱える者はおらず、ひとまず三人は帰路へとついたのだった。

そしてその翌日の朝。

「……………」

再び下駄箱前。

部活に所属している者達が朝練を終えるすぐ後の時間を見計らって登校した俺は、深く深呼吸し下駄箱を開ける。

そこには俺の予想通り、手紙は一枚も存在しない。俺が昨日の放課後、自分でしたためた手紙でさえ。

（やっぱりそういうことか）

どうやらこの下駄箱に投函された手紙は、自動的に回収されてしまふようだ。

……よく知る第三者の手によって。

そうなれば昨日の朝、翼が見せた奇行に説明がつく。

俺は小さく溜め息をつきつつ、上履きへと履き替え、翼にその真意を問うべき教室へと歩を進めようとしたのだが――

「あ、あのっ！優さん」

遠慮がちな呼びかけに足を止めた。

「綾奈？」

声を頼りに視線を移動させると、そこに立っていた少女の名を呼ぶ。
「どうしたの？」

この時間、朝練がある運動部に所属している訳でもない綾奈がこの場所に居るのは珍しい。

つい軽い気持ちで、その真意を問うたのだが…。どうやら軽い内容ではないらしく、その表情は苦渋に満ちている。

何事かと慌てる俺に対して綾奈は肩を震わせると、何を思ったか、勢いよくその小柄な体を九の字に曲げて―

「ごめんなさいっ」

綾奈にしてみれば珍しい、大きな声でそう言った。

「えっ！？ど、どうして謝るのっ！？」

突然の謝罪に困惑してしまう。

「その…手紙の事で…」

「手紙？…あ、なるほど」

そこではじめて、綾奈が俺を待っていたという事に気がついた。

主犯の翼と常に行動を共にしているほど仲が良い綾奈だ。手紙の事を知っていて、良心の呵責に耐え切れず謝罪にやってきたのだろう。

「あはは…。別に怒ってないから。手紙の事は知っていたし…」

と、言っても知ったのは今しがたな訳だが。

「えっ！？」

「嘘っ！？」

「驚きです」

綾奈は驚きの声に続いて、下駄箱の影からさらなる声が加わる。若干一名、言葉とは裏腹にさほど驚いたようには到底思えないのはいつもの事だ。

「……翼。それに委員長も」

たぶん、様子がおかしい綾奈の後を追ってきたのだろう。

俺は、何事かと思っずと近くに潜んでいただろう二人に苦笑いした。

第34話 少女交響曲3（後書き）

皆さんこんばんは（挨拶）

実は前回からですが、お話上、誰に断らせるか少し悩みました。その結果、面白そうな薰となったのですが…。如何だったでしょうか？次回でラブレター編も終了です。その次からは通常の夏休みのお話となりますのでw

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第35話 少女交響曲4

「い、いや」なんか綾奈が思いつめてたようだしさ。さすがに優の断りもなく、勝手な事しちゃったかな」って反省してね」

私は、そう言つてバツの悪そうな表情を浮かべ、二人に歩み寄る翼の後ろをついていく。

案の定、神凧優はやれやれといった表情だ。

「それに、薫も『手間をかけさせた謝罪はするべきだ』って言うものだしさ。一緒に謝ろうつて事になつて。その…ごめんな」

翼が私に視線を送り、神凧優に謝罪する。当然私も合わせて出来るだけ丁重にお辞儀を行う。

どうやら彼女は昨日、体育館の裏側で私が断つた男子生徒すべてに、謝罪を行つていたらしいのだ。

「ええ！？そ、そこまでしてくれましたかっ！？」

翼から説明を受けた綾奈は叫び、申し訳なさそうに再び何度も頭を下げている。

するとそんな綾奈の様子を見かねたのか。神凧優は、その天然とはいえども大人びた美貌とは裏腹に、子供のように笑い、綾奈にお辞儀をやめさせる。

そして、その特徴的なブロンドの髪をなびかせ――

「別にいいよ。三人とも、私のために思つてやってくれた事だしね。ありがとう」

そう言つて、本当に嬉しそうな笑みを浮かべたのだ。

男であろうと女であろうと彼女のそういった態度は変わらない。

男ならば、極力異性を感じさせないように気さくに話しかけ。

女ならば、何事においても気遣い、そして優しく接してくれる。

だからこそ私達は、彼女に近寄れなかった。些細な事ですら傷つけ

てしまう可能性があるのだから。

しかし、彼女は笑った。まるでそんなものは杞憂だと言わんばかりに。

彼女が特別を望まず、勝手に行動を起こした私達ですら、嬉しそうに笑いかけられるというのなら――

俺は、なぜかぼーとしている二人を教室へと促すと、物思いに耽っていた委員長にも『もうチャイムなるよ』と、声をかけた。

“薫”で構いません」

「え？」

突然の委員長の言葉に、俺は目を丸くした。

しかし、当の本人である委員長は用件だけ伝え、歩を幾分か早め、前をいく二人の横に並ぶ。

そして――

「教室に遅刻します。急いでください」

「ここまで来ておいて遅刻なんてシャレにならないぞ」

「早く行こうよ」

「優」

重なる私達の声に、私も綾奈も。そして無表情ではあるものの心なしか薫も笑い合う。

そうだ。この瞬間、私達は仲良し三人組では無くなったのだ。

“さん”付けするの忘れてしまいました……。あ、でも二人には“ちゃん”付けで呼んでるのに変でしょうか……？」

妙な事に拘っているのか、綾奈が申し訳なさそうに言う。

そんな綾奈に対して――

「問題ないでしょう」

薫が言う。その言葉に、薫の今の気持ちが込められているようで、少しおかしかった。

「そうだね。どうしてもって言うなら今度からそう呼べばいいだろうしね」

私が肩をとんと叩く。薫の気持ちと、私の気持ちを綾奈が伝わるように。

「…そうだね」

そして、そんな私達を見て綾奈が笑った。

以前、ハンバーガーショップで、濡れた私の頬に添えられたハンカチ。

そのハンカチ越しに伝わる彼女の体温は、いつか感じた父親の温かな掌と同じだった。

注目を浴びる事なんてしたくもなかったが、差し出された手の先にある、本当に私を心配してくれている瞳が優しくして。

つい、私は動く事を止めてしまったんだ。

ありふれた事が特別だと感じたのなら、それはきっとその人が特別な証拠。

『今日から三人じゃなくて四人』

触れた肩から感じた、翼ちゃんと薫ちゃんの想い。

それは私の想いでもある。

だからこんなに楽しそうに笑える。笑い合える。いつだって。友達だから。

楽しげに教室へと戻る、三人の後姿。

「優、か…」

彼女等に呼ばれたその名を、俺は呟いた。

響き渡る予鈴に弾かれるかのように、俺のために開けられたワンス

ペースに走り込む。

そして並んだのは三人ではなく、俺を合わせて四人。いつかの喫茶店での発言は前言撤回だ。

どうやら俺は最大の問題において、最高の答えで選び出していたらしい。

ほんの少しの罪悪感と気恥ずかしさと共に。

この三人と親友になれたという最大限の喜びを噛み締めるかのように――笑う。

（女になってそこだけは感謝してもいいかもな…）

馬鹿みたいな考えに。

俺は苦笑いを浮かべて、教室へと駆け出した。

第35話 少女交響曲4（後書き）

はてさて。仲良し三人組と優のお話、如何だったでしょうか？三人の心理描写の書き分けが上手く出来たか、些か不安ではありますが...

次回からは夏休みへと舞台は戻ります。環境が変わったため、ひよっとしたら一日一話が難しいかも知れません。申し訳ないです（汗）お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第36話：フィルムの中で微笑む少女

世間の学生は、夏休みというものを満喫している最中。

過ごすにはあまりにも高過ぎる気温が続く毎日。

今日は皆で何処かに集まって、早めに宿題を終わらせて夏を満喫しようという名目の元、エアコンが効いた快適な部屋で過ごす事と相成った。

そして今、俺は『前回優の家にお邪魔させて頂いたので』と言ってその提案の場所に自分の家を進言した小野寺薫の家にいる。

これは今日知った事なのだが……。

体を馴染ませるために、夏休み中早朝ジョギングを行なっているコース上に、偶然にも薫の家があったらしく、走っている所を発見されて家の中に案内されてしまった。

そのまま案内されるがままお風呂に入らされ、今は丁度、客室でお風呂上りによく冷やされた麦茶を差し出されたりしている。

その気持ちは有難いが、約束の時刻までには大分時間がある。

いくら他意はないといえ、二人つきりというのはどこか居心地が悪い。しかもかなり広々としている間取りで、それがさらに居心地の悪さを増幅させる。

そわそわしながら周りを見渡すと、ふと小さい頃の薫が家族と撮ったであろう写真が飾られている事に気がついた。

手にとってみようとした瞬間――

「すいませーん」

「ひゃい!？」

突然背後から聞こえたテレビドアホンの画像に映し出された宅配業者の呼びかけに、珍妙な返事で返す。

「宅配便です。印鑑かサインお願いします」

どうも受話器を取って返事をしなくとも、先程の返事で在宅である事は承知しているらしい。

「薫ー？宅配便さんだよー？」

席を立ったまま、姿を見せない薫を呼ぶ。

だがどうも反応が無い。聞こえない場所にもいるのだろうか。

しかしこれ以上待たす訳には行かないし、だからと言ってこれだけ広い家で一人を探すのには苦勞しそうなので、仕方なく俺が出て受け取る事にした。

「ご、ごめんなさい。お待たせしました」

「いえ。全然大丈夫ですよ」

爽やかな対応。なかなかのプロ根性である。

「秋月さんのご自宅の間違いですね？ここに印鑑かサインお願いします」

「は？」

宅配業者の言葉に、思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。

（秋月？薫の苗字は小野寺だよな？）

首を傾げる。そんな俺の様子を怪訝そうに見つめる宅配業者。妙な光景である。

「お待たせしました」

そうしてる間に、どうやら薫が宅配業者の存在に気がついたらしく、印鑑を持って姿を現した。そして印鑑を押して、その荷物を受け取る。

「ありがとうございます」

「お疲れ様です」

最後には再び営業スマイルを振り撒き去っていく宅配業者を見送りながら、さり気なく入る時には気にも留めなかった表札を確認する。

するとそこには――

「秋月……？」

やはり『秋月』という表札が掛かっていた。

「何か問題でもありましたか」

そんな怪訝そうな顔で表札を凝視する俺に気がついたのか。一旦

荷物を持って家の中へと入った薫が戻ってきた。

「薫の苗字は？」

「小野寺です」

「この表札の苗字は？」

「秋月です」

「だよね……」

「はい」

なんだろう。この一見会話が成立しているにも関わらず、まったく噛み合っていないような虚無感。それとも小馬鹿にされているのだろうか。いやしかし、あの悟技翼ならまだしも、こう言った冗談は薫は言わないはずだ。

「ここは普段薫が住んでる家だよね？」

「住んではいません」

「そうだよね……住んでないって、ええええ！？」

衝撃の告白を、薫は事も無さげに言い放つ。

落ち着け俺。きっと何か些細な理解の食い違いがあっただけのはずだ。

「あー……うんと。そうすると薫は他人の家の中を我がもの顔で闊歩して、あまつ冷蔵庫にあった麦茶を私に振る舞い、届けられた宅配便を印鑑を使用して受け取った、と？」

「はい。ちなみに荷物の中身は新鮮な魚介類でした。晩御飯は鍋物でどうですか」

「あ、それ美味しそうね、って違ーーーうー！さっきの荷物開けたの！？無断で！？」

どうやら薫は言葉を食い違わせるところか、物品を食い散らかすつもりでいるらしい。

誰か薫の暴走を止めてくれ。

「些細な事です」

「そんな訳あるかー！ー！！」

玄関先で捲くし立てる俺に、平然と恐ろしい事を言っただけの薫。

「薫、住居不法侵入って言葉知ってる？あ、さらに物品を物色しちゃってるから、窃盗罪も付加されるわね……」

ぶつぶつと説教を始める俺を玄関に放置して、薫は家に入り時計を見上げる。

そして最後のトドメ。

「先程室内を見て回りましたが、数日間帰宅した様子がありませんでした」

「……ああ。さっきから姿見ないなと思ってたら、ちゃっかりそんな確認を」

空を見上げる。いい天気だ。

最近の泥棒は堂々としていると聞いた事があつたが、まさかここまで堂々しているとは思ひも寄らなかつたよ。薫。

「電話してみましょう」

その様子を見兼ねたのか、心なしか不安げに携帯電話を手にして薫がどこかに電話を始める。

「警察、か。差し入れはちゃんとするからね。薫」

空を見上げたまま遠くを見ている俺に対して、薫はいつも通り無表情で――

「父です」

と、だけ答えた。

第36話：フィルムの中で微笑む少女（後書き）

早速ですがお報せです。今回から更新が遅くなります（土下座）
可能な限り早めの更新を心掛けたいですが、如何せん時間が無くな
って参りました。申し訳ないですorz

さすがに何日も更新出来ない状態にはならないかと思いますが……

（滝汗）

毎日の更新を楽しみにして頂いてくれる皆様、申し訳ないです。
お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み
難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナ
ス★S。」に投票です

第37話

世間の学生は、夏休みというものを満喫している最中。

過ごすにはあまりにも高過ぎる気温が続く毎日。

そんな蒸し暑い中、誰しもがなんとか気力を振り絞って各々の職場の席に着き、日々の激務に勤めている大人達。

その大人達が行き交うオフィス街の中にある、芸能関係のお洒落な自社のビルの中、早朝にも関わらず、男の苦悶の声が響き渡った。

「駄目だ駄目だ駄目だー！ー！」

所属しているモデル達の写真とプロフィールを、様々な資料が乱雑に置かれた己のデスクへと叩きつける。

男の名前は秋月省吾。

人柄も良く、仕事も、プロとして恥ずかしくない充分な仕事実績を残し、その筋ではかなりの信頼を得ている。

ただ、難があるとすれば根っからの仕事人間であるという事。

その結果、数年前に愛想をつかされた省吾は離婚し、相手は娘と共に家を出て行ってしまった。

「皆、この企画のモデルとしては何かが足りない！」

ばら撒かれた写真に写る女性達のすべてを、たった一言で言うならば容姿端麗。

街を歩けば、男女関わらずに、その美貌に一度は足を止めてしまうだろう。

それは、絶え間ない美への追求により勝ち得た美貌によって手にした、モデルという華々しい職業を名乗るに相応しい。

だが哀しいかな。写真撮影というファッションモデルとしての一般的な仕事を、あまりにもそつなく進めてしまう。

秋月が求めているのは、写真撮影をまったく知らぬ初々しさと、そ

してそれとは不釣り合いな程の美貌。

しかしモデルとは本来、ハードな撮影スケジュールを耐えながらも、カメラの前では笑顔を振りまけるだけの度胸と根性が必要なのである。

それをモデルの経験がまったくくない、初々しい子に求めるのは困難であって、さらにはそこにモデル並みの美貌を持った女性など、雲を掴むような話だ。

スタッフ全員で人材発掘にあたっているものの、クライアントと交わした期限が迫っている。

今日中に、クライアントが納得する写真の撮影が終了しなければ、培ってきた秋月の信頼も地に堕ちるというものだ。

だがやはり、『仕方がない』と妥協して撮った写真にクライアントが万が一満足したとしても、秋月は一生その事を悔やみ続けるだろう。

そのジレンマに悶絶している秋月の携帯電話が鳴った。

「もしもし？」

「薫です」

とってみると、それはテレビ電話として繋がっているらしく、画面にはその無表情さ度合いが分かる、母親と同じ姓——小野寺と名乗る娘の姿に秋月は苦笑いする。

「薫か。どうした？こんな朝早くに。今は学校にいる時間じゃないのか？」

携帯を片手に時計に視線を移すと、時刻は9時少し過ぎを指している。

そんな時間に、しかも普段あまり携帯電話を使わない薫が、ましてやテレビ電話をかけてくる事は極めて稀だ。

「夏季休暇中です」

「……………なるほど」

ここ数日間、不眠不休で働き続けたせいか、そうだった世間感覚がまったく言っていないほどなかった事に気がつく。

「帰宅した様子が無かったため最近の様子を伺うため電話しましたが、それをあまり気にしていないのか。薫は秋月の質問に答えると、己の用件のみを伝える。

「あゝ…どうも仕事が上手く進まなくてね。今日もまた帰りが遅くなるか、最悪このまま仕事場に泊まりになるかも知れない」

「どうやらわざわざ様子を見に、家まで来てくれたようだ。秋月は申し訳無さそうに言う。

「そうですか。顔色が悪そうなので無理のないように」

その答えは予想していたのか。淡々とした表情で答える薫。

しかし、そこで薫がどうしてわざわざテレビ電話をかけてきたのが理解した秋月は一言。

「心配かけてすまない。ありがとう」

娘の気遣いに素直に感謝し言葉にして伝えた。

一見無表情で、その高揚の無い口調から冷たく見える薫だが、そうやってさり気ない気遣いを出来る優しい秋月の自慢の娘だ。

そんな娘に片親で寂しい思いをさせてしまっている事を思うと心が痛む。

「本日の勉強会にこちらの家を使用するので何か入用があればいつでも言って下さい」

「ああ。時間が空いたら、こちらからまた電話をかけるよ」

様子見と、以前口にした『薫の友達とゆっくり話をしてみたい』と言った事を覚えていてくれたのだろう。秋月は、そんな娘の心遣いに感謝の念を抱かずにはいらなかった。

「ありがとう」

「はい。それでは」

いつもならそこで電話が切れるのだが、今回は少し違った。

「薫？話ついた？」

ふと、聞き慣れない女性の声が入る。

「おや？翼君か綾奈君かな？」

以前自宅に遊びに来ていた時に出会った、同じ峯^{ほうせん}苦高校に通う娘の友人達の顔を思い浮かべた。

軽く挨拶を交わした程度だったが、どちらもなかなか写真栄えしそうな顔立ちだったように記憶している。

あれほどの素材ならば、仕立てればモデルとして通用しそうだと秋月は素直に思った。

是非一度、彼女等に合った仕事があれば、試しにモデルとして起用してみたいと思ったりもしていたのだが…。

残念ながら今回ばかりは難しそうだ。

時間が押し迫っているというのに、少し見栄えがしそうな子の写真を撮って、クライアントに送る書類の中に紛れ込ませて『この子なんてどうですか？』なんてやってられない。

「いえ。彼女は…」

「なっ——！？」

娘の言葉に考え事から引き戻され、携帯に映し出されたその少女を見て、秋月は言葉を失った。

「神風優という新たな友人です」

「え？これってテレビ電話？あ、どうも。神風優です」

驚愕のあまり、呆然と己の携帯画面を凝視する秋月を知ってか知らずか、少し困ったような笑顔でブロード髪を揺らす少女。

興奮のあまり、テレビ電話だという事も忘れて、秋月は携帯を耳元へと近づけて冷静を装った声で問いかける。

「薫」

「はい」

「今何処にいるんだい？」

「家です」

そんな父親の目の前に映る耳のアップにも驚かず、薫は淡々と質問に答える。

「わかった。すぐ帰る」

そう言つて秋月は電話を一旦切ると、すぐさま街中で綺麗と思えた女性を口説き落としているスタッフに電話をかける。

そして呼び戻されたスタッフ総出で、自宅で待つ今回のモデルの元へと大急ぎで向つたのだった…。

第37話（後書き）

今回から、題名はその話が終わるまで一定として、空欄でお届けします。こちらの方が、話の区切りも分かり易いでしょうか？題名は、色々模索中です（笑）

更新方法について考えた結果、不定期ではありますが、出来上がり次第更新しようかと思っております。更新する曜日を決めて更新、等色々考えたのですが……。もし、何かご意見御座いましたら、よろしくお願い致します。

それとアクセス数が1万件を突破しました。読んで下さった皆様には感謝です！何かリクエストがあれば、可能な限りお受けしたく思っておりますので、仰って下さいね！

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス★S。」に投票です

第38話

「……でどうだろう？神凧優君」

「いえ、だからもうまったく素晴らしいほど人の話を聞く耳持つちゃいませんね」

目を輝かせて俺を取り囲む、見知らぬ大人の男女に口を呆然としつつ、俺は小野寺薫の父親と名乗る、秋月省吾という男性の問いかけに頭痛を抑えながら答えた。

「理解不能です」

そんな俺の隣で、誰かがお茶請けとして差し出したお菓子を頬張りながら、薫は無表情に呟いた。確かにそれは俺も言いたい台詞ではあるが。

「つまりその……。私にモデルをして欲しい、と」

「その通り。理解が早くて助かるよ」

「いえ、だから再三お断りしているんですけど……」

「大丈夫」

「だから何が!？」

繰り返される会話内容に頭を悩ませる。

その一方では、どうやらこの家自体撮影場として使用する事も想定されている造りになっていたらしい。その場に居た人々が撮影の合図と共に、一斉に準備に取り掛かっていた。

眩暈がする。どうして俺の周りには、人の困惑している姿を尻目に、それは杞憂だと言わんばかりに爽やかに話を進めようとするのか。

そこへ――

「これは一体何事ですか？」

「来たな。その第一人者」

俺が薫の家に居る事と連絡を受けて駆けつけた翔を、そんな言葉

と共に、どんよりした目で迎え入れる。

考えてみれば間違いなく翔が、人の困惑を尻目に話を進める第一人者である。そうになると、なんだかこの状況さえ翔によって生み出したものと感じてしまうから不思議なものだ。

「何をそこまでげんなりしているかは知りませんが…。とりあえず一人では不安かと思い、皆に連絡を取り、集合時間を早めた事は芳って欲しいものです」

そんな俺の不貞腐れた様子に、やれやれと言った感じで肩を竦める翔。

「み、皆…もうすぐ来るの…？」

翔の言葉の意味に愕然とする。嫌な予感がする。それもかなり高確率な。

このままいくと、訪れた翼辺りが『減るもんじゃないし、モデルぐらいやればいいじゃん』と言つて、さらには皆がその言葉に同意して俺の逃げ場が無くなるパターンだ。現状を知られてしまえば十中八九そうなるだろう。

「それだけは避けたい…」

「ちなみに。吉良と藍璃ならすでにそこにいますよ」

俺のすべての希望を打ち砕かんばかりの翔の発言に、今度はその場で崩れ落ちる。

「神風優ファンクラブ。『優ちゃんは全校生徒で見守ろう会』会長の吉良耕介です。是非とも今回を機に、ご高名な秋月さんのお力添えにより優ちゃんの魅力を、世間に広めて頂きたいと思っています」

「あ、あの…お会い出来て光栄です！神風優の妹、神風藍璃です。」

秋月さん、唯一の姉妹である姉の事綺麗に撮ってあげて下さいね！こいつ等は年中頭のネジが二、三本足りてないのだろうか。当の本人である俺をぶつちぎりで放置して、勝手に話を進めてやがる。

吉良。いつの間にそんな珍妙なファンクラブを立ち上げたんだ。

つまりはあれか。夏休み前に学校で感じていた、妙に統率が執れた不気味な視線の元凶はお前か。

藍璃。唯一という言葉。それは暗に自分には兄などいないと強調したいのか。犯罪者扱いの次は、存在を否定か。ツンデレと名乗るには酷過ぎるぞ。デレがない。

そもそも、普段がツンツンしていて、二人っきりの時にデレデレしているのがツンデレの定義と聞く。しかし、藍璃は兄と二人っきりになるものなら、デレデレではなくチクチク文句を言ってくる。略してツンチク。心身ともにとて痛そうである。

「いつもながら藍璃さんは手厳しい方ですね」

「大丈夫だ。俺の時からあんなものだっただ」

「ははは……おかげで順応するのに苦労しましたよ。いえ。慣れたというより諦めの境地に至ったと言った方が相違ないでしょうか」
笑いながら、その笑顔にかなりの苦悩と哀しみを滲ませる翔の肩を無言で叩く。

よくよく考えてみると、こいつは最初はこんなダークキューモア溢れる人間では無かった気がする。どうも神風翔としての神風家で過ごす内に、こうなってしまったようだ。

恐るべき神風家。歳月は人を変えるところはよく言ったものである。

そして――

「こんにちは――」

室内に響き渡るインターホンと聞き慣れた翼の声。

薫と共に迎えると、翼の後ろには綾奈の姿もある。綾奈はこちらを確認すると、見る者をほんわかとさせるいつもの笑顔を浮かべて、会釈してくれた。

そして予想通りと言っべきか。

大人達が写真撮影の準備に大忙しな状況を横目で見つつ、事の顛末を聞いた翼は、いつもの破顔一笑すると――

「減るもんじゃないし、モデルぐらいやればいいじゃん」

一語一句間違わず、予想通りの言葉を俺へと投げ掛けてくれた。
そしてこれまた予想通りにその意見に同意する周りの方々。

「もう好きにしてください…」

多勢に無勢。諦めたように承諾した俺は、促されるままに更衣室
として準備された部屋へと姿を消すのであった。

第38話（後書き）

さて。案の定、優は巻き込まれました（笑）

予想通りと言えば予想通りなのではないでしょうか。こと優に関しては、会長である吉良とツンチクの藍璃は、意外にいいコンビかも知れません。

次回はいよいよ撮影開始です。それと同時に薫の以前の発言の謎が明らかに……！！（内容は未定です／あ）

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第39話

鏡の前に座らされて、ヘアメイクを施されている間に今回の撮影の趣旨を説明される。

ファッション雑誌の秋物特集と題された数ページに掲載する、クワイアントから手渡された衣装の中から一枚を選んで、それを着て撮影された写真が必要らしい。

散々試着を繰り返し、最終的にスタイリストさんがこれだと決めた、胸元にレースの中にサテンリボンが入ったキャミソールのワンピースに着替える。

シルバー、と言うよりも、どちらかと言うと純白に近い色合いで、俺のブロンドの髪が映えると言われて満足気に手渡された。

そしてメイクも『素肌自体が綺麗だから最低限で。とりあえず後は照明で肌が傷まないようにだけしておきましょう』とだけ言われて、案外早く終わった。

そして――

「……………」

準備を終えて部屋から出てきた俺を、皆が呆然としながら出迎える。どという訳か、準備をし終わって一段落ついていたスタッフすら声を発しようとしない。

「へ、変…かな…?」

その妙な沈黙が不安で、思わず口を開く。

女に変わってしまった自分の姿を、そう何度も真剣に鏡を通して見た事なんて無かった。

だが、キャラメイクの自由度が高いゲームで、出来るだけ理想的で美人なキャラとして“優”を作ったつもりである。変な言い方になるが、それなりに自信はあったつもりだ。

勿論、だからと言って『俺は綺麗なんだ』と誇るには、男としてのなりの抵抗を感じる。だからその容姿を利用した行動は、出来るだけ行ないたくないのが本音だ。

それに正直、未だに自分この姿を現実として捉えられてない所もある。

なぜなら、周りに綺麗だとはやし立てられたところで、俺にとってはやはり自分は神風翔でしかないのだから。そう言われても、ピンとこないのが実情だ。

だから不安になる。俺には似合っていないのではないのかと。だが――

「う、ううん！？凄く綺麗ですよ！？」

「うん。上玉だとは常々思っていたけど、今まで服装の着こなしが駄目だったからね。合ってる物を着れば、モデルで十分通用する綺麗さだね」

「ですよー！逆に優さんが変だって言われたら、私が落ち込むかも……」

綾奈と翼。それと藍璃が落ち込む俺に、慌ててフォローを入れてくれた。

「ありがと。少しは安心できたよ」

その言葉に、俺はほっと胸を撫で下ろす。

男だと主張したりもしたいが、女として引き受けた秋月さん達にとっては大事な仕事である。俺が駄目にする訳にはいかない。

「優ちゃん。落ち着いて。君ならきつと出来るさ」

「吉良……君。ありがと」

紳士的な吉良の言葉に素直に感謝する。てっきり吉良が一番ぎゃーぎゃー五月蠅く騒ぎ立てるかと思ったのだが、いらぬ心配だったようだ。

だがまあファンクラブの件は許す気はないが。しかも――

「会長として出来る限り協力はするよ。あ、すいません。今回撮影

した写真を、校内新聞の一面で使用したいので焼き増してくださいませんか」

「とりあえずお前が一番落ち着け」

どうやら真面目にシヤレにならない事を考えていたようだ。

とりあえずこいつは撮影が終わった後から殴るとしよう。藍璃と翼なら快く協力してくれるだろう。

それからが大変だった。

みんなは本来の目的通り宿題をしつつ、こちらを『目の保養』と称してちらちらと盗み見る。

その一方で俺は、秋月さんの指示の元、あれこれポーズを取りながら笑顔を振り撒く。

当初は俺は、写真撮影ぐらい簡単だろうとタカを括っていたのだが…。

その認識は甘かった。モデルとしての写真撮影は重労働だった。相手に望まれるがまま、カメラに向って笑いかけるのは予想以上に難しい事でもあるし、照明の光が、時間が経つにつれて己の体力を奪っていく。

「優、大丈夫？」

「ん、なんとか。意外に重労働だね」

どうやらある程度区切りがついたらしく、スタッフ全員が、今日撮った写真を選別するために部屋へと入っていった。

その様子を見ていた翼達が、俺へ飲み物を差し入れてくれたのだ。

「とりあえずこれで終了らしいですよ」

「らしいね。あー疲れた…」

綾奈の言葉に溜め息と共に背伸びする。

これも貴重な経験と言えば経験だろうが…。やはり出来れば二度と経験したくないと思ってしまった。

「協力に感謝します」

薫が無表情ながらも感謝の言葉を述べて、秋月さん達のいる部屋へと飲み物を運んでいく。

そういえば。写真を撮ったのはいいが、どのようなファッション雑誌に掲載されるのだろうか。

あの多種多様な衣装からして、掲載されるのは秋物特集の数ページの中の極一部分だけだろうが、それでも自分が女性ファッション誌に載るのは嫌だ。

当然の事ながら、俺の名前を伏せるなどして素性がバレないようにしてもらいたい。

そんな事を考えていると、その不安を感じ取ったのか。翼が俺の肩をポンポンと叩いてこう言った。

「心配しなくても、あの薫だって一度もバレてないんだから大丈夫だって」

「……は？」

その言葉に首を傾げる。

（薫が？バれてないって…モデル経験があって尚且つそれが雑誌で掲載されてるって事か…？）

鳩が豆鉄砲喰らったような顔をしている俺に、綾奈は少し困ったような顔をして――

「秋月さんの専属モデルが、薫ちゃんのアルバイトですから」

と、そんなとんでもない驚愕の新事実を告げた。

第39話（後書き）

今回やっと薫のアルバイトの謎が判明しました。綾奈の話でアルバイトが出てきた時に、ここまで想像出来た人はいないでしょう（笑）もしかしたら、話中に秋月が出てから、予想できた人は居るかも知れませんが…。

少しでも予想外で、しかしながら“なるほどな”と思ってもらえるように出来て入れば光栄です。出来てなかったら……生温かい目で見守ってやって下さい（笑）

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス★S。」に投票です

第40話

「え！？あの薫がモデル！？」

その事実を耳にした綾奈と翼以外の者は、全員驚愕のあまり声を上げた。

確かに、普段は不釣り合いな黒縁眼鏡のせいで隠れているが、顔はかなり整っている気はしていた。だが、だからと言ってあの何が起こっても無表情な薫が、モデルとしてアルバイトをしていたという話は、到底信じられるものではない。

「で、でも薫さんって笑わないんじゃない？」

同性の藍璃ですら、その衝撃に動揺を隠せずにいるらしい。顔が引き攣っている。

「普段はね。でもちゃんとバイトの時は笑うよ？」

それに対して翼は、『知らなかったの？』と言わんばかりの表情だ。

「いや…モデルがバイトなんて聞いてないけど…」

そういえば以前、薫にアルバイトの事について質問した時、『基本的には延々無言で立っているだけ』だと言っていた。

なるほど。確かに基本的には立っているだけである。その説明も間違えてはいない。

だがその言い回し方からすると、薫自身もあまり人には知られたいのだろう。あの時言葉を濁した理由が、まさにそれなのだろうから。

その薫の行動に、思わず俺が失笑を溢していると――

「今日は済まなかったね。記念に何か、とも思っただが…。もし良ければ、全員の集合写真なんてどうだろう？」

部屋から出てきた秋月さんとスタッフさん達がそう申し出てくれた。

集合写真と言っても、どうやらそれも少し本格的なものとなった。みんな、各々今回の撮影でリストに上げられていた衣装の中から自由に選んで着たが、ヘアメイクまでして貰えて、特に藍璃が大はしゃぎしていた。

翔と吉良も、急遽準備された男物の衣装を身に纏い撮影に望んでいる。

普段とはまったく違う装いをして登場した時は、大いに場を沸かせてくれた。

女性をエスコートするのだからと着せられたタキシードが吉良には最高に似合わなくて、爆笑としての意味で、だが。

だが、一方の翔は不思議な事にその物腰や仕草で、不気味なほどその姿が似合っていた。

翼が『神風意外と男前じゃん』と感心するほどだったが、元神風翔としては少々複雑である。

「それじゃみんな準備出来たね？目線は気にせず好きにお喋りしたりしてくれてれば、こっちが勝手に撮影するよ」

緊張のあまり顔を強張らせている藍璃に、秋月さんは苦笑しながらカメラを構えた。

「では優ちゃんと愛の語らいを…」
「優さんに触るな。この下郎」

しかし吉良の言葉に一瞬にして反応する藍璃に、全員から笑顔が零れる。

カメラ目線でピースする者。気にせず雑談に花を咲かせている者。皆それぞれに楽しんでいる。その姿を、秋月さんやスタッフの人達も微笑ましく見守っている。

「優。感謝しています」

「ん？どうしたの？」

ふと薫が俺へと歩み寄り、小声で感謝の言葉を述べた。

「貴女は目立つ事は望まないでしょう」

本当に人の心を読めるんじゃないだろうかと思えるような言葉に、苦笑いを浮かべる。

確かに女である俺が目立つ事は苦手でもあるし、望んでもいない。だがしかし――

「友達が困ってるなら手伝うのは当たり前でしょ？」

薫が仕事が上手くいかずにやつれていた父親を――秋月さん心配していた事は確かなのだ。その心配を払拭出来るなら、それもいいだろうと思えた。

その俺の返答に、薫は一瞬呆然としたが、すぐさま立ち直り――

「心遣い感謝します」

そう言つて満面の笑みを浮かべた。

いつもの黒縁眼鏡もなく顔がよく見える。それは初めて見る薫の笑顔。

だが今それを驚いたり、はやし立てるのは違う気がしたので、俺も静かに微笑み返す。

「お？二人で密談中？」

「何か面白い事でもあったんですか？」

「まさか百合の世界へ突入――」

「吉良さん、そのまま棺桶に足を踏み入れたいですか？」

「藍璃。すでに吉良の顔が紫色に変色しています。踏み入れるどころか、すでに逝っている可能性がありますよ」

その俺達を囲むように、みんなが集まる。

そして響き渡る最後のシャッター音。

こうして、俺達の集合写真撮影は終わりを告げたのだった。

その一週間後。

写真が掲載されたらしいファッション雑誌を、秋月さんが記念に

と送ってくれたらしく、薫が全員を集めて販売よりも先立って手渡ししてくれた。

その雑誌は、書店でよく見かけるファッション雑誌のひとつだった。

しかし秋物特集と題打ったページ紹介は表紙ではなく、皆で首を捻っている――

「この『YOU』のオシャレ特集』って…何？」

あるページまで辿り着いた瞬間に顔が盛大に引き攣る。そこに写っていたのは紛れもない俺の写真。しかも、一部分どころか数ページに渡って特集されているではないか。

しかも――

「これって…私達も載ってますね…」

苦笑いの綾奈が指差した先には、俺達全員の集合写真まであった。慌てて薫に秋月さんに連絡を取ってもらったところ、『クライアントが写真をえらく気に入ったらしく、記事の内容を差し替えたようだね』と笑って言われてしまった。

さらに『また仕事を頼みたいと言って来てるんだが…』という戯けた誘いを熱烈に拒否して、呆然と立ち尽くす俺に対して――

「優。貴女はこの雑誌の発売日には校内どころか全国区ですね」

最後の集合写真の中では笑顔を浮かべている薫が、『予想外です』と言いながらもいつも通りの無表情さでそう告げるのであった…。

第40話（後書き）

題名、一回ごとにあった方が良さげですね（ええ）

次回から元に戻すようにしよう。うん。

今回の薫のお話はどうだったでしょうか？楽しんでいただけたなら幸いです。

次回はいよいよ第二部では最後（の予定）のお話！

夏休み最後のお話として、みんなで海へ出掛けます。そこで巻き起こるドタバタコメディ！どうぞ、お楽しみ下さい。

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス★S。」に投票です

第41話：檻の中のパンダ…のような少女達

眼前に広がる青い海。照りつける太陽。

そう。俺達は、八月に入り丁度遊びに行くには良いシーズンを迎えたので、吉良発案で少し遠方の海へ一泊二日の旅行に出掛けたのだ。

そしてその初日。早朝から出掛けた甲斐があり、つい先程、お昼前に現地へ到着したのだが――

「……帰っていいですか」

海の家にある更衣室で、各自手渡された水着に着替え終えて、その間に荷物の管理を任せた男連中の元へと戻る途中。

白の無地でリボンとパイピングが施されたワンピース水着を身に纏い、お疲れ顔の俺が溜め息交じりに言う。

「大丈夫大丈夫。まさかあの“YOU”が、こんな海に遊びに来ているなんて、誰も思わないって」

上は青のワイヤー入りのプッシュアップブラ。そしてボクサーショーツの上にデニムショートパンツをオシャレに着飾っている翼が笑う。

部活動で鍛えているからだろうか。そのプロポーションはこの中で一番良いように思える。

「うん。いいよね。人の目を気にしない翼って。ある意味カッコイイよ」

そんな翼の慰めらしき言葉に、遠くを見つめつつ答える。

この疲れの元凶である、あのファッション雑誌が発売されてすでに数日が経過した。

もつとも。今回水着と宿泊施設等のお金は、すべてその時に秋月さんから薫經由でみんなに手渡されたものだったりするのだが……。どうもあのファッション雑誌は女性専門誌の中でも、なかなかの部数を売り上げているモノらしく、その効果は想像絶するものだった。

た。

街を歩けば、雑誌を見た女性とにかく声を掛けられる。

モデルの先輩である薫のアドバイス通り、知らぬ存ぜぬで誤魔化してはいるものの、ブロンドのセミロングの髪と言う少々違った容姿が災いして、誤魔化しきれない事も多々あった。

ましてや、誰かがその場で俺の名前を呼ぼうものなら即バレである。

“優”と“YOU”なんて所詮文字上の違いであって、発音上はなんら変わりが無いのだから。

いつそ髪を黒く染めようかとも思ったが――

「髪を染めるという行為は、キャラの設定を変える行為に当たります。つまりは、それで固定されている貴女が、それを皆の面前で行なえば、色がまったく変わらないという有り得ない現象により今後の生活に支障をきたすでしょう」

翔のこの言葉で、その確実な逃げ道は失われてしまった。

当然、事情を知らない皆には染める事を薦められたりもしたが『髪を染める事はしたくない』と断った。

そして、その結果出た結論が――

「でもみんなが忘れるまで我慢するしかないですよね……」

人の噂もなんとやら。

可愛らしい淡いピンク色のワンピースに、パレオを羽織っている綾奈が溜め息混じりに言う。

しかし、今はまさに知名度の絶頂期である。

さらに性質が悪いのが、俺と普段から行動を共にする全員の写真が載ってしまったということだ。これでみんながいるこの現状で、他人の空似なんていう言い逃れは出来ない。

その結果、噂が噂を呼んでいるようで、本来その雑誌を見ていない男女までもが『雑誌に載ってる子がいる』という話を聞きつけて集まり始めた。

「でもさすがにこれはちょっと……」

俺とは違った花柄のワンピース水着を着ている藍璃が困惑気味に言う。

「珍獣扱いですね」

そしてその言葉に、ビキニの上にサンセットタンクを着た薫が続く。

「ま、水着姿だからっていうのもあるだろうけど」

翼が快活に笑う。確かに、総じてここにいる皆は人の目を惹くぐらしいの魅力はあるように思える。しかし、彼女はその視線の中に、自分も含まれている事を理解しているのだろうか。

さすがに、ずっとこのまま放置しておく訳にはいかない。人ごみに紛れてナンパされる可能性だってあるはずだ。俺が男のままで偶然ここで会ったならナンパしたいと思うはずだ。

翼はいざとなれば得意の蹴り技があるだろうし、藍璃もその拳と口の悪さで世界を狙えそうなので、大丈夫だろう。

薫も……相手に再起不能レベルの精神的ダメージを与えるだろうから心配はないだろうが…。

綾奈は万が一にでも一人になると、そのまま何処かへ連れ去られそうな気がする。

「薫。何かいい手段はないの？」

こういった時には、ご意見番である薫の意見を聞くのが一番だ。

薫はその問いかけに、指を口元へ添えて暫くの間黙考すると――

「ひとつ妙案があります」

そう言って、翔と吉良が待つ場所へと向った。

第41話：檻の中のパンダ…のような少女達（後書き）

いよいよ始まりました！第二部最後の海編です。

今回のお話は10話編成ですので、普段の二話分の量でお送りします（予定）

それとこの度、皆様のおかげで、二万というアクセス数に達しました。もう感激で、なんと言葉を尽くせばいいのか分からないぐらいに嬉しいです。読んで下さって、本当にありがとうございます！何かリクエストが御座いましたらどうぞ仰ってくださいね。一万ヒツトの分も考えながらも、誰の話をするべきか迷っている状態ですので…orz

しかし、微妙に何をどうリクすればいい分からない内容の小説打ってる気がするのなぜでしょう（駄目作者／あ）読者様に謝罪。ゴメンナサイorz

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス＊S。」に投票です

第42話 友達以上恋人未満ではある少女

「翔、お待たせ！」

息を弾ませながら全員分の飲み物を手にして翔へと駆け寄ると、微笑みその腕に自分の腕を絡ませる俺。

「いいですよ。それもまたデートの時間ですから」

そんな俺を見て、手にしている飲み物を半分受け取り、爽やかな笑みで答える翔。

その光景に、周りにいた男達が溜め息混じりに散っていく。その姿を横目に流し見つつ、俺と翔は腕を組んだまま、みんなが待つ場所へと歩を進める。

そして――

「優さん」

厳かに翔が俺の名を呼ぶ。

「なーに？翔」

それを満面の笑みで答える。

「優さんは男性ですね」

「そうだな」

「…………泣いていいですか？」

「好きなだけ」

悲痛そうな微笑みを浮かべる翔を、慰めるかのようにその肩を叩く。
「ちなみに俺は、先程の自分の言動を省みて吐き気をもようしてきた」

「そうですか」

「…………泣いていいか？」

「好きなだけ」

まったく同じような会話をして、先程とはまったく逆の言葉を掛け合う。そして今度は俺が翔に肩を叩かれる。

「ははははは」

「あはははは」

そして俺達は、お互いに不気味な笑い声を上げながら心の中で咽び泣く。

恋人同士とは言い難い雰囲気のはずだが、なぜか入り込む余地がまったく見えない、ある意味一線を凌駕してしまった二人に、周りの人間も俺への声掛けを諦めて立ち去っていく。

薫の案は見事成功してはいるが、こちらの精神的ダメージが凄まじい。このままでは海において、一生モノのトラウマになりそうだが、否、すでにトラウマだろう。今晚あたりうなされそうである。

「優は演技も完璧ですね」

その様子を見ていた薫が満足気に頷く。

しかしこれが完璧な恋人同士に見えるなら、世の恋人達は、常に嘆き哀しみ、今この瞬間ですら『いつそ地球よ滅んでしまえ』と祈っているような、バイオレンスな関係の上に成り立つ存在になっってしまう。嫌過ぎる。

「そついえば他のみんなは？」

絡ませていた腕を離すと、気を取り直してその場にいない皆の居場所を問う。

「……………」

その問いかけに、薫は黙って人差し指で海の方角を指し示す。

そこには――

「ほーら。そんなに下から水着姿を見たいなら、埋もれたまま満ち潮までいたらいい。運が良ければ上を誰かが通るかも知れないから」

「いやいや！？それって確実に、俺の顔も海水の中にありますから！？」

「いつそ逆方向で埋めてみるとか……」

「いやいやいや！？藍璃ちゃん、それってただの生き埋めだよね！？」

「いえ。てつきり満ち潮まで待つぐらいなら、ひと思いに死を選ばれるかと思って……」

「え、俺にあるのって死の選択肢のみ！？生きる選択肢は！？」

「残念ながら……」

「そうやって笑顔で埋めてる姿を見たら、まったく残念そうに見える
ませんよねえ！？」

何処かで見たとような光景が広がっていた。

「……薫。説明をお願い」

以前と同様に、げんなりした表情で薫に状況説明の求める。すると、
薫も以前と同じように『わかりました』と頷き、事の顛末を話し始
めた。

「吉良耕介が綾奈の恋人役としてビーチバレーで遊戯中、ヘッドス
ライディングを行いパレオの中を覗き見しました」

「……………」

道理で綾奈が止めもせず、涙目になっているわけだ。

どうやら俺達は、一番身近な危険人物の存在を忘れてしまっていた
らしい。

「翼、藍璃」

さすがにその場から離れていたため、駆け寄って二人の肩を叩く。

「優、お疲れー」

「どうでした？お兄ちゃん役に立ちました？」

「ん、まあとりあえず大丈夫だと思っよ」

先程の事を思い出し、苦笑しながらも答える。

「で？吉良君は反省したの？」

出来れば話を逸らしたい俺は屈み込み、顔だけを残して砂に埋まっ
た吉良に話しかける。

すると吉良は至福の時だと言わんばかりに、だらしなく頬を緩める。
「うん。優ちゃんの水着姿をこのアングルで見れて幸せ」

その瞬間。

その意味を理解した俺は、片手で体を支えながら足の指に力を込め
て前蹴りを。

その右に位置する藍璃が。

左に位置する翼が。

下段蹴り——つまりはローキックで砂で固定された吉良の頭を打ち抜く。

「三方向同時攻撃はシャレにならなぶべらっ!？」

三方向から同時攻撃により、衝撃が逃げることなく完璧に伝わった吉良は、一瞬にして意識を手放す。

「良い旅を、です……」

さすがの綾奈も、今回ばかりは助け舟を出す気になれないらしい。神妙そうな顔つきで、そっと手を添えて拝んでいた。

第42話 友達以上恋人未満ではある少女（後書き）

やはり小説を打つ、という事は難しいものですね。最近、しみじみとそんな事を考えております。

今回のお話は……今まで築き上げた仲間の絆の総仕上げ？のような気がする！……ような気もしないでもない。いあ、ホント脊髄反射で執筆してゴメンナサイorz

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス*」に投票です

第43話 真実とは常に残酷なものである

海の藻屑と消えかけた吉良を仕方なく引き上げて、皆で少し遅いお昼ご飯を食べて浜辺を歩きながら、藍璃が言った。

「そういえば。さっきナンパしてきた人が言ってたんですけど、今日夜にここで花火大会もあるらしいですよ」

「へー…。花火大会か…」

辺りを見渡してみる。そう言われてみれば、やけに家族連れが多い気がする。俺自身、それほど海へ遊び来た経験が無いため人の混み具合なんてものは分からないが…。

「お？その前に夕方ぐらいからモデル事務所が開催する美人コンテストもあるんだってさ」

翼が視線の先にあるお祭りのチラシを指差す。そこには『浴衣美人コンテスト』と書かれてあった。こういった海で行なわれるコンテストだ。てっきり水着美女コンテストかと思ったが、どうやら違っていたらしい。

「そうなんだよね…。水着じゃないんだよね。この企画を積極的だった事務所のモデルの奴が駄目だと言ってたらしいよ。せっかく水着なら審査にかこつけて色々エロいポーズを要求すべらっ!？」

吉良が言い終わる前に、翼の上段回し蹴りが炸裂する。

いい加減、吉良もその欲望を素直に言葉にするのも、色々問題があるという事を理解しないのだろうか。まったくもって懲りない男だ。そんな時――

「吉良さん」

ふと見知らぬ少し年配の男達数人が、吉良の名前を呼んで近づいてきた。

誰か知っている人だろうか、みんなに確認の視線を送ってみても、誰も知らないらしく全員が首を横に振る。

「あ、どうも。この度は宜しくお願ひしますね」

「いえいえ。こちらこそ。地域活性化へのご協力感謝します」

そんな一同の疑問をそっちのけで、すぐさま復活した吉良が紳士的な対応でその人達を向い入れ、穏やかなムードでその人達と挨拶がたらに握手を交わす。

地域活性化という言葉から察するに、地元の人達だろうか。とりあえず、吉良が犯罪者として捕らえられる様子は無いので一安心だが、「花火大会という新たな地域活性化への試みですが、どうやら無事成功したよう我々一同ほっと胸を撫で下ろしておりますよ。これもひとえに企画を持ちかけてくれた吉良君のおかげですよ」

「いえいえ、何を仰いますやら。すべては皆様の頑張りのご協力があつての賜物です」

驚いた事にこの花火大会は吉良発案らしい。どうやら、あの吉良が地域活性化へ一役買ったようである。

特別、金銭的な報酬はなく、吉良自身もまたそれを要求したりはしていないようだ。よほど盛況なのか『ほんの気持ち程度ですが…』と手渡された封筒も、吉良は紳士的に断っている。

「しかし、わざわざ時間を割いてまで来て頂いたわけですし…。その時間分の報酬はお渡ししない訳には…」

「いえ。地域活性化という素晴らしい目的の元、そのお手伝いを出来たのなら光栄ですよ」

そう言つて、去りゆく地元の方々の背を吉良は爽やかに見送った。ちなみに。その後ろでは、普段の馬鹿な吉良からでは考えられないような、その言動の数々を目の前にして茫然自失気味に全員が立ち尽くしていたりする。

「な、何今の？地球最後の日？」

「理解不能です」

全員が未だに信じられないモノでも見たかのような表情だ。

しかし当の本人の吉良は――

「ごめんごめん。別に自慢する気じゃないけどさ。当日は何が起こるか分からないから泊り込みの方が都合いいだろ？せっかく旅館も

海に近い場所の準備してくれるって言うから、みんなどうかな、と思っただけだよ」

爽やかだ。不気味なほど爽やかだ。今なら、俺が現翔に変化した時の家族の心境が分かる気がする。全員が輪になって『あれは偽者だろうか』や『頭打って記憶障害が…』といった、何処かで聞いた事があるような会話をしている。

確かに、今回ここへ遊びに行く事を提案したのは吉良だ。実は、旅館の宿泊代が格別に安かったので、また良からぬ事でもしたんじゃないかと少し疑っていたりもしていたのだが――

「でもタダっていうのは、さ。さすがに…良心の呵責って言うの？悪い気がしたから断った。ごめん。黙ってた」

それがどうだろうか？このどこまでも紳士的な態度は。

俺達は先程までの自分の行いを恥じた。ただ、遊ぶ事だけを考えていた俺達とは違って、吉良は吉良なりに見知らぬ人達のために精一杯頑張っていたのだ。

そして今。吉良はそれを咎める事無く、俺達へ頭を下げている。

「出来ればみんなには、そういうの抜きにして楽しんでもらいたかったんだけど…。ごめん。心配だし俺、様子見てくるよ」

「う、ううん！？全然構わないです！私に出来る事なら何でも言うて下さいね！？」

「そっだよ！お前が頑張ってるのに、私達だけで遊ぶなんて…。何でも手伝うから！」

「…まだ許した訳じゃないですけど。今回は立派な事されてると思いますから、何かあれば手伝いますよ」

綾奈と翼。そして藍璃が、吉良に手伝いを申し出る。勿論、残る俺を含むメンバーも同じ思いだ。賛同するように頷く。

「みんな…ありがとう。それじゃ。また後で」

そう言っただけ振り、吉良は先程の人達の後を追うようにその場から姿を消した。

「…なんだよ。普段はふざけ過ぎてるだけで、ホントはいい奴なん

だな。吉良って」

「そうだね…私も知らなかったけど」

翼の呟きに、俺が苦笑いしつつ答える。

吉良本人は知らないが。俺は一年の頃からの付き合いだが、ああいった一面があるというのは今日始めて知った。

意外と言えば今でも信じられないぐらい意外だ。

「吉良君を探して、私達も何か手伝いませんか？」

「綾奈の意見に同意します」

「こうなったらとことん手伝ってやろう！」

（吉良…。馬鹿の汚名返上だな）

心の中でそう呟く。

そして、全員が吉良を探すため走り出そうとした——まさにその時、それまで黙っていた翔が、張られてある花火大会のチラシを凝視しつつ、そこに書かれた文面を口にした。

「しかしそうになると、この『ファッション雑誌のモデルで有名な“YOU”達も参加！』というのは貴女方の事ですよね。間違いなく」

そして俺達は走り出す。

……………吉良をとことん蹴り倒すために。

第43話 真実とは常に残酷なものである（後書き）

誰か助けてください（挨拶）

後書きのネタすらも捻り出せない作者は駄目ですか。そうですか。

r z

最近、話の内容に節操が無くなってきているような気がして、危機感を抱いております。少しでも多くの読者様に楽しんで貰えるためにもっと頑張りたいものです。

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第44話 冗談と上段との違いは歴然である

あれから数時間後。日もそろそろ暮れ始めた頃。

「第一回浴衣美人コンテストの始まりです！」

いつの間にか建てられたコンテスト会場で、高々に吉良の声が響き渡った。

「おかしい……。波打ち際に埋めた筈なのにどうしてアイツは生きてるんだ……？」

「吉良君、だからでしょうか……？」

「理解不能です」

特設ステージの脇で、仲良し三人組が頂垂れている。

あの後。すぐさま吉良を見つけ出し蹴り倒した後、そのまま再び波打ち際に埋めて来たにも関わらず、舞台上で挨拶する吉良はなぜかいつにも増して元気だ。

「しかし残念ながら、旅館を激安で提供してもらった上での条件のようなものですからね」

まるで他人事のように……。いや、実際他人事なのだろうが。舞台設置での手伝いを終えて、あとは見守るだけになった翔は余裕そうである。

「馬鹿兄は少し黙ってて」

そんな兄の姿を、藍璃がちよっと本気の殺意が籠った目で睨みつける。どうも藍璃も、最近ではこのメンバー内では、猫かぶる事をしていないようになったようだ。言動に容赦が無い。

勿論、その一番の原因は吉良の存在なのだろう。

「……絶対殺す」

しかしながら、それには触れない方が良さそうな気がする。ぶつぶつと物騒な言葉を呟く藍璃から、さり気なく少し距離を取る。

それにしても、一番驚いたのはやはり――

「優ちゃん」

審査員席でにこやかに手を振る霧島の存在。

主催者であるモデル事務所が、霧島が所属している事務所であったため、今回、特別審査員として参加しているらしい。

何を隠そう、この浴衣美人コンテストは、事務所の稼ぎ頭である霧島が吉良の持ち掛けた提案を、会社側に押し通した事により実現したらしいのだから驚きだ。

夏休み前の剣道部での一件以来、あれほど熱心だった女遊びは控えて、真面目にモデル業を頑張っているとは薫から聞いていたが……。もしやその時のお礼参りのつもりだろうか。しかし、今回のコンテストはモデルの新人発掘も兼ねているそうだが、俺は別にモデル業に興味は無いし、落選した所で痛くも痒くも無い。

さらにはこの場で貶されようものなら、“YOU”としての人気度も下がり、悩みの種は消えてなくなり万々歳。まさに願ったり叶ったりである。

「霧島君って以前より雰囲気良くなりましたね。不特定多数の女の子達と遊ぶのも止めたらしいですし」

怪訝そうな表情を浮かべる俺に、綾奈が声を掛けてきた。

「クラスも違うし、噂程度でしか知らないけど……。それならそれでいいんじゃないかな？」

元々仲が良かった訳ではないし、特別思い入れがある相手でもない。周りから見ても、良い印象になっていいるならそれでいいだろう。そう思っ、綾奈の言葉に適当に相槌を打つ。

綾奈も、そんな俺に対して一言だけ。『そうですね』とだけ笑って相槌を打ってくれた。

「エントリーナンバー九番！その赤い浴衣よりも、返り血で赤く染まった道着の方が似合ってる。敵はただただ殲滅あるのみ。空手部エースは伊達じゃない！悟技翼の登場だぶら！？」

進行が続いていた吉良の持つマイクを通して、鈍器で人の側頭部

を叩きつけたかのような鈍い衝撃音が辺り一面に響き渡る。

ステージを覗き見ると、案の定、浴衣姿のまま器用に上段回し蹴りを決めた翼と、それを受けた吉良が昏倒していた。

「翼、お疲れ。どうだった？」

乱れた浴衣を直しつつ戻ってきた翼に、声をかける。

「吉良はいつもながらだけど、予想外にマトモかも。あんま変な質問とかも無かったし」

それを聞いてその場にいた全員が一安心した。あの吉良が企画したモノ。何が起こるか油断できない。

実際、コンテストの存在の事を話しているときに、水着美女を望んでいた言動もあった。しかし確かあの時――

『水着じゃないんだよね。この企画に積極的だった事務所のモデルの奴が駄目だつて言ったらしいよ』

そう言っただけだ。だとすると、その、反対した事務所のモデルの奴と言うのは、もしかして霧島なのだろうか。だが、そう考えると益々その理由が分からない。

悶々と黙考していると――

「優ちゃん？最後なんだから早く早く！」

「え？あ、うん！」

いつの間にか名前を呼ばれたらしい。なかなか出てこない俺に痺れを切らした吉良が、舞台袖まで様子を見に来ていた。

第44話 冗談と上段との違いは歴然である（後書き）

今回は後書きする事が何一つ無いorz

物凄く途中で終わっていますからね。少し更新するかどうか迷いましたが、同じ文字数ぐらいで綺麗に区切った方が読み易さも上がるでしょうね。こうさせて頂きました。勿論、読者の皆様に不評な場合は、ちゃんと二話を完璧に書き上げてから同時にアップする方法もあるので、ご意見があれば是非（苦笑）

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的小おかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス」に投票です

直投票が出来ず、わざわざネット小説のランキング画面で投票して下さった皆様には感謝！お手数かけて申し訳ないですorz

第45話 真実は小説よりも奇なり

しかし悲しいかな。以前にも話したが、突発的な行動というものには慣れていない。ましてや、その時着衣しているものが着慣れない浴衣と下駄ならば尚更だ。

そうなると必然的に――

「わっ……！？」

舞台袖から駆け出した俺は、ちょうど駆け出してすぐに蹴躓いた。そのままなんとか立ち直そうとするものの、徒労に終わり、真ん中にあるスタンドマイクに頭突きをかましてそのまま前のめりに倒れる。

「……いたたた」

静まり返る会場内。共に倒れたスタンドマイクが、俺の情けない声を拾う。周りの状況に気づき、見渡してみると全員が俺の次の一挙一動に注目しているように見える。

ふと舞台袖からの視線と、俺の視線がぶつかる。そこにいる翼達が、浴衣の裾を必死に指差していた。なぜか以前にも同じような状況に陥った事があるような気がする。

視線を上へと変えて、覗き込む吉良の様子を伺ってみる。呆然と一点を見つめている吉良。その視線を追ってみる。

そこには、片足をバタつかせてバランスをとろうとした為、盛大にはだけた裾から見えるふとももがあった。

「――っ！？」

声にならない悲鳴を上げて、慌てて姿勢を正し浴衣を両手で押さえる。何か微妙にリアクションがおかしい気はしたが、この際気にしてられない。

（大衆の面前で、こんなポ力をしてしまえば、誰でもこうなるだろう？きつとそうだ。そうに違いない！）

念仏のように自己今の言動を、脳内で正当化する。

「……可愛い」

そんな時。観客席の最前列に位置していた男が、穏やかな水面を打つ雫の様にふいに呟いた。

「やべ。すげえ可愛い……」

どこからかそんな声も聞こえた。何がそんなに凄いと言うのか。この反応か。この女のような反応が凄いと言うのか。たしかにある意味凄い。これが男の仕草だと主張しても誰も信じてくれないだろう。

「YOUちゃん可愛いー！ー！」

女性陣からも喝采が生まれる。ついには、その波紋が広がりきって場内に妙な一体感が生まれていた。拍手喝采。スタンディング・オベーションである。誰か助けて下さい。

「言葉を交わす事無く、魅了するなんて、さすが伝説のモデルYOU！皆様盛大な拍手をー！」

さらに客を煽る吉良。手元に竹刀があれば、脳天に打ち込んでやりたいぐらいだが、今は即刻この場からの戦術的撤退が最優先である。愛想笑いを浮かべつつ、そそくさとその場を急ぎ足で立ち去る。

「優。なんだかんだ言ってもファンサービスを忘れないね」

「見事です」

「お、おめでとうございます？」

舞台袖で頂垂れる俺。

別に過去は男の中の男だったと主張するつもりは無い。

だが、どうしてこう女と勘違いさせてしまうような動作ばかりになってしまうのか。まったくもって謎である。

「遺憾だ……」

本心からの呟きを洩らす。

視線の先。舞台上では、審査員達が真面目な表情で審議に入っている。こうなれば、せめて優勝しないように願うばかりだ。

（……ん？）

そんな事を考えながら見つめていた視線の先。審査員の一人であ

る霧島とふと目が合った。霧島は先程と違って、幾分か眉間にシワを寄せて不機嫌そうである。

拙い。貶す為に審査員をしたつもりで霧島がここにいるなら、不機嫌そうな表情の理由はただひとつ。俺の評価が良いという事に他ならない。

（霧島！気合だ。気合で俺の評価を落とせ！）

視線に念を込める。すると霧島は何を思ったのか、さらに不機嫌そうに顔を渋めると、俺から視線を逸らした。

「それでは優勝者の発表です！」

そしてついに迎えた運命の瞬間。

どうやら白熱した審議の結果が出たらしい。吉良が高らかに優勝者の名を宣言する。

「優勝者は、七瀬^{ななせ}汐^{しお}さんでーす！」

同時に湧き上がる喝采。そしてライトアップされた優勝者の笑顔が映える。

表彰されている優勝者へ拍手を送りつつ、俺は己の不安が杞憂だった事に安堵していた。

どうも最近、悪い方向へと物事を考えてしまう癖がついてしまったようで、ましてや『自分が優勝するかも』なんて考えを本気で抱いていたなんて、自意識過剰もいいところだ。恥ずかしい限りである。

しかし、優勝者には悪いが、優勝するなら仲良し三人組か藍璃の内の誰かだと思っていたが……。

「てつきり三人の誰かだと思ってたけど……」

鼻屑目で見ていると言われるだろうが、どうも腑に落ちない。思わず、その言葉が口に出た。

すると四人は、きよとした表情を浮かべて――

「だって私達、特別参加だから審査外にするように吉良に言っていたから」

さも当然のように言った。しかも『優は審査内だけど』と付け足して。

ひと段落過ぎて、今度は花火大会のための準備に入るみんなを尻目に、俺が女らしい言動する原因の一端は彼女達にあるのではないかと、真剣に考えてしまっていた。

第45話 真実は小説よりも奇なり（後書き）

さて。今回のお話ですが…。

まず優勝者が優じゃない。これは予想外だった読者様もいらつしやるんじゃないでしょうか？勿論、その理由については次回ぐらいから補足が入りますので、どうぞご容赦を（笑）

そしていよいよ第二部の最終話となる五話が始まります。物語は一気に動き始めます、と言えるほどの構想があるわけではないですが（苦笑）読者様に楽しんでもらえるように頑張ります。

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス*」に投票です

直投票が出来ず、わざわざネット小説のランキング画面で投票して下さった皆様には感謝！お手数かけて申し訳ないですorz

第46話 疑惑？

暗闇を引き裂くように、花火が夜空に大輪の花を咲かせている。男は言った。『好きだ』と。その男の言葉に女は頬を朱色に染めながら『私も好きです』と頷いた。

美しい色彩を放つ花火の下。こうして二人は永遠の愛を誓った。そしてその二人が愛を誓った場所で、花火が終わるまでに告白すれば永遠に結ばれる。

『……と、こんな感じの言い伝えがある』

いよいよ夜の帳があり、花火大会の開始を知らせる花火が打ち上げられてから、暫く経った時。

吉良が真剣か冗談か分からない表情で、そんな話を持ち出してきたのが、今より約30分前の出来事だ。

とある事情から、花火見学者が少ない岩場の影でぼつねんと立っている俺。

状況は激しくピンチである。それをなぜかと問われたならば。まずこの状況に陥ってしまうまでの経緯を話すでしょう。

俺は一人、夜空に咲く花火から少し離れた岩場の影で待ち人をおっていた。

薄紅色に染められた生地 of 浴衣に身を包んで静かに待っているとふとこの場所が、人目を避けるかのように立ち寄った恋人達の巣窟となっている事に気がつく。

この時点で、そこはかたなく嫌な予感を感じていた。

だが諦めきれず、悪いと思いつつも、行き交うカップルの会話を盗み聞きしてみると、まさにこの場所が吉良が言っていた世迷言のような場所である事が判明してしまった。

そうしてやっと、先程から前を行き交う目障りな恋人達が、俺に

対して白い目で向けていた理由が理解できたところである。

どうやら俺は、不本意ながらも綺麗に着せられてしまった浴衣のまま、不安げに瞳を揺らす恋する少女として認知されているらしい。しかも、すでにここに到着して30分が経過している。これでは相手に待ちぼうけをくらっているように見えなくもない。

「放って置いてみんなと合流、とはいかないんだろうな……」

ほのかに香る海岸の空気を吸い込み、溜息混じりに吐き出すと空を仰ぐ。

ここから離れられない理由は、呼び出された相手によるところが大きい。

呼び出し人は霧島京一。内容に関しては『謝りたい事がある』とのことだ。何の事かは皆目見当がつかないが、こちらとしてはコンテストの件で少々聞きたい事もあるので待ち合わせを承諾した。

しかし――

「これは新手の嫌がらせだろうか……」

ここはかなり居心地が悪い。謝りたいと言うのだから、迷信を信じてここで愛の告白といった類のものではないだろうが、嫌がらせとしては上出来である。

そんな事を悶々と考え込んでいると、いつの間にか背後に忍び込んでいた霧島が、とんとんと俺の肩を叩いた。

「そんなつもりはないよ」

「……………遅かったね」

表面上には出ないように、なんとか動揺を抑えながらも振り向きながら、俺は心の中で『しまった』と苦渋に顔を歪めた。

別に男口調を知られる事が拙いわけではないだろうが、現状で波風を立てないように過ごすには、女を演じる必要があるように思える。

たとえ本音でも、女口調で言ってしまうえば、今の女の姿である俺には違和感が無い。だが、逆にそのまま男口調で話すと、違和感が生じてしまうのだ。

気にし過ぎている面もあるだろうが、どうしても元男として敏感になってしまう。

「とりあえず、優はこの場所が嫌そうだから歩きながら話そうか」
だが、霧島は違和感を感じなかったのか。何事も無かったかのよう
に話を進めてくる。その態度に少し安堵するように、俺は霧島の
提案に微笑み返す。

「それで、話つてなに？」

「剣道部でのこと。真剣にやってる奴を馬鹿にするような発言した
事は謝る。けど、ああいったやり方は卑怯だ。優は剣道経験者だろ
う？」

海岸沿いを歩きながら、俺の問いかけに前を歩く霧島が答える。
やはりそれでも根に持っているのだろうか。その口調はいつもより
も厳しい。

「その仕返しをするために、わざわざ審査員まで名乗り出たの？」

遠回しに質問する気などない。単刀直入に質問をぶつける。

「優勝したかったか？」

「さあ？どうだろうね」

俺の返答が、よほど面白かったのか。霧島は声を押し殺しながら
も、愉快そうに肩を震わせて笑っている。

「……あれ？」

「ん？優、どうした？」

そこでふと、霧島の口調が、いつもの軽い感じが抜けた状態にな
っている事に気がつく。俺の名前を呼ぶ時も、いつの間にか呼び捨て
になっているではないか。

「いや。優ちゃんじゃなくて優って呼ぶんだな、と思って。口調も
少しいつもと違うような気がするしさ」

素直にその疑問を口にする。嫌なわけじゃないが、そうなってい
る理由が気になったのだ。

少し驚いたような表情を浮かべる俺に対して、霧島はすぐさま破
顔すると――

「別に？本当はこっちの方が楽だからな。……優もそうだろう？」

嬉しそうに、そう言った。

第46話 疑惑? (後書き)

話すネタがないですorz

最近、ますます迷走してる感があるので如何しようかと考え中な駄目作者でゴメンナサイ(ああ)

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。それでは。如月コウでした(礼)

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。(月1回)

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス*」に投票です

第47話 誤算と勘違い

突然過ぎる霧島のその言葉に、俺の体が一瞬強張る。

「私も？」

なんとか取り繕い、冷静を装う。確かに翼や綾奈達の前では素を出している。しかし、それは翔としてではなく、優としての話だ。

だが霧島は、俺の中の翔を見透かしているような感じがした。出来れば杞憂であって欲しいが――

「そうだな。自分を隠してる。あの三人と神風翔の前では別かも知れないけど」

やはり気づいている。

勿論、まさか俺が神風翔である日突然女になってました、なんて世迷言としかとられないような出来事までは分かってはいないだろうが……。

「本当は天然じゃなくてもっと計算高い、だろ？みんなが思っている優を演じられるぐらいだから」

霧島は振り向き、迷い無く言い切った。その言葉は疑問形ながらも、確証は無いが確信はあって断言したと言っても相違ないだろう。その瞳がそう告げている。

「……別に隠してるわけじゃないけれど。みんなが勝手に私のイメージを作り上げただけでしょ」

鈍器で頭を殴られたかのような衝撃。俺は髪を僅かに揺らしつつ視線を逸らして、吐き捨てるように呟いた。

霧島の言葉ではない。今、己が口にした言葉に、俺自身が動揺したのだ。

そうだ。俺がどうして、こんなどうしようもない状況でさえ女である事を頑なに拒み続けているか。その理由は至って簡単だったのだと、そこでようやく理解した。

『周囲からによる、自己への強制的な意識変革』

これこそが、俺が拒絶するただひとつの理由。

もしかしたら、時間さえ経てば俺はこの状況を仕方がないと受け入れていたかも知れない。今の俺が置かれている現状は、不明瞭な未来において、男で在り続けるよりも女として生きる方がこの上なく容易である。

それを理解した上でも拒んでしまう。なぜなら。まるで周りのすべての人間から、今まで翔として生きた自分の人生が無かったかのように否定されてしまっていると、どこかで感じているのだから。

“S”と呼ばれたウィルスが悪性と呼ぶ事は納得出来る。仮に『人の変身願望がパソコンという媒体を通して形を成したモノ』だとすれば、それはやはり歪な代物となっているのは確かだ。

否。元々、人の願望自体が歪な代物かも知れない。

人は対照的な変革を望む。今の自分に足りないモノ、手に入れないモノを望んだ結果なのだから。

しかし、無意識に刷り込まれた習性を、変革させる事は不可能に近い。仮に変革出来たとしても、それは現在までの記憶も変革させないと歪なモノとなるためである。

その結果。変革した世界の自分の立ち位置と、以前の自分の在り方の間にある絶対的な違いを埋められず、それを理解してくれない他者との距離を置こうとする。それが強制的に行われた変革ならば尚更だ。

ゆえに悪性。どうやら俺は、予想以上に厄介な状況に立たされていたらしい。

「だから謝るよ。ごめん」

「え？」

険しい表情のまま、押し黙る俺を見かねたのか。暫しの沈黙を破って、霧島が口を開いた。

「剣道部の件。それを忘れさせるぐらい怒らせたって事だろ？確か

に真面目にやつてる奴からすれば、ムカつく言動だった」

そう言って、霧島は静かに頭を下げる。

以前では考えられないようなほど、その紳士的な態度に少々戸惑いを感じながらも、俺は慌てて霧島に頭を上げるように促す。

だが、霧島は下げたまま――

「それと、コンテストの件も。優勝したかったようだけど、俺の一寸で優勝させなかった事も」

妙な事まで謝ってきた。

「正直、わざわざ人前でこけたりしてアピールしなくても優勝できるくせに、って腹が立って冷静に判断できなかった」

「え？ いやいやいや。私的には優勝させて欲しくなかったからちよつと良かったんだけど……」

「え？ だからあんな事したんじゃないのか？」

お互いが呆然と顔を見合わせながら、先程からの会話を思い返す。どうやら、話の内容が食い違ったまま会話が成立してしまっていた事は確かなようだ……。

「え？ なに？ ひょっとして、マジでこけたの？ あんなコントみたいな感じに？」

ああ。どうやら霧島は、俺は打算的な考えの上で、盛大にこけたと勘違いしているわけか。なるほど。確かにそうだとすれば、俺はかなり計算高い女性に見える。

「ぶ……マジかよ。あれが計算じゃなくて……あははは！」

素直に頷いた俺を見て、きょとんとしたまま瞬きを一度。そしてすぐさま腹を抱えて、霧島が笑った。

第47話 誤算と勘違い（後書き）

普通のラブコメっばいよ、俺！（何）

今回は優の気持ちに重点を置いてみました。どうだったでしょうか？それなりに納得できる理由であればいいのですが…。

次回についてはまったく考えていません。今から考えます。第二部の最終的な終わり方をどうするべきか悩んでいるところです。

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代F/Tコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第48 誤算×2

いつの間にか、二人とも歩く事を止めて話し込んでいた。

どうやら霧島は、俺がコンテストで優勝したいがために、わざとらしく蹴躓いたと勘違いしていたらしい。

確かに、モデル事務所が主催したコンテストならば、それらの業界で活躍を夢見る者からしてみれば是が非でも手にしたいチャンスだ。そのため、わざとらしい動きを見せる、あざとい女性もいた気がする。

そう考えてみれば、霧島の見解も尤もである。

だが、そういったもので優勝を勝ち取れるほど甘くない世界ではある。そういった女性に対しての評価は相当厳しかったらしい。それは勿論、俺―神風優に対しても、だ。

故意ではないと評価が高かった審査員もいれば、故意だと評価が低かった審査員もいる。そこで結局、今回のコンテストを強く押した霧島の発言が鶴の一声となった。

結論を言ってしまうえば、霧島は俺の行動を故意的だと判断したのだ。そうする事で、評価が高かった審査員も下げ、優勝候補から消えた。

「色々考えてたんだね」

そういった理由さえも審査の対象だと言うならば、優勝した女性…たしか七瀬汐さんだったかな。取り繕う事無く、自分を素直に表現していた彼女以外の優勝は考えられなかったように思える。

俺は、合点がいったと言わんばかりに両手を合わせる。

その俺の姿に、霧島は困ったように眉を顰めながら小さく笑う。

「だから天然って言われるんだらうな……」

「ん？ なにか言った？」

潮風に掻き消された霧島の独白は、俺の耳には届かなかった。

首を傾げる俺に対して、霧島は苦笑いを浮かべて、『なんでもな

い』と答える。

「でも、結果オーライ。私はモデルなんて興味が無かったから。感謝してるよ」

そう答えて破顔する。

心地良い海の香りを運ぶ風が頬を撫でた瞬間。ふと、空へと打ち上げられる花火の間隔が早まる。花火大会も終焉を迎えようとしているようだ。

「さて。それじゃ私はみんなに合流しないと」

花火を見上げながら背伸びをして、再び歩みを始める。

ただでさえ、霧島と会うから一緒にいけないと説明した時には散々な追求にあつたのだ。これで合流出来ずに旅館に戻るものなら、夜長一日延々と何をしていたのか再び追求されることは目に見えてる。

「ちょっと待つ——」

「止めて下さい！」

立ち去ろうとした俺の手首を握り締めた霧島。驚いて振り向いた瞬間に、辺り一面に響き渡った女性の甲高い声に、俺は目を丸くする。

「今の声……」

どうやら霧島も、その切迫した声に聞き覚えがあつたらしい。だが、名前や姿を思い出せるほど鮮明に思い出せない。

しかし、声色から察するに、見知らぬ顔をしておけるような状況でも無さそうだ。とりあえず今もなお聞こえてくる声の方向へと、二人で歩を進めると――

「七瀬さん!？」

小高い崖の上。三名の男性に囲まれ逃げ場を失い、言い寄られている七瀬汐の姿があつた。

「あん?んだ、てめえ」

するとすぐさま嫌悪を露わにして、にじり寄る男達。その立ち振る舞いをなんと表現すべきか。

「まさに、やられ不良キャラの王道」

そんな言葉が脳裏を掠める。

「んだと！？このアマ！」

どうやら思わず本音が洩れ出でたようだ。その言葉にさらに激昂する男達。

それでもその飄々とした表情を崩さない俺を、その場にいる七瀬汐と霧島が、半ば呆然と見つめている。

それはそうだろう。男達の体は、それなりに鍛えられているように見える。数的には同等でも、女二人に男一人のこちらの状況は極めて危険である事は明白だ。それなのに、まるで勝利を確信したかのような凜然とした態度で居続ける俺は不思議で仕方ないのだろう。

ここまでは上等である。後は――

「合図と同時に彼女の救出。花火大会の人ごみに紛れる」

「え？」

「Go！」

用件のみを霧島に告げて、七瀬汐との間を塞ぐ、相手を当身で転がせる。最悪、今の自分ではよめかせる程度かも知れないと、タ力を括つていただけに、相手が転んでくれたのはありがたい。

一方の霧島は、突然の囁きに多少の驚きがあるあつたらしいが、すぐさま我へと戻ると駆け出し、七瀬汐の腕を掴み、こちらへと引き寄せる。

男達もその行動に完全に虚を突かれたのだろう。反応し切れず、その動作を易々と見逃す。

「走って！」

すぐさま振り返り反転すると、大声で指示を飛ばす。その声に弾かれるような形で、二人が人が集まっている花火大会の会場の方向へと駆け出した。

しかし上手くいったのはここまでだった。

「てめえ！」

攻撃を加えられ、いち早くその状況に反応出来た、当身をして転

がつていた男が、立ち上がりざま反動までつけて思いっきり俺の腕を引っ張る。

コンテストの時もそうだったが、ただでさえ不慣れな下駄だ。体を勢を崩した俺は、足場が悪い事もあって、前のめりに前方へと大きく吸い寄せられる。

「——え？」

「優！」

そこで問題があったとすれば。そこは崖であつたということ。転ばないように、踏ん張ろうとしたのが間違いであつたのか。行き場を失った体は、軽々と虚空へと投げ出された。

第48 誤算×2（後書き）

第二部は動きが激しいなあ…と試みてみた。

色々な歯車が揃いつつあります。これからどうなっていくか。どうぞお楽しみを。

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法上におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス*」に投票です

第49話 少女の在り方

「……さて。霧島が早めに助けを呼んで来てくれると助かるんだけどな」

海水が滴り落ちる浴衣のまま、偶然泳ぎ着いた空洞で一人呟く。
まだ花火は続いているようで、音の後に響き渡る歓声も耳を澄ませば聞こえてくる。

落ちた際、足首を痛めたらしい。酷く痛む。先程、歯を食いしばりながら辺りを搜索してみたが外へと繋がる出口のようなものはなかった。つまり、必然的に俺はここで身動き取れない状態にいる、という訳だ。

「でもまあちようどいいか……」

少し考えようと思っていた。これまでの事。そしてこれからの事を。

みんなが立ち去ったのを確認してから砂浜に座り込むと、俺は水平線を眺めながら物思いに耽ってみる。

『女として生きる』

最近、その考えがより鮮明になつてるように思えてきた。女として過ごし始めて、すでに三ヶ月以上が経過した。

「……ふふふ。俺はこのままでいいのだろうか……？」

海へ到着した時もそうだ。普段通り、更衣室で水着へと着替える女子の面々。雑談を楽しみながら着替えている最中。

俺は一人周りを警戒しつつも、視線を極力動かさずに扉で身を隠しながら、その場で頂垂れていた。

三ヶ月以上経っているのだ。その間には当然、体育の授業等で幾度となく繰り返し行なわれていたし、その度に俺はこうして更衣室で女子と共に着替えている。

しかし。しかしだ。男として考えればそれは異常な事態だ。そんな状況に慣れてしまっている現状はどうだろうか。

翔の言うように、性別を無意識に強く願うのならば、確かに異性に恋愛感情を抱くのはもつとも適切な状況判断に基づいた答えの一つではあるのだが…。

それがそう安易に抱けるものではない訳だから、まずは“男である”という認識を持つておかないといけない。それが何事も基盤になる事は確かなのだから。

何より。俺は一生この先、女で生きていけばいいなんて簡単に割りきれるほど、諦めのいい人間じゃないからな。

そう考えると―

「…どう考えても拙いよな」

慣れてきてしまっている。

それはもう自分でも驚くほどに。

確かに、生活においての行動すべてを女として行なう事が不慣れだった時期もあった。だが、それはすでに過去形になりつつある事なのだ。

今では、家は勿論のことながら、学校でも女子更衣室で平然と着替えている自分がいる。

そして何より―

『性別を問わず恋愛してみませんか？』

翔の言葉。

空想論な上に“かもしれない”がつく可能性の話。

だが今、仮にそれが可能だとしても、両方とも俺の世界が他人の世界が交われない対角線上にある以上、どちらにも問題が生じるという事だ。

男に恋愛感情を抱く。それは世間一般的な見地からして見れば、なんら問題は無い。

なぜなら俺は、他人の世界では真正正銘の女であって、男との間に恋愛感情が生まれ、恋人となってもまったく違和感が無いからだ。

だが、俺の世界ではそれは受け入れられない。なぜなら俺は男だから。

そして女に恋愛感情を抱いた場合。男の時とまったく真逆の理由によって、片方の世界から違和感が無くなるが、もう片方の世界で違和感が生まれてしまう。

そうになると、必然的に日常生活においてのその割合によって変わってくるはずであって…。

そう考えると、今の自分の世界が果てしなく女である事に片寄ってしまったっている気がするのだ。

「……恋愛感情を抱く、か」

女であるなら、その対象は男になってしまう。

それは考えたくない事だ。

それに今こうしてそんな事を思い悩んでいる事自体が、男である事を諦める為の言い訳を考えさせられているようで気が滅入る。

何より――

「ホントに恋愛出来る運があれば、こんな所に一人でいないよなあ……」

漫画や物語の中であるならば、こんな状況だと大概が男女が二人つきりで……といったドキドキのシチュエーションなはずである。

だが、見渡す限り誰もいない。都合よく火を起こす道具も燃やす素材などある訳が無い。さらに言えば、孤島でもあるまいし、助けさえ霧島が呼べばすぐ来るだろうから、濡れた浴衣を脱いで乾かす必要性も感じない。驚くぐらいにドキドキ感が皆無である。

しかし実際はそういうものだろう、と独白し納得する。

「だが、侘しいものではあるな」

とはいえ、無茶をしたのは自分自身。言うなれば、自業自得というものだ。

霧島が頼れないほど情けない奴だったわけではない。ただ俺は基

本的に、『誰かに頼る』という行為に酷く抵抗を感じるのだ。女になつてから、尚更その気持ちが強くなつた気がする。

弱さを見せる事を嫌い。だが、他人には弱さを見せて欲しいと願うエゴ。

今、頼つてしまえば、そこに『女だから』という理由が加わつてしまふような気がして。

「女として生きるか。男を戻すために頑張るか、か」

―何をどう頑張れば。何のために頑張ればいいのだろうか？

それが一番の疑問。神凧翔は存在していて。優も存在する事が、この世界の正しい形。

では俺が男に戻る事を望めばどうなるのだろうか。叶つたらどうなるのだろうか。

そこまで考え至つて。思考がまるで、考える事を止めさせるかのように緩やかな睡魔に犯されていく。

「俺は……俺で居たいだけだけどな」

最後の呟きは、遠くで響き渡る花火と歓声にかき消された。

第49話 少女の在り方（後書き）

今回は少々真面目なお話ですね。

優としての在り方。そして翔としての在り方。コメディとしてはこんな事考える事自体変かもしれませんが（苦笑）

いよいよ第二部も次とエピソードで終わりを迎えます。どうぞお楽しみ下さいませ。

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第50話　ひと段落？

その後。無事に救出された俺は、高熱でうなされて倒れていたらしい。

らしい、と言うのは、実際に俺はその晩、一度も目を覚ます事無く次の日の朝を迎えたからである。

幸か不幸か。足首は骨には異常がなかったようで捻挫ですんだ。

熱も、朝にはすっかり引いていて、目覚めた時には周りの心配そうな視線とは裏腹に、俺は至って元気だった。

「優、あんまり動き回るなよ？」

「大丈夫だから。楽しんできてね」

翼が心配そうにこちらへと振り向くと、見送りに来た松葉杖をついている俺へと言葉を投げかける。

帰宅する時間まで元々海で遊ぶつもりだったのだが、怪我をした俺を残すのは駄目だと言って、最後までみんな譲らなかった。仕方なく翔が看護すると名乗り出てくれたおかげで、渋々ながら遊びに出掛けてくれたのだ。

「悪かったな。付き合わせて」

「構いませんよ。しかしながら、今回は少々無茶が過ぎますね」

そう言って俺を見下ろした翔の表情が、怒っている事を示すように眉を顰めている。

「どうしてあれほど迅速に貴女の居場所へと辿り着けたか知っていますか？あそこは海流の流れが激しく、岩場を削ります。あの立派な空洞を作り上げるほどにね。つまりは、水死体ならばあそこに打ち上げられる可能性が高いからです」

語気が荒い。聞けば、翔もかなり心配したと薫から聞いた。そう考えると、この言葉をいつもの戯言のように、煙に巻くような発言はするべきじゃないだろう。

「うん。だから……ごめんなさい」

松葉杖を廊下の壁に立てかけ、可能な限り頭を下げる。本気で心配させたのなら、本気で謝るしか出来ない。

「……分かって下されば構いません」

俺の考えている事を理解したのか。翔は、それ以上怒るわけでも、言及するわけでもなく口を閉じる。

玄関でじつとしていても仕方が無いので、部屋へと戻ろうと踝を返そうとした、まさにその時――

「翔様？」

玄関から訪れた客人により、呼び止められたのだった。

「優様、今回は本当に申し訳ございませんでした」

深々と頭を下げる七瀬汐。

どうやら宿泊を終えて、帰るところだったのだろう。手には大きなバツクを手にしている。その手にしている荷物を置くと、そんな謝罪と共に、霧島に頼まれたという手紙も手渡してくれた。

手渡された手紙には、あの時何も出来なかった事への謝罪が綴られている。

（何も出来ないような指示の出し方したのは俺なんだけどな……）

思わず苦笑いを浮かべる。俺が男のまま、霧島と同じ立場だったなら確かに情けない気分になってしまっただろう。無事だった今に思えば、悪い事をしてしまった。

こちらでも謝罪するべきなのだろうが……。どうやら、霧島は一足先に事務所の人間達と共に帰ってしまったようで、その姿は見当たらなかった。

「それより大丈夫でしたでしょうか？えっと……」

「汐、とお呼び下さいませ。私の方が年下ですので」

呼び方に困っていた俺に、汐が人懐っこい笑顔で微笑む。身長は一番背の低い藍璃と同じぐらいだろうか。少し黒の中に紫が入ったような髪色のツインテールが揺れて、綺麗というより清楚といった感じがする少女だ。

こうして面と向かって話していると、不思議な魅力を感じさせる。

「あ、そうなんだ。それじゃ失礼して…。汐は大丈夫だった？」

「私は大丈夫ですが……」

汐は言葉を濁し、俺の足元へ視線を一瞬移すと苦笑いを浮かべた。その苦笑が意味する事は、さすがの俺でも理解できる。

「たしかにこれじゃカツコつかないね」

汐の言葉に、こちらも苦笑いで答える。助けるつもりが、逆に心配をかけてしまうような結果だったのだ。まったく情けない話である。

「ご無事でよかったです。優しい彼氏さんに心配かけぬようにして下さいませ」

俺の手を両手で握り締めながら汐は笑うと、置かれた荷物を再び持ち上げると、頭を下げると――

「それではまた。翔様」

そう言って元気良く駆け出すと、振り返り何度も手を振りながら、玄関につけられた車に乗り込んでこの場から立ち去っていった。

その後ろ姿を見送り、部屋へと戻るため踝を返す。そこで後ろに居た、突然名前を呼ばれた事に怪訝そうな表情を浮かべている翔に気がついた。

「優しい彼氏、ね」

翔を値踏みするかのように見上げて、あからさまな溜息をつく。

そんな俺の態度に、翔は一言。

「全身全霊をかけてお断りします」

と、皮肉を返すのだった。

第50話 ひと段落？（後書き）

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス＊S。」に投票です

第二部エピローグ

乗り込んだ車は、少女が完全に座席に腰を下ろした事を確認すると、まるで示し合わせたかのように動き出した。

先程まで居たはずの旅館がどんどん遠ざかっていく。

車に乗ってしまったえば、特別気を使う必要性など皆無なのだが、汐の性分だろう。それを確認してから、ほっと一息と言わんばかりに脱力する。

そして深呼吸を数回繰り返すと、再び気合を入れ直すと運転席の男に声を掛けた。

「兵藤様。お電話をお借りできませんか？」

「……………」

少女の呼び掛けに、運転席と後部座席を区切るような、外装と同じような黒塗りの窓が開く。そこから見えるバックミラー越しには、ハンドルを握る男のサングラスが映っている。

男は無言ながらも、威圧感ある眼差しをサングラスから覗かせ、少女に携帯電話を手渡す。

少女は素早く番号を押すと、携帯電話を耳元へと添える。そして繋がった相手に対して――

「もしもし。汐です」

先程、優達と話していた時とはうって変わった、大人びた表情を伺わせて敵かに言った。

「ご本人様との接触到に成功いたしました。主観のみですが、間違いないように思えます」

「……………」

その瞬間に響き渡った、鼓膜を破壊せんが如く相手の大声に電話を耳元から離しつつ、僅かに眉を顰める。

しかしすぐさま目を伏せ、話が終えた頃を見計らって耳元へと電話を添えると、平然と――

「はい。そうかも知れませんか」

さも、今の話をすべて聞いていたかのように頷いた。

「しかしそれは……いえ。決して異論がある訳では……はい、了解致しました」

余程無茶な難癖をつけられているのだろうか。ますます、少女が眉を厳しく顰める。

そうして相手の話に耳を傾ける事数分後。

「……それでは帰宅後、手続きに入ります。大丈夫です。それぐらい私でも出来ます」

話し終えたのか。溜め息混じりに携帯電話を畳むと、少女は窓の景色に視線を移した。視線の先には、地平線の彼方まで広がる壮大な海。私用で来た時であったなら、多少は夏を満喫できたのだろうか。と邪まな考えを抱いてしまう。

しかし今頃、自宅で地団駄を踏んでいるであろう電話の相手の姿を想像して、失笑気味にそんな考えを振り解く。

「兵藤様。このまま峯^{ほうせん}苦^く高校へと向って下さい」

事前にそうなる事を予想して、彼女の友人から高校名を聞き出しておいた。

その言葉に兵藤と呼ばれた男は僅かに頷くと、手元にあるボタンのひとつを押し、再び運転席と後部座席を黒い窓で区切る。

（いつもながら不思議な殿方ですね）

その態度に、汐は困ったような笑みを浮かべた。与えられた立場上、この兵藤という男と行動を共にする機会が多いものの、未だにその心中を理解できないでいる。

とはいえ、汐の正体を知っているのは当事者と彼だけである。つまりは、現状で最も信用できる他人である事も事実だ。

だがいつまでもこの状況を周りに隠し通せる訳ではない。

だからこそ――

「同じ境遇であるはずの翔様のお力添えが必要です」

決意を秘めた瞳で、
汐は呟いた。

第二部エピローグ（後書き）

ぷらマイS。の第二部、これにて完結でございます。

ここまで執筆出来たのも、やはり読者様のおかげです。多謝！

第三部連載まで少々時間が空く事になりますが、少しの間お待ちくださいね。空く、と言っても一週間ほどだと思いますが……。

執筆中も、色々と面白くするためには課題が多々あると感じたので、第三部ではそういった部分も改善しつつ楽しめるお話作りができればな、と考えております。

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス*」に投票です

第51話 特異な変化と変わらぬ日常と

季節の移り変わりというものは、なぜいつも突然に感じるのだろうか。

暦を見れば、今日は九月一日。あれだけ騒いだ夏休みも終わりを告げた。今は、妙に懐かしさを感じさせる制服に袖を通して、ほうせん峯苦高校へ向っている最中である。

頬に感じるまだ少し暑さが残る風と、僅かに伸びたブロンドの髪が戯れる。こうしていると、夏休みのすべてがどこかの夢物語のようになってしまうから不思議だ。

もともと――

「夏休み気分で連日連夜、遅くまでネットゲームしているからそうなるんですよ」

その少女の姿には不釣り合いな前傾姿勢で歩きながら、欠伸を繰り返す俺を横目で見ていた神風翔の言葉を聞けば、詩人染みたそれがただの虚栄である事は明白だが。

「夏休みだろうが、学校だろうが普段通り過ごしてるよ。俺は」

「確かにそうでしょうね」

元々翔自身、俺が自室へと戻って寝るという最低限の約束事は守っている、それほど強く言い聞かすつもりもなかったのだろう。ささやかながらの抵抗の言葉に対して、翔は説得を諦めた事を溜め息で示す。

「尤も。随分と女性として成長されてはいるようですがね」

「ふ……」

今度は翔の言葉に、俺は溜め息をついた。

日に日に女性として順応していく己の思考と行動を顧みて、少しばかり遠い目で空を仰ぐ。

「ところで……。恋愛の首尾はどうですか？海で少々進展があったように感じましたが」

その言葉に、睡眠不足とはまた別の妙な疲れを催して思わず顔を渋めた。翔が言いたい事は理解はしている。霧島との関係の事だろう。

実際、あの時黙って二人で会って密談していたと思われても仕方が無い状況であった上に、二人で居た場所が場所だ。その密談内容が、そういった事柄だと誤認させてしまうのは致し方ない事である。「そういった事柄は、まったく完璧になかった」

なにやら妙な日本語だが、俺はとにかく最大限の否定を込めてそう答えた。

この壮大な勘違いは翔だけではなく、綾奈を筆頭に暗黙の了解となっているため、不機嫌そうに答えた俺の表情を覗き見て、翔は『やれやれ』と肩を竦めて――

「……彼も報われませんね」
と、だけ呟く。

その言葉の意味を理解出来ないほど俺も馬鹿じゃない。だが、それを素直に認める事はどうにも気が引ける。

「報われない点で言えば、俺もそうだがな」

こちららも肩を竦めて軽く悪態をつく。

（だからこそ、こうして憎まれ口のひとつでも言いたくなるというもんだがな）

そんな言葉を心の中で付け足しながら。

こんな事を口にしようものなら、再び翔の言及が始まるに決まっている。ついつい俺は、なんでもかんでも思っただけを口にしてしまっただけがあるのだが、黙っている事も時には必要だと

最近切に感じる。

「ちなみに。貴女がのんびりしているせいか、少々時刻が報われないう状況になりつつありますが」

まるで俺の考えを見透かしたかのように翔は目を細め、呆れたように腕時計を指差した。どうやらいつの間にか、走ればなんとか遅刻せずに済むほどに切迫しているようだ。

「いつてらっしゃい」

しかしこのまま登校すると少々面倒な事になるので、爽やかに翔を見送ることにする。

「いや。いつてらっしゃいではなくて、貴女も走らないと遅刻ですよ」

すると、当然意味が分からず翔から疑問の声が上がる。

しかし――

「お前と一緒に登校して、またあらぬ噂の渦中に晒される事よりもマシだ」

「……なるほど。それでは先に失礼致しますよ」

俺の真面目かつ簡潔な説明に、翔は素直に頷いた。

どうやら翔自身、そういった噂の渦中に晒されたという自覚はあるらしい。

それはそうだろう。吉良が創設した、妙なファンクラブのブラックリストの最前列に名を連ねているのだから。翔は翔なりに苦労しているようだ。

「さて。俺もそろそろ行くとするか」

翔がこちらを見ていない事を確認して、細い路地へと視線を移す。翔には悪いが、俺は常に『如何に貴重な睡眠時間を増やせるか』を追求していた自堕落的な男子学生だった。通常の通学路の他に、最短ルートというものもすでに開拓済みだったりする。

慣れない体にスカートでは、少々都合が悪い場所だったりするので今まで使用は控えていたが。今となつては多少の体力面に不安はあるものの、時間内には難なく走破出来るだろう。

そこまで考え至つて、ふと無意識ながらも男であつた過去の実績と、現在女である現状を照らし合わせて冷静に物事を考えてしまつている自分に気づく。

「なんだかな……」

もう一度振り返り、走り去る翔の背中を見送りながら自分が置かれている有り得ない状況を再認識して、俺は苦笑いを浮かべるので

あつた。

空を見上げれば、夏の微熱を残したままの太陽が忌々しげに輝いている。

今日から二学期。

特異な変化はあつたものの、特別変化も無い日常を過ごすために、その日差しを掲げた手で遮り駆け出す。

そして、女性となった俺の一日が始まる――。

第51話 特異な変化と変わらぬ日常と（後書き）

お待たせ致しました！

ぶらマイS。第三部いよいよ開始でございます。

お話としてはかなり動きがあるように思いますので、矛盾のないように頑張ります；；

色々とまだまだ思案中なので、どうなっていくのやら。私自身も分かりません。

どうなっていくか？どうぞ皆様お楽しみ下さいませ。

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス* S。」に投票です

第52話 少女+お菓子+チャイム

「ふしゃー……!!」

「……………」

はてさて。あれから数分後しか経っていないはずのこの状況を説明する事が、これほど困難を極めるものになるとは誰が予想できただろうか。

通学路から外れた最短ルート上にある平凡な公園の一角。

通常なら一分も掛からず通り過ぎるだけの公園のはずだが、俺はちよつとした小動物の妨害により通れずにいる。

「がるるる………」

威嚇するが如く唸っている。それに対して先程からずっと、どうしたものかと頭を悩ませているのだ。その、小動物と称した存在が本当に獣の類であつたならば、そう頭を悩ませる必要など皆無なのだろうが。

残念ながら、小柄ながらも精一杯威嚇の唸り声を上げ続けているのは、その声や姿からには似つかわしくない、少女そのものなのだ。そのツインテールで美しいブロンドの髪を靡かせながら唸る姿は、些か迫力に欠けている。

とりあえず――

「えーと。どうして唸ってるの？何か悪い事したっけ？」

「がるるるる」

対話を試みてみるが失敗。先程からの態度からして、予想通りと言えは予想通りである。

しかしながら、こうも目の前の少女を怒らせている心当たりが無いのだ。

偶然今日。久方ぶりに訪れた公園で。さらに、遅刻寸前の状況下において、見知らぬ少女の神経を逆撫するような言動は起こす暇もなければ、する余裕なんてあるわけが無い。

とにかく今の最優先事項は、遅刻せずに学校へと辿り着く事。そのためにも少女の妨害を排除しなければならない。実力行使という手段もあるが、背丈から見て中学生らしき少女に対して行うには気が引ける。

そうなれば対話が無理ならば、物で釣るしかない。鞆に学校で小腹が空いた時にでもと思っけて入れていたお菓子を手に取り、差し出す。

「……お菓子食べる？」

「ご馳走様」

「早っ！？もう食べたの！？」

まさに電光石火。差し出されたお菓子を一瞬にしてはおぼると、少女は幾分か満足気に初めて言葉を発した。

「ボクを餌付けしようなんていい度胸だね」

少なくとも、差し出されたお菓子を有無も言わず奪い取った人間の台詞ではない。

しかしながら、凜然と仁王立ちする少女の姿は、幼いながらもある種の風格を感じさせているが――

「……とりあえず。お菓子食べる？」

「ん、食べる」

妙に素直な所もあるらしい。嬉しそうに手渡されたスナック菓子を頬張る姿はリスを連想させた。

「で？学校はどうしたの？」

時計を覗き見てみれば、すでに遅刻は免れない時刻を示している。俺自身もそうだが、少女だって学生服を着ている以上、同じ立場にいる事は間違いないだろう。

だが、その問いかけへの少女の返答は至って完結だった。

「道がわからない」

話を聞いてみたところ、どうやら少女は転校生として転校先の高校を探して、さ迷い歩いていたらしい。

その風貌で、俺と同じ高校生という事実に驚きを隠せずにいると

「お前。またボクの身体的問題に関して失礼な事考えたろ？」

髪を左右に括っているリボンが、センサーのようにパタパタと動く。どうにも、少女はそういった視線には敏感のようだ。

しかし、その大きな瞳を半目して睨みつけられたところで、やはり怖いという感情よりも子供を相手しているような気分が先立ってしまったて、思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「ごめんごめん。もしかして、それで怒ってたの？」

そういえば、最初から俺は少女を中学生かそれ以下だと思って対応していた。

少女はそれを察して、ずっと威嚇…と言うべきかどうかは判断に困るが。とにかく怒っていたのかも知れない。

「そもそもどうしてボクが子供に見られないと駄目なのさ？」

不可解だ、と言わんばかりに肩を竦め、やれやれと溜め息をつく眼前の少女。

「……お菓子食べる？」

「ん、食べる」

再び警戒心を解き、差し出されたお菓子を嬉しそうに頬張る少女。
(どう考えてもこれが原因なんじゃ……)

そんな姿を見つめながら、困ったような笑みを浮かべる。

それにしても、遅刻は免れないので諦めるとして、このままこの少女を放置して自分一人登校なんて後味が悪い気がする。

「仕方が無い、か」

「ん？」

俺の独り言に、少女が反応して首を傾げている。

「とりあえず……どこの学校に行こうとしてるの？」

お菓子をまだ食べている途中なのか。少女はその問いかけに一瞬顔を顰めたが、再び警戒心を解くと――

「^{ほうせん}峯^{ほうせん}苦^{ほうせん}高校」

俺の制服に描かれた^{ほうせん}峯^{ほうせん}苦^{ほうせん}高校の校章には目もくれずに言い切った。

遠方から聞こえるその^{ほうせん}峯^{ほう}苦^{せん}高校のチャイムが鳴り響く。

「……あ、そう」

俺はそのチャイムをどこか遠くに聞きながら、一人呟いた。

……最初っからそれを言ってよ、と。

第52話 少女＋お菓子＋チャイム（後書き）

さて。新キャラの登場です。

今回は、第三部の最初の五話という事で、あまりここで話し過ぎると駄目なので、コメントは控えさせていただきます（え）

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス＊S。」に投票です

第53話 転校生はお嬢様

なんとか迷子の少女を無事に職員室まで送り届け、久方ぶりに訪れた登校日以来の教室では、なぜか遅れている始業式までの間、皆が談笑していて悲喜交々の声が飛び交っていた。

皆それぞれの夏休みを満喫したようで、その自慢話や笑い話に華を咲かせているようだ。夏休みほどの長期休暇となれば、各自の体験談もきつと多種多様なだろう。

その一方。俺はというと――

「優、いつの間にモデルなんかになってたの!？」

その中でも一際大きな人だかりの中心で、苦笑いと愛想笑いを足して二で割ったような複雑な表情を浮かべていた。

自分の中ではそろそろ記憶が薄れ始めていた事だが、夏休み中に偶然雑誌を見かけたクラスメイト達からしてみれば、これほど興味が沸く出来事はないらしい。皆、興味津々で瞳を輝かせている。

モデルに興味がある訳でもないのに、本来ならばある程度の事実を述べて、煙に巻くような言葉を付け足せば終わるような話題である。

だがしかし。答えに窮しているのは、些か複雑な理由があるのだ。「あの秋月さんに写真撮ってもらえるなんて羨まし過ぎるよねー」女子の一人がうわ言の様に呟く。

そしてその言葉に触発されるかのように、もう一人の女生徒が己の疑問と、俺にとっては些か複雑な理由である要因を口にした。

「どうやって知り合えたの? やっぱリスカウトされたの?」

つまりはそういう事だ。

クラスメイト達は、秋月さんが薫の父親である事を知らない。ましてや薫が、証拠品と言わんばかり机に置かれた雑誌の最後のペー

ジ。その最後を飾っている集合写真に写っている少女だとは思ってもしていない。

「翼も綾奈も羨ましい。やっぱりKAKO^{カコ}って可愛いかった？」

「そりゃもう」

「可愛い女性でしたよ」

突然のクラスメイトの問いかけに、二人が顔を見合わせて笑う。

KAKOというのは薫がモデルの時に使っている名前で、その名前に笑みが零れるのは仕方が無い事のように思える。

「……………」

ふと視線を感じて、その先を追ってみると、黒縁眼鏡を中指で押し上げながら、我関せず^{わがかんぜず}に徹していたはずの薫がこちらを睨^{にら}んでいる事に気がつく。

その視線には無表情ながらも『余計な事は思い出さなくても結構です』と、薫の無言の抗議が込められているようで、失笑してしまう。

そこへ――

「ニュースニュース！大ニュース！――やっぱりあの転校生の噂本当だつてさ」

鼻息荒く大声で叫びながら教室へと駆け込んでくる吉良。どうやら噂の真偽を確かめるために、わざわざ職員室へと足を運んでいたらしい。その手にはメモ帳が握られている。

俺達は自然と吉良中心へと輪をつくる。

「え？じゃあ本当にご令嬢で、始業式遅れてるのはその紹介の準備するためなの？」

「うん。どうやらそうらしいよ。教員連中も、随分と急だったらしく慌ててる」

俺の質問に、吉良が重々しく頷く。吉良の言う噂、というものは、今日登校した時からずっとまことしやかに囁かれ続けていた事らしい。転校生がやってくる自体、珍しいと言えば珍しい事ではあるが、その転校生がご令嬢であるというのならば珍し^{めづ}しいで片付けられる話

ではない。

自慢ではないが、この峯^{ほうせん}苦高校はどこにでもある極々普通の学生が通う一般高校だ。当然、他校に誇れるような実績がある訳でもない。少なくとも、付き添いの同年代のメイドと共に登校するような異世界基準で創立された歴史ある高校ではない。

そこへ突然『ご令嬢』だ。噂にならないはずがない。

転校生、という言葉に先程の少女を一瞬連想してしまうが、どうにもご令嬢というには程遠く感じた。そうなると、彼女が噂の付き添いのメイドとなる訳だが、それもピンと来ない話である。

「へえ？んじゃ、やっぱり始業式で転校生の紹介するんだ」

先程までの話には傍観者気味だった翼が割り込んでくる。それほど盛大に自己紹介を行うのは、本人にも逆にいい迷惑な気がしないでもないのだが……。

「本人からすれば迷惑な話ですね」

いつの間にか輪に入っていた薫が、俺の考えを代弁する。

（本当に心を読んでいるわけじゃないよな……？）

薫の言葉に思わず不安になる。どうにも薫に読まれている気がする。

もつとも、翼達から言わせればそれは俺に対してだけではなく、他人の心の機微というものを察するのは、薫は人一番聡いらしい。

「それより少し気になる事があってさ」

そんな考えを遮るように、吉良に誘導され他のクラスメイトには聞かれない場所へと移ってから、神妙な面持ちで話を続ける。

「どうやらその転校生の苗字が、二人とも七瀬っていうらしいんだけど……」

第53話 転校生はお嬢様（後書き）

さて。色々謎が多い第三部ですが、如何お過ごしでしょうか？（何
後書き書くのも一苦労しそうな内容で、まったく困ったものです。

正直まだまだ不安だらけですが、頑張って執筆いたしますので、応援宜しくお願い致します。

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス*5。」に投票です

第54話 神風翔の杞憂

「なるほど。確かに奇妙な縁ですね」

遅れていた始業式のため、体育館へと移動し終えた後。優が会ったという今朝の出来事を聞き終えて、私―神風翔は頷いた。

「情報から推測すると、彼女もまた“七瀬さん”ということになるんでしょうが…」

転校生が二人。

その内の一人は、今朝出会った少女である事は間違いない。それだけなら別に珍しいものだと言って終わる話のような気もするが、転校生は二人なのだ。

ましてや、もう一人いるという七瀬と言う苗字には聞き覚えがあるので困惑してしまう。

『それではまた』

別れ際、彼女が何気なく言い放った言葉の真意が、そこにあったような気がした。

勿論それは推測であって、七瀬汐がこの場所に転校して来たとは限らない。限らない、が…何とも言えないような予感だけはあった。優はあの瞬間、何も違和感を抱いていなかったようだ――

『翔様』

その言葉がやけに印象に残った。

最初に呼び止めた時も。最後の挨拶の然り。なぜか不自然に繰り返されたように思えた、本来ならばとるに足らないような己の呼び名。だが、七瀬汐のそれは、何かを確認するかのように思えてならなかった。

そして訪れた紹介の瞬間。全員がその容姿に目を奪われている。彼女の一挙一動に全員が溜息を漏らす。

それは私も同様で、あの時、共に海へと行った全員が驚きのあまり壇上にいる少女を見上げ、呆然と立ち尽くしていた。

「――七瀬汐と申します。皆様、宜しくお願い致します」
ななせしお

いつか見た人懐っこい笑顔で微笑む。首を傾けたため、少し黒の中に紫が入ったような髪色のツインテールが揺れる。

最後の挨拶を終え、汐が丁重にお辞儀をすると同時に湧き上がる拍手。拍手喝采とはまさにこの事だろう。特に男子連中は大歓迎のようだ。

それは私にとってはどこかで見た事がある光景。

壇上に立つ七瀬汐の姿に、誰かがかぶる。しかしそれが誰かが思い出せないでいる。

どうやら彼女の姿に、優達も汐の『それではまた』という、また会う事になる事を予感させるような別れの言葉の意味を理解したらしく、笑顔で歓迎していた。

もっとも、彼女がどこかのIT企業社長の令嬢などとはあの時は知らなかったので、驚いた事には変わりが無いようだが……。

何より驚いているのは――

「あたしは七瀬衣緒です」
ななせいお

汐の後に、マイクの前に立ち自己紹介を始めたもう一人の少女の存在だ。

「汐ちゃんとは大の仲良しで、無理を言って一緒にこの高校に転入させてもらいました」

壇上にいる少女の、汐と同じツインテールだが美しいブロンドの髪が、幼げな表情と同じように揺れてる。

それまで汐の陰に隠れていて気がつかなかったが、二人はよく似ている。それともお互いの姿を真似ているのか。遠目からでは、その姿は髪の色でしか分別出来ないだろう。

しかし、性格はその口調や仕草から察するにはつきりと違いがあるようで、衣緒と名乗る少女はその身長の高さも手伝って幼さを感じさせる。

「お姉ちゃんもいるので不安は少ないですが、皆さん宜しく願います」

「……………」

微笑み頭を下げる少女に、違和感を抱いて首を捻る。

確かに壇上に立つ少女は、伺い聞いた特徴からして優が今朝方見た少女に相違ない。しかし、絶対的に口調や仕草、果ては嫌悪していたらしい少女っぽさを前面に押し出している姿は、別人では無いかと疑ってしまうほどだ。

だが、初見に近い少女の心情など理解できるはずも無い。

ただただ形式的な紹介を行いながらも人懐っこい笑顔を振り撒く様を、私は見上げるしかなかった。

そしてここで私も見逃してしまったのだ。

彼女の言葉が意味する事を。

第54話 神風翔の杞憂（後書き）

色々考えていたら遅くなりましたorz

今回は翔の視点でのお話です。まだまだ謎は明かされません。だって、考え付いてないですからr…（ザー）

二人の少女の正体は？その目的は？

そして、最後の“言葉の意味”とは？

気になる次回をお楽しみに！

……ただ期待し過ぎると後悔するかも？（苦笑）

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス★S。」に投票です

第55話 変化

「しかし、転校生が汐だったなんて驚きだよね」

まだ夏の日差しが残る通学路を朝とは逆に進みながら、悟技翼さとうきつばきは、そう言つて快活に笑つた。

その翼の言葉に賛同するかのように、その隣の定位置を歩く菜乃なの綾奈あやなと小野寺薫おのでらかあるが頷く。

「それではまた、つてそういう意味だったんだね」
「驚きです」

その返答の仕方、いつも通りと言えはいつも通りである。綾奈はのほほんと頷き、薫は正直まったく驚いている様子が無かつたりする。

「あはは。そうだね」

その二人の様子に苦笑いを浮かべながらも、少し遅れながら後に続く神風翔へと視線をやる。どうもなにやら思案しているらしく、先程からずっと眉を顰めた状態でうんうんと唸っているのだ。

さすがに心配になり、盛り上がる三人の隣から足を遅めつつ翔の隣へと移動する。翔がこれほどまでに悩んでいる姿を見せる事は珍しいので、些か心配でもある。

「何か悩み事？」

そう言つて微笑みかける。

出来るだけ努めて明るく普段通りに声を掛けたつもりだが、どうにも気に入らなかつたらしい。翔の表情は険しい。

しかし、一瞬躊躇しながらも意を決したかのように俺の正面へと向き直すと――

「貴女はどう思いますか？ 転校生の二人を」

険しい表情を崩さぬまま、翔が小声で俺へそう告げた。

その言葉の意図する事が理解できずに、俺は真顔でこちらを見据える翔の顔をまじまじと見つめ返す。

「汐と衣緒の事か？」

「はい。ただの転校生ではないように思います」

仰々しい翔の物言いに怯みながらも、俺はその言葉の意味がよく理解出来ないでいた。

「今回の転校騒ぎは、単なるお嬢様の気まぐれによるものとは到底思えません」

「……はあ？」

どうやら翔は、彼女達が自己紹介した際に感じた正体不明の疑惑を拭いきれずにいるらしい。

『一身上の都合による転校』

それが、突然この時期に転校してきた、彼女達の口から告げられた理由。しかし翔には、どうにもその理由が腑に落ちないでいるようだ。

確かにその理由は不明瞭な説明ではあるものの、赤の他人であるはずの、ましてや全校生徒達がいる前で事細かにその理由について説明する人間なんている訳が無い。

「確かに今回が初見であるならば、そう思えるでしょうが……」

俺の意見に珍しく翔が言葉を濁す。そこまで自分の意見に疑問を感じている翔を見るのも珍しい。

「何か問題でも？」

しかし、俺がそんな心の機微を理解出来るほどできた人間ではない。煮え切らない翔に、眉を顰めて言及する。

「つまりは——」

そんな俺の態度に観念したのか。或いは、いまいち理解出来ない俺への鈍感さのせいかな。翔は大きく溜め息をついてから口を開こうとした——。

「海の出会いは偶然ではなく、この布石だったのではないか？そう

仰るんですね」

——が。その言葉は、まったく予想だになかった、いつの間にか背後から忍び寄っていた第三者の口によって告げられた。

「し、汐!？」

「はい。優様、お久しぶりでございます」

突然の闖入者に驚きを隠せずに素っ頓狂な声を上げる俺に対して、闖入者である七瀬汐は涼しい顔で挨拶を交わしてきた。

「何か御用ですか？」

「翔様。そんなに警戒なされなくても大丈夫ですよ」

そう言つて、前を歩く三人に歩み寄り挨拶を交わす。

先程の言葉に、さらに警戒心を強める翔にさえ、笑顔で対応するその姿はある種の迫力さえも感じさせる。

しかしなぜだろう?どうにも、この汐の姿を見ていると誰かを連想させるのだが…。それが誰かが分からない。

「優さん？」

そんな俺の顔を覗き込みながら、首を傾げている綾奈が視界に入る。

「あ、んと。ごめん。何？」

取り繕うかように苦笑いを浮かべた俺に、綾奈は一瞬怪訝そうな表情を浮かべたが、すぐさま微笑むと――。

「それじゃ私達はこっちですから。また明日、です」

いつの間にか別れ道に辿り着いていたらしい。

そう言つて駆け出した綾奈の姿を確認すると、その先にいるこちらに手を振る2人の姿が目映った。

「また明日、か」

いつの間にか慣れてしまった挨拶の言葉に、小さく左右に振つていた手が止まる。

そこでふと思い返してみる。

小さな自分の掌。丸みを帯びた体。それらに慣れてきた自分がい

て、それらに慣れてきた環境が今ここにある。そのすべてが、まるで自分が男であった事は妄想ではないのかと感じさせるほどの感触があった。

「さて。ではちゃんとした挨拶をさせていただきますね」

そしてその思考を途絶えさせるかのように告げられた言葉。不釣合いなほど妖艶な笑みを浮かべた少女が、俺の前へと躍り出て――。

「優様改め翔様初めまして。私は衣緒様にとっての“現翔様”と同じ立場に在る者です。以後、お見知りおきを」

その屈託のない笑顔で、上品にお辞儀をした。

「――え？」

その言葉の意味を理解出来ぬまま。

俺が搾り出すように出した掠れた声は、秋を感じさせる、少し肌寒い風に掻き消されたのだった……。

第55話 変化（後書き）

風邪で寝込んでましたorz

更新が遅れて申し訳ございません。仕事で体力を使い切り、打つ余裕が無かったです（吐血）

まだまだ本調子ではなく、更新が遅れ気味になるかも知れませんが、どうか長い目で見てやって下さいorz

さて、今回で少しだけ日常に動きがありました。

実は第一部では男としての主人公。第二部では女としての主人公を描いています。

第三部は…どちらも言えない主人公を描きたいと思っておりまして、第二部で女としての日常を読者の皆様も慣れてしまいうように描いたつもりです。なので、最後の汐の言葉に、多少の驚きを感じて貰えたなら嬉しいです。勿論、予想された読者様もいらっしゃるでしょうが…w

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代F.Tコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第56話 疑惑±疑惑

「ではここでお待ちください」

「……はあ」

「どうも」

丁重に通された居間の広大さに二人残された俺達は、呆然としつつ汐の言葉に生返事を返した。

あれから発言の真相を知るために案内されるがまま、汐の後を着いて来たまでは良かったのだが、この現実離れた状況を前に、些か呆気に取りれてしまっている。眼前に広がるのは、一戸建ての家ならそのまま入ってしまうのではないだろうかと思えるぐらいの客間と呼ばれる異次元空間。

レンガ造りのレトロな洋館。その途中には洋風庭園。それに池を中心にした和風庭園までもが配されている。おおよそ一般人である俺達には縁も無い場所である事は明白である。だがしかし……。

そんな心の葛藤を代弁するかのように、

「優様改め翔様初めまして」ですか。安易に勘違いなどでは片付けられない発言ですね」

まるで、この場にいない誰かにも伝えるような声で言った。

「以前の翔との違いに私の言動を訝しむ友人知人は今までにも存在しましたが……。貴女という存在に、翔という存在を関連付ける事は有り得ない話です」

そう語る翔の表情は陰しさを増していた。

翔の言う事は尤もではある。

親戚という存在で、その上同居している存在ともなれば、その関係について怪しまれたり要らぬ推測が飛び交ったりした事は確かにある。だが、2人の存在に疑問を感じる人間などいなかった。ましてや“優様改め翔様”といった、俺を翔として確信を持って挨拶を交わす人物など、この世に存在するはずはない。

あるとすればそれは――

「“S”について、何らかの情報を知りえてる。或いは、その被験者である可能性がありますね」

翔の言葉に、俺も静かに頷く。

「問題は、その情報がどれだけのものか、だな」

俺を“神風翔”として認知したのだ。少なからず現状では、何も分からずに日常を過ごしていた俺達よりも遥かに多くの事を知っているだろう。

そこまで考え至って。そうすると今、優として生きている自分はどうなってしまうのだろうか？そんな疑問が脳裏を霞める。

「……不安ですか？」

どうもソワソワと落ち着きが無くなってきた俺に翔が苦笑いを浮かべてそんな質問をしてきた。

今まで考えていた女としての自分の在り方。そして記憶の中で薄れかけていた男としての本当の現実。それが、今、たった一人の少女の一言で根底から覆されるような気がしている。

それを恐ろしいと感じることに少なからず驚きもあれば、少し前まで望んでいたはずのものに手が届くかも知れないと感じながらも不安を募らせる自分自身に首を捻った。

「……どうだろうな」

それらを踏まえて、精一杯の強がりど、心からの疑問の意を込めてそう答えてみせる。

「まったくもって貴女らしい返答ですね」

「それはどうも」

俺の返答に満足気に微笑む翔に、心情を見透かされているような気がして不機嫌そうに俺が投げやり気味に返答した次の瞬間。

「なんだ。それなりに友好的な関係を築けてるようだね？」

重く閉じてあった扉が開き、汐を引き連れて居間へと入ってきた

少女。

学校とは違う、早朝の登校中に会った時のような口調に戻しながら、少女は目の前の椅子に腰掛けると愉快そうに笑った。

「キミが優とは知らなかったから、今朝方の非礼は詫びるよ。ボクの名前は七瀬衣緒。これから宜しく。お姉ちゃん」

スカートの端を上品に摘み、軽く会釈をする。

その立ち振る舞いに暫しの間呆然としていたが、ふと衣緒と名乗る少女の台詞に聞き捨てならない言葉が含まれていた事に気がつく。

「……お姉ちゃん？」

「うん。お姉ちゃん」

衣緒の視線が捉えている先にいるはずの己を指差し、首を傾げながら聞き返す俺と、平然と笑顔を絶やさずに言い返す衣緒。

そして――

「キミは今後、神風翔の親戚の神風優じゃなくて、ボク七瀬衣緒の姉、七瀬優として生活してもらうよ」

そんな色々とツツコミどころ満載な、とんでもない事を言い出したのだ。

第56話 疑惑±疑惑（後書き）

大変長らくお待たせ致しましたorz

内容が内容ですし、色々と気を遣っていると言時間無さも手伝ってこんなに更新が遅くなってしまう…。申し訳ございません。

さて。色々物語が動き出しています。正直、一話ごとですと、話が短過ぎて訳が分からないと仰られるかも知れません。ですが、五話を通して見てみると、違和感が無いようにと心掛けておりますので、どうぞ温かい目でみてやってください；；

更新も遅くなりがちではありますが、どうぞ最後までお付き合い下さいませ；；

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング＞現代FTコミカル部門＞「ぶらすマイナス★S。」に投票です

間話 翼の意外な特技！？（前書き）

よくよく考えてみれば、休載しなくても、間を繋げる小話的な話を執筆してありました。（汗）どうぞ暫らくお付き合い下さい（笑）

間話 翼の意外な特技！？

三限目の家庭科の授業中。

そのあまりにも難解な授業内容に、俺は机に突っ伏して、教科書と穴が開くほど凝視していた。

そこに、待ち侘びた授業終了を報せるチャイムが鳴り響く。

（やっと終わった…）

げんなりした俺を労うかのように、隣に座る綾奈が苦笑いを浮かべながらも優しく肩を叩く。

しかし、教員はさらに追い討ちをかけるかのように――

「それでは来週の家庭科のこの時間に、調理実習を行いますので、各自エプロンを準備してくるように」

俺にとつては、死刑宣告ともとれる言葉を最後の最後で言い放った。事務的に響き渡る小野寺薫の号令に従いながら、礼が終わると同時に俺はギブアップと言わんばかりにへたり込み、机に突っ伏す。

「大丈夫ですか」

高揚がない声色ながらも、心配してくれているであろう薫に、『大丈夫』と突っ伏しながらも答える。

「でも意外――。優はそういう女性的なの得意だと思ってたんだけどな――」

「うん。私もそう思ってた」

「意外だよな――」

さも不思議そうに首を傾げる悟技翼の言葉に、周りにいた女生徒達と同調するかのように言葉を続ける。

しかし俺は生まれてこの方、包丁もまともに握った事もない。ましてや料理をするために、キッチンへと足を踏み入れる事なんて考えられない人種である。

「皆、私にどんな空想を抱いてるのさ……」

溜め息交じりに答える。すると――

「ご、ごめんなさい…。私もそう思っていました…」

「あ、綾奈まで……」

申し訳無さそうに、しなくていい白状をする綾奈に、俺は恨めしそうに視線を送る。

「ご、ごめんなさい…」

その責めるような視線に、小さい体をさらに萎縮して小さくする綾奈。その姿は、やはり小動物を連想させる。

「優。貴女は調理が苦手なのですか」

それまで唇に手を添えて、何かを黙考していた薫が突然俺へ話しかけてくる。

「え？あ、うん。家では藍璃がやってくれるし…」

それ以外で俺が食事を取る時なんて、お湯を注いで所定の時間を待ち頂きますの世界だ。

もつとも、女になってからというものの『せつかくのスタイルを無駄にしないで下さい』と藍璃に怒られて以来、それも控えてはいるのだが。

「では提案があります」

どうやら調理実習という、俺にとっては最大の難関を打開出来る術を考えてくれていたらしく、その提案に耳を傾ける。

しかし、薫の口から出た提案は、些か俺の予想外のものだった。

「翼に料理を指導してもらうのはどうでしょうか」

その理解不能な言葉に一瞬俺の脳が静止する。

（料理を？あの翼に？）

俺が言うのもなんだが…。

料理といった家庭的なイメージよりも、外で男相手に決闘を挑みつつも、その半端ない攻撃力と正確無比な足技で相手を薙ぎ倒して、爽やかに汗を流している方がイメージ的にしっくりくるあの翼に、料理を指導してもらえと仰るのか。

「いくらなんでもそれは……」
『ないだろう』と言いかけた瞬間――

「あ、それはいいかもしれないですね」

まさに名案だと言わんばかりに、満面の笑みでその意見に同意する綾奈。

「ちょ、ちよつと本気……!？」

「問題ありません。翼の料理の腕はかなりのものです」

俺の想像している事を察しているのだろう。しかしそれを踏まえた上で、薫は平然とそう答えた。

しかし料理が得意であるのなら、翼は昼食を勝ち取るために毎日購買部へと、猛然とダッシュする必要があるはずである。

なぜなら、誰が好き好んで、あの飢えた集団の中にその身を投じるというのだろう。

答えは否だ。

そうなれば考える可能性は二つに一つ。全員の味覚がおかしいのか、或いは全員が通常に比べて極めて料理が下手かのどちらかである。

「なるほど」

「いや、そこまで頑なに拒否しなくても」

近くにいた女生徒のツツコミが入る。俺が考えている事は、自分で考えている以上に顔に出るらしい。

「とりあえず今日の放課後からでも優さんの家に寄って、料理特訓しましょうか」

綾奈が胸の前で両手を合わせて楽しそうに微笑む。

「くっ……!!」

この綾奈スマイルに何度押しきられた事か。

「まあ、私も自慢するほど得意って訳じゃないのは確かだけどさ。
諦めな」

そう言ってケラケラと笑いながら肩を叩く翼に、一抹の不安を感じ

ながら、俺は諦めたように家庭科室の天井を仰いだのだった。

間話 翼の意外な特技！？（後書き）

皆様ご迷惑おかけしております。なかなか体調が回復せず、申し訳ないです。その間、夏休みよりも少し前の些細な出来事を三話分お楽しみ下さいませ。如月コウでした。

翼の意外な特技！？2

そしてあつという間に放課後になってしまった…。

教壇に立つ2 - 4組の担任、萩原庄司はぎわらしょうじが連絡事項を言い終えると、挨拶を済ませると教室を後にした。

部活動や帰路に着く者達も皆、それを追う形で各々の準備をし終えると教室から出て行く。

さすがの俺も、この学校に転校してきて随分と経って馴染んできたのか。

そんなクラスメイト達と爽やかに挨拶を交わしつつ、教室の扉に手をかけて―

「ふっふっふっ…逃げようたってそうはいかないよ」

自然な流れでの逃走を試みたが無理だった。

翼は俺が逃げられないように肩を掴んで、そのまま腕を絡めとる。しかもその周りには料理特訓の知らせを聞いた女生徒達もいる。

皆どうあっても、俺に料理をさせたいらしい。

（死人が出るぞ…たぶん）

心の中で悪態をつく。しかし悲しいかな包囲網は完璧だった。

「何事にも諦めが肝心です」

その隣で、黒縁眼鏡を中指で押し上げて、薫は無表情に言い放つ。

「大丈夫ですよ」

綾奈が微笑む。

どうもこの三人が結託してしまうと、俺には拒否権というものが無くなってしまうらしい。

そのまま両脇を固められ、連行されていく俺の姿を見送りながら、クラスメイト達は一週間後の調理実習を心待ちにするのであった。

そして辿り着いてしまった我が家のキッチン。

ここまで来てしまったのなら、もう腹を括るしかあるまい。

皆と同じように、制服の上からエプロンを身に着けて、戦闘準備完了である。

ちなみに先に断っておくが俺は、自慢ではないが致死量レベルの料理音痴だ。

それをたかだか調理実習が行われる一週間後という短い時間で、常人が食する事が可能なレベルにまで到達するとは、到底思えない。それは翼の腕前がどうであれ、だ。

だから――

「“さ”は？」

「砂糖」

「うん。“し”は？」

「塩」

「おーなんだ、知ってるじゃん。“す”は？」

「酢」

「そうそう。“せ”は？」

「正●丸」

「…最後。“そ”は？」

「掃除」

料理の“さしすせそ”というものに答える事になった。

実際の俺の腕前を知らない翼は、最初にどれほどの知識があるのかを試すためと称して、俺へそのような質問を投げかけたのだ。

薫の事前の情報曰く『料理の基礎として知られる言葉』らしいので、俺が料理を作る際に必要なものを答えてみたのだが…。

こんな良く分からない質問で、この三人は俺の何を推し量ろうとしていたのだろうか。

まったくもって謎である。

「あー…うん。最初の“さしす”までは正解」

「料理には必要不可欠だろうからね」

翼が口にした正解という言葉聞き、俺は誇らしげに胸を張る。

「んと…それから後の“せそ”について聞きたいんですけど…」

綾奈にしては珍しい、引き攣った笑顔で控えめに聞いてくる。

その引き攣った笑顔の理由が、さっぱり分からなくて、俺は首を傾げながら答える。

「大体食べた後お腹を壊しちゃうから必要なのが正露●。それからどうしても材料が飛び散ったり、お皿を割ったりするから掃除しないと」

そんな俺の回答に呆然と立ち尽くす翼と綾奈。

そしてその横で―

「なるほど。言い得て妙ですね」

『見事なものです』と感嘆の声を上げる薫。

「あ、頭痛くなってきた…」

さすがの翼もこれには堪えたのか、がくりと項垂れる。

「だ、大丈夫だよ！優さんならきつと…！たぶん…恐らくは…」

そんな翼を勇気付けるかのように寄り添いながらも、綾奈もさすがに少し自信が無くなってきたのか、語尾に向うにつれて不明瞭な言葉を、尻すぼみ気味に言う。

「……私ってそんなに酷いの？」

その二人の様子から、自分の回答がかなり間違えた方向であった事は明白である。

しかし、それがどう間違えていたのかが分からない俺は、唯一理解を示してくれた薫に問いかけると一言。

「予想外です」

と、だけ答えてくれたのだった。

……予想外って……どういう意味で？

間話 翼の意外な特技？3

キッチンでは騒がしい声が響いていた。

悪戦苦闘しつつも、その表情は真剣な優。

その横で、そんな優に檄を飛ばす翼。

そして、その二人のフオローのため、キッチンを所狭しと動き回る綾奈。

最後に、至っていつも通りに我関せずを貫く薫。

そんな、制服のエプロン姿という魅惑の少女達の姿を、神風家一同は総出で廊下から見守っていた。

「……優さん大丈夫かなあ？」

その腕を一番理解している藍璃が心配そうに呟く。

だが、皆を大喜びで迎え入れた時に翼の口から発せられた『優に料理を教えるにきた』と言う言葉に笑顔を凍りつかせて、ただ『頑張つて下さい』とだけ答えてさり気なく己は安全圏に逃げていたりする。

「優ちゃん、ああ見えても不器用だから」

今度はのんびり口調で母が言う。

そんな二人を見ながら、神風翔は黙って微笑んでいた。

（優さんも、なんだかんだ言いながらも、ちゃっかり女の子なさってますね…）

その自分の脳裏によぎった、普段では有り得ない言葉に少しばかり失笑してしまう。

彼女自身は気づいていないだろうが、普段のネカマで培った経験がそう思わせるのかどうかは分からないが、女性としての魅力はかなりのもののように思える。

勿論、その容姿端麗な姿により、男女に関わらず目を惹く事は確かだが、それだけならああやって彼女のために一肌脱ごうとする友人などいないだろう。

やはり本来、異性であるはずの女性に対しての優しさと気遣い。そ

して同性であるはずの男性に対しては、同性であるが故の気さくな対応が、神風優という一人の女性としての魅力なのだ。

それに――

「優！？ここに置いてあったお塩は！？」

「え？あれって砂糖じゃなかったの？全部使っちゃったけど……」

「翼。今まさに新たな厚焼き玉子が出来上がるうとしています」

……ああいった元々の天然さも、さらにその魅力に拍車をかけているのだろう。きつと。

四苦八苦の末、なんとか出来上がった食べ物らしき物体の前。

精も根も尽き果てたかのように、がくりと頂垂れる俺。もはや掛け言葉も見つからないのか、悲痛そうな表情を浮かべる皆の視線が痛い。

「いつそひと思いに殺して……」

「あはは。でも、何も出来なかったにしては、よく出来た方だよ」

そう言つて、翼は頂垂れた俺の肩を叩きながら、優しく声をかけてくれた。

「この調子で、一週間みっちり練習すれば、調理実習の時に何も出来ないような事はないって」

そう言つて快活に笑い、帰り支度を始める翼達。

綾奈と薫はキッチンの後片付けを行つてくれている。俺もその手伝いをする。

翼は、俺に教えながらその片手間で準備していた晩御飯を、手際よく最後まで作り上げて――

「おばさん。遅くまでお邪魔した上に、台所をずっと占領したので勝手かも知れませんが晩御飯は作っておきました。お口に合えば食べてやって下さい」

様子を見守っていた母親にそう告げると、視線を翼がさっきまでいた居間へと視線を移す。

そこには、散乱しているキッチンとは対照的に、いつの間にか豪華な食事の準備が整っているではないか。そのどれもが、片手間で作っていたとは思えないような、美味しそうな匂いを醸し出している。「翼さん、凄過ぎます…」

料理が苦手な両親に代わって、料理を良く作っている藍璃すらこの驚きぶりだ。

料理の的確な指導に、この料理の手際の良さ。これはもう綾奈や薫が言っていた『翼が料理が得意』という言葉は本当だったと認めるしかないだろう。

『一緒に食べていっただろうだ？』という両親の誘いを丁重に断り、帰っていく三人の後姿を見送る。

「それにしても…あの翼さんがあれほどの料理の腕前とは。私も些か予想外でしたよ」

そして後姿が見えなくなつて、翼が準備してくれた晩御飯を食べようと、玄関へ足を向けた時に翔が素直な感想を漏らす。

その感想に『そうだな』と苦笑いで答えて家の中に入る。

家の中では、薫に薦められた父親が、料理に一つだけ紛れ込んでいた黒い塊を口にした瞬間、卒倒したらしく断末魔のような唸り声を口から捻り出していた。

そして、そのまま何事もなく調理実習が行われる前日まで料理特訓は続けられた。

その成果か、俺は調理実習で多少の失敗はあったものの、可もなく不可もなく、最低限の野菜を切る程度の手伝いをして事無きを得る。切った野菜が余ったので、翼の目を盗み他のグループに頼み込んで、試しに野菜炒めにも挑戦したりもしたのだが…。

どういう訳か、中華料理店の厨房ではよく見かける炎の柱を高々と

上げて天井を焦がしてしまい、教員に注意を受けてしまった。

まあそれは……覚えてたの初心者によくある失敗、という事でひとつ大目に見てもらいたい。

問話 翼の意外な特技？3（後書き）

まともにパソコンと向かい合えるのは久しぶりな如月コウです（苦笑）

お待たせして申し訳御座いません。こうして思考がクリーンな状態で後書きを書いているのは久しぶりです（笑）

体調自体は復帰には程遠いですが、休みがあるのでなんとか……といった感じでしょうか……

ですが、今のうちにある程度話を進められたらな、と思っております。

次回からは、前回の続きからのお話です。どうぞお付き合い下さいませ（笑）

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング＞現代FTコミカル部門＞「ぷらすマイナス★S。」に投票です

第57話 もう一つのSな関係

はてさて。突然現れた転校生から、『今日から自分の姉だ』という素晴らしく突拍子の無い申し出に、呆然と立ち尽くす現神風優と前神風翔。つまりは俺の事なのだが……。

どうにも最近……と言ってもこの不思議な生活が始まってからだ。常に呆然としている間に、事態が淡々と悪化の一途を辿るという妙な結果が先行するようになってしまっているように感じる。

今回もそれに違ふ事無く、現状は極めて最悪な方向へと傾きつつある。

なぜなら――

「いつでも遊びに来ていいのよ」

「……はあ」

玄関前。

綺麗に整理されてしまった荷物が詰められた鞆を片手に呆然と立ち尽くす俺に、ハンカチを添えて、涙ながらに語りかける母親。

「私はいつでも経つても君のお父さんだからね。いつでもパパと呼んでくれていいからね」

「お断りします」

そして、いつもながら微妙に人間として間違えているような言葉を携えて見送る父親。

本来、ここに藍璃がいれば更に面倒な騒ぎになりにかねないのだが、どうやら藍璃はお出掛け申中だったらしく、この珍妙かつ突然の出来事に遭遇する事は免れたらしい。

「今まで優お嬢様がお世話になりました。それでは失礼致します」
そんな俺の心中は何処吹く風か。気にする様子が無いまま、七瀬衣緒に遣わされた七瀬汐は丁重にお辞儀をすると、有無も言わず俺をだっ広い黒塗りの車の後部座席へと押し込める。

示し合わせたかのように動き出す車。こうして素晴らしく手際よ

く、俺は長年住み慣れた家から、ほんの数時間までいたはずの見知らぬ豪邸へと連行されていたのだ。

こうして見事に、俺は不本意ながらも“神風翔”から“神風優”という変化だけでは飽き足らず、“神風優”から“七瀬優”という変化にまで至ってしまったという事になる。

勿論、そのような最悪な結果になるまでには、それなりの理由と俺が知らない理不尽な思惑がある訳で。

今回はそれについて、ここに至るまでの経緯と現状についての説明が必要だろう。

まずは現実的な問題から。俺の現在の社会的地位から述べるとしよう。“神風翔”が存在している以上、俺、つまりは“神風優”は有り得ない存在であって、戸籍上、実在に存在しない状態にあった事は明白だ。

しかしながら今は違う。ちゃんと“七瀬優”として実在しているのだ。

法律上などといった小難しい事はよく分からないが、今回の諸悪の根源である七瀬衣緒曰く、『居る筈の人間を違う存在にするよりも、居ないはずの人間を実在する存在に仕立て上げる方が断然楽らしい。』

そう言つて、コロコロと笑う衣緒のドス黒い微笑みを見て、少しばかり世の中の不条理を感じさせた。

少々男の子じみた口調に違和感を抱かせる事なく、その腹黒さも微かに匂わせている。そして、そのアンバランスな魅力を感じさせるその容姿も充分な不条理ではあるのだが……どうにも猫かぶりは十八番らしい。普段は、完全無欠なお嬢様ではある――

『お前。またボクの身体的問題に関して失礼な事考えてたろ?』

(訂正。無欠ではないな)

そこまで考え至つて、ふと思ひ出した、こちらを見上げる衣緒の姿を思い出して苦笑いを浮かべる。

話す内容から察するに、衣緒が被験者であり、汐がSウィルスに

よって生み出された人物という事だろう。

実際、その物腰からは想像できないが、屋敷に通された時に出会った使用人達の衣緒と汐に対する反応や接し方の違いは如実に現れていた。

それを体現するかのように、衣緒も汐もお互いの立場を理解した上での付き合い方をしているようにも感じられたのは、たぶん間違いないはずである。

『なんだ。それなりに友好的な関係を築けてるようだね？』

つい数時間前に投げ掛けられた言葉が脳裏を霞める。その言葉は、つまりはそういう事だろう。彼女達の関係とは違った、俺達の関係に多少の驚きと疑問があつてこそその言葉だったのではないかと思う。

「……翔様と離れて良かったのですか？」

そんな事を考えながら、車窓から流れる景色を見つめ終始無言のまま座っていた俺に、前に座る汐がほんの少しだけ不安げに瞳を揺らして問いかけてくる。

「ん。まあ学校でも会えるからね」

そう言つて汐の頭を撫で、俺は苦笑いを浮かべた。

そんな俺の行動に、少しばかり驚いた表情を浮かべながらもすぐさま照れたように笑う汐。

そして――

「君。汐まで毒牙にかけるつもり？」

そんな光景を鋭い眼光を目蓋で半分を隠し、面白くないと言わんばかりの視線を送る衣緒。

「“まで”ってなんだ」

その物言いを非難するかのように声を上げる俺に対して、衣緒は――

「男女問わず人気が高いからね。YOUは」

そう答えて、意地悪そうな笑みを浮かべて、静止した車の扉を開け放った。

第57話 もう一つのSな関係（後書き）

明けましておめでとうございます。

本年度もどうぞぶらマイを宜しくお願い申し上げます。

と、まあ硬い挨拶はここまでにして。

お待たせしました。なんとか再開です（苦笑）

更新スピードは…とにかく頑張りますorzすいません…（苦笑）

まだまだ謎の説明部分。気合を入れて頑張ります！

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第58話 現実的な非現実

再び訪れた屋敷の中。衣緒に案内を申し付けられた汐の後を追う。突然の出来事とはいえ、それでもやはり性別が反転してしまった時の事を考えると幾分か冷静でいられるから可笑しな話である。

衣緒はその心情を知ってか知らずか。それを深く言及する事も無ければ、こちらから質問しない限りは必要最低限の情報を無条件で教えてくれると言うこともその要因の一つだろう。

「……このような突拍子の無いお話。よくご了承して下さいましたね？」

何度目かの部屋の説明を終えて、その扉を閉じようとした時だった。汐がふと、そんな疑問を口にした。

「そうだね。でも、あのまま記憶がありませんからお世話になりますってというのは無理があつただろうしね」

溜息混じりに答える。確かにその言葉に偽りは無い。

神風優という存在は、あの家族の中においては異質なものである事には違いないのだから。

家を飛び出して来た家出少女。そして運悪く何らかの理由により記憶を失い、さ迷い歩いていたところ、偶然出会った神風翔により保護された身元不明者。

本来ならば、即警察に御用となるべき存在であつたはずだが、両親のご好意に甘えて居候させてもらつていただけなのだ。

しかし、各方面で有名な七瀬家の長女とすれば、記憶喪失として偽り、身元を明かさなかつた理由としては充分すぎるように思える。そして何より。社会的な地位としても存在を確立できる上に、この身に降りかかった出来事を理解している人間が全面的に保護してくれるという条件付でもある。

ならば、突拍子がなかるうとも衣緒の申し出を断るという選択肢は自然と失われてしまうというものだ。

だがしかし。そこで新たな疑問が浮き上がる事となる。

それは“神風優”として生きるキャラクターから、“七瀬優”へのキャラクターの変更が可能なのだろうか。

以前、俺は髪を染めるといふ行為を“キャラクターの設定変更に当たる”と翔に窺められた事があつたからだ。

「問題ありません」

こちらの不安を他所に、飄々とした表情で汐は言い切った。

その言葉に、こちらでは知り得ない情報を持っているという事を改めて認識してしまい、少々それが不平等な気がして面白くない。

「……貴女は本当に可愛い女性ですね」

その心情が顔にも出ていたのだろう。どうにも不機嫌そうに頬を膨らませていたらしく、それを見た汐が上品に笑う。

「そうですね。確かに衣緒様が望むいわゆるギブ&テイクの関係を構築するためには、こちらの情報も開示する必要もあるでしょうね」

そう言つて静かに微笑み、汐は『翔様もある程度はご説明されたかと思ひますが』とだけ付け足して口火を切った。

「問題なのは、髪を染めるといふ行為自体ではなく、髪を染めようとしても染まらないという通常有り得ない状況を皆様に露呈してしまふ、という事です。すでに固定されてしまつてゐる設定は変更できず、髪は染められないですから」

「いや、それはなんとなく理解はしてるんだが……」

俺が聞きたいのは名前も固定された設定であつて、それを変更する事は可能なかどうかという事だ。

「そうですね…。夢幻学園で“YOU”として固定した情報を歪める事は出来ませんが、追加するなら可能と言えばご理解して頂けるでしょうか？」

しかし、その疑問を口にする前に、汐は俺の言葉をそう言つて遮った。

「髪という情報はすでに存在しており、そこに新たな情報を追加する事は不可能ですが、名前という情報に苗字という情報を追加する

事は可能という事です」

確かにその理論でいくならば現状は頷ける。

が、その実汐の言い分はおかしい。それならばすでに俺は“神風”という設定を付け加えていた。髪という情報が強制的に外部からの変更を受け付けないと言うのなら、すでに固定された神風という苗字の情報も外部からの変更は受け付けられないはずだ。

疑惑の目を向ける俺に対して、汐は少し困ったような笑みを浮かべ――

「そもそも貴女は、この現実世界において神風という情報では明確な設定はなされていないでしょう？」

と、俺の考えを根底からひっくり返す言葉を言った。

つまりは神風優という設定は、俺の周り……しかも酷く限定された場所でしか存在していないと言う事を指し示しているのだろっ。

単純だが現実的に考えれば尤もな話だ。今の俺――七瀬優には紛いなりにも戸籍までも存在している。だが、神風優にはそれが無い。つまりは元よりあった優という名前以外に、俺には今まで何も無かったという事実。

「あゝと……？」

ここまで明確に、非現実な出来事において現実的な違いを突きつけられてしまったは言葉に詰まるというものだ。

そんな俺に対して――

「貴女は神風としての社会的地位も無いでしょう？身元不明者なんですから」

同じく非現実的かつ元身元不明者であるはずの汐が、さも当たり前だと言わんばかりに言い放ったのだった。

第58話 現実的な非現実（後書き）

更新が遅くなってしまつて申し訳ないです。

なかなか前に進まない…orz

気管支炎のため体調が芳しくなかったですが、多少は回復しました事をここで報告させて頂きます。

最近しなければならない事が多く、更新が滞りがちですが、完結までは必ず書き上げるつもりです。

もし宜しければお付き合ひ下さいませ。

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第59話 火が炎になって災いへ

最近身に染みて感じることもある。

どうしてこうも物事というものは、想定できうる最悪の予想の遙か斜め上をいくのだろうか、と。

尤も。この事態を仮に偶発的かつ今世紀最大の閃きを得て想定出来たとしても、俺は何の対策も立てる事も出来ぬままその日を迎えたであろう事は明白なわけだが。

非現実染みた世界であるなら、そのまま非現実的に物事を進めてくれてもいいように感じたりするのだが、そう都合よくは動かないらしい。

非現実な立場であろうが、現実世界においては相応の在り方と在る場所が必要であつて、また、それを確立しておかなければ生活がままならない。

つまりは、非現実な存在であろうがなんだろうが、現実に生きるならば現実のルールに沿わなければいけないのだ。

“ 郷に入つては郷に従え ”

まったくもつて奥が深い先人達の言葉である。

「ここが本日より優様のお部屋でございます」

長く広い廊下を抜けて、何度目かの右左折を繰り返した後に辿り着いた一室を前に、汐が丁重にお辞儀をする。

これだけ歩けば、なにやら隔離されるために、遠方の隅の部屋に追いやられた気がするのだが――

「機密保持のため、隣には私がいましますのでご安心くださいね。尚、この廊下の一番奥には衣緒様のお部屋がありますので、御用の際はノック後返事があり次第進入を試みれば、生命に危険が及ぶ事はないように思います」

どうやらその心配は杞憂となりそうだ。若干、最後の方に聞き捨てならない新たな不安要因は増えたが、精神的安息のため聞き流すでしょう。

「あと……」

「ん？まだ何かあるの？」

部屋に入ろうとドアノブを回す俺を制するかのように、言葉を続けようとす汐に怪訝そうな表情で首を傾げる俺。

「その方の都合上、パートタイマーという形ではありますが、双方の利害が一致したので貴女様のお世話役として本日付にてメイドとして仕える事になった者のご紹介を」

よく分からない説明を挟みつつ、一気に説明を終えた汐さんは淡々と事務的にお辞儀をした。メイドとして業務中の彼女は、どうも薫を連想させる物言いと雰囲気を感じさせた。

「やはり貴女をよく知っている人物にお世話を頼む方が楽でしょうし。特例ではありますけど、彼女は聡明だったので高校への飛び級入学、それと貴女様のクラスへの編入手続きは安易に済みました」
嬉しそうに微笑む汐の姿に、ただならぬ悪寒が背筋を走る。

（彼女？）

つまりは女性という事だろう。

（飛び級？）

つまりは年下という事だろう。

（聡明？）

つまりは頭の回転が良いという事だろう。

（俺をよく知っている人物？）

当てはまる人物が一人。

この時点で嫌な予感、確信へと変わった。

出来る事ならば、この扉の向こうで待つであろう人物には触れずにこのまま穏便に日々を過ごしていきたい気がしないでもないのだ

が、如何せん逃げ場がないというべきか……！！

「……ちなみに」

「はい？」

まるで錆び付いた機械のように固まった首を、無理やり満面の笑みで佇む汐へと回す。

「俺の存在については話したのか？」

「……？つまりは貴女様が、元神風翔だとお教えしたのかという事でしょうか？？」

さも不思議そうに首を傾げる汐。

無言で頷く俺の姿を見て、汐は破顔すると――

「まさかそんな事」

「あ、あはは。そうだよ。話したところで信じられないだろうし。何言ってるんだろ」

廊下に響き渡る不気味な笑い声。

「現在、神風翔様は存在している以上、その説明には無理がありませんし、元々の貴女様の説明との食い違いが生じます。よって、可能な限り現状を壊さぬように妥当な嘘を交えつつ、現状に至るまでの経緯を説明させて頂きました」

「多大なる面倒をおかけしたようで……」

「いえ。衣緒様の配慮があつてこそ、ですよ」

そして一通り笑い終えた後、汐はケロッとした表情で言い放った。
「想い人である神風翔と添い遂げるため身分すらかなぐり捨てて家を出て、記憶喪失を装っていた、とご説明させて頂きました」

「この馬鹿娘……！！？」

「無事、親の許しを得たので屋敷へとこの度戻る事となったと告げた時の神風家の皆様とご友人一同の笑顔を、是非優様にもお見せしたかった……。ですから安心して下さいませ」

「どこに！？どこに安心する要素があるの！？」

配慮という言葉の意味を理解しているとは到底思えない汐の発言に、俺はその満面の笑みを浮かべる肩を掴み叫んだ。

そしてその騒ぎを聞きつけたのか、独りでに開かれた扉の先。
これまた見知った満面の笑み。

「あ、優お義姉様」

……お義姉様ときたか。この馬鹿妹よ。

第59話 火が炎になって災いへ（後書き）

新年早々体調崩してばかりだ……orz

体調が回復しました宣言した次の日辺りで、インフルエンザか高熱で死んでた如月コウです（吐血）

病院行って熱を測ると40度。あれ？死亡フラグですか？（ああ）皆さんもこの時期の体調管理はしっかりしておきましょうね。

何はともあれ、再び舞い戻って更新です。

自身で立てた更新速度に遥かに遅れている分、少々焦りを感じていますが、内容がこれ以上駄作にならぬように頑張ります。

激動な話の流れも四話目。そろそろ平穏な学園コメディに戻りたいところですが……まだまだ説明がきれていません。

少しずつ説明していければな～と考えております。

お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第60話 交わる“S”の関係

「案内、無事終えました」

「ご苦労様」

優の案内が終えた事を告げに部屋を訪れた私に、衣緒が労いの言葉を返す。

少し離れた部屋から聞こえる騒動を尻目に私達は少し苦笑いを浮かべながら、準備されたお茶を啜る。

ピンク色に可愛らしく統一された家具一式と内装に、いまだに慣れないのか衣緒は心なしか落ち着かない様子でもある。

「いい加減慣れませんか？」

その様子を見かねて困ったように眉を顰め、苦笑いを浮かべる。

「元々汐の部屋をボクがいきなり奪い取って居座ってるだけだからね」

視線を逸らして言った返答に、再び困ったような苦笑いを浮かべてしまう。

「私は気にしませんけど……」

それでも朗らかに言葉を返す。だが――

『……やはり2人だとなっちゃういますか』

先程まで接していた優達の騒動と、自分達の気まずさを比較して思わず溜め息をついてしまう。

神風翔と優という存在は、私にとっては憧れにも似た関係だった。詳細はまだ聞いてはいないが、突然の変化に戸惑いながらも、自分達の一番良い形で、良い関係を築いているように思えたから。

元々、私達と境遇が違うという理由もその1つではあるだろうが、お互いがすり替わってしうという特異な環境でさえ素直にそういう関係を築ける事は、互いに信頼していないと無理な話だ。

「立場上、そう変わってしまったんですから。慣れてもらわないと」

まだ初見に近いとはいえ、優と名乗る元神風翔が、現状把握とそれに対応出来るまでかなりの時間を要したように感じられた。

しかし、彼以上に衣緒は今の自分の在り方に戸惑いを感じているのが実情だ。

その憂いにも似た感情は、きっと衣緒にもあるのだろう。2人の関係を見た時に出た言葉がそれを証明していた。

『なんだ。それなりに友好的な関係を築けてるようだね?』

私にとっては今、衣緒と名乗る少女は唯一無二の親友。だが、決して以前のように友好的ではない。

私はその変化を無理やり強いてしまった負い目もあるし、衣緒は衣緒で、元々七瀬衣緒というお嬢様の世話係であつたはずの自分が、その立場を乗っ取る形になつてしまつたという負い目を感じている。私が“七瀬衣緒”から“七瀬汐”へと変貌を遂げたあの日の出来事が脳裏を霞む。

それは私にとっては望んだ変化。だが、元々“汐”だつた少女にしてみれば、それは望まぬ変化だつたに違いない。

「それに、今までそれほど“衣緒”に興味を示す者達がいなかった分、立ち振る舞いには苦労しないと思いますし」

あの日交わした会話の一部を引用するような形で、洩る衣緒を諭す。だが、その言葉に益々衣緒は顔を顰める。

「衣緒の、そうやって自分がまるで居なくなつても良かったみたいと言ひ方は気に入らない」

怒つたような視線を投げ掛けてくる衣緒の言葉は、彼女らしい本心だろう。

だが、その本心にも間違いがひとつ。

「衣緒?今は貴女が衣緒ですよ?」

「……………あ」

私の言葉に『しまった』と言わんばかりに顔を渋める衣緒の様子を見て、思わず微笑みを溢してしまう。

彼女が私に七瀬衣緒としての生き方を返そうと、躍起になってくれる気持ちはありがたいし、それだけで彼女だけが私を七瀬衣緒として必要としてくれていた事に胸が詰まる。

尤も。それを抜きにしても、その性格ゆえに衣緒は私にあれこれ世話を焼きたくなるのだろうか……。そうなってしまった原因は私にある以上、それは私を縛る鎖でもあった。

ここまで説明していれば誰でも理解してもらえらるだろう。

私は元々は『七瀬衣緒』として存在していた。そして、今は『七瀬衣緒』に仕えていた『七瀬汐』として存在している。

そして私——現七瀬汐は、神風翔同様に被験者である者……私の場合は七瀬衣緒を導く立場でもあるのだ。

しかしそれは立場上での話。“S”についての謎と疑問は尽きない。

衣緒が調べ上げた、あの日のサーバー情報の中に変化が見られたのは、神風翔唯一人。あのオンラインゲームを経営している側にある私達にしてみれば、その個人情報を得ることは容易かった。

が、それだけだ。プログラムに変化があったわけでもなく、バグが生じた訳でもない。ただ、“YOU”が“SYOU”に。そして現実では、“翔”が“優”へと変化してただけのこと。

「……………どちらにしろ。“S”を“アンインストール”して変化した私達との関連性は高い、ということですね」

こうして出会う事でなんらかの変化が生まれるかも知れない。

そんな期待と、望んだ今を壊される不安を感じながら、私は慣れ親しんだ衣緒の部屋の扉を閉め、汐の部屋へと歩を進めるのだった。

第60話 交わる“S”の関係（後書き）

かなりお待たせして申し訳ございませんでした（土下座）

コメントも少しずつ返信していけるように頑張ります。読ませて頂いて、もっと頑張らなくては、と自分を奮い立たせておりました（苦笑）感謝ですw

今回は、体調は勿論でしたが、どこまで、こういった風に表現するのかを迷い、かなり時間を費やしてしまいました。

出来るだけわかり易く執筆したつもりでしたが……どうだったでしょうか？（汗）

まだまだ説明不足ではありますが、やっと五話。次からはまた少し変化した日常が始まります。

コメディの割には、謎が多く困惑してしまうかも知れませんが、それは如月クオリティということで勘弁してやってください（吐血）お手紙、コメント、感想大歓迎です。文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス＊S。」に投票です

第61話 変化するものしないもの

それは確かに、激動的な運命の転換期だったと言っても相違ないだろう。

出逢った事がたとえ偶然であつたとしても、運命にとってすれば必然となるであろう出来事。

だが悲しいかな。少なからずそれを理解するには、あまりにも情報が少な過ぎたことは紛れもない事実。

だからこそ、人は互いの運命に不器用ながらも関わりあつて。支え合つて生きていくモノなのだろう。

だからと言つて――

「優……結婚式には呼んでね」

「……翼。人の話聞いてる？」

――こんな運命全力で願ひ下げなのだが。

七瀬汐の魔手により広められた翔は優――つまりは俺の婚約者発言は、瞬く間に校内を駆け巡り、様々な憶測と、とんでもなく誇張された噂話が併走する結果となった。

「お、お似合いだと思います」

いつもながら凄いフォローをありがとう。綾奈。

「なるほど。いわゆるマリッジブルーという状態に陥っているわけですね」

わざと言っているんじゃないだろうかと疑いたくなるような、更に混乱を招くフォローありがとう。薫。

「深夜にこそこそお兄ちゃんの部屋に忍び込んでいたぐらいラブラブですから」

そして沸き上がる悲喜交々な歓声。

そこに本来いるはずがない、神凧翔の妹である藍璃が、その有り

難迷惑なフォローにトドメをさす。

本来ならば年上ばかりのこのクラスには戸惑いもあるはずだ。だが、藍璃はすでにこのクラスでの地位を、この数日間を着実に定着させつつある。まったくもって元妹の腹黒さには頭が下がる。

「……頭痛い」

机に突っ伏して、げんなりとした表情を浮かべる。

こうして、良くも悪くも好奇心な視線の渦中にいることは、多少なりとも慣れてきてはいる。

だが、それが色恋沙汰となれば話は別だ。

それは、己が男に戻るための手段として挙げられている、由々しき問題。

ましてや、その対象が男女どちらだとしても、異質になるのだから質が悪い。

そうになると、周りが考えている以上に、俺が誰かに恋愛感情を抱くということは至難の業なのだ。

「なるほど。君は君なりに苦労してたようだね」

「その苦労の一端を担ったお前が言うな」

「どちらかと言えば、大部分を担ってますけど……」

我関せずといった物言い、労いの言葉をかけてくる七瀬姉妹。

「その『ご苦労さまです』みたいな言い方はなに……？」

その態度と言葉に、なんとか面を上げた体も、堪らず再び机に突っ伏してしまう。

あのとんやわんやの大騒動から一夜明けて。

二人から聞いた話から推測するに、俺の状況がすぐさま打開される訳ではなさそうだ。

分かったことがあるとすれば、二人は“S”をアンインストールして出来た存在だという事。

そして、その関係が“S”をインストールした俺達と関係を交わらせることで、何か変化が生まれるかも知れないという、希望的観

測に基づく予想。

それらは結局のところ、現状に至った原因については、何一つ掴めていない状態であることを示していた。

しかし、その一方で変化したものがあつたことは確かだ。

俺を囲む親しい友人の輪の中に、七瀬姉妹と藍璃の存在がまさにそうだろう。

だが――

（衣緒が、どこか距離を置いているんだよね……）

思わず溜息をついてしまう。

元々、純正のお嬢様の付き人であるはずの衣緒だ。嫌な言い方だが、一般的な学校に通つたことすらない事は、あの広大な館に一日でも住めば理解出来る。

それでも幸か不幸か。社交辞令は心得ているらしく、皆に合わせて表情を変化させているところに、若干の杞憂を感じてしまうのは俺だけだろうか。

それにしても、だ。そう考えると……

「はい？なんでしょうか？」

視線の先。本来なら、その立場に立つはずだった生粋のお嬢様である汐が、ひとしきり笑い終えた後、飄々とした表情で首を傾げる。

「いや。汐はこういう雰囲気は苦手じゃないんだな、と思つてね」

「私は純粹に楽しんでいきますから。衣緒様が、色々考え過ぎているだけかと思います」

その口調はいつもながら、付き人としての自分の立場を忘れずにいるものだった。

だが、“汐は”という俺の言葉に含まれた意味を理解して、返答を返してくるあたり、口には出さないものの、衣緒を気にかけているということだろう。

「そこで提案です」

「うわっ!？」

突然、目の前に現れた薫に素っ頓狂な言葉を上げる。

「今度の日曜日。七瀬汐、衣緒兩人を遊園地にでも誘うというのはどうでしょうか」

いつもながら、心臓に悪い読心術をお持ちのようで。

「些細な事です」

「だからどうして分かるのっ!？」

さも当然と言わんばかり、薫は眼鏡を中指でクイッと押し直す。

「ちなみに、すでに翼ちゃんは行く事を前提で、話を進めちゃっています」

「……………」

薫もさることながら、翼もすでにその算段で動いていることを綾奈は苦笑しつつ伝える。

そつだとする、俺に聞く必要はあるのかどうかすら疑わしいが…………。

目の前には、俺の返事を待つ親友達。このお節介ながらも、優しさに満ちた自慢の親友達の申し出を断る必要もないだろう。

「分かった。楽しみにしてる」

だからこそ。

満面の笑みで、彼女達の誘いを受ける事にしよう。

なんの因果か知り合いになったのだ。作り笑いで築かれた関係を維持することよりも、笑い合える関係である方が、良いに決まっている。

第61話 変化するものしないもの（後書き）

随分とお待たせしてしまいました。

その間、お手紙やコメントを頂いた皆様には、最大の感謝とお礼の言葉を。

励まされて、遅ればせながらですが、更新できた事は、私自身も嬉しく思います。

この作品の継続に危機感を抱いた方もおられたかも知れませんが、この作品は完結させるつもりですのでご安心を。

いつか、纏めて本にでもしたいですね（野望／あ）

時間が空き次第、指摘を頂いた誤字等も修正しますので、暫しお待ち（汗）

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス★S。」に投票です

第62話 続・変化するものしないもの

「余計な事しなくていい」

不機嫌そうな表情を隠す事無く、衣緒が答えた。

約束の日曜日。太陽はすでに真上に上がり、まだ少し夏の名残を思わせる日差しで、遊園地の入り口で待つ俺達を照りつけていた。

「駄目ですよ？皆様の厚意を無駄にしては」

まるで、駄々っ子を叱りつけるかのような口調で、隣に立つ汐が膨れ面の衣緒を嗜める。

そんな汐に不満があるのだろう。衣緒は膨れ面を更に膨らませて、不機嫌そうに視線を逸らす。

元々、身長が低く、実年齢よりも幼く見える衣緒だ。その姿は、何処から見てもお子様に見えてしまうのも、致し方ないことだと思う。

「あによ？」

「なんでも」

そんな、俺の視線に気づいたのか。ジト目のまま、睨みを効かせてこちらへ視線を送る。

まさか俺の思考内容までは理解してはいないだろうが、そういう感情には酷く敏感である。こうやって、素知らぬ顔で、とぼけるのが一番だ。

「子供っぽいから、呆れていらっしやるそつですよ？」

「ふしやーーーーー！！」

「おお！？」

汐が発射した爆弾は、見事なまでに、衣緒の堪忍袋を破壊したらしい。

そのうして数日間、この姉妹と寝食を共にして気づいた事がある。それは、2人の不思議な関係だ。

本来は、まったく逆の立場に居たはずの2人。この場に存在する、

今は汐として存在し、元は衣緒と呼ばれたはずの少女と、今は衣緒として存在し、元は汐と呼ばれた少女。

互いに、お嬢様とその使用人である事には変わりはないが、逆になれば多少なりとも違和感があっても変ではないだろう。

だが、この2人にはそれがあまりにも少ない。あたかも、この関係が本来正しいはずの関係であつたかのような……そんな不思議な関係。それが、今の2人だった。

違和感があるとすれば、それは――

「……………」

「なんででしょうか？衣緒様」

衣緒自身が、その立場に不満を抱いているような言動があるということ。そして、それを気づいていながらも、わざとはぐらかす汐の言動。

互いの真意など、所詮余所者である俺が理解出来るはずも無く。勿論、そうである以上、悪戯に首を突っ込んでいいものかどうかとも判断しかねる。ただただ、傍観者に徹する以外手段が無いのが実情である。

更に言うならば、俺は俺で懸案事項を抱えているのだからどうしようもない。

その懸案事項というのは、七瀬姉妹同様に他でもない――

「さて。どうするおつもりですか？」

なぜか機嫌が悪い翔との関係改善である。

七瀬家で数日間過ごした後、会ってみれば不機嫌そうな表情を浮かべる翔がいたという理解不能な事実。

とはいえ、特別怒らせる言動をした記憶がない以上、謝ることも出来ないでいるのが、現在の俺。

そして、それを更に困難とさせている幾つかの要因も、ここで紹介しよう。

「ん？何？」

「どうしてここに霧島京きりしまきょういちがいるの？」

「まあ別にいいじゃんか」

あからさまに嫌な顔をする俺に対して、満面の笑みで言い返してくる辺りは、さすがといったところだろうか。

だが、海の一件以来、この輪に霧島が加わる事が多くなった。

それに、以前にはよくあった、作り笑いは薄れたかのように思える。事実、雰囲気が柔らかくなったと女子の間では評判だ。

「倦怠期ですね」

「うつそ！？二人はそういう関係！？」

「が、頑張つて下さい……！」

「うん。いつも通りだね。三人とも」

薫の一言から始まり、翼、綾奈の三者三様のリアクションに、げんなりした表情を浮かべて、曖昧に返事を返す。

「馬鹿兄とはいえ、女性を見る目だけは確かだったようですから」

藍璃が苦笑しながらも、微笑ましそうにその様子を眺めている。

「確かに。そのおかげで、俺も優ちゃんとお知り合いになれたからな」

そして、その横には吉良の姿。

「優さんは、たとえ変態で一言そいつに言っなら『死ねばいいのにと、願っちゃうぐらいの相手にでも優し過ぎます』」

「あつはつはつはつ。藍璃ちゃん、やけに具体的に表現するね」

「むしろ死ね」

「俺に対して、願いどころか命令形で口に出してる！？」

この二人のやり取りも、藍璃が同じ高校に通うようになってから多くなったのは、ご愛嬌といったところだろうか。

「どうしてこうも大所帯になるんだ……？」

そんな、各々のいつも通りの行動を流し見て、俺は深く溜息をついた。

女になってというものの、必ずと言っていいほど、多人数での行動が多くなっている。

勿論、それはある程度のミスも、誤魔化せる状態であるというこ

となので、ありがたくもある。

だが。このメンバーであるからこそ、誤魔化せない事もあるということを、是非一度、皆に考慮して頂きたい。

「……ねえ。あれって」

「うそ！？どうして!？」

その懸案事項が、上野動物園のパンダの如く、目を輝かせながら俺達の周囲に集まりつつある。

「気づかれましたね」

その様子を逸早く察し、薫が、落ち着き払った表情で俺の隣へと歩み寄る。そして、『如何致しますか?』と、無言ながらも問う視線に、思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「……逃げよっか」

それが俺達らしいだろう、と。笑う俺に、薫はその返答は想像通りだと言わんばかりに、満足気にほんの少し微笑むのだった。

第62話 続・変化するものしないもの（後書き）

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス＊S。」に投票です

第63話 それぞれの関係

よくよく考えてみれば、この状況は予想出来たのではないだろうか。

遊園地という広大な遊技場とはいえ、そこは、帰る選択を取らなかった以上、ある種の密閉空間だ。有名人が大人数で逃走を試みたところで、完全に取り巻きを撒くには無理があった。

最初こそ全員で逃げていたが、一人また一人と知らない間にその姿が見えなくなっていった。

そして現在。逸れてしまった全員と連絡をとっている最中だ。

『素直に、自分達の足が人一倍遅かったと認めませんか？』

「そうとも言う気がしないでもない。そもそも、スカートは運動に適していないのだ」

いくら女の体に慣れたと言っても、普段着慣れていないオーバーレースワンピースなどといったヒラヒラの服装で、全力で走れというのが酷というものだ。

ただ、別に全力疾走が出来ない訳ではない。公衆の面前で、漫画的に表現するならば、一種の読者サービスの犠牲を払えば、出来なくも無い。

しかし、だからと言って、恥も外聞も無く逃げれるほど、人間としての羞恥心を捨てる訳にはいかない。

そう。決してそれは、女としての無自覚な照れなどではないと、ここにしっかりと表記しておきたい。尤も。ここには居ない、同じくスカート着用の綾奈^{あやな}は、器用に全力疾走して、俺をぶっちぎっていった訳だが。

『……別にいいですけどね。それよりそちらはどなたとご一緒なんですか？』

俺が心の中の自己弁論に奔走している最中。翔が呆れ果てたかのように、電話越しにも聞こえるような溜め息を交えて、こちらの状況を確認してきた。さり気なく行ったであろうその仕草は、なぜか翔の中にあつた怒りが緩和したように感じさせる。

『ちなみにこちらは、ゲームコーナーで仲良し三人組さんと霧島さんが一緒におります』

翔の言う所の、仲良し三人組というのは、さとりぎつばさ おのてらかある悟技翼、な小野寺薫、菜乃綾奈のことだろう。

『つ、翼ちゃん！？それ、出てきたワニを踵落として破壊するんじゃないかって、横のハンマーで叩いて、叩いた数を競うゲームだよっ！？』

『え？そうなの？』

『綾菜、すでに手遅れです。半分以上屍と化しました』

なにやら、翔の背後から漏れ聞こえてくる三人娘の声が、空恐ろしいものだったりするのだが……。そう考えると、翔の先ほどの溜め息には、俺に対してだけではなく、その三人の相手をしていることからくる疲労もあるのではないかと思ったりする。

『優？変な男に声かけられたりしてないか？』

そんな中、突然割って入ったのは、霧島京一。

心配してくれるのはありがたいが、彼の気遣いというものは、一定以上の好意からくるものだと、なんとなく気がついている。

それは、他の誰かと接する時の霧島と、唯一、あの海岸で見せた、本人曰く本来の霧島京一

で俺に接してくる姿を見れば一目瞭然だ。

勿論、それが恋愛感情からくるものなのかは、経験が無い俺には未だに計り知れない。

ただ、演じずに居られる人間が傍にいるという安心感は、俺も経験がある以上、邪険にするのはどうにも気が引けてしまうのだ。

とはいえ、必要以上に仲良くなる事も、正直遠慮願いたいのが今の本音である。

「私は大丈夫だから」

ゆえに、必要最低限の返事だけを返す。

「―私は、衣緒と汐の二人と一緒に。ってことは、残るは、吉良と藍璃か」

『そういうことになりますね』

電話が、再び翔の手元に戻った事を確認するように、独白した言葉に翔が同意する。一番最悪な組み合わせが残ったものだ。出来れば、電話することすら控えたい。

『藍璃さんと吉良さんは、どうやら行動は共にしているそうですよ』

「あ、そうなんだ？なら、安心かな？」

『ちなみに、現在地はお化け屋敷でした』

「……………それは」

二人のお互いの利害が、見事一致した上の選択だったのではないのだろうか。

ちなみに、吉良が暗闇に乗じて抱きつく算段。そして藍璃が、暗闇に乗じて吉良を殺る算段である。

『現在地が分かった事は素直に喜びましょう』

俺が、色々な意味で二人の安否を案じている時、翔は、そう言うて一旦言葉を区切り、

『ですが、すぐに合流しても先程の二の舞でしょうし、このまま少人数で楽しむ方が得策かと思われます』

現状での妥協案を提示してきた。

確かに、ここで合流して大人数で行動なんてしようものなら、目立つことその上ない。そうなれば、先程の騒ぎで浮き足立って探し回っている客に発見される事は目に見えている。

「んじゃ、少しの間このままで。日が暮れるぐらいに合流すれば問題ないだろう？」

『そうですね。暗闇になれば、発見される恐れも少なくなるでしょう』

今回の首謀者である仲良し三人娘によれば、夜には花火による催

し物もあるらしい。

「さて、と……」

夕方に再び連絡を取り合って合流する事を約束し、手にしている携帯電話を閉じる。

（「そういえば、翔がどうして不機嫌だったのか理由聞いてなかったな……」）

それと同時に、いつの間にか元通りになっていたやり取りに満足してしまい、不機嫌さの原因に対しての言及を忘れていた事に気がつく。

ポケットに仕舞い込んだ携帯電話を再び手にし、通話記録を検索しようとした矢先。

「………」

背後から感じる、不機嫌そうな視線と、それをどこか楽しそうに眺めている視線を感じて、振り返る。

「……あによ？」

明らかに不満そうな視線のまま、素直に不満を口にする衣緒。その姿は、構ってもらえなくて拗ねている小学生のようである。

「遊園地なんて久しぶりで、興奮を隠しきれない状態でお預け状態なので、少々衣緒様は不機嫌なんですよ」

困りあぐねた俺を見兼ねたかのように、汐は助け舟を出してくれた。

ただ、

「ち、違う！ボクはただ、こんな小さな遊技場が物珍しくて……！」

「そうですか。良かったですね」

状況が好転しているかどうかは疑問だが。

それでも、汐の発言は的を得ているのは確かだろう。真っ赤になっ
て否定する衣緒は、確実に小学生だ。

「……お前。また失礼なこと考えてたろ？」

胸元を掴まれ、凄まれる。カツアゲされている気分だ。ただし、小学生に。

「ふしゃー！ー！」

「またかよっ！？」

最近分かったのだが、どうにも衣緒は身体的特徴に対しての言動には、かなり敏感に反応する。それはまさに獣並みに、だ。

「衣緒様。あちらで、この遊園地のマスコットキャラが風船を無料配布してますよ。一ついかがですか？」

汐が指差す方向には、猫をモチーフにした可愛い着ぐるみが、周りにお客様に風船を手渡ししていた。ちなみに、周りにお客様は、主に小学生だ。

「え、ホント！？」

「それは応じるんだ！？」

その言動は、自発的な、自分は心もお子様であるというカミングアウトなのではないのだろうか。

そんな疑惑の眼差しも、風船を無事に受け取った衣緒には通じないらしい。手にした風船を眺め、満足気だ。

「……ったく。本当に子供だな」

「……えっ！？」

呆れ顔で振り向いた俺に対して、汐は驚いたように小さく声を上げた。そして、俺はそんな汐に次の言葉をかけられずにいた。無邪気に笑う衣緒の姿を、どこか憂いを帯びた瞳で捉えていた汐の姿を見てしまったからだ。

「そうですね。ですが、あれが本来の衣緒様ですから」

安堵の溜め息のようにも感じられる深い溜め息、そして、微笑み

と共に囁かれたその言葉に、俺はますます返す言葉を失ってしまう。

「お心遣い、ありがとうございます」

視線は衣緒に向いたまま、汐は独り言のように呟いた。

「えっ!？」

今度は、汐の言葉に俺が驚きの声を上げる。慌てて、その意味を問おうと、汐の表情を伺ったが、その疑問の答えは視線の先にある、衣緒の笑顔だとすぐ気がついた。

これは俺が考えた事じゃない、とか。一瞬、色々な言葉が脳裏を掠めたが、どれも今の汐に対して、適切な言葉じゃないような気がしたので、

「うん」

一言だけ、短く返事をする。そして、風船を手にしてはしゃいでいた事を悟られて、居心地が悪そうに黙化して、叫ぶ衣緒へと歩み寄る。

家では、その広大な広さゆえか、お互いに不干渉が暗黙の了解になってしまっている部分はある。

だが、こうしてせっかく二人と接する機会なのだ。皆と合流するまでの時間、同じ境遇に身をおく者同士、少しでも相互理解を深めていて損はないだろう。

尤も、それを行うにあたって、今の俺の最重要優先事項は――

「がるるる」

唸っている元お世話係、現お嬢様である衣緒をなだめる必要があるわけだが。

第63話 それぞれの関係（後書き）

生きてますよ？（挨拶）

大変長らくお待たせいたしましたorz

これだけ空けてしまっているの、このまま連載休止かと心配された方がおられましたら、ごめんなさい（滝汗）それは無いので、ご安心くださいませorz

頂いたコメントやお手紙、とても励みになりました。感謝です！

余裕があれば、ホームページでイラスト掲載とかも考えてますが、果たしてその余裕があるかどうかorz

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的小おかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス*」に投票です

題64話 二人だけの関係

「あ、次はあれに乗ろう！」

昼下がりの陽光が、容赦なく俺達を照りつけている午後。

俺達は、体力と好奇心が尽きる事ない衣緒に振り回されていた。

動く度に揺れる、飾りのリボンがついた、動き易そうなショートパンツが、彼女の活発さに磨きをかけているようにも感じられる。

「す、少し……休憩させて」

その一方で、俺は完全にグロッキー状態だ。

真夏日は過ぎ去ったとはいえ、異常気象やらでまだまだ残暑が残る9月。こつも元気に動き回る、さながら小動物のような衣緒についていくには、かなりの労力が必要になる。

「元気ですね」

言葉とは裏腹に、その笑顔を崩さぬまま、俺が腰掛けているベンチへと腰を下ろす汐。

「どうして汐は平気なんだ……？」

「立場こそ逆にはなりましたが、元々の関係自体は変わりませんから」

汐の言う関係とは、つまりは、今、こうして衣緒が元気良く走り回り、それを汐が見守っているような事なのだろう。

それを証明するかのように、俺の横に座る汐の目の前で、地団太を踏む衣緒を見つめる瞳には、優しさに満ち溢れている。

立場こそ違えど、二人の間には、ちゃんとした信頼関係が築かれている。

それが知れただけでも、今回無理やり二人を誘った事にも意味を見出せるというものだ。

普段の二人に感じられる違和感。それが何なのかを知るには、七瀬衣緒、汐という人物について無知すぎる気がする。

今回、少しでも二人を知る事が出来れば。それだけでも、十分過

ぎる収穫だと、俺は思う。

「……ですけど」

一瞬、そんな物思いに耽っている俺の横顔を流し見て、汐は目を伏せて笑った。

だが、次の瞬間、

「そうはいられないと、衣緒様は考えてらっしゃるようですが」

そう言って、視線を再び衣緒に向けた汐の瞳は、寂しげに揺れていた。

「……髪型」

「え？」

二人を包む沈黙は、そんな言葉で破られた。

汐の寂しげな瞳に、言葉を失っていた俺は、その突拍子のない言葉に目を丸くした。

だが、その言葉の意味は、汐と、その視線の先に移る衣緒を見比べれば、それが二人の外見的な共通点だという事に気がつく。

そういえば、内面で見れば確実に真逆な二人だが、外見的から言えば、汐が少し黒の中に紫が入ったような髪で、衣緒がブロンドの髪という以外、あまり相違ないように思える。

汐が言ったツインテールという髪型が、それを更に際立たせている事には違いない。

「以前お話したように、髪の長さや色を変化させる事は、私達も、あなた達同様に不可能です」

そう言って、言葉を一旦区切り、汐は立ち上がった。

そして、

「ですが、それは既存の状態での髪型の変更までも縛れるものではありません」

髪を括っていた紐を解き、その腰まで届く長い髪を風になびかせた。

紫がかった黒い髪が、太陽の光に照らされ、美しい光沢を放つ。

「つまり、二人とも同じ髪型にする必要性など、本来皆無なのです」

それはつまり、どちらかが故意に片方の髪型を真似ているのだらう。

汐の物言いからして、汐自身はその事をあまり良くは思っていない様子だ。そうなれば、必然的に真似をしているのは、衣緒ということになる。

だが、その事を知ったところで、その言葉の真意が分からない。分からない以上、俺は返す言葉を失う。

「……………ん、と」

その真意を問おうと口を開くが、上手く言葉が続かない。まっすぐに見据える寂しげな瞳に、俺は気圧されていたのだ。

しかし、このまま硬直していても仕方が無い。

意を決して、佇む汐と向かい合うように立ち上がろうとした瞬間だった。

「……………“七瀬衣緒”という地位が、相応しい人物に移っただけ。それだけなのに」

「え？」

それは、汐の独白に似た呟き。だが、その呟きは、

「衣緒様を泣かすな——！！」

怒号と共に繰り出された衣緒のドロップキックによって切り裂かれた。

「……………って、いきなり立ち上がるの反則——！！？」

名前を呼び間違えるほど、冷静さを失っていたのだろう。

十分に助走までつけた後、跳躍。華麗に空を舞った現衣緒は、何か言おうと意を決して、立ち上がった俺が座っていたベンチを貫き、その勢いのまま芝生の上を転がっていった。

「衣緒様！」

珍しく汐が声を荒げる。転がり終えたものの、獲物を仕留められず、悔しそうに顔を渋めている衣緒に詰め寄っていく。

「靴底に鉄板を仕込んだの攻撃の危険性は、常々申し上げていたはずです」

汐が怒るのも、至極尤もだ。

あれは人に向けて放つ技ではないことは、無残にも砕け散ったベ
ンチが教えてくれている。こんな致死レベルの攻撃を繰り出す主人
を、怒らないメイドがこの世にいるわけが無い。

「攻撃力がある分、回避された場合の隙が大きいのですから」

「それを怒るのかよっ!？」

だが、このメイドは違う方向にベクトルが回っていたらしい。

主の素行を怒るのではなく、確実に相手を仕留められない手段を
取った事に対して、酷くご立腹の様子である。

「では、奇襲に対して声を出すとは何事ですか？」

「いや。そんな可愛らしく首を傾げられても……」

どうやら俺のツッコミで、怒るポイントが違うという事は理解し
たらしいが、相手を殺すという間違った前提自体は捨てる気が無い
ようだ。

「そもそも、相手を殺す事を前提にしているのがおかしいだろ」
げんなりとした表情で、怪訝そうに眉を顰める汐に進言する。

暫くの間、汐は俺の言葉を何度も小さく復唱しながら黙考し、吟
味した後――

「なるほど。理解しました」

と、手を合わせて納得しましたと言わんばかり仕草で答えた。

再び衣緒に向き合うと、汐は衣緒の肩を掴み、まっすぐに見据え
て、厳かにその口を開いた。

「飛ぶとは何事ですか」

「お前の頭のネジが飛んでいて何事だよ」

「相手を仕留める事ばかりに意識がいき、相手の反撃は想定してい
ませんでした。確かに、飛べば相手の反撃に対しての対応は難しい
でしょうね。お見事です」

間違った方向に解釈した拳句、なぜか俺が褒められた。まったく
もって意味不明である。この調子だと、何を言っても無駄に終わる
だろうと感じた俺は、お手上げと言わんばかりに両手を上げる。

「すつごく馬鹿にされてる気がする」

「同感です」

「とにかく。休憩もしたことだし、もう暫く、集合時間まで三人で遊び回るとするか」

説得するのも、説明するのも面倒なので、話半分に二人の不服申し立てを棄却し、足早に歩き出す。

「致し方ありませんね。この件に関しましては後ほど小一時間ほど問い詰めるとして、今は時間を有意義に使いましょう」

物騒な物言いながらも、歩を揃えてくる汐。

だが、もう一人の気配が感じられず、後ろを振り返ってみると、どういふ訳か、衣緒がその場に留まり、不機嫌そうな顔で前に行く俺達を睨んでいた。

「衣緒？」

怪訝そうに首を傾げる俺の呼びかけに、弾かれたように衣緒が走り出す。そして衣緒はあつという間に、俺達を追い抜かしていく。

「……………」

その後姿を見送りながらも、俺は、すれ違いざま、吹き抜けた風が残された、衣緒の言葉の意味を考えていた。

「……………“そんなの望んでない”」

その言葉を俺が反復した瞬間、隣の汐の肩が僅かに震えるのを感じた。

題64話 二人だけの関係（後書き）

お待たせ致しました（ぺこ）

汐と衣緒の関係が、ほんの少し見えてきた…… ように感じてもらえたら嬉しい気がします（弱／あ）

遊園地では、色々な人物の関係について描写したいと考えております。

関係に変化が訪れる時期、のような感じでしょうか？

シリアス部分が多いとは思いますが、お付き合い頂けると幸いです。お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぷらすマイナス★S。」に投票です

第65話 友達の定義

「予想外です」

普段と変わらぬ台詞に、幾分かの不満を乗せて、小野寺薫は呟いた。

神風翔が、優との電話連絡を終えて、すでに一時間以上経過している。だが、多少置かれている状況に変化があったものの、四人の現在地にさほど変化は無かった。

尤も、現在地においては変化こそないが、四人が置かれている立場には多大なる変化があったりするのだが。

「人……少し多過ぎないですか……？」

綾奈が、自分の眼前に広がる予想以上の人の群れを目の前にして、苦笑いとも泣き笑いとも取れる複雑な表情を浮かべる。

「ま、私にはなんとなくこうなると思ってたけどね。なんせ、あのKAKOの握手会なんだから」

翼が、薫に視線を送る。

「予想外です」

「……薫ってホント、そういう事に関しては疎いよね」

眉を顰める薫に、翼は溜め息をつく。

翼が破壊したゲーム機の弁償の代わりに提案された、即席ながらも設けられた握手会場は満員御礼。

薫自身は、己を有名人だと自負するつもりも、父親が有名なファッション雑誌を手掛けているとも思ってたなどいないのだろう。だが、以前掲載された雑誌の数ページが、どれだけ話題になっているのか、元々そういった事に無頓着な薫には理解出来ていなかったようだ。

「ですが、これで当初の目的は達成出来るでしょう」

「それは……そうだけど」

普段通り無表情に事を進める薫に、翼に続いて綾奈も溜め息をつく。

自分の事には疎いくせに、それ以外の事には計算高いのだから困ったものだ、と、翼と綾奈は顔を見合わせて苦笑し合う。

「図らずとも、少なからずこの握手会が行われている間は、優さん達は誰にも邪魔されず、この遊園地で親睦を深められる、という事になりますからね」

人員整理が一段落ついたのだろう。設置された会場の裏から姿を見せた神風翔が、まるで、彼女達の心を見透かしたかのように呟く。「そう、ですね……」

綾奈が、その言葉に複雑そうな笑みを浮かべる。

ここにいる三人は元々そのつもりで優達を誘った事は、翔には察しがついていた。勿論、その気持ちを汲んで、優が頷いた事も。

「けど、二人の間に何があったかは知らないけど、やっぱり姉妹が仲良くないのは駄目だろうからね」

それでも。そうする理由はある、と。翼は笑う。

「それぐらいの対価が無いとやってられません」

感情の起伏が感じられないが、彼女なりの優しさが込められた声色で、薫が答える。

「……（いつだって自分よりも相手を優先、ですか）」

そんな三人の姿に、翔は言葉にせず、ただ静かに微笑む。

三人が感じている不安。それは、七瀬汐・衣緒の登場で出来てしまった優との距離。

優が、いくら気配り上手とはいえ、関わる人間が増えれば、その分薫達と関わる時間が減ることは、どうしようもないことだ。

だが、我々に見れば、衣緒達によってもたらされた変化とは、第三者の関与によって生み出された、今を壊すエラーのようなものでしかないのだ。

そこまで考え至つて。翔は初めて、自分が最近感じていた、優に對しての不可解な怒りの原因に気がついた。

居心地が良かった今までを壊そうとしている、七瀬汐・衣緒達は然ることながら、それに同調した優に、自己の友人としての好意が

裏切られた気がしていたのか。それは独占欲とも言えるべき感情。

忘れていた。『一緒にいたい』という願望は、本来いつだって自分勝手な考えで。自分が持つ好意と、同等のものを相手に望み。それが叶わず、傷ついたフリをして相手に理不尽な怒りをぶつけるだけならば、とても容易い事を。

だが、この三人は、そういった感情よりも、優の気持ちを優先させた。

七瀬衣緒が、周りを拒絶して孤立している事を案ずる、優の優しさ。それは、親友である彼女達が良く知っている優の美德なのだ。それを否定してでも、自己の寂しさだけを主張するだけの片道切符の関係などではなく、お互いの思いを理解し合える関係。

それこそが、彼女達が望む関係であって、翔自身が居心地が良くと感じられた関係なのだと思います。自分の行動を思い返して苦笑いを浮かべた。

「若さゆえの過ちというものです」

どこまで心中を察したというのか。その様子を横目で見ていた薫が、そう言って、翔の背中をぽんぽんと叩く。

「ちよつと寂しいですけど、今だけ我慢ですよ」

それに追従するかのように、綾奈が微笑みかけてくる。

自分以上に、友人として優へ好意を抱いている彼女達がこうして笑っているのだ。過去の行いと自己への反省を糧として、再び変化した優との関係を楽しむとしよう。

そんな事を考え、翔はもうすぐ開始される握手会の準備の手伝いへ、再び向かうのだった。

第65話 友達の定義（後書き）

お待たせしました！

無事に65話を掲載出来たのは、読者様の温かい声援のおかげです。多謝！

片道切符の好意。それは恋愛感情だけではなく、人と関わっていく中では、よくある落とし穴だと思います。

第三部では『変化』という言葉がよく使用されます。それはとても様々な変化で、この関係の変化もその一つです。優の立場という変化があれば、その周りにも変化が訪れる。

突拍子のない空想のお話だからこそ、そういった心情の機微は綺麗に描写したいと思っています。

それが面白くない場合が多々あるのは、単なる作者の力量不足ですがorz

それでも、楽しんでもらえる様に頑張ってこそ書き手の本分。精進いたします。

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

それでは。如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第66話 問題ないでしょう

遊園地内に点在している、とある売店の前。

一通り乗り物を制覇した優達は、そこで飲料水を購入して小休憩を行っていた。

幸か不幸か。電話を切ったすぐ後に流れた、『あのKAKOの握手会が催される』という園内放送による効果だろう。休日で賑わっていたはずの遊園地は、一部を除いてすっかり人もまばらになっている。

それを好機と踏んだのか。あの小休憩の後も、衣緒はそのペースを緩めず、園内を所狭しと動き回った。結果、ジェットコースター等の人気が高い乗り物も、比較的速やかに乗る事ができて、汐も衣緒も満足気だ。

とはいえ、それに反比例して一緒に来ていたはずの友人達の状況は、きつと想像絶するものになっているに違いないと、いつかの海の出来事を思い返して、優は思わず溜め息をこぼした。

「貴女は、本当に良いご友人をお持ちですね」

その溜め息に含まれた意味を知ってか知らずか。向かい合うように座っていた汐が、優しく微笑む。

「……その心は？」

「入園時にも申し上げましたが……。汐様が未だにご学友達に馴染めずにいることを考慮し、親睦を深めようとお誘いしてくれたのでしょうか？」

そう言って再び謝罪の言葉を口にする汐に、なぜだか無性に気恥ずかしさを感じて、優は視線を逸らし、頬をぼりぼりとかいた。

「礼なら、薫達に言っちゃってくれ。今回の最大の功労者だろうし」
今頃、大人数相手に四苦八苦しているであろう友人達を思い浮かべ、優は、ただ皆が立てた計画に便乗しただけだと、照れからくるむず痒さを誤魔化すように笑う。

だが、その氣遣われた当人は面白くなかったらしい。

「そんなの言えるわけじゃないじゃない」

そんな二人の会話を遮る形で、汐の隣に座っていた膨れっ面の衣緒が割って入ってくる。

「そうやって氣を遣って、衣緒お嬢様にお近づきになろうとでも？
こちらが望んでいない氣遣いを見無遠慮に押し付けて、その分の見返りを求めるなんて卑怯。ボクはそんなのいらない。変に氣遣われる方が、いい迷惑」

まっすぐ見据えて、衣緒は言い切った。

普段、汐以外とはあまり話さない衣緒だが、まるで堰を切ったかのように吐き出された言葉は、紛れも無く本心なのだろう。

学校でも、コミュニケーションお断りと言わんばかりのオーラのようなものを醸し出していたことは誰しもが察していた。仮に言葉を交わそうと試みたところで、ただただ不機嫌そうに返事を返す程度でしかなく、会話が成立したとは到底思えない。

知り合って間もないが、その言動や雰囲気から捻くれ者だということは十分に理解していたつもりだが、まさかここまで酷いとは。

「お前な……」

優は軽い眩暈を感じつつもなんとか持ち直すと、衣緒のその物言いを窺めるかのように口を開く。皆の氣遣いを無に返すようなその物言いは、さすがに聞き流す事は出来ない。

だが、それよりも先に衣緒の予想外の発言が、優に待ったをかけた。

「それに、相手の気持ちを汲み取る点で言えば、キミも察してあげてないじゃない」

「は？」

察する？こいつは何を言っているのだろうか。

汐の言葉に、優はここ数日間の自分の言動を振り返ってみるが、まったくもって身に覚えがない。

「たぶん、私達の存在が、皆様と優様の交流を妨げる障害になって

いると言いたいのだと思われます」

首を傾げる優を見かねたのか。今まで静観していた汐が口を挟む。
「私達が来てからというものの、慣れぬ屋敷の暮らしに加えて、知り合って間もない私達の相手。ご多忙で、ご友人と以前のように遊べていないでしょうか？」

そう言つて、汐は申し訳無さそうに苦笑いを浮かべた。

「言葉が足りませんが、つまりはそういうことかと」
「なるほど」

「気づいてないなんて……おめでたい奴だね」

汐のフォローにより、納得いったと頷く優を、衣緒はふふん、と小馬鹿にするように笑った。その態度が癪に障った優も、反撃に打つて出る。

「まったく……。足りないのはその体型だけにして欲しいな」
「ぼそつと。だが、しっかりと聞き取れるような声で呟いた。」

その反撃は、衣緒に多大なダメージを与えたいらしい。衣緒は、ぶるぶると肩を震わせながら真っ赤になって叫ぶ。

「せ、成長期つて言葉を知らないのかー！」

「あればいいな。あれば」

「ふしゃー……！」

優の言葉に、衣緒が手にした飲料水をテーブルに叩きつけて立ち上がると、優へと向き直り威嚇するような声を上げる。今にも飛びかかりそうな勢いである。

その様子に、汐が一瞬、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしたが、すぐに笑顔になるとそそくさと椅子をずらして、ちゃっかり安全圏を確保した。

「係員の制止の意味を理解できないような、羞恥心の欠片も無い女に言われたくない！」

係員の制止。それに思い当たる乗り物は、たった一つだけだった。気に入ったのか、衣緒がやけに何度ももう一度と主張して、繰り返し乗ったジェットコースターだ。

「ジェットコースターと羞恥心が、一体どう関係してるんだよ！」
確かに、バイトっぽい係員が汐や衣緒をさておいて、優に乗る気なのかと確認してきたことがあった。

尤も。衣緒が「叫びそうだから心配してくれているのだ」と笑うものだから、深く理由も聞かずに大丈夫だと答えたのだが……。それが羞恥心とどう繋がるかは、優にはまったく理解出来なかった。
「ほら。女としての自覚ない」

まるで理解出来ない優を見て、衣緒は勝ち誇ったように勝者の笑みを浮かべる。

何か重要な見落としがあるのではないのか？

だが、思い当たる節が無い以上言い返せない。優はスカートをぐつと握り締めて、意味不明な悔しさに耐えていた。

「大丈夫ですよ。故意ではないとしても、ちゃんと押さえていましたから」

そう言つて、汐は優を慰める。

その言葉の意味はやはり優には通じないのだが、汐も正直に説明するかどうか判断に迷っていた。

故意でない場合、無意識にもスカートを押さえるという動作を行えたということだ。それは女性としての自覚が少なからず芽生えている証拠でもあるのではないだろうか？

未だに女性としての自分をどこか否定しているような優に対して、女性らしいと褒めるのはことが、果たして正しいのかどうか。

いや。見知ってからそう月日は経っていないが、その間、稀に出てくる口調こそ男性の名残を感じさせるとはいえ、仕草や動作はすでに女性そのものだ。では、女性らしいという言葉は最上級の賛美になるのでは？

「……困りましたね」

喧嘩の仲裁を行おうとしつつも、そんな堂々巡りな考えに、汐は頭を悩ませた。うんうんと唸ったまま、ぴくりとも動かない。

「……暇だね」

「暇だな」

当の本人達も、暫くの間はそれを見守ったものの、あまりにも動かない仲裁役にやる気を削がれたらしく、今では喧嘩もすっかり下火になっていた。

そんな時だった。

「悪い事しかなかった……少し気まずくて」

衣緒が、バツの悪そうに視線をあちこちに泳がせながら口を開いた。

「身元を証明するための緊急処置とはいえ、友達と疎遠になるような引越しまでさせちゃったからね。その上、その元凶である私が、我が物顔で友達の輪に入るなんて、相手からしてみればあまり気分の良いものじゃないだろうから」

そう言つて、まるで叱られた後の子供のようにこちらの表情を窺う衣緒の姿は、普段では考えられないような可愛らしさがあつた。常に無愛想に不機嫌の重ねがけのせいで、凶悪な顔つきのイメージだけが専行してしまいがちだったが、よくよく見てみればかなり可愛いのではないだろうか。

そう感じると、身長も低く、まだまだ幼さが残る体格だが、それが逆に不安げに揺れる瞳とツインテールに括られた、ブロンドの髪の魅力を実際立たせているかのように思えてくるから不思議である。

「遠慮してた？ 気を悪くするんじゃないかと思つて？」

「さつきからそう言つてる」

優の問いかけに、不機嫌そうに訴える衣緒。だが、どういふわけかその態度がほんの少し前と受ける印象とは違つてきているものだから、優は対応に困つてしまう。

「それに、自分自身がずつと付き合つていく人達じゃないからね。衣緒としてのボクが築いた関係は、元に戻った時にそのままお嬢様の関係になるんだから慎重にもなるよ」

そう考えると、どうしても人付き合いが億劫になるのだと、衣緒は苦笑する。だが、その苦笑いとは裏腹に、その言葉には絶対に元

に戻るといふ決意が込められているような気がして、優は少し驚いた表情を浮かべて、「なるほど」とだけ答えた。

そうだ。ずっと理解はしていたつもりだったが……。入れ替わるという事が、どれほどの影響をもたらすか。それは、被験者である優自身が一番理解できるはずだったのに、見逃してしまっていた。

「その……迷惑だった？ 今回誘ったこと」

「うん」

衣緒の即答に、優は申し訳ないような、そんな居た堪れない気持ちになってしまう。

だがその一方では、肩を落とす優を眺めていると、衣緒はなぜか妙な感覚に囚われていた。

この、人の気苦労を察しているのか察していないのか判断しかねる、言動の数々。思慮深いのか深くないのか。

だが、衣緒から見ても人を寄せつけるだけの魅力がある人物で、傍にいただけでその優しさを感じられた。それは、衣緒にとって大切なお嬢様にどこか似ている。そう感じた瞬間、衣緒はなぜだか急に自分が張っていた意地が馬鹿らしくなり、優の顔を捉えて微笑んだ。

「けど、そういう迷惑は嫌いじゃない。ありがとう、優」

それは、衣緒が始めて優の名前を呼んだ瞬間。

ほんの数分のやり取りの中で、衣緒にどのような心の葛藤があったかを伺い知る事が出来ない優にとっては、その微笑みは不意打ちだ。

「あ、うん……」

普段見慣れていない笑顔と、名前を呼ばれた衝撃に、優は気の抜けた返事しか出来なかった。

しかし、照れを誤魔化すように、衣緒が最後に小さく「皆にも感謝してる」と付け足すあたりは、さすがは天邪鬼といったところだろうか。

「嫌ってないなら、それでいい。これから仲良くなっていけばいい

と思うよ」

「そうだね。すでにお嬢様も交流を行われているようだし、大丈夫かな」

そう言うてはにかむ衣緒は、純粹に可愛い。

これが衣緒の本来の姿なのだろう。

天邪鬼で、なかなか本心を見せようとしないが、どこか他人を拒絶していた冷たい雰囲気は影を潜め、良くも悪くも子供っぽさがある笑顔を浮かべている。

「……あら？」

その様子に気づいた汐が、不思議そうに首を傾げる。

どうやら自分が黙考している間に、あの不毛とも呼べる言い争いはすでに終了しており、二人は仲直りをしているようだ。

「問題ないでしょう」

どうにも物思いに耽ると、周りが見えなくなるのが悪い癖だが、過程はどうであれ自分が望んだ結果になっているようなので、水を差すのも無粋というものだろう。

悩んだ結果に思いついた言葉が、お茶を濁すようなものだったことは情けないと思ったが、こうした場面で使うのならば問題ないはずだと、汐は満足気に頷く。

尤も。衣緒は、いつもながらの楽観的な自己完結で満足気に頷く汐を、なぜだか疲れきったような瞳で見つめて、静かに溜め息をついていたりしたのだが。

第66話 問題ないでしょう(後書き)

皆様こんにちは。如月コウです。

今回は少し長めになっております。

なかなか仲良し三人組のお話が無く、寂しい思いをさせてしまっていますね(え)

ですが、後数話で遊園地編も終了。

もう少しだけお付き合い下さいませ^^

さて。それと少しばかり皆様にお知らせがあります。

こういったところで公表するのは駄目だと思ったので、ブログにて詳細を書いております。

ご都合宜しければ、そのご意見・ご感想お待ちしております。

勿論、こちらでのコメントや評価もお待ちしておりますw

アドレスは、

パソコン <http://one-more-time.blog.drecom.jp/>

携帯 <http://one-more-time.blog.drecom.jp/m/>

となっております。

如月コウでした(礼)

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。(月1回)

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第67話 内緒の魅力

一方その頃。

ついさきほど開始された握手会は満員御礼で、訪れた人々でこつた返していた。

「KAKOさん、頑張って下さいね！」

「ありがとうございます」

集まった人数が人数なので、三人のうち誰か一人と握手が出来るという形を取ったが、それでも断然に人数が多いのは、やはり薫であつた。

押し寄せる人々を、丁重に、だが迅速に捌く薫の顔には、普段の無表情さと、かけているはずの眼鏡は存在しない。それだけで人々が、薫をKAKOとして認知する事は、神凧翔にとってはちよつとした驚きだ。

「まいったくの別人だな……」

翔と共に人員整理を行っていた霧島が、そんな薫の様子を見て苦笑いする。

「おかげで俺も全然気がつかなかった訳だけど」

モデルとしての仕事を行っている霧島は、バイトとはいえ同業者で同じ歳であるKAKOというモデルの存在は知っていた。しかし、それがあの小野寺薫であるということを知ったのは、つい先日のだ。

霧島曰く、元々KAKOというモデルは、ちょっとした有名人ではあつたらしい。

その業界で、今や知る人ぞ知る秋月省吾の専属モデル、KAKO。秋月省吾と共に、かなり幼い頃からモデルとして活動しているにも関わらず、どこかの事務所に所属しているわけでもなく、秋月省吾が手掛ける雑誌以外に、その姿を見せる事はなかった。

とはいえ、その限られた環境ながらも精力的に活動していたのだ

が、突然、ぴたりと姿を見せなくなった時期があつたらしい。

元々、数多く存在するモデルの中の一人だ。その一人のことなど、すぐさま忘れ去られるのが世の常というもので、世間的な知名度は皆無に等しかった。

「……はずだったんだけどな」

霧島は、そこで一旦言葉を切ると、溜め息混じりに「とある雑誌で、誰かが話題になることがなければ」と付け足した。

事情は知らないが、本格的な活動は控えてほそぼそ活動を行っていたはずの彼女が、再び注目を浴びる人物と一緒にフィルムに収まっていたのだ。多少なりとも世間的にも話題に上がるのは必然だろう。

尤も、今日の秋月省吾を語るには必要不可欠な存在でありながらも、その正体を知る者はいないことから、稀に姿を見せる度に業界内ではよく話題になっていたらしいが……。そんなことは、翔にとつては知るところではなかった。

「そういうのは疎いからね、薫は」

「悟技さん。抜け出してきた大丈夫なのですか？」

ファンと握手しているはずの翼が、突然背後から話に割り込んできたため驚きはしたが、翔は努めて冷静に切り返す。

「ま、あつちは人気が高い綾奈と薫が居れば大丈夫つしょ。ほい、水分補給」

翔の問いかけに、翼はまるで悪びれた様子もなくケラケラと笑い飛ばすと、手にした飲料水を霧島と翔に投げ渡す。

暦も九月となって夏は過ぎたとはいえ、まだまだ暑さが残っている上に、この人だからだ。そんな中、ずっと訪れた人々の誘導を行っていた二人には、この救援物資ありがたい。

「ふむ……」

立ったまま飲料水を一口だけ口に含んで喉の渴きを潤わすと、翔はおもむろに翼に視線を移す。

「ん？何？」

自分の分も持参していたのだろう。手にした飲料水を腰に手を当てて豪快に飲んでいた翼が、その視線に気がついて、飲むのを止めて首を傾げた。

「……………」

だが、当の翔からの返答はない。

翼は、怪訝そうな表情を浮かべながらも、再び飲料水に口をつける。

その瞬間だった。

「十分、貴女も魅力的だと思いますが」

まるで朝の挨拶を交わすかのように、爽やかに、かつ自然に翔は言った。

服装は水玉模様のカットソーに、クロップドパンツ。似合っていないとは、到底思えない。ましてや、知り合いという鼻屑目無しにしても、部活で鍛えている分、スタイルもいいように見える。

「確かに小野寺さんや菜乃さんも魅力的ではありますが、ご自分を卑下することはないように思えます」

それは、翔にしてみれば至極当然な、翼の姿を流し見た上での総評なのだろう。

特別これといった他意などなく、翔はただ素直な感想を述べたつもりだったのだが……どういうわけか。目の前の翼にしてみれば予想外の発言だったらしく、驚きのあまり飲料水が気管に入ってしまったいきりむせてしまっていた。

「大丈夫ですか？」

「げほっげほっ……。うん、大丈夫。ちょっと驚いただけ」

心配げに覗きこもうとする翔を片手で制すると、翼は大きく深呼吸してから顔を上げる。

「神風って、ずいぶんと変わったよね」

「……そうでしょうか？」

「うん。まあ、変に演じて距離をとられる方が嫌だから気にしないけどさ」

「そう言って頂けると助かります」

翼の指摘に動じることなく、翔はそう言って頭を垂れた。そういえば、随分と前から以前の神風翔を演じる事を止めてしまっていた気がする。

確かに、当初はあまりの変貌振りに、仲が良かった者は勿論ながら、家族ですらあらゆる意味で驚嘆していたのだ。親睦が薄かった彼女にしてみれば、その程度の変化など些細なことなのだろう。第一印象が、交流を深めるとどんどん変わっていくなんてことは、よくある話だ。

「あ、そうそう。霧島。薫のことは内緒だからね？」

翼もそれは同じらしい。それ以上特別詮索することもなく、話題は、翔の隣で飲料水を飲み終えた霧島へと移した。

「今回は、親友のためにつてやつで、こんなこともう二度としないだろうけど。それでも、そっちの世界じゃ話題になるんでしょ？いい？絶対話すなよ」

翼が、真面目な顔で霧島に言い寄る。

「お、おう」

その勢いに負けるような形で、霧島が小さく頷くのを確認すると、翼は再び笑みを浮かべて、霧島の背中をばんばんと叩く。

「そ、それはいいけどさ。なんで？」

手加減を知らない翼の張り手はかなり痛いらしく、霧島は眉を顰めながら、隠す理由が分からないと疑問を口にした瞬間だった。

「演じることが大変だからです」

「うわあ！？」

霧島の背後から、ひよっこりと噂の人物が顔を出す。

「小野寺さん。握手会はどうしたのですか」

「綾奈がいるので問題ないでしょう」

一応、KAKOの握手会として開催している以上、その本人が居ないのは致命的な問題のような気がするのだが……。あまりにも平然と答える薫に、翔は「そうですか」としか言えなかった。

「ですが、よくここまで来れましたね？」

薫が座っていた場所は、ここから然程距離は離れていないとはいえ、薫目的の人で賑わっている中を、何の騒動もなく来られるものではないはずだ。

その疑問は尤もはずなのだが、なぜか薫は僅かに驚いた表情を浮かべたが、すぐさま普段の表情に戻ると、見慣れた仕草をして見せる。

「この眼鏡をかけていれば、よほどの事がない場合は誰も気づきません」

握手会で外していたはずの眼鏡を、いつも通りくいつと押し上げて言った。

確かに、お世辞にも可愛いデザインとは言えない眼鏡をかけている分、その印象はかなり違ってくる。だがやはり、一番の原因は別のところにあるだろう。

「演じるって、モデルを？」

「はい」

霧島の質問に、薫は簡潔に返事を返す。

つまりは、こういうことを無表情で話すところが、あのモデルのKAKOとは結びつかないのだ。

しかし、こちらの薫に慣れている者からしてみれば、KAKOとして笑顔を振り撒く彼女の方に違和感があるから不思議なものである。

「真似事の笑顔を量産できるほど、器用ではありません」

「でも、それがモデルだ」

霧島は、まっすぐに薫を見据えて答えた。

薫の言葉に、同じモデルとして活動している者として、何か感じるものでもあったのだろうか。その表情は、少しばかり険しい。

しかし、その視線の先にいる薫は表情を変えず、

「ですから、私にはモデルという職業は無理でしょう」

そう言って、霧島の意見をきっぱり肯定した。

薫のあまりにも単純明快な返答に、霧島も返す言葉が見つからないようで、呆然としている。

「ま、一番合ってそうなのは優だけだね」

そんな薫の言葉は、翼にとっては当然だったのだろう。

「優がいたら、もっと混雑していたかも知れないし、そしたら、今頃こうして私達ものんびり話してられないって。きつと」

呆然としている霧島を横目に、翼はケラケラと笑いながら、再び霧島の背中をばんばんと叩いた。

その翼の言葉に、薫は賛同するかのように小さく頷きながら、視線を握手会の会場に送る。

「とはいえ」

そして、ぼつりと呟く。

その言葉につられるような形で、全員が握手会の会場に視線をやると更に一言。

「さすがに、綾奈一人では限界があったようです」

視線の先。つい先程までは、薫や翼、そして綾奈が座っている姿を確認できたはずだったのだが、いつの間にか、まったく見えなくなっていた。

どうやら、二人が抜け出した分のすべてが、綾奈にしわ寄せとしていつてしまったらしい。結果、綾奈は今頃あの人だかりの中に埋もれているのだろう。

「あちゃ。さすがに放置しすぎたか」

「尊い犠牲を払いました」

翼と薫がそれぞれの心境を語った、すぐ後だった。

「二人ともどこいったのー！ー！」

いつの間にか孤立無援状態になっていた綾奈の、今にも泣きそうな声が辺りに響き渡った。

第67話 内緒の魅力（後書き）

皆様、こんばんは。如月コウです。

少々、ゆつくり構え過ぎていたせいか、日曜日に公開と言っておきながら、冷や汗ものでした。

遊園地編が、普段よりも長いのは登場キャラが多過ぎるせいかと思われます（え）ただ、まあ普通の小説の一話分、という量では、適量ではないかと勝手に思ってみたり。

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

小説情報や日記をブログにて公開しております。

もし宜しければ、ご覧下さいませ。

パソコン <http://one-more-time.blog.drecom.jp/>

携帯 <http://one-more-time.blog.drecom.jp/m/>

となっております。

如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス*5。」に投票です

第68話　そこまでは気がまわらない

夕闇が濃くなり、そろそろ日が沈もうとしている。

優と一緒に行動していた汐と衣緒は、どうやらはしやぎすぎたせいか、些か疲れた面持ちで、ベンチに腰掛けていた。

当初の予定通り、各自連絡を取り合った結果、遊園地敷地内の真ん中に位置する、大きな時計の下で待ち合わせとなったのだが……どういう訳か。藍璃と吉良の姿がない。

約束事には厳しい藍璃が、約束の時間に遅刻することは稀なのだが、一緒にいた相手が吉良だ。何があってもおかしくない。そう感じるのは間違いではないはずだ。

とはいえ、それ以外にも問題があったりするのだが。

「……人、多くない？」

周りにいる人々を見て、優は首を傾げた。

確かに、この場所は待ち合わせ場所としては最適だが、それでもこの場にいる人数は異常に思える。だが、ここに辿り着くまでの間にも、かなりの人を見た気がする。

いつものメンバーが全員集まれば、大所帯になる上に、男女共にモデルとして誌面に載ったことがあるとなると、一度目立ってしまうと面倒な事になりかねない。

ただ、救いがあるとすれば、明かりがあるとしても辺りは暗くなっているので、顔を下に向けてさえいれば、ほとんど声をかけられることはなかったことだろうか。

「でも、さすがにずっとここに居ると大変かも知れませんか……」

つい先程合流を果たした握手会組の綾奈が、周りの視線に妙に体をビクつかせながら答える。

「その……綾奈？大丈夫？」

優は、そのあまりの挙動不審ぶりに、なんと声をかけていいものか一瞬迷ったが、当たり障りのない言葉を投げかけてみた。

「な、なんとか」

そう言って、優の言葉に努めて笑顔で返す綾奈だが、その表情はやはり硬かった。

握手会で翼と薫に放置された後、綾奈なりに頑張ったつもりだったが、その苦労は報われず、人の波に飲まれてボロ雑巾のようになったせいで、こうも人が多いと、その時の恐怖心が蘇えるらしい。

「大丈夫です。まだいけます」

心配そうに自分の顔を見つめる優を見て、綾奈は小さくファイティングポーズをとる。

優にしてみれば、そのポーズで一体何が大丈夫なところをアピールするつもりなのか気になるが、かなり大丈夫じゃない事は理解できた。

尤も。その元凶である翼と薫は「綾奈は名誉の重症を負いました」とだけ言い残して、翔と霧島を引き連れ、さつさと藍璃と吉良を探しに辺りを見回りに行っているのだが。

「気分が悪いなら、ちゃんと言ってね？我慢することはないんだから」

とはいえ、握手会での綾奈の悲惨を、その場にいなかった優が知るわけがない。疑問に抱きつつも、優は再び当たり障りのない言葉を口にする。

「ありがとうございます」

それでも、そう言って貰えただけでも幾分か気分が楽になったのだろう。綾奈は微笑み、小さく頷いた。

「優さん！」

それとほぼ時を同じくして、聞き慣れた声が辺りに響き渡る。

その声に反応するように、声がした方向へと視線を移すと、藍璃がこちらに手を振りながら笑顔で駆け寄ってきた。

「凄い人ばかりで、ここまで来るまで時間がかかったちゃいました」

優達を発見できて安心したのか。藍璃は、深く安堵の溜め息をひとつ零して乱れた息を整えると姿勢を正す。

「あれ？吉良君は？」

だが、どういふわけか吉良の姿が見当たらない。

不謹慎ながら、どうせボロ雑巾のようになって引き摺られてでも来るのではないかと予想して優だが、まさか姿自体が見えないとは完全に予想外だった。

「え？あ、それは……」

吉良の名前を出すと、なぜ藍璃がせわしなく視線を泳がせて、明らかに挙動不審になる。

なぜかそれを追求するのはとても怖いのだが、そうも言っていない。

意を決し、優が問おうとすると、

「ああ。やっぱりそうだったんだ」

「そのようです」

示し合わせたかのように、ベンチで休んでいた汐と衣緒が口を開いた。

「やっぱり？」

「うん。ボクも詳細は知らないけど」

汐と衣緒とはずっと一緒にいたはずだが、何か騒動があったなんて気づきもしなかった。

「救急車で運ばれていった」

「きゅ、救急車？」

どうして衣緒達がそんなことを知っているか。疑問ではあるが、救急車という物騒な単語にその疑問は打ち消され、優は目を丸くする。

どういった経緯でそうなったのか、皆目検討がつかない。どうしてそうなったのか、藍璃に問おうと視線を移すと、藍璃は断固拒否と言わんばかりに顔を背けた。どうやら語る気はないらしい。

それならば、と、衣緒と汐に視線を移す。

「優様は、兵藤様をご存知でしょうか？」

困ったように苦笑いを浮かべつつ、汐が答える。

「えっと、確か運転手の……」

おぼろげな記憶を探り、なんとか思い出したが顔が思い浮かばない。

優は、運転手の兵藤という人物を紹介はされたものの、サングラスで表情が分り難く、その上挨拶を数回交わした程度しか面識がなかった。

「一応、ボク達のボディガードも兼ねてるんだけどね。それで、今日は断ったはずなんだけど、やっぱり心配で遊園地内には居たみたい。それで偶然二人を見かけて、連絡をくれたの」

汐が言う二人というのは、藍璃と吉良のことだろう。

「何か問題でもあったの？」

「それは……」

衣緒は、優の質問に答えようとした瞬間、ほんの少し視線を横にずらして、藍璃を見る。

その視線に気づいた藍璃は、すぐさま頭をこれでもかというほど左右に振って、拒否の意思を表す。

そんな藍璃の姿に、汐は深く溜め息をついて「別にそこまで恥ずかしがることじゃないと思うけど」と小さく呟いた。

「それは？」

「キミが知る必要がないことだよ」

優の追求に、汐はつまらなさそうにそう答えると、それ以上は答える気はないといった感じにそっぽを向いてしまう。

それでも、優にしてみれば、自分だけが知らないというのはどうにも納得できない。

再び藍璃に視線を戻して、じいっと見つめる。こうなれば、直接本人から聞き出すほか方法はない。そう考えた瞬間だった。

「全員揃った？んじゃ、逃げるよ！」

走って戻ってきた翼が、目の前の藍璃の手を引いて、その場から立ち去っていく。

「え。ちょ、ちょっと！翼！」

突然の出来事に、一瞬呆然と立ち尽くした優だが、すぐさま我に戻ると、どんと遠ざかっていく翼の名前を呼ぶ。

「だー！ー！そんな大きな声で呼んだら、逆効果だってば！優！」
そう言いつつ、翼本人も大きな声で返事を返すのだからわけが分からない。

「さて。事態が更に悪化したので、私達も逃げるとしましょう」

ただただ呆然と優が二人の姿を見送っていると、いつの間にか戻ってきていた薫が優の隣に立っていた。

「神風翔と霧島京一は、そちらの二人をお願いします」

「了解いたしました」

「OK」

状況が分からない優を放置したまま、淡々と逃走の指示を出す薫。そして、それに従う翔と霧島に、優は痺れを切らしたように叫ぶ。

「だからどうして？」

「ホントにおめでたい奴だね。キミ」

促されるように走り出した優の問いに、やれやれといった表情で衣緒が答えた。

「何が！」

「少しでも周りに注意を向ければ、ご理解いただけるかと思いが」

今度は、衣緒の手を引つ張りながら隣を走る翔が、呆れた様子で優の疑問に答える。

なぜか今日はやけに皆から馬鹿にされることが多い気がして、優は不機嫌そうに頬を膨らませながらも、言われた通りに周りに視線を移してみた。

すると、なぜか妙に自分達が注目を浴びていることに気づいた。
なんだか、今朝方も同じ視線に晒されたような気がする。

「この大衆の面前で、大声でお互いの名前呼び合えばバレるに決まってるじゃん」

「握手会で薫様や翼様がこの遊園地内にいることは周知の上でしょ

うし。今朝の一件で優様の存在も噂にはなっていたようですよ？」
そんなこと今更言われても。

優は思わず、霧島と汐の発言に心の中でツッコミを入れるが、それでもこの状況を作り出した一端は自分にある以上言い返すことが出来ない。

大衆の好奇の視線に、そして仲間内から向けられる非難の視線を向けられ、居た堪れなくなった優は、やけくそ気味に叫んだ。

「そこまで気がまわるかー！」

そんな優の様子をみて、その場にいた全員が心の中で一斉に溜め息をついたことは………なんというか。ここだけの内緒、ということにしておこう。

第68話　そこまでは気がまわらない（後書き）

皆様、こんばんは。如月コウです。

今回は繋ぎの話なので、今まで以上に面白くないかも知れません。

r z

説明部分が多いと、どうしてもそういう部分が出てくるんです……。

・。(。ω。)。・。エーンエーン

現在のお話上、面白おかしい文章が書けないですが、もう暫くお付き合ひ下さいませ。

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的不おかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

小説情報や日記をブログにて公開しております。

もし宜しければ、ご覧下さいませ。

パソコン <http://one-more-time.blog.drecom.jp/>

携帯 <http://one-more-time.blog.drecom.jp/m/>

携帯 <http://one-more-time.blog.drecom.jp/m/>
となっております。

如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス* S。」に投票です

第69話 その可能性は考えてもみませんでした

「なるほど。これが原因だったのか……」

少し離れた空を彩る花火を見つめながら、優は呟く。

あれから、自分たちの存在に気づき、追いかけてきた大衆からなんとか逃げきったものの、優は夜に開催されているらしいイベントからは少し離れた、小さな子供達の憩いの場として作られたのであろう遊具の上に腰掛けていた。

「うん。ホントは、これをもっと近くで皆一緒に見るのも目的だったんですけどね」

綾奈がすまなさそうに頷く。

「今日でこの花火のイベントは終了だったからなー。ま、こうして人が少ない場所で見れるんだからいいじゃん。ね？優」

「そうだね」

背後から抱きついてくる翼に、優は相槌を打つ。

若干距離は離れているものの、人が少ない分気兼ねなくのんびり楽しめるので、特別残念には思わない。

男性陣の翔と霧島は、どうやら昼間の握手会の手伝いのせいか疲れているらしく、下に敷き詰められた芝生の上で座り込んでしまっているし、女性陣は女性陣で花火を楽しんでいるようなので、問題はないだろう。

もつとも、元々近くで見えるはずだった予定を、急遽変更しなければならぬようにした原因は、主に翼と自分にあるのだから、優にしてみればこちらが謝罪することはあっても、綾奈が謝罪する必要などないというものだ。

「綾奈。ありがとう」

ただ、こちらが謝罪の言葉を述べたところで、綾奈との謝罪合戦になることは目に見えている。だから、優は謝罪ではなく、感謝の言葉を告げることにした。

綾奈は嬉しそうに微笑んで、「うん」とだけ返事を返してくれる。それだけで、場の雰囲気は温かくなったように感じられる。

「衣緒。花火見えやすいように肩車しようか？」

「しゃー……！」

とはいえ。全員が合流してからというものの、なぜか妙に翼が衣緒にちよっかいを出して、その度に衣緒が奇声を上げているのが気になるといえば気になる。

「優！こいつどうにかして！」

威嚇の声にめげずに抱きついてくる翼は、自分だけでは対応できないと感じたのか。衣緒は、隣で笑って見守るだけの汐の助力を諦め、纏わりつく翼を剥がそうと必死にもがきながら優に助けを求める。

「二人とも、あんなに仲良かったっけ？」

だが、険悪というには程遠く、お互いにじやれているとしか思えないその光景は、助けていいものかどうか判断に迷うというものだ。衣緒の救援をとりあえずスルーして、優は首を傾げる。

「貴女のおかげでしょう。衣緒の雰囲気が穏やかになったのは」

その疑問に答えたのは薫だった。

「衣緒が歩み寄ってくれるのならば、こちらが遠慮する必要などありません」

その薫の言葉に綾奈はうんうんと頷く。

そんな二人に、優は驚きを隠せなかった。

確かに、薫の言うように衣緒の雰囲気が変わったように思う。

仲良くなっていけばいいという優の言葉に、素直に笑って頷いてみせた通り、衣緒は皆に対しての態度をぎこちないながらも変えてきている。

今までは、誰かが話題を振らなければ言葉を発する事すらなかったのだが、今では時折自分から話に入ってくるようになったのだ。そうやって、すぐさま実行に移す行動力を持つ衣緒も凄いと感じたが……。何より優を驚かせたのは、そんな衣緒の心情を察したか

のような、薫や綾奈、そして、今も抱きついて離れない翼の衣緒への接し方だった。

「けど、どうして急に？」

今朝までは、抱きつくどころか、七瀬と呼んでどこか他人行儀だったはずが、今では衣緒と下の名前で呼んで、ああしてじゃれあっている。

「こうして、友人一同で花火を見れたのです。翼も些か羽目を外してしまっているでしょう」

だが、薫は翼に視線をやることなく、そう言って微かに口元を綻ばせる。

「え？」

「前は優さんも、それに汐さんも衣緒さんもいなかったもんね」
薫の言葉にきょとんとしている優に、綾奈は微笑んだ。

そんな二人の態度に、最初は呆然としていた優だが、少し考えるから、ああ、そうかと納得いったように微笑みを返した。

確かに、前回みんなで行った海での花火大会では、自分が勝手な行動をしたせいで花火大会どころではなかったと、翔が言っていた。今回は、そのとき見れなかった花火をもう一度、今度は一緒に見るための企画でもあったのか。

そして、汐と衣緒の二人も。友人として、こうして一緒に花火を見ながら騒いでいる。

「それなら、あれも仕方ない……のかな？」

それを素直に喜んでくれている翼の、あの行動を止められるはずがない。あれは、友人としての翼なりの友好の証なのだから。

「はい」

「そうですね」

それを知っていたのだろう。二人は、優の言葉にただただ頷くだけだった。

「それでも、あれは少しテンションが高い気がするけど」

衣緒から抱きついて離れない翼を指差し、優は困ったように苦笑

いを浮かべる。

「衣緒のあの天邪鬼な言動は子供そのもので、毎日子供の面倒を見ている翼にしてみれば大好物です」

大好物。

その薫の物言いに、思わず優は笑ってしまった。

だが、その表現が一番翼にしっくりくるのだから不思議なものだ。そういえば、自分も女になってしまった当初は、天邪鬼とも取れる言動が多かっただろうし、翼のあのスキンシップにはどう対応したらいいのか分からず、困惑するばかりだった気がする。

そう考えると、衣緒の姿はまるで、昔の自分自身をそのまま見ているようで可笑しかった。

「ありがとう」

それからごめんね、と。優は独白のように呟いた。

衣緒と自分の間にあった会話など、知るはずのない彼女達が見せた、彼女達らしい気遣い。

それは、かつて自分にも向けられたことがある優しさで、とても感謝していること。

だが、それは優としての自分に向けられたものであって、神風翔としてのものではなく。それが、彼女達を欺いているように思えて、その罪悪感はまだに消えることなく残っているということ。

そんなすべての思いを込めての、優なりの感謝と謝罪の言葉だった。

その言葉に、二人は少し驚いたような表情を浮かべたが、

「問題ありません」

「みんなで笑ってお話できる方がいいですから」

そう言って、小さく笑ってみせた。

「たーまやー」

花火も終わりが近いのだろう。段々と彩り鮮やかになっていく大空に向かって、翼が大声で叫ぶ。

「たーまやー」

それにつられるかのように、みんな顔を合わせると笑い合い、火花が彩る空に向かって叫んだ。衣緒も汐も。疲れて座り込んでいた翔も霧島も、今では最後と言わんばかりに叫んでいる。

「あれ？」

そんな時。ふと、先程のやり取りでの疑問が優の頭の中に過ぎり、その疑問を口に出していた。

「そういえば……。私がもし衣緒の説得に失敗していたらどうしてたの？」

その疑問に、薫と綾奈は鳩が豆鉄砲をくらったかのような顔をして、お互いの顔を見合わせて首を傾げる。

そして、しばしの間見合った後、向き直すと、心底驚いたような表情を浮かべ、優を呆然とさせる言葉を言い放った。

「その可能性は考えてもみませんでした」

第69話 その可能性は考えてもみませんでした（後書き）

予想以上に忙しいorz

それでも、書き溜めていたこの話だけでもなんとか……（あ）

寒くもなっているので、体調管理だけはしっかりしたいものです。

次話は、エピソード的なお話です。楽しみにしていて下さいませ。

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

小説情報や日記をブログにて公開しております。

もし宜しければ、ご覧下さいませ。

パソコン <http://one-more-time.blog.drecom.jp/>

携帯 <http://one-more-time.blog.drecom.jp/m/>

となっております。

如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第70話 変わらぬ心と変わり始めるもの

「……はい。そうですか。これからよろしくお願い致します」

花火大会も終わった、帰路の途中。

汐は、一言お礼を告げて携帯電話を閉じて、深く溜め息をついた。携帯電話を使用していた自分に、気を遣ってくれたのだろう。少し前を歩く友人達に視線を移し、微笑む。

最近、何かと色々忙しい日々が続いていたが、慌しさが楽しいと感じたのは、汐にしてみれば本当に久しぶりだった。

「これで、少しは今日の恩返しになるでしょうか」

「みんな、そういうの気にするようなタイプじゃないようだけど……」

きつと喜ぶ、と笑顔で返す衣緒を眩しそうに目を細めながら見つめ、汐は思う。七瀬衣緒という人物が、今この時彼女であって良かった、と。

幼い頃から、特別扱いという孤独感の中で育てられて、いつの間にか笑顔を振り撒きながらも、他人とは一定の距離を保つようになってしまっていた自分。

それは、少し前を歩く彼女達が望む友人の形ではないだろう。

「でも、宜しかったのですか？」

去来する鈍い痛みを胸に感じながらも、それを衣緒に悟られないように努めて、汐は疑問を口にした。

「ん？」

「先程の件ですよ」

質問に対して首を傾げる衣緒に、汐は、手にした携帯電話を無言で指差す。

「優さんを24時間こちらの監視下において、Sウイルス解決の糸口を探すと言いだしたのは貴女でしょう……」

「そ、それはそうなんだけど」

呆れたような汐の物言いに、バツが悪そうな表情を浮かべる衣緒。それもそのはずだ。

衣緒として存在していたはずの自分と、汐として存在していたはずの衣緒が、ある日突然、目が覚めたら入れ替わっているという常識はすれな事態が起こったのは、今から数ヶ月前のこと。

その日。父親が経営している会社が運営している、オンラインゲーム夢幻学園を二人でプレイし終えて、寝ようとしたときの出来事が原因だ。

Sをアンインストールしますか？

無機質な画面の真ん中に、ぽつりと浮かび上がった一文。

それを了承してしまった理由を挙げるとすれば、眠り眼で思考が鈍っていたということ。そして、確認もせずにセキュリティソフトに摘出されたウイルスか何かだと、勝手に思い込んでしまったことだろう。

それ以来、衣緒となってしまった汐は、必死に元に戻る方法を探してきた。

そして見つけた、もう一つのSの存在。

だが、それはいくつかの類似点はあるものの、自分達とはまた違った形で存在していたため、彼女は衣緒としての立場を利用して、24時間監視できるようにしたのだ。

その案は、元々衣緒であった汐からしてみても、かなりの無茶が必要だったが、それに見合うだけの情報は得られるだろうと渋々承諾したのだが……。

どういう訳か。衣緒は、その案を白紙に戻すと言ってきたのだ。

「優さんを自宅に帰す。つまりは、監視を止めるということですね」深く溜め息をつく。だが、呆れたような口調だが、その表情は穏やかだ。

いや。本当は、その理由など、汐は十分過ぎるほど理解していた。友達だから。

言葉にしてしまえば、それはとても簡単なこと。

ただ、何事も打算で動いてしまう汐にしてみれば、その行動理念は、自分には到底理解できないものなのだと感じてしまう。

だからこそ汐は、そうやって素直に感情を優先して動ける衣緒を尊敬もしているし、彼女のように在りたいと何度も願ってきた。

そう考えると、Sという代物が、人の変身願望がパソコンという媒体を通して、歪ながらも形を成したものかも知れないという神風翔の推測は、正しいように思える。

「でも。諦める訳じゃない」

それでも、やはりその願いは歪なものであると。それを証明するかのように、今は衣緒として存在している汐が呟いた。

「確かに、私は衣緒に憧れていたけど。そう在りたいと願ったこともあったけど……。今を望んだわけじゃない」

真摯な眼差しで。前を見据えて。彼女は汐としての言葉を口にした。そして、前を歩く友人へと駆けていく。

その姿に。言葉に。汐であることを願った衣緒の胸が、僅かに痛んだ。

それでも、私はこうして汐としていられる時間が愛おしく、変えたくない。

もし、その思いを彼女に告げてしまったら、ずっと築き上げてきた信頼関係や、尊敬の裏側にある、嫉妬という醜い感情を認めることになってしまう。

その結果が、心の中ではこのままであることを望みながらも、彼女が望んだ、元に戻るといふ願いの手伝いをしている自分が在るところが、滑稽で仕方がなかった。

そんな矛盾の末にある、今の状況を受け入れられるほどの心の余裕は無い。

私には、あの輪には入れない。

その言葉が脳裏を掠めた瞬間。汐は、顔を下げて、歩みを止めてしまう。

だが――

「密談は終わりましたか？」

「……………え？」

前方からの突然の呼びかけに、汐は下げていた顔を上げる。

その視線の先に立っていたのは、翔だった。

「終えたようですね」

翔は、呆けている汐の返事を聞くよりも先に、正面に立ち、語り掛けてきた。

「……………」

突然の出来事に、汐は一瞬何が起きたか理解できないでいた。

それでも、何かを言わなければならない気がして、汐は必死に言葉を探す。

だが、いったい何を？

衣緒には話していないが、汐に言わせてみれば、現神凧翔は謎が多過ぎる。

Sという異質なものの中で、一番の異質物を挙げるとすれば、今まさに自分の目の前にいる人物の存在だ。

その理由は至って簡単であり、明確だった。

彼が何者か分からない。

その一点尽きる。

あの日のサーバー情報の中に変化が見られたのは、YOUというキャラクター唯一人。

だが、それだけではプレイヤーの個人情報を特定するには至らない。

それは、元々、無幻学園のような基本的に参加無料のオンラインゲームにおいて、ちゃんとした個人情報を入力する人が少なくなってきたという事が必要因の一つでもあるが……。

汐は、その無幻学園に参加するプレイヤー情報を確認出来る立場にいる者であって、ある程度確認し終わった上での見解なのだ。

しかも、ただ個人情報でたらしめなプレイヤーをすべて調べ上げたわけじゃない。

優のように、キャラクター自体が変化した以外のことでも、何らかのSの影響下にあるプレイヤーがいるかもしれない。

だからこそ、プレイヤー情報が不明瞭なキャラクターに対して、『バグが発生した』と発表し、初期化することで不審人物を炙り出したりもした。

通常、これまでの情報が消えたのならば、大抵はそのゲームを再びやり始める気には到底なれないだろう。だが、万が一、Sと関わりを持った人間がいるとすれば、無幻学園を辞めるわけにはいかなはずだと考えたのだ。

そして、汐の思惑通り、あつという間に調べる必要性がありそうなプレイヤーを絞り込むことが出来た。

だが、どうしても確認できないプレイヤーが数人いることも事実だ。

その一人が、神風翔としてこの場に存在しているとしたら？

そして、これは可能性としての話だが……。その人物こそ、この状況を生み出した元凶であって、自分達を監視するためにこの場に入り込んだのならば。

そう考えれば、ある程度の辻褄が合う。

ただ、そうなると、優という人物は餌で、それに釣られて寄ってきた自分自身も、その計略にはまってしまっていることになる。

だからこそ、その人物から優を遠ざける意味で衣緒の案を承諾したし、必要以上に彼との接点を持たないようにと努めていた。

汐にとっては、警戒心はあっても信頼という言葉には程遠い存在。それが神風翔という人物だった。

「……どうして」

汐は、思わずそう口に出していた。

その言葉に、翔は怪訝そうに眉顰め、苦笑した。

「衣緒さんは変わられましたね」

「は？」

予想外な翔の言葉に、汐は思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。

「これで、もう少し貴女も皆さんに対しての警戒心を解いて下さると助かるのですが」

いつまでも警戒心を解かない汐への皮肉のつもりだろうか。

翔は、やれやれといった感じに大げさに溜め息をつく。

「あ、貴方には関係ないことでしょう！」

まるで、心中を見透かされたかのような翔の言葉に、汐は顔を真っ赤にして反論する。

良くも悪くも、当たり前障りのない友好関係を築くことは得意だった汐にしてみれば、その奥に秘めた警戒心を指摘されること自体、初めてのことだった。

見透かされたことに、怒りと、なぜか無性に恥ずかしさを覚えて、汐は顔を伏せる。

そんな汐に、再び困ったように苦笑いを浮かべつつ、翔が口を開く。

「何を遠慮しているのかは解りませんが……」

翔はそこまで言って一呼吸おくと、視線を、前を歩く優達に移して……。

「皆、貴女が肩を並べて歩いてくれることを待っています」

寂しげに呟いた。

「……………え？」

その呟きの中にある寂しさの正体を、汐はよく知っている気がした。

顔を上げて、翔の表情を伺おうとしたが……。

「それに、待たせ過ぎると後が怖いので」

その表情は、すでにいつもの人を食ったような笑顔で微笑んでいた。

「そうですね」

あまりの変わりように、一瞬呆気にとられたが、汐はすぐさま微笑み返す。

翔の後ろには、立ち止まって談笑している優達の姿が見える。

時折、こちらの様子を確認しながら、ずっと自分達の到着を待つ姿は、汐にとつてはとても眩しかった。

そして、それを眩しいと感じているのは、自分だけではないだろう。たぶん、目の前に立つ翔も、きっと。

それは、先程の眩きにあつた寂しさの根源を知っているから。

自分には、あの輪に入ることが出来ない。

ただ、見守るだけしか出来ない自分への嘲笑と、それでも大切な誰かが笑っていてくれるならばそれでいいと。

そう願っている者だからこそその眩き。

それは、汐自身が衣緒に抱いている想いとなんら変わらないもの。そう思うと、なぜか心が軽くなったように感じられるから不思議だ。

つい先程まで、神風翔という存在は、もっとも警戒すべき存在だったはずなのに、今では妙な共感と安心感をもたらす存在になっているなんて。

汐は、自分がこんな単純な人間だったことに驚きつつも、それを「嫌じゃない」と思っている自分がいることに気がついて、思わず頬を緩めてしまう。

「残念ながら、警戒し甲斐のない人達ばかりです」

翔が、先に待つ友人達を見て笑う。

「確かに。警戒するのが、馬鹿らしく感じさせられますね」

汐も、それを見て微笑む。

そして、そのままの笑顔で、汐は言った。

「でも、貴方はまだまだ油断出来ない人物ですが」

こうして、警戒心をそのまま言葉にするなんて、普段の汐ならば考えられない愚行だった。

でも、今はこれでいい。

そう思えるから、不思議だ。

「確かに」

そんな汐の物言いが面白かったのか。翔は、必死に笑い声を抑え

ながら、先程の汐の返答を真似る。

「今後、貴女が、警戒するのが馬鹿らしく感じれるように努力しましょう」

だが、汐はそれを不快には感じなかった。

「ちなみに。現状、私の中での、貴方に対する好感度を上げる方法が一つあります」

「聞きましょう」

「ささやかな疑問に答えてくれることです」

まるで、翔を試すかのような眼差し。

しかし、汐の表情は穏やかだ。汐の性格上、質問ではなく疑問として投げかける時点で、まともな返答は期待していないということは、翔にも理解できていた。

それは、汐なりの不器用な譲歩のつもりなのだろう。

ならば、翔の返答は決まっていた。

「聞きましょう」

翔は頷く。

その姿に、汐は満足気に微笑む。そして、自分の中にある率直な疑問を口にした。

「貴方の正体は、響夜ですか？」

第70話 変わらぬ心と変わり始めるもの（後書き）

とりあえず、目標のところまでの更新はなんとか間に合いました（汗）

これは色々と後書きがし難いお話です（え）

無茶な優の環境な変化には、実は衣緒、というよりも汐の思惑があったからこそその出来事。

今回、ここに辿り着くまでに時間がかかったせいでもあります、衣緒と汐が出てきてからのお話は面白味が欠けてしまっているという状態に陥ったのは、自分の構想内でのお話を、上手く表現しきれていなかった気がします。

反省するべき点が多いですが、今後の糧にしていこうかと思います。次回から、再び学園生活のお話になります。

汐と衣緒が本当の意味で友達となった新しい学園生活にご期待ください。

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

小説情報や日記をブログにて公開しております。

もし宜しければ、ご覧下さいませ。

パソコン <http://one-more-time.blog.drecom.jp/>

携帯 <http://one-more-time.blog.drecom.jp/m/>

となっております。

如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第71話 疑惑+戸惑い

「どういう意味だ」

あまりに二人が遅い事に痺れを切らせて、近寄ったそのとき。偶然聞こえてしまったその言葉は、少なからず優にとっては衝撃的だった。

だが、そんな優の言葉に、汐は心底驚いた表情を見せる。その驚きの表情が、更に得体の知れない不安感を煽る結果となった。

「それって、どういう……」

「優さんのむやみやたらと人を疑わないところが美德ですからね」
「どういう意味だと、優が口にしようとするよりも先に、翔が汐への嫌味半分の言葉を口にしていた。」

だが、その言葉は、今の優には辛い言葉で。

無性に、腹が立った。

「……どういう意味だ」

もう一度、確認するかのように呟く。

その言葉に、どれほどの覚悟を要したのかを察したのか。

目の前に立つ翔は、さっきまでの笑顔を崩し、真摯な眼差しで俺を捉える。

そして――

枕元で、聞き慣れた目覚まし時計が鳴っている。

「……ん」

眠り眼のまま、包まった布団から手を伸ばし、目覚ましのアラームを切ると、再び睡魔が襲ってきた。

優が男だった頃に比べると、小一時間ほど早い時刻だ。睡魔も襲ってくるはずである。

だが、以前と同様の時間では、女性としての身支度に要する時間

に違和感があるという翔達の指摘により、こうして早めに起きる羽目となったのだ。

当初は、優も気にせず睡魔に身を委ねていたりしたのだが、七瀬家で住むことになった時は、そういう訳にはいかなかった。

なにせ、あの神風藍璃が専属の使用人として、常に身の回りの世話をしようと目を光らせているのだ。優はボロを出さないためにも、可能な限り、女性の習慣とやらを自分で出来るようにならなければならなかった。

結果、こうして鏡の前で座って、ブラッシングやら化粧水やらを、自然と行えるようになったのは、果たして喜ばしいことなのか。

男として駄目な気がするのは、きっと気のせいではないだろう。

（嫌な夢見ちゃったな……）

目の前にある鏡に映った、女としての自分を見ながら、優は深く溜め息をついた。

「あれから一週間経ったのか……」

優は、そう言っただけで慣れた部屋を見渡す。そこは、七瀬家の不要なほどに馬鹿でかい一室などではなく、神風翔の部屋ではないものの、女に変化してから、ずっと優が過ごしていた神風家の一室だった。

「優さん。朝ご飯準備出来てますよ」

「ん。ありがとう」

扉越しの藍璃の呼びかけに返事をして、リビングへと向かう。何もかも、ほぼ元通りだ。

再び神風家に帰ることが決まったのは、みんなで行った遊園地からの帰り道のこと。

藍璃を家へと送り届けて、いざ七瀬家へと帰ろうとした時、衣緒と汐は、なぜかそのまま藍璃の後に続き、「ただいま」と平然な顔をして言い放ち、未だにこの家に居座っている。

「おはよう」

優は挨拶を済ませると、いつの間にか自分の指定席になっている席へと腰を下ろす。

その視線の先には、未だに違和感がある人物が二人ほど鎮座している。

「日本の朝は、やはり白いご飯にお味噌汁に限ります」

「家じゃ、こういう朝食が出ないからね」

用意された食事を、我が物顔で食べている七瀬汐・衣緒の両名。この光景だけは、優は未だに慣れない。

建前上は、優が父親の承諾を得て、神風家への居候が認められたものの、監視役として妹の衣緒と、その付き人である汐も一緒に暮らすことになった、という流れらしい。

どういう経緯でそういう流れになったのか。

何も説明されていない優からしてみれば、今すぐテーブルをひっくり返して問いただしたい気分ではあるが、周りの人間がその状況を受け入れてしまっているのだ。今更、自分ひとりが騒いだところで、この家族からまともな返答を得られるとは到底思えない。

悲しいかな。それだけは現状で、唯一優が確信をもてることなのだから、この状況を受け入れなければ、自分だけが無駄な疲労を溜め込むだけだということは十分理解できた。

「いやー。娘が増えたみたいで、お父さんは幸せだ」

「犯罪者にならない程度に、発言を謹んで下さいね？お父さん」

「わかってい……」

「発言を謹んで下さい」

「はい」

それにしても、どんどん男性陣の肩身が狭くなっていつていうような気がする。今でこそ、女性としてこの家に居候しているという形をとっているが、元はこの男性陣に位置する優としては、複雑な心境だ。

元々、男女が2名ずつという環境だったが、優が居候する事で男女のバランスが傾き、汐、衣緒の参入で民主的に治外法権が出来上

がってしまったという構図である。

「恐ろしい……」

政界を思わせる民主主義を盾にした数の暴力に、優は戦慄を抱かずにはいらなかった。

しかし、それにしても遊園地へ行ってから、様々なことが変わった気がする。

こうして、汐と衣緒両名が神風家に居候していることもそうだが、現状で一番気になる変化を上げるとすれば……。

「翔。その醤油を取って下さい」

「刺身醤油で宜しいでしょうか？」

「……貴方は豆腐を刺身醤油で食せと言うつもりですか」

今まさに、目の前で繰り広げられた光景に他ならない。

「冗談はその笑顔だけにして欲しいものです。神風翔」

「貴女もいつもながら笑顔での嫌味がお上手ですね。七瀬汐さん」

神風翔と七瀬汐の関係。

いつもながらの笑顔だが、お互いの言葉の端々には、相手への嫌味が満載である。

優が記憶している限りでは、二人の関係は少し前まではお世辞にも良好とは言えない状態のはずだった。

尤も、この口論だけ見ていれば、仲良くなったというにはまだまだ難がありそうだが、そんな皮肉の言い合いも、この二人にしてみれば親愛の証であるということは、それなりに理解できる程度の付き合いはしてきたつもりだ。

だからこそ、それまでの冷戦を思わせる二人の関係が、ここまでの改善を見せたことには、優にしてみれば正直驚き以外何者でもなかったりする。

『貴方の正体は、響夜ですか？』

あの日。遊園地の帰り道で、汐が翔に問いかけた疑問。

優は、そこで始めて自分が、翔という存在自体に疑問を抱くことすら忘れていたことに気がついた。

同時に。いつの間にか一緒にいることが当たり前になっていた翔のことを、まったく知ろうとしていなかった自分自身を恥じ、憤りを感じた。

そして、それを知った上で、何も話そうとしてくれなかった翔に對しても。

それでも、優にしてみれば、これは自分自身の問題であつて、二人のわだかまりが解消されて今に至っているのならば、深く追求するつもりもなければ、その必要性も感じられない。

ただ、問題があるとすれば、ただ一つ。

「優様、衣緒様。今更急いでも遅刻は決定ですが、とりあえず学校には向かわないと駄目かと思われます」

時計を指差し、汐は優雅に立ち上がると、素早く身支度を整える。「はい」

衣緒は、汐の言葉に二つ返事で答えると、素早く残りの食事を済ませて立ち上がる。

急かされるように、優は壁にかけられた時計に視線を移す。遅刻が決定というほどの時刻ではないが、余裕はあまり残されていないようだ。

だが、

「優さん」

その呼びかけに、一瞬肩が震える。

「……私は、まだ余裕があるから」

少しの空白の次に、自分の口から紡がれた言葉に、優自身も内心戸惑いながらも、冷静を装う。

「そう、ですか」

そんな優の態度に、翔は呆れ果てたように溜め息をついて玄関へと向かう。どうやらこれ以上の説得は無意味だと察したのだろう。

「いいのですか？」

汐が、優を指差して翔に問いかける。

「時間が必要でしょうから」

寂しげに告げる翔に、汐は少し困惑した表情を浮かべる。

汐にしてみれば、こういう状況を作り出してしまったことには、少なからず責任は感じているのだろう。

それは優も同じで、どうしてこつも普段通り装えないか、自分自身ですら不思議でならなかった。

翔が自分に対して秘密を隠し持っていたぐらいで、どうしてここまで気持ちがかき乱されるものなのか。人間である以上、人に言えない秘密のひとつやふたつあって当たり前だということは、頭では理解しているつもりだ。

だが、どう言い聞かせても、今まで通りの態度で接する事が出来なくなっている。

「それではお先に失礼致しますね」

「……うん」

優の戸惑いを察しているのかどうか読めない翔の言葉に、優は不機嫌そうに箸をくわえながら頷いた。

第71話 疑惑+戸惑い(後書き)

まだ生きてますよ(挨拶)

随分とお待たせしてしまいました。申し訳ありません。

ちよつと軽く色々なことに落ち込んでました(え)

それでもこうして更新できたのは、皆様読者様のおかげでございます。

感謝感激でございます。

はてさて。今回の出だしは真面目に。次の話では壊れる可能性があります。ありますが……。

何事も、些細なことが変化するキツカケになります。それが、こういう結果になるかは……それこそ神のみぞ知る、というものでしょうか。

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

小説情報や日記をブログにて公開しております。

もし宜しければ、ご覧下さいませ。

パソコン <http://one-more-time.blog.drecom.jp/>

携帯 <http://one-more-time.blog.drecom.jp/m/>

となっております。

如月コウでした(礼)

●ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。(月1回)

●ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス* S。」に投票です

第72話 混乱＋色恋沙汰

とにかく、出来るだけ翔とは距離を置こう。

子供のような、こんなつまらない意地など張らず、普段通りに振舞えば、たぶん……というか、確実に変わらぬ日常を享受するはずなのだろうが。

優は、なぜか一度出してしまった矛先の収め方が分からなくなっ
てしまっていた。

それでも、学校では嫌が応にも顔を合わすことになるのは、クラスが同じである時点で至極当然なことであって。

朝。始業前の教室。

「おはようございます」

「……………」

一足先に家を出ていた翔が、たとえ優が不機嫌そうな顔をしていても、教室へと足を踏み入れれば挨拶を交わす事は、これまた至極当然なことなのだ。

「遅刻されるのかと思いましたよ」

聞き慣れた声が、級友達の談笑で賑わっていたはずの教室に透った瞬間、なぜか妙に緊張した空気に支配される。

「……おはよ」

翔のあまりにも普段通りの対応に、なぜか胸の中のモヤモヤ感が悪化するのを感じた優は、素っ気無い態度で挨拶を交わすと、スタスタと歩いて自分の席へ腰を下ろした。

優からしてみれば、出来る事なら気づかないフリでもして、何事も無かったかのように自分の席へと向かいたいところだったのだが……。

静まり返った教室で無視すれば、優の言動を、なぜか固唾を飲んで見守る級友達がいる前では余計な心労が増えるだけだ。

「痴話喧嘩……………」

「痴話喧嘩だ……」

それでも、やはりあの対応には問題があったのだろう。

静まり返っていた教室は一転して、即座に『神風翔と七瀬優が痴話喧嘩したのか』という話題で持ちきりになっている。

人の噂も七十五日とは言いが、噂の渦中である自分が、更なる噂の温床となっているのだから、優自身、始末に負えない。

（それでも、なんかあの態度はム力つく）

尤も。だからといって、すぐさま翔への態度を改められるほど、人間できてなどいないわけだが。

そうなれば、級友達の噂のネタになることは、ある程度許容しなければいけない事項の一つではあるのだと、無理やり自分を納得させるしかないのだろう。

「好きに言ってくれ」

溜め息混じりに呟き、優は机に突っ伏した。

「優、何があつたかは知らないけど、いい加減仲直りしなよ……」

そんな様子を見かねたのだろうか。翼が呆れたように声をかける。

「ヤダ」

「ヤダって……。優って、なんか一度拗ねると駄々をこねる子供みたいになるね」

嫌味の無い口調で快活に笑う翼を、優は突っ伏した状態のまま見上げて、再び溜め息をついた。

「でも、噂はすでに二人は喧嘩して別れたってところまで肥大してるから、そろそろ面倒なことになると思うよ」

「面倒も何も、始めから付き合ってもないし……」

尾ひれがついた噂話などには興味があるわけでもなく、ただただ色恋沙汰に関しての噂話の釈明が如何に面倒なのかを痛感する日々である。

「でも、実際問題、周りはそう思っていたわけだしねえ……」

「わ、私もてつきり『結婚を前提としたお付き合い』とか、『すでに入籍済みで、後は卒業を待つのみ』の関係なんだとばかり……」

「綾奈……それ以上言うなら私は本気で泣くかも」

実際はそれ以外にもありそうだが、これ以上言及して聞く勇氣は、今の優は持ち合わせてなど無かった。

「ですが、貴女の置かれている現状についての説明は受けて然るべきかと」

だが、どうやら三人とも元々そのつもりで話しかけてきたのだろ
う。

ちょうど、机に突っ伏した優と視線を合わせるようにしゃがみこ
んでいる薫と、視線がぶつかる。

「うん。ちゃんと顔を上げて話を聞くから。顔半分を覗かせないで
若干、怖かったのは秘密である。」

「時間も無いから、単刀直入に説明するよ」

翼は、優が起き上がったことを確認して満足気に頷くと、手に持
っていた鞆の中から、一枚の便箋を取り出した。

「それは……」

そこに書かれた宛名には見覚えがあった。
なぜなら――

「――……七瀬優様へ？」

翼が誇らしげに目の前に突きつけた便箋は、なぜか優自身への充
てられたものだったからだ。

第72話 混乱+色恋沙汰（後書き）

めちゃくちゃお待たせしました（吐血）

書く気が無くなってるわけじゃないのでご安心下さいませorz
まあそう思われても仕方がないくらい更新できませんでしたが（目逸らし）

（色々な意味で）ちょっと復活したので、今のうちに何度か更新したいと思っております。

どうぞお付き合い下さいませ。

あと、ちょっとした疑問があります。

携帯で見てみたのですが、79話分あると結構最新話を見るの苦労します？

私個人は古い携帯ですし、そもそも見慣れていないのでそこまで辿り着くまでに時間がかかるだけかも知れませんが……。

もし、時間がかかるようなら、区切りをつけて『ぷら マイ2』とかで新たに続きを移そうかと考えてます。

ご意見あればコメントで言ってお下されると助かります。

それでは。

如月コウでした！

第73話 手紙によってもたらされた事実

「ラブレター、ですか……」

窓から差し込む昼の陽光が眩しいのか。或いは、ただ目の前に広がる現実から逃避したいのか。

以前にも見たことがあるような便箋の山に若干目を細めながら、優は、自分の机の上に置かれたお弁当を埋め尽くすように無造作にばら撒かれた手紙の束を凝視していた。

「元々、神風翔という恋人の存在が抑止力となっていました、ここ数日でその抑止力が機能しなくなったことによって表面化した問題でしょう」

眼鏡の縁をくいつ、と押し上げて、淡々と現状に至るまでの経緯を説明する小野寺薫の言葉を、優はげんがりした表情で聞き流していた。

つまりは、今までずっと恋人だった翔と喧嘩別れたことで、男性諸君が優と付き合うチャンスだと勘違いしたということだろう。

「でも、実際に最近までは、ラブレターなんて一日一枚あるのかぐらいいの状態だったからな」

（そのラブレター自体、俺の手元に届いた試しがないがな）

屈託無く笑う悟枝翼の、微妙に聞き流せない部分に心の中でツツコミを入れる。

今更、それを声に出して言及すれば、やぶへびになりかねない。

「そうそう。俺なんて、下駄箱も監視されているからって、朝一番に登校して机の中に忍ばせてもなぜか発見されちゃってさ」

先程から聞き耳を立てていたのだろう。ここぞとばかりに吉良が話に割り込んできた。

「発見される度に、なぜか三日三晩原因不明の頭痛に悩まされたりしたけど……。今はもういい思い出さ！」

「そうですね。失敗を糧に次こそはしとめます」

吉良の言葉に、薫は同意するかのようにうんうんと頷いてみせる。薫が何をしていたのかはともかく、吉良自身が人知れず思い出にされそうになっていただけはよくわかった。

「ちなみに、転入してきた当初は沈静化に一ヶ月程度要し、モデルとして雑誌に載った時は沈静化の期間はそれほどかかりませんでした。が、校内でのラブレターの他に、全国からのファンレターや問い合わせ等への対応には少々骨が折れました」

さすがにその全てを煙にまくわけにはいきませんから、と、薫は小さく溜め息をつく。

「そうそう。それで、手書きの返事を何種類か用意して、それをコピーして、そこにサインまでつけて全員に返信したりして大変だったんだから」

翼が、その時の苦労を思い返すかのように、遠い目で当時の事を語りだす。

「さすがに全部同じ内容のお返事だと失礼だもんね……」

どうやら、その物言いからして綾奈も手伝っていたらしい。

三人は、自分に余計な苦労をさせたくないということで、内密に行ってくれていたことなので、その気持ちは素直に喜ぶべきものなのだろうが……。

当の優はというと、あまりにも唐突の暴露に呆気にとられて、呆然と三人を眺めている。

しかし、三人が語るそんな苦労話の中に、やぶへびになると分かっている、さすがにツツコミを入れざるえない発言が多々ある気がする、優は恐る恐る手を上げた。

「んと。ファンレターへの返信は手書きの返事で……何？」

すると、三人はさもし不思議そうに顔を見合わせて首を傾げる。「いや、だからさ。私は、そんなファンレターの返事を書いた記憶はないんだけど」

そこまで言うと、三人は納得したように頷くと、示し合わせたかのように親指を立てて、各々なぜか誇らしげに問いに答えた。

「大丈夫です。筆跡鑑定すら欺く自信があります」

「サインも優さんに相応しいものにしておきましたから！」

「いやー、量が量だけに、コピーするのも一苦労だったよ」

優が『がたん！』と、勢いよく机に突っ伏す。

「あ、あのね……。そんな誇らしげに言うことじゃないと思うんだけど」

自分の知らないところで、まさかそんな裏工作が行われているとは。優は、今更ながら知らされる、予想だになかった爆弾発言に軽い眩暈すら覚えた。

「け、けど、そんなコピーの上に大量生産された返事なら、きっと今頃受け取った全員が気づいているはずだよね！」

優は、自分にそう言い聞かせるように、『うんうん。きっとそうだ』と何度も頷く。

この情報化社会と呼ばれる世の中では、そんな簡単な偽装工作がばれないわけがない。

「三人には言えないけど、今頃、ネット上では、その手紙の内容のすべてが、不特定多数の人々によって閲覧された挙句、誹謗中傷の嵐の中、晒し首の如く祭り上げられているに決まっている……。ああ、恐ろしきネット社会！」

「おい。優、思いつきり口に出してるぞ」

「酷く偏った知識ですね。何か嫌な思い出でもあるのでしょうか」

一向に進まない優の食事をよそに、翼達はすでに食べ終えた弁当箱を鞆にしまっていた。薫に至っては、食後のお茶を優雅に啜っている始末である。

「優さん、きっと大丈夫だと思いますよ？」

綾奈が、地団太を踏む優の肩に手を重ねて優しく微笑む。

「綾奈……」

幼さの残る立ち振る舞いだが、不安は勿論の事、疑問すら打ち消さんとするその笑顔は、まさに天使の微笑みそのものである。

「そう、だよね……。うん。きっと大丈夫だよね」

「はい。大丈夫ですよ」

優が、綾奈の笑顔に釣られて頷く。

「……なんか、綾奈って、実はこのメンバーの中で一番怖い気がしてきた」

「奇遇ですね。私もです」

自分達が、どれだけの詭弁・雄弁を用いても納得しなかった優を、笑顔一つで納得させてしまった綾奈に、翼と薫は畏怖の念を抱かずにいらなかった。

「とはいえ、納得して貰えたようで安心しまし、た……？」

今のうちに話を纏めようとした薫は、何か不審な点に気がついたらしく、微妙に語尾を上げて眉を顰める。

「ん？」

優がその視線の先にいる人物へと視線を移すと、なぜか優の机の真横で床に両膝をついている吉良がいた。

その場にいた全員からの視線に気づいていないのか。吉良は心底悔しそうに呟く。

「馬鹿な……。額縁に入れて飾っているあの手紙が贋作だと……？」

どうやら吉良は、そのファンレター返信偽造の不幸な被害者の一人らしい。ましてや、わざわざ額縁に入れて飾っているところを見ると、随分と重宝がられているようだ。

（そもそも、お前は俺に対してファンレターを出したのか）

重宝されている、というだけでも頭が痛いのに、見知った男からファンレターが送られていたとなれば、なんとも形容しがたい気分になってしまう。

「失礼ですね。元々存在しないものである以上、贋作とは言いません」

優の、そんな心の機微を察することなく、愚かですね、と、告げる薫はどこか誇らしげだ。しかし、それは誇らしげに言うべき台詞ではない気がする。

「それでも好きだー！」

「意味が分からないって！」

訳の分からないことを叫んで抱きついてこようとする吉良を、優は力いっぱい殴り飛ばす。吉良はそのまま、優の隣の机を巻き込んで昏倒した。

「しかし、落ち着いたとはいえ、父の元へ送られてくるファンレターや問い合わせの対応に、更にラブレターへの対応となると人手が足りません」

「うん。さすがにちょっと大変かも……」

薫の言葉に、綾奈が困った表情で相槌をうつ。

すでにそこに至るまでに、本人が関与していない事を疑問視するのはどうかと思うが、今更ツツコミを入れる気力も無い。こうなると、自分は素直に彼女達の案に従うしかない状態であることは、今までの経験で十二分に理解している。

しかも、その大体が考えうる限り中での最良の案でありながらも、なぜか自分にとっては酷く疲れるものであることは……なんというか。必然と考えるには、少々気分が重くなるものだが。

「じゃあ、わたしにどうしろと……？」

それでも、そうしなければこの事態は収まらないらしい。

まるで死刑宣告を待つ囚人のような気分で、優は素直に諦めを口にした。

第73話 手紙によってもたらされた事実（後書き）

お待たせ致しました！

ここ最近よりは若干早めのアップです（、 - ω - 、 ; ）ゞポリポリ

いつも、サブタイトルに悩んでしまつて、統一性のないものになつてしまつていて、猛省中です。

纏めたりしたときに、色々と手直しする必要があるなあ、と痛感させられて（*。*。*）ガハツ ; ; * ; ;

それと、ここで返信するのも可笑しな話ですが、いつもコメントやお手紙を下さつて、ありがとうございます。

やはり、読者様に直に感想を頂けるのは嬉しい限りです。勿論、修正や指南等も、頂く度に考える事があり、とてもありがたいです。現在も続きを執筆しつつ、それらを糧に頑張らせていただいておりますので、どうぞ暫くお待ちを！

如月コウでした！

第74話 たそがれ

その日の放課後。

夕暮れ染まる教室に優は、憂いを帯びた眼差しで、窓の外で部活動に勤しむ学生達を眺めていた。

僅かに開けられた窓から流れた風が、優の頬とブロンドの髪を撫でていく。

その姿は、まるでドラマのワンシーンを思わせるほど美しく、教室に佇む優の存在に気づいた者は、一瞬目を奪われてしまうことだろう。

そんな中、優は一言溜め息混じりに呟いた。

「眠いし、お腹減ったな」

しかし、所詮それは外面的な話であつて、現実はこの様なものである。

部活動に所属していない優にしてみれば、今頃家で晩御飯までの時間をゲームや情眼に費やしている時間帯だ。ましてや、大分慣れてしまったとはいえ、まだ女としての学校生活には注意する点がある以上、集中力を持続し続ける必要がある。そうになると、なかなか体力が消費されてしまうものなのだ。

「人を呼び出しておきながら、第一声がそれですか」

「思ったことを口に出したただだよ。私は」

思考を遮るかのようにかけられた声にも、優は動じることなく応じる。

しかしながら、これからの事を思うと少々気分が重くなるというものだ。

薫達の提案は思ったよりも簡単で、放課後、誰もいない教室に翔を呼び出して、ちゃんと話をして仲直りするというものだった。

『話せないのではなくて、話すことから逃げているだけですね』

話そのものが出来ない状態だからこそ困っていたのだと言ったと

き、綾奈はまっすぐこちらを見てそう返してきた。

その真摯な眼差しに気圧されて、その提案を受け入れた。と、いうよりも、今この状況を生み出してしまっているのは、事実そこにあるのだと気づいたからだ。

（確かに、こうやって無理やりにも話す場を作れば逃げられないな）

優は自虐気味に苦笑いを浮かべる。

そういえば、自分が女に姿を変えてしまった時も、『なっってしまったものは仕方が無い。どうにかなるだろう』といった、ある種の諦めにも似た客観論を抱いていた。

そうすることで冷静でいられたし、なにより、困難な状況を打開するよりも、仕方が無いと受け入れてしまった方が楽だということを真っ先に考えていた自分がいる。

実際、今の翔との関係も、心のどこかで時間と共に元に戻るだろうと考えていたのではないだろうか。それはあまりにも情けなさ過ぎる。

「誰がいるか分からないから、普段通りの口調で話すけど……いいよね？」

薫達のことだ。どこかで聞き耳を立てているかもしれない。

そのためにも、このまま女口調で通さなければ後々面倒な事になりかねないので、念のため確認しておく。

尤も。一人では不安なので、どこかで聞き耳を立ててくれている方が、幾分か緊張が解れるので、ありがたくはあるのだが。

「なるほど」

そんな優の意図に気づいたのだろう。翔は視線だけを動かし苦笑した。

「いつもの無遠慮さが無いと思ったら……。優さんも、可愛らしいところがあるじゃないですか」

どうやら、気づかれたくない部分まで気づかれたようだ。

やれやれと肩を竦める翔に、優は不満げに呟く。

「……意外は余計」

不満げに愚痴を漏らしつつも、優は、自分が安堵していることに気がついてしまった。

己の正体を知っているのは翔だけではないが、一番最初から傍にいてくれた存在というのは、自分の中では特別に成り得る。

お互いに、すべてを包み隠さず一緒にいられる存在だと思っていた。

だからこそ、相手に自分が知らない部分があることを知って、戸惑ってしまっているのだ。

（ああ、そうか）

そこまで考え至って。

優は初めて、今まで自分がどれだけ翔という存在を頼りにしていたのかに気づく。

「……あはは。まいったな」

「どうかされましたか？」

突然、呆れたように笑う優に、翔は怪訝そうな表情を浮かべて問いかける。

「いや。こうしたやりとりも大事だと思えるんだから、周りが勘違いするのも仕方がないのかな、って思って」

なるほど確かに。これが男女間での問題であるならば、これは恋愛沙汰の類であると勘違いされても致し方ない。しかし、それが恋愛感情の類のものかどうかと問われれば、はっきりと断言できるが、答えは否だ。

「けど、そうじゃない。そうじゃないんだ」

その理由は至って簡単。

あの寂しげな横顔を見てしまったから。

こんなに不安になっているのだ。

「私はただ、翔がいなくなるかも知れないってことが不安だったんだよ」

これが、ずっと自分の中にあつた不安の正体なのだと、口に出し

て初めて確信を持てた。

「秘密だとか、私にとっては問題じゃなかった。私は、こうやって馬鹿言い合える奴を失いたくないだけなんだ」

「……」

堰を切ったかのように語られる優の本音に、先程まで怪訝そうな顔をしていた翔も、いつのまにか真顔で聞き入っている。

「考えて、ちよつと不安になったんだよ。私は貴方の事を何も知らない。それって、貴方がいつでもここから居なくなれる存在であるってことだと思えたから」

「そんなことは……」

「ある」

翔が否定の言葉を告げようとしたにも関わらず、優は更にその言葉を否定した。

「いなくなるのは簡単。顔しか知らない相手なんて、私も見つけようが無い」

だから勝手にいなくなるな、と、優は翔をまっすぐ見据えて告げた。

いつか、いなくなるのかも知れないという疑問は、自分の中でずつとあつて。

衣緒や汐のように、元に戻そうとする人間が目の前に現れることで、その疑問が膨らんでいった。

そして、遊園地の帰り道。

なかなか合流しない二人に痺れを切らして振り向いた先にいた汐と翔は、ほんの一瞬、目蓋を閉じれば、消え去りそうな儚さを感じられたから。

「……まったく。あなたは」

一瞬、何か言おうとした翔は、その言葉を飲み込むと、固くなった表情を崩して、困ったように微笑む。

NPCだと説明したはずの己の存在を、まるで元から存在しているかのように『顔しか知らない相手』と言い切った。

ましてや、いなくなれば探すつもりであることは、『見つけようが無い』という言葉が告げている。

そんな支離滅裂な言い分も心地良いと感じさせるのは、優が必死に自分を繋ぎとめようとしてくれていたからこそだろう。

「では、秘密を話せばいなくなっても？」

「は？」

突然の翔の申し出に、優は目を丸くする。

「ですから、探し出せるような情報を提示しておけばいなくなってもいいんでしょうか？」

「ちょ！？そ、それは卑怯！そもそも、ほんとに秘密があるの！？つてか、いなくなること自体が反対であって――」

優が慌てて言葉を訂正しようとすると、翔は遮るように『それでも』と前置いて、

「探し出してくれるのでしょうか？」

「……………」

優は、なぜか無性に恥ずかしくなって、俯くように顔を背ける。

このような青春ドラマのような展開は苦手なので遠慮願いたいのだが、目の前にいる人物は、本来この場にいるはずのない人物であることには間違いない。

だが、その人物を含めて、今の環境を悪くはないと思ってしまっている自分の気持ちにもまた、間違いなどないのだ。

だから、

「……可能な限りは」

俯いたまま、か細い声で答えた。

「愛の告白のようです。優さんも、存外に女の子していますね」

「……ぶん殴るぞ」

「いえいえ。率直な意見を述べたまでですよ」

そう言って微笑むと、翔はちらりと横目で廊下側を流し見ると――
「……………」

突然、翔に腕を掴まれ、引っ張られた優が間抜けな声を出す。呆

氣に取られてしまい、よろめいた優を、翔はその腕と体で受け止めた。

「……なにを、してるんだ？」

呆けたまま、優は現状に対しての疑問を、混乱した頭で捻り出す。抵抗はしない。と、いうより出来ないでいた。

元々男であり、女性との交友関係もさほど広くはなかった優にしてみれば、誰かにこれほどまでに情熱的に抱きしめられるという経験が無い上に、そもそも相手はかつての自分自身という珍妙不可思議な状態だ。

優は、動かない頭を無理やりフル回転して考える。

通常、女として考えれば、いくら知り合いだとはいえ、異性からの抱擁はご遠慮願いたい所であって、叫ぶ、或いは暴れるといった行動を取るのが当たり前だろう。

逆に男だったらどうだ？

相手が女だったら、素直に喜ぶ場面かもしれない。仮に吉良だったら、相手が抱きつくこのものなら、喜んで抱き返すだろうが……。

（いやいやまで。落ち着くんだ、俺）

浮かんでは消える、冷静そうで実は混乱気味の思考を落ち着かせるため、翔の腕の中でゆっくりと深呼吸を繰り返す。

「なんのつもりだ。冗談にしても笑えないぞ」

そして、今度ははつきりとその疑問を翔にぶつける。

すると、翔はその腕の力を緩めると、ゆっくりとした動作で優の両腕を掴んで、互いの顔が見える位置まで引き離れた。

そうしてぶつかり合った視線の先。

遠くから様子を見守っていたのであろう薫達が、教室へと駆け込んできた姿が見えた。

その姿になぜか安堵して、優が力を抜いた瞬間、

「待っています」

そんな呟きが耳に届く。

「……え？」

そして再び優の頭が真っ白になる。

言葉が出ない。

発する事も出来ない。

何をされているのかは理解は出来ているのだが、なんというか、自分の身に起こっている事だということを理解できないというベ
きか。

そんな状況を、教室の入り口で優と同様に呆然と立ち尽くす三人は、この状況を完結に叫んで、それが性質の悪い幻の類ではないことを知らせてくれた。

「き、キスしてるーーーーー!!」

第74話 たそがれ（後書き）

お久しぶりです。

パソコンがご臨終して吐血気味の如月コウです。

更新が遅れて申し訳ないです（汗）

さて、優が、モヤモヤした感情に振り回されていた矢先の出来事。
最近は動きが無い話が続きましたが、これからまた動きが出てきた
らしいかな、と思います。

パソコンの突然のご臨終で、書き溜めた分が消えたりしましたが、
めげずに待つて頂けると嬉しいですorz
如月コウでした！

第75話 現実逃避と現実と

『それは災難だったな』

『いや、災難ってレベルじゃないだろ？』

『当人に見ればそうかも知れんが、周りからしてみれば楽しくて仕方が無いがな』

パソコンの画面上で向き合っている響夜と表示されたキャラクターが、快活に笑ってみせる。

ここ最近、非現実的な現実の慌しさからか、あまりプレイすることがなかったのだが、本日は夜も更けてきたにも拘らず、七瀬優は画面にかじりついていた。

……否。慌しかった、というのは詭弁だろう。

理由はどうであれ、この『無幻学園』というゲームが、今の非現実的な日常をもたらしたのには変わりはない。いくら、栓が無い事だと言っても、気にするなという方が困難だ。

最初は男でいられることに喜びを見出せてはいたが、女としての現実が続けば続くほど、それすら疑問を抱いてしまっていく自分自身の心理に対しての恐怖もあった。

オンラインゲーム自体、一種の現実逃避するための行為だとしても、その逃避行為を許さず、逆に現実を見せ付けられる羽目になるのでは、滑稽を通り超えて酷刑というものだ。

しかし、今回ばかりは優は現実逃避できている自信がある。

なぜなら、つい数時間前、自分にとっては最大の混乱と困惑と、ついでに言えば貞操の危機すらも兼ね備えた現実での問題が発生したのだから。

『それは今後が楽しみだな』

『簡単に言ってくれるな。他人事のように』

『他人事だからな』

ネット上の付き合いだからというのも手伝って、仲良くなれば、それこそ親友同士のような会話が出来るのがいい。

しかし、それは現実逃避であって、逃避している限り問題が解決するわけではないのだが。

「そもそも、告白されたわけでもないからな……」

思考がズレ始めてしまっているが、当の優は至って真面目に悶々と苦悩しつつ、打ち終えて、ため息交じりに独白する。

現実逃避していたゲーム内でさえも、考える時間を与えられると、ついつい考え込んでしまう。元の木阿弥もいいところだ。

三人が教室に駆け込んだ後。

触れていた唇が離れると同時に、気づけばいつの間にか、優は翔の頬を引つ叩いていた。

眼前に映し出された、夕日が差し込む放課後の教室でのキスシーンを目撃してしまって、困惑半分興奮半分の三人も、まるで冷や水をかけられたかのように静まり返っている。

しかし、当の本人である優ですら、この状況に困惑していた。

一瞬だけ触れた唇に、僅かに熱が籠る。

抵抗すら出来ずに許してしまった口付けが、現実だったという証拠だ。

そして、一瞬自分の心を支配した、制御不能の感情に突き動かされた結果。

動揺に瞳を揺らしながら、振り切った右手を下ろす。そのまま、所在無さげに宙を彷徨い、制服の胸元を掴んだ。

（俺が叩いた……？どうして？）

優が、信じられないものでも見るかのように、翔と自分の右手を交互に視線を泳がせる。

そして、

「……優さん」

「……っ！」

翔の一言に弾かれるように、入り口で呆然としている三人をかき分けて教室を後にしていた……。

『何が気に入らないんだよ？別に嫌いじゃないんだろ？』

「え？」

相手が書き込みを行ったことを知らせる音に、現実に戻された優は、思わず口で答える。

「嫌い、ではないけど……」

返事をキーボードに打ち込む事を忘れて、優はパソコンの画面に向かつて声に出す。

（男なんだぞ。俺は）

海でも一度考えたことだ。

男としての俺の考え方と、女としての生きる現実の世界との相違。今の俺は、女で。しかし、男でもある。

けど、それは自分の中での話であって、この世界に存在しているのは、女としての自分。

そんな堂々巡りの思考の海に漂い始めると、他の畑から悩みの種がよきによきと芽を出すものだ。それは優も例外ではない。

すでに優はネットゲームをしていたことを忘れて、一人、部屋で堂々巡りな思考に耽っている。

『とはいえ、知り合いにキスシーンを目撃された以上、あれこれ悩むよりも前に、覚悟を決めないとダメだとは思うが』

数十分放置されたことで、優のキャラクターにAFK状態を報せるアイコンが頭上に表示されてたことを確認して、優が見当違いな悩みに頭を痛めていることを察したのだろう。

『元来、相手の気持ちなんてものは不明瞭なものであって、知るためにはそれこそ、その本人にでもならない限り不可能であってだな

――』

そこまで打ち終わって、一区切りおくと、響夜は暫くの間返事を待つ。

『……まあ、今更言っても詮無き事だろうがな』

反応が無いことを確認すると、おやすみとだけ打ち込むと、響夜はやれやれといった感じでため息をついたまま、ログアウトしたのだった。

第75話 現実逃避と現実と（後書き）

皆様、こんばんは。

後書きはブログにて。

長々とここで書いても、読者様の的に邪魔なのでは？と思ったので（汗）

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法的におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

小説情報や日記をブログにて公開しております。

もし宜しければ、ご覧下さいませ。

パソコン <http://one-more-time.blog.drecom.jp/>

携帯 <http://one-more-time.blog.drecom.jp/m/>

となっております。

如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第76話 いつもとは違う朝

「……ん」

神風家の一室。『優さんの部屋』と書かれたプレートが掲げられた、客間だったはずの部屋。

カーテンの隙間から漏れた朝の光と、覚醒していくほど耳障りになっていく目覚まし時計の音で、部屋の主が目を覚ます。

まだ半開きの目蓋を叩き起こすかのように擦ると、普段見える部屋の天井の代わりに、パソコンが目の前にあることに気がついた。

「やば……。昨日あのまま寝ちゃったのか」

ネットゲームで机に突っ伏して寝落ちるのは、随分と久しぶりだ。変な姿勢で寝ていたせいだろうか。妙に体がだるい。

しかし部屋の主に見れば、この倦怠感は久々なものだ。ここ最近では、ネットゲームを寝落ちするまでプレイすることなどなかった。

如何せん、悩み自体は解決したわけではないが、少なからず、多少の気晴らしにはなったのは事実だ。そう考えれば、こういうのも悪くはない。

「さって、それじゃ学校に行く準備をしないとな」

そう言って、背筋を伸ばした時だった。

妙にきつく感じていた締め付けが、ブチブチッという不穏な音と共に緩和されたのは。

「ん？」

何かが床へ落ちたことに気づき、何事かと視線を落とそうとした瞬間。

「優さん」

床に落ちたものがボタンだと確認したのと同時に、神風翔の妹である藍璃が部屋へと入ってきた。

「朝です、よ……？」

入ってきた藍璃が、笑顔でドアノブに手をかけたまま静止する。
しかし、若干笑顔が引き攣っているように見えるのは気のせいだろうか。

「へ、へ、へ……………」

「へ？ん…………。へい！おはよう？」

様子は変だが、とりあえず挨拶を交わそうとしているのだろうと解釈して、満面の笑顔で答える。

そこで、彼は妙な変化に気がつく。

どうして、少し大きめだったはずのパジャマが酷くきつく感じているのだろうか。

背筋を伸ばしただけでボタンがはじけ飛ぶなんて、体のサイズが明らかに違っていることは明白だ。

（いやまて。そもそも、今の俺の声、妙に太くなかっただろうか）
微妙に、かつてこれらに符合する出来事を知ってはいる。

視線を再び下へ…………いや、正確には自分の体へ移して、藍璃を凍てつけた状況を把握したいが、その勇気がなかなかもてない。

仮にそうだとすると、自分は今、とんでもない状況に身をおいているのではないだろうか。

（つてか、むしろ、どうかそれだけはないように）

想像してみても、今の現状のシニールさを改めて実感して、心の中で十字をきる。

「…………翔お兄ちゃん。何してるの？」

「よし、藍璃。まず落ち着いて話し合おう」

だが、満面の笑みを浮かべる藍璃を見て、それは儚い夢であることを悟った、昨夜までは優であったはずの神風翔は、素早く最悪な状況からの脱却を試みる。

どうやら、恐れていた予想は的中していたようだ。

つまりは、

「私は。どうして、お兄ちゃんが、優さんの部屋で、優さんのパジャマを着て、寝ていたのかって聞いているの」

こういうことである。

「いやー……」

翔は乾いた笑いを浮かべながら、最悪な現状を打開する策を弄するべく、脳内会議を繰り広げていた。

「……………」

考える翔。

「……………」

返答を待つ藍璃。

暫く沈黙の後、その結果。

「ゴメンナサイ」

この状況を上手く切り抜ける方法が思い浮かばず、とりあえず謝罪を口にした。

「変態……！！」

謝罪の言葉をかき消すように、藍璃の叫びが響き渡る。

その騒動を聞きつけたのだろう。複数の足音がこちらへと向かってくる。

「理不尽さを感じつつも、素直に謝ったのに、なんてことを！」

「こんな変態行為が謝って許されるぐらいなら、警察なんていらないわ！お母さん、お父さん。警察呼んで！警察はこんな人のために存在するの！」

「話せばわかるって！」

朝から混迷を極める兄と妹。

「あ、もしもし。警察の方ですか？うちの愚息がついに犯罪を。ええ。急に真面目になったものですから、怪しいとは思っていたんですけど」

「おいこら、母親！なんだ、その言い草！」

母の口から告げられる衝撃の告白。

「若さゆえの過ち……ってやつか」

「親父、なんで爽やかに親指立ててんだよ！？おかしいだろ！？」

「大人になつたな」

「親父の考える大人と子供の境界線ってそんなもんなのかよ！？おかしいぞ、あんたの情操教育！」

父からの教えに涙する息子。

「部屋にお兄ちゃんがいらないと思えば、優さんの部屋で変質者の仲間入りしているなんて……。お兄ちゃんが悪い方に頭をぶつけた」

よよよ、と大げさに床に崩れ落ちる藍璃。

「よかったな。そんな変質者の妹」

このままでは埒が明かないので、いつそ清々しく開き直ってみる。

「……もう一度ぐらい頭ぶつけない？一〇トトラックあたりで」

「それは暗に死ねといっているのか？」

一〇トトラックに頭をぶつけたら即死ものだ。

「ほらほら。制服に着替えて。女顔の可愛い男の子が女装するならいいけど、翔みたいな一般男子の女装姿なんて見苦しいだけなんだから」

いつの間にか電話を終えた母親は、二階の部屋からわざわざ制服を取りに上がっていたらしく、さり気なく毒を吐きつつ、息子に学校の制服を手渡す。そして、無言で睨む翔におほほとわざとらしい笑いを浮かべながら、父親と共に居間へと歩いていった。

「まったく……。朝から無駄に慌しい家族だな」

久しぶりに袖を通す男の制服に多少の違和感を覚えたが、翔は素早く着替える。

「お兄ちゃんが変態に戻っちゃったんだもん。仕方ないじゃん」

翔の眩きにも、逐一ツツコミを入れるのは、やはり藍璃だ。

「兄の着替えに立ち会う変態妹には言われたくないな」

「か、勝手にいきなり脱ぎ出しといて、それを言う！？変態露出狂じゃないの！？」

金切り声のように高音で叫びながら部屋を出ていく妹に、邪魔だと言わんばかりにぞんざいに手を振る。

「久しぶりのやり取りに、なんの疑問も持たないのか。ここの家族は」

自分ではない翔相手ならば、こんなやり取りなど行われたりはしなかったはずだ。それを、もう一度頭をぶつけろ、という会話だけで終わらせるあたり、この家族の楽天的な性格が出ている。

（戻った……んだよな）

ふと目に入った鏡に映るのは、神風翔の姿。

その姿が、自分だと認識できることに違和感を抱くのは、ここ最近の優としての生活が身についてしまっているからだろう。

（とりあえず、戻った以上は元通りだ。アイツと、汐や衣緒にも報告しておかないと）

久しぶりの男の自分に浮き足だった気分を抑えつつ早速居間へと急ごうと、扉へと足を向けた時だった。

「神風翔。少しいいですか」

「ん？」

まるで、そんな気分を遮るかのように、まだ眠たそうな衣緒を引きずった汐が部屋の扉からひょっこり顔を出してきて、予想外の言葉の口にした。

「優はどこに行ったのですか？朝から姿が見えませんが」

第76話 いつもとは違う朝（後書き）

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

小説情報や日記をブログにて公開しております。

もし宜しければ、ご覧下さいませ。

パソコン <http://one-more-time.blog.drecom.jp/>

携帯 <http://one-more-time.blog.drecom.jp/m/>

となっております。

如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第77話 戸惑いの日常

「つまり貴方は私達の知るところの七瀬優であって、朝、気がついたら神風翔に戻っていたということですか？」

「そういうことになるな」

目覚めてからの出来事を説明しても、疑いの眼差しを向ける汐に翔は憮然と答えた。

「……どうしてそんな事態に。確かに、二人とも様子は変でしたが」
「知るか。そんなこと」

寝起きの衝撃と混乱を引き継いだまま、慌しい朝食を終えて今は登校の道中。

優失踪という大事件。帰ってきてから説明するとだけ述べて、家族の追求からなんとか逃げ出したものの、面倒な懸案事項が増えてしまった。

考えなければいけない問題が多過ぎて不機嫌そうな翔に、汐が驚いたように目を瞬かせる。

「理由は分からない、と？」

「知っていたら、朝からあんな騒ぎになるわけないだろ」

口に出したことで思い出してしまったのか。再び仏頂面になる翔に、汐は困ったように笑うと、口をつむんで視線を落とす。

（神風翔は完全にSウィルスから解放された？ いや、でも仮にそうなら元凶となった無幻学園でも変化が見られるはず……）

ある程度、関係しているかもしれないプレイヤーには、二十四時間体制で監視させてもいる。勿論、それは神風翔も含まれている。

汐は携帯電話の着信履歴を見る。だが、昨日の夕方から今朝にかけての着信は見られない。つまりは、ゲームではまったく変化が見られない証拠だ。

（ゲーム自体が変化に関係していない？ けど、それなら私達の変化の説明がつかない。ならどうして？）

推測でしかない出来事に更なる憶測を被せるなど、悪戯に真実を捻じ曲げる結果になることは理解しているつもりだ。

だが、考えずにはいられない。情報不足は否めない。しかし、衣食住を共にして目に見える変化はこれが始めてなのだ。これを足がかりに出来なければ、進展など望めない。

「それで、どうするおつもりですか」

その問いかけが意味するものは、実は翔が今一番悩んでいるところだったりする。

「正直、あなたでない神風翔しか知らない私からすれば、今の神風翔には違和感があります」

「たぶん、顔見知り全員から同じ台詞を言われるんだろうな……」

汐の意見に、翔はげんなりとした表情で答える。

そんなことは目に見えている。

なぜなら、自分が神風翔であることに違和感を抱かずにはいられないのだから。

「優として長く居すぎたかも。正直、今度は女から男に変わった気分だったりする」

常に事なかれ主義だったつもりだったが、どうやら今回ばかりは堪えているらしい。素直に今の心情を語る。

「探す気はなさそうだね」

衣緒が溜め息をつく。

「どこにいて、どの誰だか分からないのに？」

衣緒の呆れたような声に、心がざわついた翔が若干怒気を含んだ声色で問う。

そんな翔の態度が衣緒の気に障ったらしく、衣緒が目を細める。瞬時に張り詰める空気。

しかし、そんな険悪になる雰囲気制するように汐が翔に再び問いかけた。

「それで、どうするおつもりですか？」

「……完全に戻ったかどうかは分からないし、アイツの真似をして

振舞えば混乱もないんだろうけど」

途端に、『自信が無いな』と困ったように翔は眉を下げる。

「そこはなんとかフオーロしましょう」

その物言いに、今の翔に彼を探すことを考えれるほど余裕がないと判断した汐は、ただ翔の言葉に頷いた。

「協力に感謝」

押し黙るように考え込む汐につられるように、翔も話題が思いつかず口を閉ざす。

「そういえば、藍璃の件では苦労かけたよな。わるい」

しかし、その雰囲気根気負けしたかのように話題を振ったのは翔だった。

「……こちらの都合で振り回してしまっただけです。貴方には怒る道理はあっても、謝る道理はないでしょう」

翔の胸中を察したのか。汐は少し戸惑ったような表情を浮かべつつも応える。

「それに、藍璃さんは元の中学校へ再び転校してもらっただけですから。それほど手間はかかりません」

「そっか」

「一時とは言え、無茶な行動で迷惑をかけていたことは謝罪します」
「ごめんなさい、と素直に謝罪を口にする汐の態度は、以前に比べると幾分か固さが抜けてきている気がする。」

『何も知らない身内を監視として置ける立場に私はいる。つまりは、あなたは情報を隠匿出来る立場にはいないのだという牽制のつもりでした』

遊園地の帰宅後。汐が謝罪と共に教えてくれた、藍璃を翔達の傍におかせた理由。

牽制と言えばまだ聞こえはいいが、これではただの脅しだ。

しかし、そう言われたところで驚天動地するわけもなく、ただただ優は頷くだけだった。その態度に、説明していた汐が何度も諦めにも似たような表情で深々と溜息をついていたが、そもそも牽制も

なにも、されている本人がそのことに気づいていなかったのだからどうしようもない。

「いや、前回同様、藍璃の件に関しては気にしないでくれ。藍璃も喜んでいたし」

実は、体験学習の一環としての編入という名目だったらしく、元々それほど無茶をしたわけではなかったらしい。

とはいえ、体験入学する人物に藍璃に指定したり、編入を短期編入に書き換えて中学に戻す、といった最低限の無茶は行ったようだが。

「そうですね。お心遣いに感謝しつつも、気にしないことにします」
適当な受け答えに、汐は一瞬呆れたような表情を浮かべたが、すぐに微笑んで頷いてくれた。

「汐が謝ることじゃないよ。やったのはボクだしね」

そこへ、先程の険悪ムードからずつと後ろで唸っていた衣緒が、小走りで行ってきて横に並ぶ。

「なんだ。今日は襲われなかったのか」

「え。あ、うん。猫丸のやつ、ボクに恐れをなして逃げたな……」

何事もなかったかのような翔の態度に、衣緒は一瞬鳩が豆鉄砲くらったような表情をしたが、すぐに二人に歩幅を合わせながら、ふん、と衣緒は誇らしげに胸を張った。

「猫丸って……。あの野良猫のことか？」

ここ最近、やけに衣緒にちよつかい出してくる野良猫を思い浮かべる。

野良猫とはいえ、食料には事欠かないのかやけに体格のいい。

「猫で太ってて丸いから猫丸。太いくせに素早いの」

どうやら、翔の思い浮かべた猫で間違いないようだ。

しかし……。

本人の前で口にすることは出来ないが、衣緒は本当の意味でお子様だと思う。人見知りは激しいようだが、一度心を許した相手にはとことん甘い。その上、背が低いのもあるが、表情もコロコロ変わる。

り、最悪、小学生にも間違えられそうな気がする。

「……それをそのまま口に出したら暴れると思いますよ」
「そうだな」

衣緒への、珍獣を見るような視線から翔が考えていたことを察したのか。汐が小声で釘をさす。

「猫丸は、ボクが油断した瞬間を狡猾に狙って、背後から襲って食べ物を奪うんだよ。信じられない！」

だが、一語一句に表情が忙しく変化させる衣緒の姿は、やはりどう見ても子供そのものだ。

そんな翔の無言の訴えに、さすがの汐も苦笑いでしか答えられないでいる。

「けど、まあ今日は大丈夫みたいだし、さっさと食べちゃおう」
そんな心中を察することも無く、衣緒は一区切り不満をぶちまけると、今度は大事そうに持っていた食べ物を取り出す。

それは、翔の母親が衣緒だけに毎日手渡すおにぎりだ。

翔からしてみれば、数分前に朝食を食べたばかりなのに、どこにそれほどの量を詰め込めるかいささか疑問ではある。だが、衣緒にとって、この時間は何よりも至福の時らしく、満面の笑みでおにぎりをほおばる衣緒はとても嬉しそうだ。

「おにぎりってそんなにいいもんか？」

あまりの頬の緩みっぷりに、翔から疑問の声がでる。

裕福な家庭に育ったはずの衣緒が、何の変哲も無いおにぎりをまるで至高の一品であるかのように食べているのだ。その感覚がいまいち理解できない。

だが、そんな翔の怪訝そうな表情を気にも留めず、衣緒は頷く。

「うん。手作りって感じがして、好き」

「……そうか」

「あげないよ？」

「別にいらん」

そもそも、猫とも格闘するほど気に入っているものを取り上げる

気にはなれない。仲良くなればなるほど、衣緒が本当に自分と同年代なのかと疑問に感じてしまう。

「あ、そうそう」

「ん？」

衣緒が何かを思い出したのか、手に持っていたおにぎりを口に放り込むと、翔を見上げて告げた。

「昨日、翼達から謝罪の電話があったよ」

「……………」

電話があったのか。

思わず、翔の表情が強張る。

「やけに優のこと心配してたけど？昨日、あの三人が優に対して何かやらかしたの？」

突然の話題の引き戻しと、それに対して確信をつく言葉に翔は眉を顰めた。

事情を知っている上での意地悪か。それとも、ただ純粹な興味での質問か。

「……………別に。あの三人が悪いわけじゃないし」

答えに窮しながらも考えた結果、翔の口から出たのは誤魔化しだった。

「あの三人じゃないって言っちゃったら、消去法で考えたら神風翔しかないよ？」

「……………」

墓穴を掘ったことに気づいて顔を逸らす翔に、衣緒は苦笑する。

「けど、それだとまた面倒なことになりそうだね」

困ったように眉を顰める衣緒。

「困ったこと？」

今現在でさえ十分困っているのだが、これ以上、何に困れと言うのだろうか？

翔が首を捻る。

「だって昨日の翔が、あの三人に心配かけるようなことを優にした

次の日に、優は行方不明で不登校だよ？」

一瞬、衣緒の言葉の意味が理解できなかったのか。翔は更に首を捻ったが、すぐにことの重大さが理解できたらしく、その顔を赤から青へと変色させていった。

「家出か……」

「世間一般的にはそう思われるのが自然だろうね」

自分が走り去った後、その場に残された翔と三人がどのような会話を行ったかは知らないし、あの時の翔の言動の意味も、今の自分では分からない。

ただ、困惑していた自分と。

それ以上の困惑と後悔の色に揺れていた瞳が、捉えていたことだけを思い出された。

「そして、その家出の原因を作った神風翔が今はキミだってこと」それは。

翔は言葉に詰まる。

優であった昨日ですら、あの状況をどう説明したものかと苦悩していたのに、なんの説明も無いままその元凶である立場に立たされても……。

このまま、学校へは行かず家に逃げ帰りたい気分になってしまう。

「ちなみに」

そんな翔の考えを遮るように、衣緒が声を上げる。

「今ここでキミが逃げて、三人が家に押しかけでもされたら、優が行方不明だってことがバレちゃうよ」

そうなると、更に面倒なことになる。

責任を感じて電話をかけてくるぐらいだ。行方不明だと知れば、慌てて搜索に乗り出さだろう。

その上で、日常生活内では必要がない情報さえ問い詰められる可能性も、ある。ある程度は口で誤魔化せても、大事になればそれに輪をかけたように問題が膨らむのは目に見えている。

「頑張れ。男の子」

絶望に顔を歪める翔の背中を、衣緒がぽんぽんと叩く。

「とりあえず、欠席の理由だけならこっちで準備できるから、ね？
汐」

「え？ あ、はい。そうですね」

突然話を振られたので驚いたのだろう。汐が、目を丸くしながら頷いた。

「家の方々には後から説明するとして……。さしあたっては、一週間程度の欠席を目安にされてはどうでしょう？」

「可能か？」

「一応は。優さんは七瀬家の長女ですからね。お仕事で海外にでも行ってもらいましょう」

素っ気無く汐が答える。

「ただ、七瀬家の長女という肩書きを使う以上は、優に戻った場合それらしくしてくれないと駄目だけどね」

今まで、あんまり自覚してなかったでしょ、と凄む衣緒に、翔は気圧されながら曖昧な作り笑いを浮かべる。

そういえば忘れていた。

衣緒や汐の姉という立場にいるということは、優は大企業の社長の長女ということになるのか。

（よくよく考えたら、それってかなり無茶な話のような気がするぞ）
一般家庭に養子として迎え入れるだけでも、戸籍等の問題もあって難しいはずなのに。それなのに、どのような手段を使ったかは知らないが一流企業の社長の長女。

ありえない話だ。

そう宣言されてはいたものの、特にこれといった問題が生じたことがなかったため、完全に失念していた。

いや。失念していた、というよりは、深く考えることを放棄していたといった方が正しいだろう。これ以上、自分の身に降りかかる問題を増やしたくなかったのだから。

「元々、こういった問題が発生した時の対策のひとつですから」

そのための肩書きなのだ。

こんな時にこそ必要なものだろうと、汐は言う。

「でも、突然、あなたは社長令嬢ですって言われてもな……」

実際に言われたのは約一ヶ月前。

今更になって事の重大さに気づいて苦悩する翔に、汐は呆れたように溜息をつく。

「本当に今まで自覚してなかったんですね……」

「実感するような出来事もなかったから」

翔は心底申し訳無さそうに眉を下げる。

その言葉に汐は一瞬目を丸くしたが、すぐに視線を落とすとはき捨てるように呟いた。

「そういった問題は極力こちらで処理していますから」

「え？」

高揚の無い言葉に、翔は眉を寄せる。

「それよりも。今は、久々の神風翔としての生活で、失敗しないように心がけることが先決でしょう」

だが、顔を上げた汐は、普段通りの笑顔を見せた。

その笑顔に違和感を抱きつつも、翔は素直に頷くのだった。

第77話 戸惑いの日常（後書き）

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

小説情報や日記をブログにて公開しております。

もし宜しければ、ご覧下さいませ。

パソコン <http://one-more-time.blog.drecom.jp/>

携帯 <http://one-more-time.blog.drecom.jp/m/>

となっております。

如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス*Ｓ。」に投票です

第78話 電話

（しかし、元々神風翔の俺に対して、『失敗しないように』ってどういうことだよ）

長々と会話を言いながらの登校だったためか。予鈴と同時に教室へと滑り込むこととなった翔は、ふてくされ気味にぼやいた。

教員に優の欠席とその理由を説明するために、職員室へと向かった夕と衣緒と別れて今は一人。机に突っ伏して感慨に耽っている。

自分が神風翔として周りから接されることに戸惑いがあるのは事実だが、実生活に支障をきたすほどのものではないはずだ。優として過ごしていたときも、可能な限り自分を取り繕ったりはしなかったのだから。

（だからかな？ 元に戻ってもあんまり変わった感じがしないのは）立て続けに起こる懸案事項の数々に、耐性がついたのかも知れない。

尤も、翔の場合、ただ単に深く考えることを放棄しただけという可能性も捨てきれないものではあるのだが。

「なんだなんだ、机に顔を押し付けて？」

机に突っ伏していた翔の頭上から、声がかかる。

面倒くさそうに顔を上げると、そこには悪友の顔が間近に迫っていた。

「吉良、顔が近い」

「いや、なんかいい匂いでもするのかなと思って……」

吉良の発言に、翔は思わず凍りつく。

（男に顔を近づけて、その匂いを嗅ごうとしていたのか？ こいつは）

「……………」

「あれ？ なんで俺ってば、可哀想な人を見るような目で見られるの？」

「悪いな。偏見はないつもりだが、俺はお前と今後付き合っていく自信がない」

「意味が分からないまま絶縁状叩きつけられてる!？」

これ以上は相手する余裕はないと言わんばかりに、再び机に突っ伏す翔の姿に、吉良はその場で苦悩している。

「全員席につけー」

そうしている内に、少し遅れてきた担任の萩原庄司が教壇に立つて生徒達に着席を促す。

その後ろからやってきた汐と衣緒も足早に席へと向かうが、視線の脇に映った翔の姿に一瞬顔を顰めた。

「ん？ そこに眠りこけているのは神風か」

翔の体がピクリと反応する。

だが、それだけだ。どうやら起き上がる気はないらしい。

「七瀬の事情は聞いているが、離れるといつても一週間ぐらいなんだろう？ 初日から寂しくて不貞腐れていたら身が持たないぞ」

やれやれといった様子で、肩をすくめる。

事情というのは、一週間ほど仕事で学校を休むという嘘の向上のことだろう。

だが、それとは別に、なぜそこに色恋沙汰が加味されているのか、翔にしてみれば不思議でならなかった。

「そんなんじゃないですよ」

それは翔にしてみれば、おおよそ聞き流せるものではない。面倒くさそうに顔を上げながらも、しっかりと否定の言葉を口にした。

優であったときにも、まるでそうあるように催促されているような冷かしは嫌っていたし、ましてや、現在進行形で突然の口付けという色恋沙汰の類で頭を悩まされている最中なので面白くない。

「アイツがいようがいまいが、俺には関係ありません」

若干、怒気も含んだ抗議。

しかし、そんな翔に対して、萩原は更に呆れたような表情を浮かべて、言った。

「その割には、七瀬の席で顔を埋めていたのはどうしてだ？ 残り香でも探していたのか？」

その言葉に、翔は目を見開いた。

自分が腰を下ろしている席を確認。

そして、周りの視線に気づき。

汐に呆れ果てたような表情で、こちらを見て溜め息をつくところを目撃して。

そこでやっと、先程の吉良と萩原の発言の意図に気づいて眩暈がした。普段通り、優の席に腰を下ろしてしまっているではないか。

汐の注意を適当に聞き流しておきながら、その数十分後にあらぬ誤解を深めるような行動を起こしてしまった自分を恥じた。

「……寝ぼけていたようです」

「いや、まあいいけどな」

憂鬱そうに席を移る翔の微妙な言い訳に、萩原は苦笑いで応える。翔自身、相手の勘違いを払拭するにしても、もっとマシな言い訳があるだろうと思えるほどの言い訳だ。これでは、余計に勘違いされても仕方がないように思える。

案の定、憶測が飛び交いざわつき始めた教室だったが、それを止めたのは綾奈だった。

「萩原先生。事情、というのは何でしょうか」

普段ののほほんとした雰囲気とは、また違った雰囲気を纏った綾奈が問う。

「ん？ ああ。いわゆる、家庭の事情ってやつだな」

あの七瀬家の長女としての仕事、ということを配慮してくれたのか。萩原は、言葉を濁して答えた。

「体験学習の一環として来ていた神風の子も無事帰っていったばかりで、今度は七瀬が短期間とはいえ休学。意気消沈したくなる気持ちも分からなくてもないが、これから何かと行事が多くなってくる季節だ。気合入れていけよ」

生徒達のあからさまに落ち込んだ様子に、萩原は苦笑いを浮かべ

ながら朝のホームルームの終わりを告げる。

そして教室を後にしようと思ふに手をかけてから、翔を一瞥してついでに促す。

（優絡みの話か）

教室では会話し辛いことがあつての呼び出しだろうと判断した翔は、黙つて教室を出て萩原の後についていく。

その途中。

一限目の生物の教員とすれ違い様に、『神風は事情があつて欠席します』と伝える萩原に、翔は言い知れぬ不安を抱いた。

そして、昇降口まで歩いて周りに誰もいないことを確認してから萩原が口を開く。

「神風、大丈夫か？」

「は？」

妙に心配げな問いかけに、翔は小首を傾げる。

「いや。なにか無理をしている感じがしたから聞いてみただけだ」席を間違えて座つていたことを疑問に思われたのだろうか。

それとは別に、冷静を装つていふという点では萩原の疑惑は的を得ているのだが、その理由については語るわけにはいかない。

「……大丈夫です」

「そうか」

追求することもなく、萩原は頷いた。

そして、いよいよ翔を呼び出した用件を口にする。

「神風、お前は今回のことについて七瀬本人から何か説明を受けたのか？」

「優から、ですか？」

その態度を見て、説明を受けていないと判断したのか。萩原は困つたように眉を寄せた。

「休学理由に関しては、汐や衣緒が説明したと思いますけど」何か不審な点でもあつたのだろうか。

翔の訝しげな視線に、萩原が慌てて笑顔を取り繕う。

「あ、いや。説明は受けたんだが……なんというか。電話があつて、だな」

「電話？ 誰からですか？」

言葉を濁す萩原に、翔はますます怪訝そうな視線を向ける。

事実確認であれば、説明にきた汐や衣緒に問えばいいだろうに、二人を気づかれることを避けるような萩原の行動に、翔は疑問を抱いた。

だが、次の瞬間。

これは七瀬達には内密に、と前置いて告げられた電話の主の正体に、それらは氷解することとなる。

「ああ。七瀬の親父さんから」

予想外の人物に、翔は目を剥いた。

それと同時に、先程感じた嫌な予感は正しかったことを知る。

「どうやら、七瀬達は自分達の独断で転校やお前の妹の体験学習を行ったらしくてな」

事実関係の確認をするための電話があつたと、半ば呆れた様子の萩原。

ただでさえ、様々な問題に頭を悩ませているというのに、更にここにきて新たな問題を突きつけられるとは思いもしなかった翔は、その場で卒倒したくなった。

「そうになると、だ。今回の七瀬の『仕事で一週間休学』も嘘つてことになるだろう。なんせ、一緒にいるはずの父親から確認の電話があつたんだからな」

電話があつたのは、今朝早く。

担任である萩原にしてみれば、登校してきた七瀬達を呼び出して説明を求めようとしていたのだが、何も知らない汐と衣緒が更なる嘘の報告に来た。

その場で問いただすことも出来たのだろうが、いくら権力という力があつたとしても、それだけのことを親に内緒で行っているのだ。なんらかの理由があると推測した、萩原の推測に間違いはないだろ

う。

「だから、俺だけをこんなところに呼び出したってわけですか」

「さすがに、七瀬達がいる教室でするわけにはいかんし、職員室でするとそれはそれで色々と問題がありそうだからな」

萩原が快活に笑う。

「で？ どうなんだ」

笑顔を崩すことがないまま、萩原が問う。

「理由は俺にも……。ただ、状況はあまりよくないかも知れません」
何を指しての状況なのかは言わず、翔は自分の客観的観測を述べる。

神風翔として在ったはずの人物の失踪。

七瀬の父親のこと。

それに、仲の良い三人を心配させてしまっているという事実。

それらのすべてが、自分ではどうしようもない問題ばかりの気にして、翔は深い溜め息を吐いた。

「それは、俺が相談に乗れば解決できる問題か？」

真摯な眼差しで問いかける萩原に、翔は一瞬返答に窮してしまう。
だが、すべてを打ち明けたところで信じてもらえないだろうし、
何より、どのように説明すればいいのか分からない。

ならば答えは否だろう。

「無理だと思えます」

「そうか……」

翔の返答に、萩原はしばらくの間黙考した後、厳かに呟いて頷く。

「わかった。とりあえず、七瀬の件は保留にしておくでしょう」

「え？ いいんですか？」

あっさりと追求を止める萩原に、翔は目を丸くする。

「理由が話せない内容なら、俺にはどうしようもないだろう？ それに、七瀬達が自分勝手な我儘で周りに迷惑をかけるとは思えんな」

お前もそう思うだろうと言わんばかりの視線に、その言葉に。汐

と衣緒、そして優としての自分への信頼が見え隠れして、翔は照れ笑いを浮かべて返事を誤魔化した。

「実際、七瀬の親父さんからは事実関係の確認の電話があっただけで、それらに対する対応を求める抗議の電話ではなかったから問題ないだろう」

「……遠回しな、無言の抗議って可能性は？」

「俺にそんな難しい抗議は通じんよ。ストレートな抗議じゃなければ、応じる必要もないしな」

まるで悪びれた様子もなく言い放つ萩原に、翔は苦笑する。

「優は先生に信頼されているんですね」

そんな翔の言葉に、今度は萩原が眉を八の字にして答えた。

「信頼はしているが、ある一点において信用はしていないぞ」

「……そうなんですか？」

信用していないという発言に、翔は内心ショックを受けつつも、冷静を装う。

萩原も、まさか目の前にいる神風翔が、昨日まで七瀬優として登校していた人物だとは分かるはずもなく、翔の疑問に答えた。

「周りに気を遣うばかりで、自分の弱い部分を見せたがらない奴の『大丈夫』って言葉は、面倒を見る立場にある俺にとっては信用ならん」

先程の翔の発言の裏に隠された心理を汲み取ったかのような言葉に、翔は眉を寄せる。翔として、それから優としても説教を受けている気分になり、妙に落ち着かない。

そんな居心地の悪さを、翔が感じているのを察したのか。

萩原は咳払いをして、話題を変える。

「今日のお前を含めて様子が変な生徒が多く、教室の空気がお通夜みたいに重苦しい。七瀬がいれば、そんな空気にはならんのだろうが……」

翔以外に様子が変な生徒というのは、薫達のことだろう。特に綾奈は、普段では考えられないような態度だった。

「七瀬の休みは、お前が抱え込んでいる心配事のひとつでもあるんだろう？」

「それは、まあ確かにそうですが」

翔は否定せず、ただ頷いてみせた。

担任である萩原曰く、優はクラスのムードメーカーのようなものだと言う。

まさか優としての自分が、担任からそんな風に見られていたとは思ひもしなかった翔は、戸惑いながらもどこかで嬉しくもあった。

「菜乃達も心配している。早く帰ってきてくるといいな」

それは、優がいなくなつて落ち込んでいる翔への萩原なりの慰めのつもりなのだろう。

実際は、萩原が考えているような理由で悩んでいたわけではないが、なぜか翔はその言葉を否定する気にはなれなかった。

ならば、返事はきまっている。

「そうですね」

萩原の言葉に、翔は力強く頷くのだった。

第78話 電話（後書き）

お手紙、コメント、感想大歓迎です！文法におかしな部分、読み難かった部分があればご指摘、もし宜しければお願いします。

小説情報や日記をブログにて公開しております。

もし宜しければ、ご覧下さいませ。

パソコン <http://one-more-time.blog.drecom.jp/>

携帯 <http://one-more-time.blog.drecom.jp/m/>

となっております。

如月コウでした（礼）

● ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

● ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ぶらすマイナス★S。」に投票です

第79話 険悪な空気

悩みのすべてが解決したわけではないが、自分が現状に不満を抱いていることを確信した翔は、とりあえず目の前の問題から解決していくことにする。

（アイツを探すにしても手がかりがないから不可能。親父さんからの電話の件も内密につてことだし、とりあえずは……）

思考を巡らせた視線の先には、優と仲が良い翼、薫、綾奈の三人の姿。

今まで、優としてしか三人と接したことがなかった翔にしてみれば、どう接すればいいのか悩んでしまう。

ましてや、以前の翔が、優と一緒にのとき以外に三人と仲良く会話しているところなど見たことがないので、神風翔個人として仲が良いかどうかは、若干疑問に思うところだ。

「その上、無理やりキスをして優を傷つけたと思われるだろうし……」

これまでに何度か、綾奈と視線がぶつかったことがあるのだが、ことごとく睨まれたところを見ると、そう思われていると考えた方が妥当だ。

これが、無理やりされた立場である優であったなら、多少、話はしやすかったのだろうが、今は無理やりした立場である以上、話しかけることすら勇気がいる。

溜め息混じりに頭を抱える翔。

どうすればいいのか、翔が考えあぐねている間に、会話がないまま四限目の授業の終了を告げる鈴が鳴る。

「どうするつもりなのさ？」

頂垂れている翔に、呆れ顔の衣緒と汐が弁当を持ってやってくる。どうやら、衣緒は翔の様子を観察してその心中を察しているようで、今朝から挨拶すらともに交わしていない翔の不甲斐無さぶり

に落胆している様子だ。

「とりあえず、昼食に誘って話してみる」

汐の責めるような視線に、翔は苦笑いで答える。

どう対応すればいいのかは分からないが、声さえかければそれが会話の糸口になると考えたのだ。

「翼、薫、綾奈。一緒にいいか？」

三人を見つけて、思い立ったら即、実行。

後ろにいる汐と衣緒に視線をやって、『みんなで食べようよ』という意思表示をする。

「え？」

「薫……？」

そんな翔の態度に、翼が目丸めて、薫は眉を顰めた。

二人の瞳に明らかな動揺の色が見えたので、翔は首を傾げる。

「……なんか変なこと言ったか？」

「あ、いや、うん。びっくりしただけだから。うん。適当に座って座って」

「どうぞ。私もいきなり名前を呼ばれるとは思いませんでしたよ」

よほど動揺したのか。

取り繕うような笑顔を慌てて作ると、二人は各々の感想と挨拶を述べてくれた。

名前。

隣の席へと腰を下ろしながら、翔は自分の失敗に気がつき顔を顰める。

そういえば、アイツは薫や翼のことを名前で呼んでなどいなかったことを思い出したのだ。

あれだけ平然さを心がけて話しかけたというのに。

自分の迂闊さを呪いたくなってくる。

「あつと……。悪い。苗字の方がよかった？」

「ん……。私は別にいいけど。どっちかというと、名前の方が気楽だし。ただちよつといきなりだったからびっくりしただけ」

「私も問題ありません」

視線を逸らしつつ答える。

二人とも、昨日のことと翔の態度の変化に対して違和感は抱いているが、どう対応すればいいのか分からないのだろう。

それは翔も同じで、昨日の件で気まずさを感じずにはいられない。それが相成って、妙な緊張感が互いの間に存在しているのだから、堪らない。

ましてやそんな中、突然親しげに名前を呼ばれたら相手も困惑するに決まっている。

（はてさて。話しかけたものの、どう会話すればいいのやら）

よくよく考えてみれば、優であるときは親友として接していた三人だが、神風翔として彼女達と接するのは初めての経験だ。普段通り、というわけにはいかないだろう。

（アイツの真似って言っても、やりようがないしな……）

昨日までの神風翔は、ただでさえ、正体不明でなにを考えているのか分からない人物なのだ。久々に神風翔として振舞うこととなった自分が、上手く演じられる自信などあるわけがない。

どうしたものか。

翔が唸りながら、視線を泳がせている時だった。妙に怒気を孕んだ視線を送っている人物と目が合った。

「綾奈……？」

その視線に思わずたじろぐ。

そういえば、綾奈だけは挨拶を返すことなく、無言だった。やはり、昨日の件が何らかの形で尾を引いていることは明白で、優として接している時とはまったく違ったその態度に翔は更に困惑する。

「えっとさ。綾――」

「……優さんは？」

鋭い綾奈の問いかけに、翔は眉を寄せる。

「あ、えっと。優は……」

「すいません。少々、お仕事で海外へ行っています。たぶん、一週

間ぐらいは帰って来れないかと」

返答に窮していた翔を見かねたのか。会話に聞き耳を立てていた汐が助け舟を出す。

「ほ？仕事って？」

翼が汐の言葉に首を傾げる。

それもそうだろう。仕事と称して学校を休むなんてことは、今までになかったことなのだから。

「ああ見えても、優は七瀬家の長女だから。父親が海外の取引先との商談のときには、交渉のカードのひとつとして連れて行かれるの」予想されていた疑問に、前もって準備されていたであろう回答で答える衣緒。

その声に、若干の怒気が込められている気がしたのは、なぜだろうか。

「へえ。そういえば、優は社長令嬢ってやつだもんね」

衣緒の言葉に、納得したようにうんうんと頷く翼。

「でも、今まではそんなこと一度も……」

よほど優が心配なのか。先程までの怒りが霧散している綾奈が不安げな瞳で疑問を口にする。

「家出して神風家に居座った挙句、勝手に編入までしてしまっていたので。落ち着くまでは、お父様も控えて下さっていたのですよ」

そういえば、優は想い人である神風翔と添い遂げるために家を飛び出していった、などといった珍妙な設定であったことを、今更ながらに思い出す。

（まさかとは思うが、それも父親の耳に入っているんじゃないだろうな）

仮にそうであったとしても、翔に確認する術はない。

汐や衣緒に、父親から学校へ電話があったことを告げれば調べてもらうことは可能だろうが、その情報は本来、優は勿論ながら汐や衣緒が知るはずもないものだ。それを告げることは、つまりは担任である萩原の信頼を神風翔が裏切る形になってしまう。

「家出してまで親父さんに仲を認めてもらうつて凄いいじゃん。なんだ。上手くいつてるなら心配することなかったな」

「ハハハ。ソウデスネ」

そんな不義理なことはしたくない。

翔は、内心冷や汗を流しつつ、笑ってその場を誤魔化す。

「それじゃ……昨日のことは関係してないんですか？」

「優が休みってことに？ないない。確かに優と翔の雰囲気は変わったのは認めるけど。普段から変な関係なんだから大丈夫大丈夫」

それでも、やはり本人の口からではないのが不安なのか。或いは、翔が拳動不審なのが気になるのか。

疑いの眼差しを止めない綾奈に、『気になるなら帰ってきてから聞けばいいよ』と衣緒は笑い飛ばす。

「根が単純なので、寝て起きれば普段通りでしょう」

当たり障りがないとはいえ、若干棘が感じられるフォローに、翔は眉を顰めながら弁当箱の中身を口へと運ぶ。

「……そう、ですか」

しかし、その様子にどこか納得がいかない、といった様子の綾奈。それでも、これ以上の言及は無意味だと感じたのだろう。諦めたように深く溜め息を吐く。

（凄い落ち込みようだな……）

肩を落とす綾奈をただ見ているだけ、というのは、中々に辛いものがある。

だが、そうさせてしまったのは神風翔という人物。

今、翔として在る自分に、綾奈にかけられる言葉があるのかどうか。いくら考えてみても、その答えは出てくる気はしなかった。

第79話 険悪な空気（後書き）

本当に大変長らくお待たせしました（土下座）

今回の話が結構重要なところなので、最後までしっかりと書き終えてから更新しようかと思っていたのですが、多忙になりそれすらも叶わないまま随分と空いてしまいました。

申し訳ないです。

勢いで職を変えると大変なことになr……（ザー）

今回の話の内容はかなりの難産ではありますが、もうあと踏ん張りといったところまでなんとかたどり着いてほつと一息。

されど、これ以上お待たせすることないようにがんばっていきたいところですorz

いあ、ホントに待たせ過ぎだろう、俺orz

第80話 自分の在処

放課後。

普段とは勝手が違う、神風翔として通う学校に戸惑いながらもなんとか無事に一日を終えて、家路に着こうと翔が下駄箱で靴を履き替えていたときだった。

「神風。ちよつといい？」

聞き慣れた声に、翔は振り返りながら返事をする。

「なんか用事か？ 翼」

「うん。ちよい綾奈のことで相談が…… って。汐も衣緒も一緒に帰るところだったの？」

こちらへと駆け寄ってきたときに、翔の背後にいた二人にも気がついたのだろう。翼は目を丸くした。

「はい。そんなに珍しいことですか？」

「え？ あ、うん。最近は仲良くなったって感じだけど、前は一線引いてるって感じがしてたから」

飄々と答える汐に、少し驚きながらも翼は笑顔だ。自分の友達同士、仲が良いのが嬉しいらしい。

だが、住んでいる家が同じとはいえ、実際に翔と汐が一緒に帰ることは滅多に無いのだから、翼が疑問に感じるのは当然だ。

汐からすれば、翔は警戒すべき相手だと考えていたから一緒に帰ったりする必要以上に仲良くなることは避けていたが、以前の正体不明の神風翔ではない以上、警戒のしようが無い。

「都合が合いましたから」

「そうなんだ」

だから、同じ方向に、同じ時刻に帰るなら一緒に帰る。とても単純明快な考え方だ。

ただ、事情を知らない翼からすれば、突然の仲良くなったように見えるのだろうか。

「ところで。綾奈がどうかしたの？」

このままでは話が進まないと感じて、衣緒が口を挟む。

「うん。ちょっと、今日の綾奈荒れてたからさ」

ごめんね、と翼がバツの悪そうに眉を下げる。

明らかにいつもと違った綾奈の姿を思い出して、翔は苦笑いを浮かべる。

「あれはやっぱ昨日のことが原因、なんだろうな……」

「ま、まあそれは否定できない、かな」

げんなりした表情の翔に、翼も苦笑気味だ。

「早退したのも、それが原因か？」

「優を悲しませた神風に対しての怒りと憎しみでってやつ？」

「……………それ、本気で言ってるのか？」

「冗談だよ。冗談」

快活に笑う翼に、翔は半分呆れたようにぼやく。

「昼間の綾奈の態度見てたら、冗談に聞こえないって……」

「けど、早退するために鞆を取りに来た綾奈の顔見てるんだから、違うつてわかってるよな？」

「それは……………まあな」

五限目の授業途中で、体調不良を理由に早退していった綾奈の姿を思い浮かべる。

昼休みの説明の後からずっと落ち込んだ様子だったが、気分が落ち込みすぎて体調まで崩してしまったようで、その顔は真っ青だった。

「けど、どうしてそこまで綾奈が落ち込んだのさ？ 昨日、なにがあったの？」

衣緒が再び会話に割って入る。

「衣緒、お前めちやくちゃ興味本位で聞いてるだろ」

「失礼な！ 知的探究心だよ」

誇らしげに無い胸を張る衣緒を見て、翔は開いた口が塞がらない。
(それを興味本位だと言っているのだが……………)

声に出すとまたうるさそうなので、心の中でツツコミを入れる。
しかし、そんな心の中のツツコミに、更にツツコミを入れる者がいた。

七瀬汐だ。

「神風翔が、優お姉様の唇を無理やり奪ったことぐらいは承知していますよ」

「なんで知ってるんだよ！」

わざとらしく、お姉様と呼ぶあたりに悪意を感じずにはいられない。

そもそも、あの場にいなかったはずの汐が、なぜそんなことを知っているのだろうか。

「少しスコープの具合を見ようかと思って、的になるものを探していたらちょうど良いものが映ったので。標準を合わせていたら偶然見えただけです。他意はありません」

「ちょうどいいものって……。標準合わせていたらって……。お前」
どうやら知らないところで、神風翔は命の危機に晒されていたらしい。

覗く気は無かったのかも知れないが、殺意は若干あったように思える。

「ってことは、優がいなくなった後ってことかな？」

「そうですね。それでお願いします」

「あれ？ どうしてそんなに何事もなかったかのように会話が進められてるんだ？」

翔の呟きもなんのその。

まるでそれが当たり前のように、話はサクサクと進むようである。
「でも、その後って言ってもなあ。詰め寄った綾奈に、神風が一言
二言答えて帰っちゃったからなあ」

何かを伺うような視線をこちらに向けつつ、翼は頬をかく。

普段から、なんでもはつきりと言う翼には珍しい物言いに、衣緒が小首を傾げる。

「その返答が、綾奈さんの怒りの原因というわけですか」

洪る翼に、催促するかのように汐が口を開く。

「怒りというよりも」

「動揺の表れですよ」

言葉を選んでるように、翼が言い淀んでいるところに薫が口を挟む。その口調は、やけにはつきりとしたものだ。

「自分の深い部分が無造作に触れられたら、誰だって動揺してしまうものですよ」

薫が目を細めて、射抜くように翔を見る。

それはつまり。

神風翔が、菜乃綾奈の深い部分が無造作に触れる発言をしたということなのだろうか。

「どうして貴方が。綾奈と父親のことを知っているのですか？」

それは薫の純粋な疑問だったのだろう。

しかし、翔にしてみれば昨日の出来事について言及されたところで答えようがないのが現状だ。ましてや、それが優として過ごすようになってから仲良くなった綾奈の、それ以前の過去について知っているのかと問われたところで答えは否に決まっている。

「綾奈の父親……。確かすでに亡くなっていたよな」

それでもなんとか薫の疑問点との接点を思い返してみた結果出た言葉に、薫は少し驚いたような表情を見せる。

正解を探るかのような疑問を含んだ言い草が、薫にしてみれば意外だったらしい。

「……そう、ですよ。綾奈と貴方は特別仲が良いというわけでもないですし、それぐらいの認知でしかないはずですよ」

しかし、薫も本来神風翔という人物が知るはずのない情報であることは理解していたのだろう。

「あのときの言葉はまるで知っているかのような口ぶりだったのですが……考えすぎだったようですね」

薫は納得したかのように、頷いてみせた。

「親父さんのことは、綾奈にとっては鬼門というか。思い出したくない過去ってやつだから」

そう告げる翼の表情はどこか寂しそうだ。

「思い出したくない過去、か。嫌ってたとか？」

「その真逆」

翼が首を横に振る。

「大好きだった。だからこそ、ってやつじゃないかな」

困ったように、そしてなにより寂しげに翼は微笑んだ。

そんな翼を言及することに罪悪感もあるが、その態度から昨日の一件で綾奈は思い出したくない過去を思い出してしまい、結果として体調まで崩すこととなったのは事実なのだろう。

「それが俺への態度とどう関係してるんだ？」

だからこそ、聞きたいと思った。

綾奈が、優を友人として大切に想っていることは分かっているつもりだ。だから優を傷つけた神風翔のことを怒っているということも理解できる。

しかし、それ以上に今綾奈が苦しんでいるのは、その過去の出来事にあるのだと思えたから。

「それは神風が――」

「翼」

「か、薫？」

翼の言葉を遮るように口を挟んだ薫は、自分の靴箱から下履きを取り出して履き替えている。

「すいません。これ以上は、了承を得た上で本人の口からお聞き下さい」

やんわりと断りを入れる薫と、勝手に喋ってしまったことを笑って誤魔化す翼。

「本人から、か。話してもらえるかな？」

少なからず、今の綾奈が神風翔として在る自分に対して嫌悪感を抱いているのは間違いないだろう。

なにより、そんな深い部分を今の自分が聞いていいものか、翔にしてみれば判断に迷うところだ。

しかし、そう考えていた翔に、薫は意外な意見を述べた。

「貴方だから話す可能性がある、と言えば納得しますか？」

「それはどうして？」

言葉遊びのような会話に、翔は顔を顰める。

「貴方に対しては理不尽な怒りを向けてしまった。今頃、冷静になって貴方に酷いことをしてしまったと頭を悩ませているところでしょう」

「……なるほど」

弱みをつけこんだ方法ではあるが、綾奈の性格からして十分ありそうだった。納得いったと言わんばかりに、翔が苦笑いを浮かべながら頷く。

「で。お見舞いに一緒に行くってことか」

「お。神風、今日はやけに話が分かるね。彼女の影響？」

さっきまでとは打って変わって、反撃と言わんばかりに翼がニヤニヤと笑いながら、肘で翔の脇をつついてきた。

彼女。

翔は、自分の周りでそれに該当しそうな人物を思い浮かべてみる。該当者はたったの一名。

（……優のことかよ）

頭を抱える。

なにやら、いらぬところでいらぬ誤解を生んでしまっている気はするが、今更むきになって否定するだけ無駄だと判断して、翔は愛想笑いで誤魔化する。

「その愛想笑いで誤魔化す癖も、優の影響ですか？」

「か、薫？」

薫の言葉に翔は顔が強張る。

「え、影響ってわけじゃない……デスヨ」

「口調も普段と違いますね」

「……………」

翔は口を噤む。

多少違っているけど意外に気づかれないものだと思っていたのに。心配した学校での一日も無事終えて、安堵していた翔にとっては寝耳に水とはまさにこのことだ。

「いえ。残念ながら、皆、気づいていました。全力で気づかれないと思って幸せそうだったので誰も言えなかっただけです」

それはつまり。

いわゆる、裸の王様の状態ではなからうか。

「知らなければよかった……」

自分が如何に滑稽であったかを思い知らされて、翔はその場に突っ伏す。

「そもそも、キミ隠す気あったんだ。あれで」

「そのことに驚きですね」

そんな翔に、衣緒と汐が非情にも追い討ちをかける。

今朝方、フォローすると約束してくれた気がするのだが、どうやらその約束は果たすつもりは毛頭無さそうだ。

「あははは。好きなだけ笑えばいいさ」

反論も諦めて、翔は歩き出す。

そんな翔の背中を追うように、全員が歩幅を合わせながら歩く。

勿論、目的地は分かっている。喫茶店『Re：Symphony

(リ：シンフォニー)』だ。

「ぷっ」

「衣緒、それム力つく。その笑い方なんかム力つく」

「ごめんなさい」

「薫、真顔で謝らないでくれ。凄く悲しくなるから」

「笑えない冗談です」

「え。何が？　なんか一番心に突き刺さるんですけど。汐、それはわざと？」

「気にすんなって。面白かったし」

「なぜだろう。フォローになってないのに、なぜか一番安心感があるよ。翼」

眉を顰めながらも、翔は妙な安心感と不安を抱いていた。ここに、自分が翔としても居られるのだという安心感と。優としての自分がいない不安。

いつの間にか優である事に慣れて、こうして男に戻った今に違和感を抱いている。

翔としての自分。

優としての自分。

どちらにもある居場所。

だが、どちらも異なっている在り方。

どんどん曖昧になっていく二つの境界線に戸惑う。

「心配事ですか」

「え？」

ふいに足を止めてしまっていた翔に、声をかけたのは薫だった。

「今の貴方は遊園地の帰り道で見た姿と重なって見えます」

いつか、消えてしまいそうな。

その言葉に、胸が締め付けられるような気持ちになる。

それは、自分ではないはずの神風翔。

なら。なぜ、今、自分は彼と同じ目をしているのだろうか。

動揺する翔に、薫は深く溜息をついてから、まるで目を背けるように歩を進める。

「類は友を呼ぶ、ということでしょうか」

そんな呟きを残して。

第80話 自分の在処（後書き）

ふははは！次の更新も間が空くだろうと思われているだろうが、こ
こは素早く更新してみるっ！

いあ、あまり余裕が無くてブログの方は放置し気味で申し訳ないで
すorz

コメントへの返信も後日必ずさせていただきます！

やつとこさ、ある程度現状の環境に慣れ始めたので執筆できる余裕
が出てきました。

更に余裕があれば、挿絵的なイラストを『みてみん』に投稿して賛
否を問おうかと思ってみたり。

勿論、小説の執筆に支障をきたさない程度に、ではございますが。

それで更新遅れました、はシャレになりませんしね（苦笑）

このキャラを描いてみて！というのがあればご意見ください。まだ
キャラも固まってないのですよorz

シリアス回が続きますが、どうぞお付き合いくださいませ。

81話 綾奈

—ショックだったのかも知れない

それが、一日経った今の私の感想だった。

そう望んでいたはずの自分。

でも。

唇を重ねた二人を見た瞬間。

その想いよりも、そうあって欲しくないと望んでいた自分に気づいて、私は愕然とした。

誰かの関係が変わること、自分達の関係も変わってしまう。それは、変わりたくないと思っていた日々の歯車が、鈍い音を立てて狂ってしまうことへの恐怖だったのかも知れない。

そんな中、教室に響いた乾いた音。彼女が彼の頬を叩いていた。動揺に不安げに瞳を揺らす彼女の姿に、まるでこうなるように仕向けた私が頬を叩かれたかのような錯覚を覚えてしまつて。

自分の自己満足に走った結果が、あの表情だとしたら。

『傷つけてしまった』

そう感じた瞬間、私は頭の中が真っ白になった。

それからは酷いものと我ながら思う。

散々そうなるようにしておきながら、八つ当たりのように彼を詰つた。

そして告げられた言葉に。

私は動揺して、その場から逃げ出していた。

駅前をまっすぐ突き抜けている大通りから、少し外れた場所にある喫茶店 Re：Symphony（リ：シンフォニ）。

いわゆる、一等地と呼ばれるような場所ではないが、それでも洋

風の可愛らしい外観には、目を引くものがある。

そして、一度中に入れば麗しい女性達がメイド服でお出迎え。

それ目当ての男性客が多い印象も受けるが、その実女性客も多い。菜乃里香と綾奈の二人が作るランチが、密かに人気が高いためだ。

その美味しさはさることながら、調理する者が二人しかおらず、作られる数に限りが出来てしまう上に、その一人は学生だ。その都合により数量が変化することが、良い意味で作用しているのだろう。いわゆる、数限定の魔力というものだ。

それでも、やはり作れる数が増えれば必然的にお客の数が増えるだろう。

だからこそ、綾奈は学校が終わればすぐに家に帰って手伝うようにしていた。

それが、早くに父を亡くし女手一つで自分を育ててくれた母親への、綾奈なりの恩返しのもりだった。

そのはずだったのに。

「綾奈、大丈夫？」

いつの間にか寝てしまっていたらしい。熱で潤んだ瞳の視界に、心配そうな母親の姿が見えた。

部屋にかけられた時計に目をやる。時刻は午後五時。いつもの騒がしさがなくところからすると、母親がいつもより早く喫茶店を閉めたのは明白だ。

バイトは雇ってはいるが、調理が出来る人は綾奈と里香しかない。い。

自分を看病するための行動だと分かるからこそ、綾奈は心底申し訳なく思う。

「うん。ごめんね。お母さん」

「謝ることなんてないわ。今はゆっくり寝て、しっかり休みなさい」
謝罪を口にする綾奈に、里香は苦笑いする。

「うん」

迷惑をかけないようにしているつもりが、いつも迷惑をかけてし

まう我が身を恨みつつ、綾奈は素直に頷いた。

自分はいつだってそうだった。

病弱、という訳ではないが、精神的には打たれ弱く、精神的な疲れがすぐに体に影響してしまう。せつかく、誰にも心配かけないように早退してきたのに、これでは元の子も無いではないか。

「翼ちゃんと薫ちゃんにも謝っておかないと……」

熱にうなされながら呟く。

長い付き合いだ。たぶん、早退理由もバレているだろう。

「……優さん、大丈夫かな」

綾奈は深い溜息をつく。

その溜め息に気づいた里香が、思い出したかのように手を合わせた。

「そういえば、皆、お見舞いにくるって言っていたわよ」

「え！ うそ！」

予想外の言葉に、驚きのあまり思わず飛び起きる。

「……寝てなさいってば」

そんな綾奈の姿に、里香は呆れたように笑う。

しかし、綾奈の心中は穏やかではなかった。

ここ数日間で、どれだけ友人達に迷惑をかけたのやら。更には、この体たらくである。

顔も合わせられないとは正にこの事だ。

「お母さん、お見舞いなんだけど――」

「却下」

「……私、まだ何も言っていないよ」

意を決したように口を開いた綾奈だが、里香は聞き終わる前に返事をよこした。

それが面白くない綾奈は頬を膨らませて抗議する。

「どうせ『大丈夫だと言って断って』っていうお願いでしょ？ そんな友達甲斐のないことさせるわけないでしょ」

もっとお見舞いは歓迎だと伝えてあるから、と里香は綾奈のおでこ

を軽く叩く。

「とにかく。さっき、今から皆で行きますって電話があったから、もう少ししたら来てくれるはずよ」

「明日には元気になってるのに……」

不貞腐れたように顔をしかめる綾奈に、里香は呆れたように溜息をつきながら、部屋を後にしようと立ち上がる。

「みんなって……神凧君もなのかな」

それは、質問というよりもただの独白。

そんな綾奈の言葉に、里香は立ち止まり目を瞬かせる。

「神凧君っていうと、優ちゃんの恋人の？ 彼がどうかしたの？」

「え？ あ、ううん。なんでもない」

（神凧君、か……）

綾奈の取り繕ったような態度に、里香は訝しげな顔をする。

そういえば、綾奈の性格上、ただの体調不良で寝込んだだけなら、心配してくれた友達のお見舞いを断ろうとは思わないはずだ。

「喧嘩でもしたの？」

しばらく思考を巡らせた結果を口にした、里香の優しい問いかけに綾奈は静かに首を横に振った。

「けど……今はあまり顔を合わせたくないかな」

自分が勝手に嫌な過去を連想した挙句、それを振り払うためだけに彼を詰ってしまった。

何一つ成長しない自分と、未だに自分の弱さの根源をそのせいにして悲劇のヒロインぶっている自分に嫌気が差す。

「はいはい。でも、また貴女の悪い癖が出たのね。反省してちゃんと謝りなさい」

思いつめた表情の綾奈のおでこを、里香は再びぺちりと叩く。

小さい子供に言い聞かすような里香の態度に、綾奈はますます不満そうに口を尖らせた。

「自分でもわかってるもん。ただ、今はまだ上手く言えないだろうから」

「上手く本音を隠して言えないから、お見舞いを断るつもりだったの？」

「う……」

言い負かされて、綾奈は口ごもる。

そんなとき。

訪問者を告げるインターフォンが鳴った。

「どうやら皆到着したみたいね」

こうしてはいられない。

里香は皆を出迎えるために、今度こそ部屋を立ち去ろうとする。だが、ふと立ち止まって。

「綾奈」

振り向かず、拗ねて布団に潜り込んだ娘を呼ぶ。

「みんな、貴女のいくつもある中から選んだ本音じゃなくて、いくつもある本音すべてを受け入れてくれるはずよ」

素直になりなさい。

「……………」

里香の諭すような口調にも、綾奈は返事を返そうとしない。

里香は深く溜め息をついて、静かに扉を閉めた。

素直になる？

少しそう在っただけで、今回の結果を生んだのだ。

優さんと神風君が恋人同士になればいい。

お似合いだと思ったのも本音。

でも、その実。

そうなったら、私達の関係が変わるだろうから、失敗することを望んでいたのも、まぎれも無い私の本音。

そのすべては、ただの我侭でしかないんじゃないだろうか。

我侭だと分かっているから、他人に見せる本音を選ぶ。作り笑顔と共に。

そうすることしか、他人を傷つけないで接することができない

自分はなんて歪んでいる人間なのだろうか。

「……私みたいな我儘女、素直になったら他人を傷つけるだけで誰も傍にいてくれないよ」

綾奈は呟き、布団の中でその身を丸めた。

81話 綾奈（後書き）

なんとか携帯で更新。如月コウです。慌ただしい日々が続いていますが、少しずつでも頑張って進めていきたいところです。皆様の暇潰し程度になれたのなら光栄です。それでは、また次回お会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9326a/>

ぷらすマイナス S。

2010年10月9日11時00分発行